遊戯の弟子は闇使い

鷹

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
遊戯の弟子は闇使い

【Ｎコード】
Ｎ１８２０Ｖ

【作者名】
鷹

【あらすじ】
伝説の決闘王武藤遊戯の弟子にしてペガサスミニオンという人脈がチート過ぎる主人公がアカデミアに入学して十代達とドタバタやる小説……かな？

※主人公は別の世界から転生した訳でもなければトリップした訳でもないです。

プロローグ（前書き）

プロローグでいきなりデュエルしているという……プロローグっぽいのになっているのは後半からです。

プロローグ

「『可変機獣　ガンナードラゴン』で『激昂のミノタウルス』に攻撃！」

俺の攻撃宣言と共に、龍と戦車が一体となったような機械龍……『可変機獣　ガンナードラゴン』が、自身に付いているキャタピラで向きを変え、斧を持った獣人に向けて大砲を振っ放した。

獣人……『激昂のミノタウルス』が破壊されるのと同時に観客から歓声があがるが、守備表示だった為、相手にダメージは無い。

「メインフェイズ2でする事は無い。俺はターンエンドだ」

???　ＬＰ２７００　手札４枚
場
モンスター
可変機獣　ガンナードラゴン（ＡＴＫ２８００）
魔法・罠
スキルドレイン

テッド・バニアス　ＬＰ１８００　手札３枚
場
モンスター
幻獣王ガゼル（ＤＥＦ１２００）

魔法・罠
なし

「くっ…俺のターン！」

そう言いながら、俺の対戦相手である何故かいつも眼の下に隈のあるオッサン…テッドさんがカードをドローした。

ドローしたカードを見た瞬間に表情が少し変わったけど、何か良いカードでも引いたのかな？

「俺は手札から『死者蘇生』を発動し、墓地から『激昂のミノタウルス』を特殊召喚！」

『死者蘇生』の効果で、さっきのターンで破壊された『激昂のミノタウルス』が再び場に現れた。

「更に俺は『薬食い《やくぐい》』を発動！『幻獣王ガゼル』と『激昂のミノタウルス』を生贄に『アサルト・リオン』を召喚！！『薬食い』の効果対象は『激昂のミノタウルス』だ！」

薬食い
魔法カード（遊戯王R）
生贄召喚を行った時、生贄にしたモンスターの半分の攻撃力・守備力と特殊効果をその召喚モンスターに与える（複数の場合は一体選ぶ）

アサルト・リオン
モンスターカード（遊戯王R）

属性　不明（この小説内では地属性に設定）
種族　不明（この小説内では獣族に設定）
☆　７
ＡＴＫ　２６００
ＤＥＦ　２５００
効果　なし

テッドさんの場に顔だけライオンに似ている獣人が、右手に『幻獣王ガゼル』を、左手に『激昂のミノタウルス』を持って現れた。

そして『激昂のミノタウルス』を口元に持っていって……食べた。
それはもう頭からバリバリと。カード効果の為とはいえ正直言って気持ち悪い。

戦闘で破壊され、復活したと思ったら食べられる。悲惨だな……頼むから化けて出ないでくれよ？アーメン。

ちなみに『幻獣王ガゼル』は握り潰された。こっちもこっちで悲惨だ。それ以前に何で握り潰したんだ？てか、何故持った？こっちも化けて出ないで、アーメン。

「『薬食い』の効果で『アサルト・リオン』は『激昂のミノタウルス』の半分の攻撃力・守備力と効果を得る。尤も、『激昂のミノタウルス』から得た効果はお前の『スキルドレイン』で無効になるがな」

アサルト・リオン
ＡＴＫ　２６００→３４５０
ＤＥＦ　２５００→３０００

海馬さんの『青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイト・ドラゴン）』のステータスをあっさりと超えたな～

『スキルドレイン』発動してて良かった良かった。

あれで獣、獣戦士、鳥獣族に貫通効果を付けられたら厳しいからな。

『アサルト・リオン』自身も獣族だし。

「『アサルト・リオン』で『可変機獣　ガンナードラゴン』に攻撃！！」

『可変機獣　ガンナードラゴン』が迎撃しようとするも、『アサルト・リオン』の速さに着いていけずに、後ろから殴られて撃破される。

「チッ、撃破されたか……」

???　LP2700→2050

「ターンエンドだ」

???　LP2050　手札4

場

モンスター

なし

魔法・罠

スキルドレイン

テッド・バニアス　ＬＰ１８００　手札１
場
モンスター
アサルト・リオン（ＡＴＫ３４５０）

魔法・罠
なし

「俺のターン。ドロー」

来たカードはっと……『マジック・ジャマー』かよ。さっきのターンに来てればなぁ～まぁ、良いけど。

「手札から『天使の施し』を発動。カードを3枚ドローし、2枚捨てる。更に手札から『神獣王バルバロス』を生贄なしで召喚！」

俺の場に右手に槍を持ち、左腕に盾を装着した神に仕えし獣の王、『バルバロス』が現れる。

「『神獣王バルバロス』はレベル８のモンスターだが、生贄なしで召喚出来る！ただ、生贄なしで召喚した『神獣王バルバロス』の攻撃力は１９００となってしまうが、俺の場にある『スキルドレイン』の効果でその効果は無効になる。よって『神獣王バルバロス』の攻撃力は３０００！」

「はっ！その程度じゃあ俺の『アサルト・リオン』は倒せねーぞ！！」

テッドさん。そういう事を言うと大概やられるって城之内さんが言ってましたよ……てか、俺の手札的にそうなります。

「墓地の『可変機獣　ガンナードラゴン』と『不屈闘士レイレイ』をゲームから除外し、手札から『獣神機王バルバロスＵｒ』を攻撃表示で特殊召喚！！」

さっき出した『神獣王バルバロス』に『神機王ウル』をくっつけただけにしか見えないモンスター……『獣神機王バルバロスＵｒ』が俺の場に現れる。

こいつが『神獣王バルバロス』と『神機王ウル』が融合した姿に見えるのは、俺の目が悪いからという理由だけじゃない気がする。

「『獣神機王バルバロスＵｒ』の攻撃力は３８００だが、このカードが戦闘を行う場合、相手プレイヤーが受ける戦闘ダメージは０になるという効果を持つ。尤も、この効果も『スキルドレイン』の効果で無効になるがな」

まぁ、『アサルト・リオン』さえ潰せば『神獣王バルバロス』の攻撃で終わりだからどっちでも良いけど。

それにぶっちゃけちゃうと前のターンで2体とも出せたんだよな～何で無駄にピンチにならないといけないんだか。

まぁ、それも今日までか……

「バトル！『獣神機王バルバロスＵｒ』で『アサルト・リオン』に攻撃！！閃光烈破弾（クラッグ・ショット）！！！」

『獣神機王バルバロスＵｒ』の両腕に付いている『神機王ウル』の腕が2つに割れて、砲門が2つずつ出る。その砲門からビームが出

て『アサルト・リオン』を貫く。

「俺の『アサルト・リオン』が……」テッド・バニアス　ＬＰ１８００↓１４５０

「これで終わりだ！『神獣王バルバロス』でダイレクト・アタック！トルネード・シェイパー！！」

「ぐあぁぁぁ！！」

テッド・バニアス　ＬＰ１４５０↓０

「決まったあぁぁ！！！カードプロフェッサー同士のデュエルはやはり！やはり！！大方の予想通りデュエルを制したのはブラック・デュエルディスクを持つカードプロフェッサーＮｏ．１デュエリストＴ．Ｔだあぁぁぁ！！！」

『神獣王バルバロス』が持つ槍がテッドさんに当たった瞬間、デュエルディスクからデュエル終了を告げるブザーが鳴る。

それと同時に今まで黙っていた実況が喋りだす。てか、凄いリーゼントだな。中にフランスパンでも入ってんのか？

まぁ、そんな事は置いといて控え室に戻るか。

カードプロフェッサーの任期は、今日で終わったから明日から何をしようかな～そうだ！ペガサス様や月行義兄さん達の手伝いでもしようかな。

時は少々溯る

童実野町某所

遊戯　Ｓｉｄｅ

「ラッキーカードだ。こいつが君の所に行きたがっている」

【クリクリ～】

「あ、ありがとうございます！あの！貴方は遊戯さん…ですよね？」

「ああ。そうだ」

「俺、遊城　十代って言います！遊戯さんデュエ「待った……君は急いでいたようだけど、大丈夫なのか？」　うわぁぁぁ！！そうだった！遊戯さん。すみませんがまた今度！」

此方が忠告すると少年は、慌てて走り去って行った……と思ったら凄い勢いで戻ってきた。

「受験票落としたー！！」

「これの事かい？」

足下に落ちていた紙を渡す。どうやらデュエルアカデミアの受験票のようだ。

「ありがとうございます！」

そう言って今度こそ少年は走り去って行った。

まるで台風が過ぎた様だったな。しかし、ハネクリボーが行きたがるとは……それだけあの少年が純粋という事なのだろうか？

【主よ。速く行かねばデュエルが始まってしまうのでは？】

「ああ！そうだった！」

ブラック・マジシャンの言葉で思い出す。今日は教え子の貴志のデュエルを見に行くんだった！

【まったく、大事な弟子のデュエルを見に行くと言って速く家を出たのに、沢山寄り道をした挙げ句、話し込むとは……もう余裕はありませんぞ】

「ブラック・マジシャンも言ってくれれば良いのに」

ブラック・マジシャンと軽口を叩きながら、教え子である貴志がデュエルしているデュエルドームに向かった。

プロローグ（後書き）

デュエルが途中からなのはミスではないので悪しからず。

遊戯やマハードの口調ってあんな感じで良いのかな？ついでに言うと遊戯の一人称は俺か僕で悩んでいたりします。

感想やミスの指摘等、お願いします。

《次回予告的な何か》

「師匠！！」

「デュエルするか？」

「よし、デュエルアカデミアに入学する事な」

「師匠：受験の日はとっくに過ぎてます」

※ここで書いたセリフが出るとは限りません。

第1話　VS伝説の決闘王（前書き）

カード効果の説明はアニメオリジナル等のオリカを除き地の文かセリフで説明します。

カード名には『』をつけますが、精霊の名前には特に何もつけていません。

てか、普通第1話でデュエルする相手じゃねぇ。

第1話　VS伝説の決闘王

試合を終えて控え室に戻り、素早く鍵を閉める。

「ふ～暑かった」

椅子に座り、身長を誤魔化す為に履いていた厚底ブーツを脱ぎ、顔を隠す為に被っていたフードを取り、声を変える為に付けていたマスク型変声機も取る。

エンターテイメント的にミステリアスな人物を演出する為とはいえ、やり過ぎだと思う。

夏だけじゃなく、冬の時ですら暑かったし……

【クェー】

「クシル」

俺の精霊の一羽（？）である『ダーク・シムルグ』のクシルが実体化し頭の上に乗ってきた。

デュエル以外の時は力を抑える為、幼鳥の姿になっているから負担は全く無い。むしろほのぼのするなぁ～

―コンコンッ―

と思っていたら誰か来た。

終わった後は誰も来させないようにって、スタッフの人に言っておいたのに……

慌てて変装セット（ブーツ、フード、マスク）を身に付け、応対すべくドアを開ける。

「久しぶりだな貴志」

「師匠！何故此処に？あっ、立ち話もあれなんでどうぞ」

「済まない」

ドアを開けると師匠である遊戯さんが居た。部屋の中に招き入れる。

まぁ、俺の部屋じゃないけど。

「師匠。さっきも聞きましたが、何故此処に？」

「弟子のデュエルを身に来ただけだ。途中からだったけどな」

うわぁ～師匠が来てるんだったら、雇い主の言葉を無視して無駄にピンチにならずにさっさと終わらせたのに。

「ただ、デュエルを見て確かめたい事が出来た」

「確かめたい事ですか？」

「ああ。ボクとデュエルしよう」

「へ？」

師匠の言葉の後、師匠の家の前でデュエルをする事になった。夕暮れ時だが、周りに人影はない。

ちなみに変装セットとブラック・デュエルディスクはボストンバックの中に入れた。

今、装着しているのは市販のデュエルディスクだ。まぁ、こっちの方がしっくりくるけど……使うデッキもカードプロフェッサーの時に使うデッキじゃなく、正真正銘自分のデッキだし。

「こうしてデュエルするのも久しぶりだな」

「そうですね。俺がカードプロフェッサーになる前なので、もう1年ぐらい前になりますね」

つまり、俺が自分のデッキを使うのも1年ぶりか……久しぶりにクシル達が出せるかな。来たらの話だけど。

「さぁ始めよう」

「はい！」

「「デュエル！！」」

俺　ＬＰ４０００　遊戯　ＬＰ４０００

「先攻はお譲りします」

「分かった。ボクのターン！　ドロー！『クィーンズ・ナイト』を攻撃表示で召喚！」

師匠の場に絵札の3剣士の紅一点『クィーンズ・ナイト』が姿を現す。

「更にカードを1枚セットしてターンエンドだ！」

『クィーンズ・ナイト』
レベル４　光　通常　戦士族　攻１５００　守１６００

遊戯　ＬＰ４０００　手札3枚
モンスター
『クィーンズ・ナイト』　（攻１６００）

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン！ドロー　『スピード・ウォリアー』を召喚！」

俺の場にローラースケートを履き、特徴的な頭をしている戦士が現れた。

『スピード・ウォリアー』レベル２　風　効果　戦士族　攻９００
守４００

「バトル！『スピード・ウォリアー』で『クィーンズ・ナイト』に

攻撃！更に『スピード・ウォリアー』の効果を発動！召喚に成功したターンこのカードの元々の攻撃力をバトルフェイズ終了時まで倍にします！」

『スピード・ウォリアー』攻９００→１８００

「リバースカード発動！『攻撃の無力化』　攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了させるよ」

『クィーンズ・ナイト』に『スピード・ウォリアー』が突撃したが、渦に阻まれ失敗する。

『スピード・ウォリアー』攻１８００→９００

多分、師匠のターンに絵札の３剣士が揃うな。でも……

「カードを１枚セットしてターンエンドです」

俺　ＬＰ４０００　手札４枚
モンスター
『スピード・ウォリアー』（攻９００）

魔法・罠
伏せ　１

遊戯　ＬＰ４０００　手札４枚
モンスター
『クィーンズ・ナイト』

魔法・罠

なし

『ボクのターン！　魔法カード『増援』を発動！この効果によりデッキからレベル４以下の戦士族モンスターを手札に加える。そして手札に加えた『キングス・ナイト』を通常召喚！更に『キングス・ナイト』の効果を発動し、デッキから『ジャックス・ナイト』を特殊召喚！」

師匠の場に絵札の３剣士唯一の効果モンスターである『キングス・ナイト』が現れ『クィーンズ・ナイト』と剣を交える。すると剣が光を発し、光が消えると『ジャックス・ナイト』が『キングス・ナイト』と『クィーンズ・ナイト』の間に現れていた。

『キングス・ナイト』
レベル４　光　効果　戦士族　攻１６００　守１４００

『ジャックス・ナイト』
レベル５　光　通常　戦士族　攻１９００　守１０００

「更に手札から永続魔法『連合軍』を発動！ボクの場に存在する戦士族・魔法使い族モンスターは合計３体。よってボクの場に存在する戦士族モンスターの攻撃力は６００アップするよ」

『キングス・ナイト』
攻１６００→２２００

『クィーンズ・ナイト』
攻１５００→２１００

『ジャックス・ナイト』
攻１９００→２５００

「行くよ『ジャックス・ナイト』で『スピード・ウォリアー』に攻撃！！」

「トラップ発動！『フローラル・シールド』　このカードの効果により『ジャックス・ナイト』の攻撃を無効にし、カードを１枚ドローします」

『ジャックス・ナイト』に『スピード・ウォリアー』は斬り掛かるが、無数の花びらに阻まれる。

「なら『キングス・ナイト』で『スピード・ウォリアー』に攻撃！！」

今度は『キングス・ナイト』が『スピード・ウォリアー』に斬り掛かり『スピード・ウォリアー』は真っ二つになった。

俺　ＬＰ４０００→２７００

「更に『クィーンズ・ナイト』でダイレクトアタック！」

『クィーンズ・ナイト』の剣をデュエルディスクで防ぐがそのまま斬られる。

俺　ＬＰ２７００→６００

アテム師匠が言っていた「デュエルディスクは盾」理論失敗！やっぱり防げないよね。

「ぐっ……俺の場にカードが存在せず、師匠がコントロールするカードによってダメージを受けたこの瞬間、手札の『冥府の使者ゴーズ』を特殊召喚します！出でよゴーズ！」

『冥府の使者ゴーズ』
レベル７　闇　効果　悪魔族　攻２７００　守２５００

【主の危機に俺様参上！クゥ～俺様カッコイィ！！】

俺の場に俺の精霊の１人であり若干、性格に難がある『冥府の使者ゴーズ』が現れる。

「更に『冥府の使者ゴーズ』の効果発動！俺が受けたダメージは戦闘ダメージ。よって受けた戦闘ダメージと同じ数値の攻撃力・守備力を持つ『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚します。現れろ！『冥ｈ【来てくれ！マイハニー！】オイオイ……」

俺のセリフを取るなよ……別にマイハニーなんて言わないけどさ。

【主の求めに応えるべく、いざ参らん】

ゴーズの呼び掛けに応えるかの様に俺の精霊の１人でゴーズと違い、性格がまともそうに見える『冥府の使者カイエン』が現れる。

『冥府の使者カイエントークン』

レベル7　光　トークン　天使族　攻?（２１００）　守?（２１００）

ゴーズ達を使い始めて3年経つけど、何で俺が使うゴーズ達と師匠やアテム師匠が使うゴーズ達とで、ここまで性格が違うのかなぁ～師匠達が使うゴーズ達はまさしくクールを絵に描いた感じなのに。

【ハニーが冷たい～】

【今はデュエル中よ。真面目にやりなさい】

この会話だけを聞けば、カイエンがまともに見える。そう、この会話だけなら……

「貴志のゴーズ達も相変わらずの様だね」

「ええ。俺的には変わって欲しいのですが」

「ふふっ。ボクはカードを1枚セットしてターンエンド」

俺　ＬＰ６００　手札５枚
モンスター
『冥府の使者ゴーズ』　（攻２７００）
『冥府の使者カイエントークン』
（攻２１００）
魔法・罠
なし
遊戯　ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター
『キングス・ナイト』
（攻２２００）
『クィーンズ・ナイト』
（攻２１００）
『ジャックス・ナイト』
（攻２５００）

魔法・罠
『連合軍』
伏せ　１

「俺のターン！　ドロー！」

狙い通りゴーズとカイエンを出せたけど、思ったよりもダメージを受けたな。『連合軍』はちょっと予想外だったし。取り返せるかな……

「バトルフェイズに入り『冥府の使者ゴーズ』で『ジャックス・ナイト』に攻撃！冥府の剣（めいふのつるぎ）　斬撃剣（ざんげきけん）！」

師匠のデッキには戦士族・魔法使い族が多い。ならば、数が揃う前に攻撃力の高い順に潰す。

ゴーズと『ジャックス・ナイト』が剣を交える……かに見えたが『ジャックス・ナイト』が相手にしたのは残像。そして『ジャックス・ナイト』の後ろに本物のゴーズが現れる。

【冥府に沈め！斬撃剣！】

ゴーズに『ジャックス・ナイト』は斬られ、破壊された。

遊戯　ＬＰ４０００→３８００

『キングス・ナイト』
攻２２００→２０００

『クィーンズ・ナイト』
攻２１００→１９００

【イャッホ～！やったぜ！】

これが無ければ、普通に格好良いのに……

【きゃ～！ゴーズカッコ……ゴーズ、やったじゃない】

カイエン。今、素が出かけたな……まぁ良いか。

イラストの雰囲気と違い過ぎる２人の性格にももう慣れたし。それでも時々、頭が痛くなるけど。

「続いて『冥府の使者カイエン』で『キングス・ナイト』に攻撃！冥府の舞　斬滅剣（めいふのまざんめつけん）！！」

【行くわよ！】

カイエンが飛び上がり、落下すると共に『キングス・ナイト』を両断する。

「うっ」

遊戯　ＬＰ３８００→３７００

『クィーンズ・ナイト』
攻１９００→１７００

【流石はマイハニーだぜ！】

【私よりもゴーズの方がカッコイイわよ。でも…ありがと】

デュエル中にイチャつきそうなバカップルは放っておいておこう。
それより師匠の伏せたカードは何なんだろう？除去するカードが手札に無いから、どうしようもできないけど。

「俺はモンスターをセット。更にカードを3枚セットしてターンエンドです」

俺　ＬＰ６００　手札２枚
モンスター
『冥府の使者ゴーズ』
（攻２７００）
『冥府の使者カイエントークン』

（攻２１００）
伏せモンスター　１

魔法・罠
伏せ　３

遊戯　ＬＰ３７００　手札２枚

モンスター
『クィーンズ・ナイト』
（攻１７００）

魔法・罠
『連合軍』
伏せ　１

「ボクのターン！ドロー！」

ドローしたカードを見た師匠が少し笑った気がした。多分……というよりほぼ確実にヤバイ事になるな。

「手札から『強欲な壺』を発動！デッキからカードを２枚ドローする。更に『天使の施し』を発動！デッキからカード３枚ドローして手札からカードを２枚捨てる」

手札交換……これはマジでヤバイ！いや、これは師匠に限らずか……

「『クィーンズ・ナイト』を生贄に『ブラック・マジシャン・ガール』を召喚！そして魔法カード『賢者の宝石』を発動してデッキから『ブラック・マジシャン』を特殊召喚！！」

『クィーンズ・ナイト』がフィールドから姿を消し、代わりに師匠の相棒の１人にして精霊の『ブラック・マジシャン・ガール』が現れる。そして宝石を胸に抱き、何かを祈る様にするとすぐ傍に魔方陣が描かれ其処から師匠の相棒兼切り札にして精霊の『ブラック・マジシャン』が現れた。

「お、お久しぶりです。マナさんにマハードさん」

多分だけど俺の顔は少し引きってると思う。何故ならこの2人が揃ったターン＝ラストターンになるから！

【久しぶりだね～】

【久しいな。だが、手加減はせんぞ！マナも手加減はするなよ】

【はい！】

【俺様達も負ける気はないぜ！】

【その通りよ】

イチャつきそうだったゴーズ達もマハードさん達の方を向く。

確かに俺も負ける気は全く無いし諦めても無い。

だが……

「行くよ？リバースカードオープン！『黒・魔・導』《ブラック・マジック》！このカードの効果で貴志の魔法・罠を全て破壊する！」

やっぱり出た！『ブラック・マジシャン』がフィールド上に居ないと使えないけど、相手の魔法・罠を全て破壊するカード。まさか伏せていたとは……

それと何でこういう時に限って『魔宮の賄賂』や『マジック・ジャマー』が毎回無いんだろうか……

『ブラック・マジシャン』もといマハードさんが飛び上がり、杖に魔力を溜める。

【ハアァァァ！！！行くぞ！『黒・魔・導』！】

マハードさんが杖に溜めた魔力を解放する。解放された魔力は俺の魔法・罠ゾーンに降り注ぎ、容赦なく俺の魔法・罠を破壊する。

伏せていた『ドレインシールド』『リビングデッドの呼び声』『呪縛牢』が破壊される。

俺の場にはゴーズが居るからと楽観……できないな師匠相手だと。

「バトル！『ブラック・マジシャン』で『冥府の使者カイエントークン』に攻撃！！ブラック・マジック！」

【ウオォォッ！魔連弾（まれんだん）！】

マハードさん！技名が違います！

それでも放たれた黒い弾？みたいなのにカイエンは包まれ姿を消す。

俺　ＬＰ６００→４００

【クッ…済まないマイハニー】

それ俺が言うセリフだと思う。マイハニーなんてやっぱり言わないけどさ。

「続けて『ブラック・マジシャン・ガール』でセットモンスターに攻撃！ブラック・バーニング！」

【行っきまーす！それぇ！】

『ブラック・マジシャン・ガール』が放った色とりどりの弾？みたいなのにモンスターが包まれて破壊される。

「破壊され墓地に送られた『クリッター』の効果を発動！デッキから攻撃力１５００以下のモンスターを手札に加える。俺は『ジャンク・シンクロン』を加えます」

これで次のターンにある程度希望が持てる。耐えきれれば……だけど。

「手札から速攻魔法『ディメンション・マジック』を発動！『ブラック・マジシャン』を生贄に捧げ手札から『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』を特殊召喚！！」

『ディメンション・マジック』が発動された瞬間マハードさんが「えっ？私？」みたいな顔をしたが、生贄にされ姿を消し、新たに白い導士服を着た少女が現れる。

技名を変えた事を根に持たれたのかな。

「更に『ディメンション・マジック』の効果によりフィールド上に存在するモンスター１体を破壊する！『冥府の使者ゴーズ』を破壊

！」

【今逝くよマイｈ】

ゴーズが喋っている途中だったが『サイレント・マジック　ＬＶ４』が容赦なく消した。

ナイスタイミング！と言いたいが、俺のモンスターなのでそうも言えない。

「これで終わりだ！『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』でダイレクトアタック！！サイレント・マジック！！！」

『サイレント・マジシャン』が手に持つ杖を俺に突き付ける。杖の先端には既に魔力が溜まっている。

魔力を解放する時『サイレント・マジシャン』が少し笑っていた気がした。

俺　ＬＰ４００→０

遊戯　Ｓｉｄｅ

「負けました。やはり師匠は強い」

貴志とデュエルしてみて、さっき感じた違和感がはっきりと分かった。

今の貴志は純粋にデュエルを楽しめていない。しかもそれを本人は自覚していない。

どうするべきか……『ハネクリボー』達の力を借りて、僕自身ともう一人のボクとデュエルさせるというのが良いのかもしれない。そうすればきっとデュエルの楽しさを思い出す事ができる筈だ。

そう思ってデッキケースを開ける。

「ああ！」

「師匠？」

「いや、何でもない」

そうだった。『ハネクリボー』はさっきぶつかった少年にあげたんだった。

ん？そうだ。

「貴志」

「何ですか師匠？」

「確かカードプロフェッサーとしての任期は今日で終わりだったよね？」

「ええ。そうですけど」

「なら今年からデュエルアカデミアに入学しなさい」

『ハネクリボー』が初対面にもかかわらず行きたがったあの少年な

ら貴志にデュエルの楽しさを思い出せる事ができるかもしれない。
理由が理由だからペガサスや月行くん達も反対はしない筈だ。

「……えぇー！！！！！！」

溜めに溜めて貴志が叫んだ。ちょっと近所迷惑になるな。

第1話　VS伝説の決闘王（後書き）

クシルについてですが地縛神とは無関係です。一応シグナーの竜や地縛神は現時点で存在してない設定なので。

後は『ダーク・シムルグ』で他にダムとかダルシムぐらいしか思いつかなかったのでクシルになったり。

ゴーズとカイエンはある意味性格が崩壊。あえて軽い感じに。

そして負けた主人公。師匠は手札を使いきって華麗に勝利。まぁ、勝てないのは当然と言えば当然ですね。

次はオリ主の設定です。

では！

主人公設定とRの用語集（前書き）

この小説の設定でRの内容はバトルシティ編とドーマ編の間にあった出来事とします。ドーマ編にペガサス出てましたし。

GXはアテムが冥界に帰った5年後という事にしてます。

主人公が関わる以外で原作と違う所には※をつけてます。

主人公設定とRの用語集

【名前】　天道　貴志
【年齢】　１４歳（R時代は９歳）
【誕生日】６月７日
【血液型】Ｏ型
【身長】　１６６？
【体重】　５７？

容姿
ポケットモンスターＳＰＥＣＩＡＬのシルバーの髪を少し短くして黒髪にした感じ。

職業（第１話時点）
プロデュエリスト　　（カードプロフェッサー）

所属（第１話時点）
ペガサスミニオン

備考
教育の賜物か周りの影響の為か機械に強い。

精霊が見え（ペガサスミニオンになった要因の１つ）自分の精霊は１体を除き闇属性。

デッキは複数あるが、作る際に主力モンスターが闇属性になるクセがある為、基本的に全デッキ共通で闇属性モンスターが切り札。

（メインデッキ以外を使う比率は低め）

カードプロフェッサーとしてデュエルする時は、エンターテイメント重視の為　（と主人公は思っている）ミステリアスな人物を表現するように言われていた為、顔などは明かさず、デッキも攻撃力２０００以上モンスターが中心の派手なデッキを使っていた。

ペガサスミニオンになった経緯

赤ん坊の時に、とある孤児院の前に捨てられていたのを保護される。

６歳まで孤児院で育ったが、デュエリストとしての才能に恵まれており『神童』と呼ばれていた。その噂を聞いたペガサスが孤児院に赴き、才能を見極める為のデュエル後（結果は主人公の敗北）ペガサスミニオンとして迎えられる。

ペガサスに見極められた才能は本物で、ペガサスミニオン内では『パーフェクト』デュエリストと呼ばれた天馬月行には勝てないものの、月行以外には勝ち越していた。

ちなみに、エドやヨハンとは顔見知り。

遊戯達との関わり

ペガサスミニオンになって3年後、決闘者の王国（デュエリスト・キングダム）で、ペガサスが消息不明になった後、邪神に取り憑かれた天馬夜行を月行と共に止めようとするも月行共々、邪神の力で体を乗っ取られる。

その後、バトルシティ終了後の遊戯達と海馬コーポレーション本社ビルを舞台にして戦う。主人公は『邪神　イレイザー』を使い遊戯と戦うも敗れ、正気に戻る。

夜行ＶＳアテム戦の後にシャーディーがペガサスを連れて現れ、事の真相を聞き和解。（※１）

ドーマ偏ではダーツに襲撃され（※2）ペガサスの魂が封印された後、他のミニオンと同様にダーツに挑むも敗れ魂が封印される。

ドーマ編後、本物の強さを教えて貰う為、邪神に打ち勝った遊戯とアテムに弟子入りする。その為ＤＭ時代のデュエリストとは一部を除き顔見知り。

記憶編では遊戯達に同行した。戦いの儀の時も同行した為、アテムＶＳ遊戯戦を見ている。

４年後、ペガサスミニオンでカードプロフェッサーＮｏ．１のリッチー・マーセッドとＮｏ．２のデプレ・スコットがタッグプロデュエリストに転向した際に、リッチー達の頼みという事と修行になると思い、後釜としてカードプロフェッサーになる。
カードプロフェッサーとしてデュエルするうちに、知らず知らずに純粋にデュエルを楽しめなくなり、若干冷めた感じになる。

（※１）
漫画版ではペガサスは死んでいる為、ペガサスは居ない。シャーディーも出ていない。
ＧＸにＲを合わせる為に、ペガサスが千年目（ミレニアム・アイ）を闇バクラに抉り取られ、瀕死状態になったところをシャーディーが助け、療養しているところを消息不明にされたという感じにしました。

（※２）
ペガサスを襲撃したのはダーツではなく、孔雀舞。こっちはＤＭのデュエリストと主人公てＲのキャラをギクシャクさせるのもなぁ～と思いチェンジ。
もう１つ理由がありますがそれは２年目まで秘密という事で。

用語説明

遊戯王Ｒ

●原作遊☆戯☆王の作者高橋和希先生のアシスタントをしていた伊藤　彰先生が作者の遊戯王のアフターストーリー
この小説ではバトルシティ編とドーマ編の間の出来事にしました。

邪神

●ペガサスが３幻神が暴走した時の為に、抑止する存在としてデザインしたものの創造をためらった神のカード。３幻神の対になるかのように３体存在し原作の３幻神と同じく大抵の魔法・罠は効かない上、神のランクは３邪神ともラーと同等の為、オシリスとオベリスクの効果すら効かない。

ペガサスミニオン

●ペガサスが世界中から集めた優秀な孤児達。ペガサスはゲームデザイナーやデュエリストを育成していた。

天馬夜行

●ペガサスミニオンの１人。邪神を完成させ、ペガサスを復活させる為にＲ・Ａ計画を計画するが失敗。アテムとの最終決戦にて邪神から解放され和解する。

天馬月行

ペガサスミニオンの１人。夜行の双子の兄でもある。Ｒ・Ａ計画を止めようとするが体を乗っ取られ、Ｒ・Ａ計画の片棒を担がされる。
『邪神　ドレッド・ルート』を使いアテムとデュエルするも『邪神ドレッド・ルート』が破壊された時に正気に戻り、以後力を貸す。

リッチー・マーセッド

●ペガサスミニオンの1人。カードプロフェッサーNo.1デュエリストでもある。月行に勝つが『邪神イレイザー』を使ったキースに敗れた。

デプレ・スコット

●ペガサスミニオンの1人。カードプロフェッサーでもある。表の人格の遊戯とデュエルするも、敗れる。

カードプロフェッサー

●雇われデュエリスト集団。巨額な賞金が架かっている大会等で主催者が大会を裏からコントロールする為に雇われたりする。（簡単に言えばサクラみたいなもの）

Rでは賞金が懸けられた遊戯や城之内、海馬と戦った。

この小説内では、Rの話の後、インダストリアル・イリュージョン社がスポンサーになり、主に大会を盛り上げる為に雇われるデュエリスト集団になってます。

ブラック・デュエルディスク

●カードプロフェッサー最強のデュエリストの証。当初はリッチーが持っていたが、キースに敗れた為キースの手に渡りその後、キースに勝った城之内の手に渡るも、Rのエピローグにて城之内がカードプロフェッサーの1人ティラ・ムークに渡していた。

テッド・バニアス

●カードプロフェッサーの1人。正直言ってやられ役。月行に敗れた。

ティラ・ムーク

●ヴァンパイアデッキを使い。アテムとデュエルするも敗れる。デュエルディスクを城之内に貸した。

主人公設定とRの用語集（後書き）

用語集はアレで大方あってると思うのですが間違いがあれば指摘してください。

感想等お待ちしております！

《次回予告？》

なんとも都合の良いことだ……

この問題は海馬さんが考えたのかなぁ～

か、海馬さん……

おい、自重しろよ

よし。白いオカッパー（ホワイト・オカッパー）と命名しよう。

スピード・ウォリアー。お前は何がしたいんだ？

ジャンクよ……お前もか。

第2話　入学試験　VSクロノス（前書き）

海馬が若干暴走ぎみです。

第2話　入学試験　VSクロノス

師匠がとんでも発言をした日から早数週間、俺はデュエルアカデミアの受験会場に来ていた。

あの後、師匠がペガサス様と電話で何か話すとペガサス様は、あっさりと受験を受ける事を許可をしてくださった。むしろ「貴志には人生経験がアリマセーン。よって、アカデミアで人生経験を積んでくるのデース！」や「アナタの歳なら学校に通って当然デース！」と言い始めた程だ。

確かに接する人間が偏ってる気がするけど、そこまでじゃない気もする。

学業も基本的なのは終えてるし。

後、受験の日は過ぎてると思ったけど、俺が師匠とデュエルした日にあった受験は選抜1で、定員が足りないから、もう一度受験が行われるらしい。

なんとも都合の良い……裏でペガサス様達が動いたって事は無いよね？

まぁ俺としてもデュエルばっかりできるってのも悪くないから良いけどさ……でも、何か裏がある気がするんだよな～

「それでーは筆記試験を開始するノーネ」

髪がオカッパで顔が若干白塗りのおそらくデュエルアカデミアの先

生と思われる人が言った。

今は眼前の事に集中するか。ペガサスミニオンと師匠の弟子として、落ちる訳にはいかないし。

室内に正解の時に出る『ピンポーン！』という音と不正解の時に出る『ブゥー！』という音が響く。

筆記試験の内容は４択問題形式で、机に埋め込まれたスクリーン上に問題が表示され、その問題の答えの記号にタッチする「これ筆記試験って言うの？」という内容だった。

しかも問題が、カードの種類を当てろとかカードの名前を当てろとかの問題ばっかりだ。白い忍者（ホワイトにんじゃ）のカードイラストが出て『このカードの名称は？』という問題の時、選択肢の中に虹色の忍者（レインボーにんじゃ）や金色の忍者（ゴールドにんじゃ）があった時は流石にあり得ないと思った。忍者的にその色は無いと思うのは俺だけじゃ無い筈だ。

問７２　次のカードの中でこの俺、海馬瀬人を不快にさせるカードは？

Ａ　青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）
Ｂ　青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメットドラゴン）
Ｃ　青眼の光龍（ブルーアイズ・シャイニングドラゴン）
Ｄ　ブルーアイズ・トゥーン・ドラゴン

この俺って……問題は海馬さんが考えてるのか？てか、分かりやす！絶対Ｄじゃん！！他のは全部海馬さんのデッキに入ってるし。Ｄっと……正解みたいだな。

『ピンポーン！』と正解の音がする。次の問題はっと……

問７３　次のカードの中で最も元々の攻撃力が高いモンスターは？

Ａ　青眼の白龍（ブルーアイズ・ホワイトドラゴン）

Ｂ　ブラック・マジシャン

Ｃ　サイレント・ソードマン　ＬＶ７

Ｄ　凡骨の意地

か、海馬さん……凡骨の意地て……モンスターですらない……おまけに離れてるし。

答えはＡっと。次は

問７４　次のモンスターの内、最も元々の攻撃力が高いモンスターは？

Ａ　青眼の究極竜（ブルーアイズ・アルティメットドラゴン）

Ｂ　オシリスの天空竜（オシリスのてんくうりゅう）

Ｃ　ラーの翼神竜（ラーのよくしんりゅう）

Ｄ　オベリスクの巨神兵（オベリスクのきょしんへい）

おい、自重しろよ……どんだけブルーアイズ好きなんだ海馬さんは？確かに神に勝ってるけどさ。Ａっと。

そんな感じで筆記試験は終わった。

海馬さんの職権濫用な気がするよ……

筆記試験を終えて実技試験の会場に向かう。

デュエルフィールドが十個あるから、百人ぐらい居る受験生を教員十人で相手するみたいだ。

後、何故かギャラリーが居た。ギャラリーの服装と受験案内に付いてたパンフレットに確かあんな服装の人が居た気がするから、多分デュエルアカデミアの生徒だと思う。

「受験番号１から１０！デュエルフィールドに来なさい！」

俺の受験番号は８だから初めからデュエルをするみたいだ。ちなみに番号の基準は申し込んだ順らしい。

「宜しくお願いします」

先に居た先生に挨拶する。どうやら俺の相手は筆記試験の時に居たオカッパの人みたいだ。

「アナタの相手は実技担当最高責任者であるこのワタシ。クロノス・デ・メディチがやってあげるノーネ（ドロップ・アウトボーイに負けた汚名を返上する為、生贄になってもらうーノ）」

実技担当最高責任者か。強いのかな？てか、クロノスねぇ～。シロノスのがしっくり来そうだけど。

「デュエル」「デュッエ～ル」

俺　ＬＰ４０００
クロノス　ＬＰ４０００

「先攻は譲ってあげるーノ（この手札なら、いきなり切り札を出せるノーネ）」

「そうですか。俺のターン！ドロー」

手札は…まぁまぁだな。

「モンスターをセット。カードを2枚セットしてターンエンド」

俺　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター

伏せ　１

魔法・罠

伏せ　２

「ワタシのターン。ドロー」

先生がデッキからカードをドローする。今更だが使いにくそうなデュエルディスクを使ってるな。

「ワタシは手札から『融合』を発動。手札の『古代の機械巨人（アンティーク・ギアゴーレム）』二体と『古代の歯車（アンティーク・ギア）』を手札融合するーノ。現れよ古代の機械究極巨人《アンティーク・ギア・アルティメット・ゴーレム》！！更に『古代の機械騎士（アンティーク・ギアナイト）を召喚ナノーネ」

「ブッ！」

思わず吹いてしまった。１ターン目から攻撃力４４００かよ。ちょっとキツいな。

そう思っていると、歯車が肩等に埋め込まれている巨人二体と手みたいなのが生えた歯車が一瞬だけフィールドに現れ、一つに重なる。するとケンタウロスみたいな姿の巨大なモンスターが出現する。その後、槍と歯車の盾を持った騎士が召喚される。

同時に観客席から「終わったな」や「憐れだ」という声が聞こえてきた。『古代の機械兵士（アンティーク・ギアソルジャー）』じゃ無い分マシな気がするけどな。

『古代の機械究極巨人』
レベル１０　地族性　融合／効果　機械族　攻４４００　守３４００

『古代の機械騎士』
レベル４　地族性　効果／デュアル　機械族　攻１８００　守５００

「バトルなのーネ！『古代の機械究極巨人』で守備モンスターを攻撃！アンティーク～アルティメット～パウンド～！！『古代の機械究極巨人』の効果によってこのカードが攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・罠を発動する事ができないノーネ。更にこのカードが守備表示モンスターを攻撃した時、その守備力を超えていれば、その数値分ダメージを与えるノーネ！」

無駄に技名伸ばしやがった！てか、マジでヤバいな。

『古代の機械究極巨人』が放った拳は壁モンスターとして出した『クリッター』を貫通し俺に届く。

「ぐあぁぁ！！」

俺　ＬＰ４０００→２００

「ぐぅ！クリッターの効果によりデッキから『スピード・ウォリアー』を手札に加える」

「そんな事をしテーモ無駄ナノーネ！『古代の機械騎士』でダイレクトアタックするーノ！」

「トラップカード発動！『フローラル・シールド』！このカードの効果により『古代の機械騎士』の攻撃を無効にし、カードを１枚ドローする」

耐えた事により観客席から「お～」という声がする。

大ダメージは受けたが、勝つ準備は整った。次で決める。

「ターンエンドナノーネ（次のターンで決めてやるーノ）」

俺　ＬＰ２００　手札５枚

モンスター
なし

魔法・罠
伏せ　１

クロノス　ＬＰ４０００　手札１枚

モンスター
《古代の機械機械究極巨人》（攻４４００）
《古代の機械騎士》
（攻１８００）

魔法・罠
なし

「俺のターン！ドロー！俺は『スピード・ウォリアー』を攻撃表示で召喚！更に手札のモンスター１体を墓地に送り、手札から『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

俺の場に『スピード・ウォリアー』とガンマン風のモンスター『クイック・シンクロン』が召喚される。

『スピード・ウォリアー』レベル２　風属性　効果　戦士族　攻９００　守４００

『クイック・シンクロン』
レベル５　風属性　効果　戦士族　チューナー　攻７００　守１４００

「墓地に送った『レベル・スティーラー』の効果を発動！自分フィールド上に存在するレベル５以上のモンスター１体のレベルを１つ下げ、墓地から特殊召喚！」

『クイック・シンクロン』レベル５→４

俺の場に、背中に星が描かれた虫が現れる。

『レベル・スティーラー』レベル１　闇属性　効果　昆虫族　攻６００　守０

「まさかシンクロ召喚する気ナノーネ！？」

「いいえ。まだしませんよ」

本当はしたかったよ。　『クリッター』と『レベル・スティーラー』とさっきのターンに引いた『クイック・シンクロン』で『ジャンク・デストロイヤー』をこのターンでシンクロ召喚したかったよ。

ただ『古代の機械究極巨人』が予想外だったんだよ。

「俺は手札から『進化する人類』を発動し『スピード・ウォリアー』に装備！俺のライフは先生より下。よって『スピード・ウォリアー』の元々の攻撃力は２４００になる」

『スピード・ウォリアー』攻９００→２４００

まぁライフの優劣が逆で元々の攻撃力が１０００になっても『スピード・ウォリアー』の攻撃力は９００だからどのみち上がるけど。

「バトル！『スピード・ウォリアー』で『古代の機械騎士』に攻撃！更に『スピード・ウォリアー』の効果発動。このカードの召喚に成功したターンこのカードの元々の攻撃力はバトルフェイズ終了時まで倍になる」

『スピード・ウォリアー』攻２４００→４８００

『スピード・ウォリアー』が自由の女神のポーズを真似たと思ったら『スピード・ウォリアー』が巨大化した。巨大化した『スピード・ウォリアー』は右拳を天に向かって伸ばし、左腕をくの字に曲げて、左拳を顔の近くに持ってきている。

『スピード・ウォリアー』……お前は何がしたいんだ？

そう思っていると『スピード・ウォリアー』が飛び上がり空中で無駄にアクロバティックな動きをし『古代の機械騎士』を蹴り倒した。心なしか脚が燃えてた気がする。

クロノス　ＬＰ４０００→１０００

「な、なかなかやるノーネ　（次のターンで『古代の機械究極巨人』で倒してやるノーネ）

「ここで、トラップ発動！『緊急同調』このカードはバトルフェイズ中のみ発動する事ができるトラップカード。このカードの効果によりシンクロモンスターを１体シンクロ召喚します」

夜行義兄さんが師匠や海馬さん達とモンスター達との堅い絆を見て考案したデュエルの新たな可能性シンクロ召喚。久しぶりに使うな。

観客がざわつく。まぁシンクロを使う人はあまり居ないからな。

「行きます！レベル１『レベル・スティーラー』にレベル４『クイック・シンクロン』をチューニング。５つの星集まりし時、現れる戦士よ。戦友（とも）の力を結集しその力を示せ！シンクロ召喚！我が障害を粉砕せよ『ジャンク・ウォリアー』！！」

『クイック・シンクロン』が４つの星の輪になりその輪を『レベル・スティーラー』が通過し、光に包まれると青を基調とし肩にブースターを付けている戦士『ジャンク・ウォリアー』が光から現れる。

『ジャンク・ウォリアー』レベル５　闇属性　シンクロ　戦士族
攻２３００　守１３００

「『ジャンク・ウォリアーの効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在するレベル２以下のモンスターの攻撃力分の合計分アップする！『スピード・ウォリアー』のレベルは２。よって攻撃力４８００アップ！」

『ジャンク・ウォリアー』攻２３００→７１００

「な、ナンデス～ト！！」

『ジャンク・ウォリアー』も『スピード・ウォリアー』と同じく巨大化し『スピード・ウォリアー』と同じ様なポーズをしている。違うのは右手が開いてるというぐらいか…てか、ジャンクよお前か。

「バトル！『ジャンク・ウォリアー』で『古代の機械究極巨人』に攻撃！スクラップ・フィスト！！！」

『ジャンク・ウォリアー』がブースターを使って勢いをつけて『古代の機械究極巨人』を殴りそのまま先生の所まで押していく。

そして先生の所まで行くと『古代の機械究極巨人』が爆発した。

「ペペロンチーノ～」

クロノス　ＬＰ１０００↓一１７００

先生が『古代の機械究極巨人』の破片に押しつぶされた。相変わらず海馬コーポレーションのソリットビジョンシステムは凄いな。

「ありがとうございました」

俺はフィールドを去って観客席に向かった。

余談だがあの白塗り先生は、その後ほぼワンキルで勝っていた。

第2話　入学試験　VSクロノス（後書き）

感想やアドバイス等お待ちしております！

《次回予告》

「此処がデュエルアカデミアか……」

ブルーアイズホワイト……

あれは……『ハネクリボー』！？

ハ、ハゲッター……失礼過ぎるか。

第3話　デュエルアカデミア入学（前書き）

デュエル無しで短いです。

第3話　デュエルアカデミア入学

今俺はデュエルアカデミア行きの船に乗っている。

入学試験の結果は文句なしの合格だったが、選抜二での入学という理由で俺はオシリス・レッドでの入学となった。

多分俺が無名だから、実力を疑問視されてるってのもあるんだろうけど。

カードプロフェッサー『T．T』としての公式試合記録はあるけど『天道貴志』としては無名だからなぁ～

そういや、オシリス・レッドで思い出したけど、デュエルアカデミアにはランク制がある。

でも何でオシリス・レッドが一番下でオベリスク・ブルーが一番上なんだ？普通ラー・イエローが一番上じゃないのか？神のランク的に。

海馬さんの職権濫用じゃ……無いよな。それならブルーアイズ・ホワイトを作りそうだし。

攻撃力で決めたのかな？オベリスクは４０００で安定。

オシリスは手札の枚数×１０００と安定しない。

ラーもだけど、ラーは俺のトラウマである第二の能力を使えば、蘇生召喚でも初期ライフのままなら攻撃力は３９９９になるし。

それとも対邪神での活躍？ラーは元々、三邪神と神のランクは同格で邪神を倒せる能力もある。出なかったけど。

オベリスクは神専用のカードを使ったけど、打倒不能と言われたアバターと相討ちになった。

オシリスだけは確か、敗れていた筈。能力的にも邪神には勝てない。

まぁ気にしても仕方ないか。

【クェー】

「どうしたクシ……って『ハネクリボー』？」

【クリクリ～】

実体化はしてはないが、肩に乗っているクシルが騒ぎだしたので鳴き声がした方を見ると『ハネクリボー』の精霊が居た。

って精霊!?珍しいな……

「お～い相棒～どこだ～」

そう思ってるとおそらく『ハネクリボー』の持ち主らしき人が来た。

赤い制服だから俺と同じオシリス・レッドなのだろう。

【クリッ！クリクリ～】

主人に気付いた『ハネクリボー』が声を上げる。

「あっ居た。相棒どうしたんだよいきなりどこかに飛び出して」

【クリックリクリクリ～】

「へー同じ精霊の気配を感じたのか」

よく『ハネクリボー』の言葉が分かるな。

俺はクシルと同じ鳥獣族の精霊であるアレクに通訳してもらわないと分からないのに。

「この『ハネクリボー』は君の？」

「ああ！俺の相棒だ！この鳥はお前のか？」

「ああ。『ダーク・シムルグ』のクシルだ」

「『ダーク・シムルグ』ってもっと大きくなかったか？」

「デュエルの時以外は力を抑えてるから小さいんだよ。人型以外の精霊はこうするらしい」

現にゴーズとカイエンにアレク、今は冥府で修行中のマルスと里帰り中のアスディは通常サイズだし。

「お～い。アニキ～」

『ハネクリボー』の持ち主と話してると眼鏡を掛けた赤い制服の生

徒と黄色い制服を着た生徒がこっちに向かって来た。

「アニキどうしたんすか？いきなり走り出して」

「悪りぃ翔に三沢。ちょっと色々あってな」

兄貴？この二人は兄弟なのか？でも全く似てないな。俺や義兄さん達と同じ感じなのかな？

「君は？」

俺がそう思ってると黄色い制服を着た人が俺の方を向いて聞いてきた。

「俺は天道貴志だ。選抜二で入学した見ての通りオシリス・レッドの生徒だよ。そう言う君は？」

「俺は三沢大地だ。宜しくな」

「僕は丸藤翔っス。宜しくっス」

「へー貴志って言うのか。俺は遊城十代！宜しくな」

「一緒に居たのに名前も知らなかったんすか？」

「そういや、お互い名乗ってなかったな遊城」

「十代でいいぜ。俺も貴志って呼ぶし」

「分かった十代」

それから四人で話した。

そこで知ったんだが、選抜二の実技を担当する教師はデュエルアカデミア内でも屈指の実力者らしい。

それを聞いた十代にデュエルしようぜと言われ、入学式の後にデュエルする事になった。

――――――――――――――――――――

デュエルアカデミアに着き、今はハゲッター……は失礼過ぎるか。鮫島校長の話を聞いている最中だ。

しかし話長いな。後、反射する光が眩……睨まれたから止めておこう。

隣の十代は立ったまま寝てるし。本当に暇だ。

「それでは新入生の皆さん。学園生活を楽しみデュエルに励んでください」

校長先生の話が終わったみたいだ。

「十代起きろ。寮に行くぞ」

「んあ～よく寝た」

会って間もないが、図太いな。

「此処がオシリス・レッドの寮か」

オシリス・レッドの寮は少し古いアパートだった。

「部屋割りは……俺が一人部屋で十代と翔は隣みたいだな」

「それじゃあまた後でな貴志」

「ああ」

そう言って部屋に入ったんだが、部屋の中はわりとしっかりしていた。

問題はセキリュティか……後でカークさん直伝の罠でも仕掛けるか。

隣から『デス・コアラ』！と驚いている翔の声が聞こえた。翔も精霊が見えるのだろうか？

「貴志。デュエルしようぜ！」

十代がドアを開けて言ってきた。ノックぐらいしようよ。

「十代か。ちょっと待ってくれ。荷物を受け取りに行かないといけないんでな」

というより校長に用があるんだけどな。主に俺の事で。

「えぇ～マジかよ～。じゃあ戻ったらデュエルな！」

「了解」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「失礼します」

周りに誰も居ない事を確認して校長室に入る。

「天道君か。何か私に用かな？」

「ええ。私がペガサスミニオンである事とカードプロフェッサーだった事、武藤遊戯の弟子である事は秘密にして欲しいのです」

俺の入学届は直接校長に渡されたから校長は俺の事を知っている。

一応口止めしとかないと。『ペガサスミニオン』や『カードプロフェッサー』、『武藤遊戯の弟子』ではなく『天道貴志』として見てもらいたいからな。

「良いでしょう。もとよりそのつもりだったので」

「ありがとうございます」

鮫島校長に礼をして校長室を出た。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

校長室を出て寮に向かおうとしたら、デュエル場で十代と翔がブルーの生徒と何か言い合っていた。

「十代、どうかしたのか？」

「ん？ああ！万丈目さんこいつも入学試験でクロノス教諭を倒した奴ですよ！」

眼鏡を掛けた制服からブルーの生徒が鳥頭に向かって言った。

選抜二の時も観客が居たから見られていてもおかしくないけど、万丈目ってどっかで聞いた事があるような、無いような……

「お前もクロノス教諭が手抜きをしていたとはいえ、勝った奴か。まぐれかどうかその力を見せてもらいたいな」

『古代の機械究極巨人』を使って手抜きか……なら本気出したらどんだけ強いんだあの先生は？まぁそれは良い。

「まぐれかどうか確かめてみるか？」

まぐれ呼ばわりは気に入らないな。

「万丈目さんが出るまでもありません俺にやらせてください！」

「良いだろう」

そう言って万丈目は下がり、取り巻きらしき奴は俺と向き合いデュエルディスクを構えた。

「「デュエ「ちょっと待ちなさい！何をしているの！」

デュエルしようとしたら、気の強そうな女子生徒に止められた。

「て、天上院君か。なに、こいつらにデュエルアカデミアの厳しさを教えようと思ってね」

急に慌て始める万丈目。どうかしたのか？

「そう。でも、もう少しで寮の歓迎会が始まるわよ」

「くっ、行くぞお前等」

帰りだした万丈目。どうやらこの人には逆らえないらしい。

「貴方達もアイツ等と関わらない方が良いわよ。アイツ等碌でもない奴等なんだから」

吐き捨てるように言ってるが、一体何があったんだ？

「さっ、貴方達も自分の寮に帰りなさい。あと、万丈目君の挑発に乗らないようにね」

その後、自己紹介をして寮に帰った。

そういや、十代とデュエルする時間無くなったな。

第3話　デュエルアカデミア入学（後書き）

次回はデュエルを二回分書く予定です。

後、マルスはオリカの精霊です。

決してどっかの亡国王子ではありません。

第４話　弟子ＶＳ継ぐ者（前書き）

十代戦が思いの外長引いたので、十代戦だけにしました。

第４話　弟子ＶＳ継ぐ者

レッド寮に戻って来たのは良いのだが、まだ準備が出来てないらしく時間があるので十代とデュエルする事になった。

寮の前にあるレッド寮のデュエル場で向き合う。

「貴志君はどんなデッキを使うんスか？」

「ん～色々」

翔の質問だけど本当に色々なんだよね。精霊全部入ってるのとか、ドラゴン族のとか……

取り敢えず、精霊全部入ってるのを使うか。組み替えるの面倒だし。

「んじゃやるか」

「くぅ～ワクワクするぜ！」

「「デュエル！」」

俺　ＬＰ４０００　ＶＳ　十代　ＬＰ４０００

「俺の先攻！ドロー！」

さてどんなのが飛び出すのか……

「俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ（エレメンタルヒーロー）　スパークマン』を攻撃表示で召喚！」

十代の場に黄色い鎧のような物を付け、手から雷を出しているモンスターが現れた。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』
レベル４　光属性　通常　戦士族　攻１６００　守１４００

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代　ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』（攻１６００）

魔法・罠
無し

「俺のターン！ドロー！」

レベル４以下のモンスターが居ねぇ！？まぁ何とかなるか。

「手札を一枚捨てて『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚！」

俺の場に顔と胸に『？』と書かれている魔導師が現れる。

『ＴＨＥ　トリッキー』
レベル５　風属性　効果　魔法使い族
攻２０００　守１２００

「バトル！『ＴＨＥ　トリッキー』で『スパークマン』に攻撃！トリッキーイリュージョン！」

『トリッキー』が三人に分身し『スパークマン』に向かう。

『スパークマン』が迎撃すべく、手から雷を出す。一人目、二人目と雷に当たり消える。

『スパークマン』が三人目に雷を打ち出し、それは『トリッキー』に当たる。だが、その『トリッキー』も消えた。

『スパークマン』が辺りを見回すが見当たらない。すると上から体を半分スライドさせた『トリッキー』が『スパークマン』めがけ蹴りを放った。

「ヒイィィ！」

翔が悲鳴を上げる。『トリッキー』の体が半分スライドしてるから、体内が見えたのだろう。

蹴りを受けた『スパークマン』が消滅する。

十代　ＬＰ４０００→３６００

「くっ…トラップ発動！『ヒーロー・シグナル』！この効果でデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ・フェザーマン』を守備表示で特殊召喚！」

空に『Ｈ』というマークが浮かんだと思ったら、何処からともなく

鳥男とも言うべき、羽が生えた男が現れた。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』
レベル３　風属性　通常　戦士族　攻１０００　守１０００

「十代のデッキはＨＥＲＯデッキか……」

「ああ！次から次ぎえと現れるカッコイイ、ＨＥＲＯ達。ワクワクするだろ？」

「確かにな。カードを一枚伏せてターンを終了する」

俺　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『ＴＨＥ　トリッキー』
（攻２０００）

魔法・罠
無し

十代　ＬＰ３６００　手札４枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェザーマン』（守１０００）

魔法・罠
無し

「俺のターン！」

ＨＥＲＯ使いならやっぱり『融合』主体なのか？手札の消費が激しい気がするが……

「俺は魔法カード『融合』を発動！場の『フェザーマン』と手札の『バーストレディ』を手札融合！現れろ！マイフェイバリットモンスター『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』！！」

一瞬だけ、赤を基調とした衣装に身を包み、両手から火を出している女性が現れれ『フェザーマン』と融合した。

そして二体のＨＥＲＯが居た所には、右手が竜の口なっていて羽が片翼だけついているモンスターが現れた。

人相が若干悪いと思ったが、間違ってないと思う。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』
レベル６　風属性　融合／効果　戦士族
攻２１００　守１２００

「更に俺は『Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン』を召喚！」

十代の場に剣を背負った野生人とも思えるモンスターが現れる。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン』
レベル４　地属性　効果　戦士族　攻１５００　守１６００

そういや、十代のデッキには『一族の結束』や『連合軍』は入ってるのか？だとしたら、使われるとかなりヤバいんだが……

「バトル！『フレイム・ウィングマン』で『トリッキー』に攻撃！フレイム・シュート！」

「悪いが『トリッキー』は破壊させん。トラップ発動『亜空間物質転送装置』このカードの効果で『トリッキー』をエンドフェイズまでゲームから除外する」

「でもそれだとダイレクトアタックになるぜ？」

「別にいい。受けるダメージは同じだ」

『フレイム・ウィングマン』は自身が戦闘で破壊し、墓地に送ったモンスターの攻撃力分のダメージを与える効果があった筈だからな。

『トリッキー』が突如現れた機械から発射された光線を受けて姿を消す。

『フレイム・ウィングマン』の攻撃は俺にきた。

「って炎かよ！」

右手の竜の口から炎が吐き出される。技名にフレイムってあったからまさかとは思ったけどさ……

俺　ＬＰ４０００→１９００

【クェー♪】

クシルが喜んでいる。自分と同じで、自身の属性と違い炎の攻撃をする仲間を見つけたからだろう。

自分の主がこんがり焼かれてるのにその反応はどうかと思うけど。

「俺は手札の『冥府の使者ゴーズ』の効果を発動！俺の場にカードが存在しない場合、相手のカードによりダメージを受けた時、このカードを手札から特殊召喚できる！来い！『冥府の使者ゴーズ』！」

『冥府の使者ゴーズ』
レベル７　闇属性　効果　悪魔族　攻２７００　守２５００

俺の場に『冥府の使者ゴーズ』が現れたが何故か元気が無い。

【んも～何もデート中に呼び出すこたぁないでしょーよ】

その言葉に俺と十代はずっこける。

「貴志。まさかそいつもか？」

「ああ。そうだ」

「でも雰囲気が」

「言うな……言わないでくれ」

「ははは……」

流石の十代もびっくりしたみたいだ。この空気は何とかしないと……

「んん！更に『冥府の使者ゴーズ』の効果を発動！俺が受けたのは戦闘ダメージ。よって受けた戦闘ダメージと同じ攻撃力・守備力を持つ『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚する！現れろ『冥府の使者カイエン』！！」

【……】

『冥府の使者カイエントークン』
レベル７　光属性　トークン　天使族
攻？（２１００）　守？（２１００）

空気を変える為、咳払いをした俺の場にカイエンが現れる……が様子がおかしい。

【……さない】

「え？」

【ゴーズとのデートを邪魔した貴方は絶対に許さない！】

「俺！？貴志じゃないのかよ！？」

様子がおかしいと思ったらキレてたんだ……十代、色々済まん。

「カ、カードを二枚伏せてターンエンド」

「この時『亜空間物質転送装置』の効果で除外された『ＴＨＥ　トリッキー』は場に戻る」

俺　ＬＰ１９００　手札３枚

モンスター
『ＴＨＥ　トリッキー』
（攻２０００）
『冥府の使者ゴーズ』
（攻２７００）
『冥府の使者カイエントークン』
（攻２１００）

魔法・罠
無し

十代　ＬＰ３６００　手札０枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』
（攻２１００）
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン』

魔法・罠
伏せ　二枚

「俺のターン！ドロー！」

やっとレベル４以下が来たよ。まぁまずは

「手札から速攻魔法『サイクロン』を発動！俺から見て右側のカー

ドを破壊する」

突如現れた風の渦によって十代の伏せたカード『攻撃の無力化』は破壊された。

「よし！バトル！『ゴーズ』で『フレイム・ウィングマン』に攻撃！冥府の剣　斬撃剣！「トラップ発動！『聖なるバリア　－ミラーフォース－』！！」何！？」

『フレイム・ウィングマン』に斬り掛かるゴーズだが、突如現れたバリアに防がれ、そのバリアから出た光線により破壊される。攻撃表示のカイエンと『トリッキー』も同じように破壊された。

【俺達はやられちゃったけど、頑張れよマイブラザ～】

【これでやっとデートが再開できる！（頑張りなさい）】

待て！ゴーズのはともかくカイエンのはおかしいだろ！？

「形勢逆転だな（カイエンを破壊できて良かった）」

「大丈夫。問題ない」

実際かなりあるけど。

「俺はモンスターをセット更にカードを一枚伏せてターンエンド」

俺　ＬＰ１９００　手札１枚

モンスター

伏せ　１

魔法・罠
伏せ　１

十代　ＬＰ３６００　手札０

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』
（攻２１００）
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ワイルドマン』
（攻１５００）

魔法・罠
無し

「俺のターン！ドロー！俺は手札から『サイクロン』を発動！貴志の場のリバースカードを破壊するぜ」

「なっ！」

さっきは十代を襲った風の渦が今度は俺を襲い俺の『次元幽閉』を破壊する。

「バトル！『フレイム・ウィングマン』で守備モンスターに攻撃！フレイム・シュート！」

『フレイム・ウィングマン』が俺がセットしたモンスターを容赦なく燃やす。

燃やされたのは白い犬のようなモンスターだった。

『ライトロード・ハンターライコウ』
レベル２　光属性　効果　獣族　攻２００　守１００

「『ライトロード・ハンターライコウ』のリバース効果発動。フィールド場のカードを一枚破壊する事ができる。俺は『ワイルドマン』を破壊する。そして『ハンターライコウ』の効果でデッキの上から三枚墓地に送る」

『ライコウ』が野生人……『ワイルドマン』に噛み付き破壊する。

捨てられたカードは……『蜘蛛の糸』と『機械仕掛けのマジックミラー』と『命削りの宝札』……あ、悪夢だ。

「くっ……でも『フレイム・ウィングマン』の効果によりダメージを受けてもらうぜ」

『フレイム・ウィングマン』が先程とは違い、小さすぎる炎で攻撃してくる。こんなもの俺が受けた精神ダメージに比べたら……

俺　ＬＰ１９００→１７００

「ターンエンドだ」

俺　ＬＰ１７００　手札１枚

モンスター
無し

魔法・罠
無し

十代　ＬＰ３６００　手札０枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』
（攻２１００）

魔法・罠
無し

「俺のターン」

『命削りの宝札』は墓地に行ったがまだ『天よりの宝札』がある…
…頼む来い！

「ドロー！」

【クェー♪】

お前か……だが、かなり良いタイミングだ。

「俺は墓地の『冥府の使者ゴーズ』と『ＴＨＥ　トリッキー』をゲームから除外し手札から『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」

俺の場にいつものように力を抑えた幼鳥の姿では無く、真の姿としてクシルが現れる。

『ダーク・シムルグ』
レベル７　闇／風属性　効果鳥獣族　攻２７００　守１０００

「バトル！『ダーク・シムルグ』で『フレイム・ウィングマン』に攻撃！！ダーク・フレア！」

クシルが『フレイム・ウィングマン』に炎を吐く。その炎はクシル自身が起こす強風で勢いを増し大きくなっていく。

大きくなった炎は『フレイム・ウィングマン』を飲み込んだ。

「くっ…『フレイム・ウィングマン』が…」

十代　ＬＰ３６００→３０００

「カードをセットしてターンエンドだ」

俺　ＬＰ１７００　手札０

モンスター
『ダーク・シムルグ』
（攻２７００）

魔法・罠
伏せ　１

十代　ＬＰ３０００

手札、場　０

「俺のターン！！」

十代がドローした瞬間、空気が変わった。

「俺は魔法カード『ミラクル・フュージョン』を発動！俺は墓地の『スパークマン』と『フレイム・ウィングマン』をゲームから除外して『Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フレア・ウィングマン』を融合召喚！」

マジか！このタイミングで引くか普通……

十代場に光輝くＨＥＲＯが降り立つ。『フレイム・ウィングマン』よりずっとＨＥＲＯっぽい。

『シャイニング・フレア・ウィングマン』
レベル８　光属性　融合／効果　戦士族
攻２５００　守２１００

「『シャイニング・フレア・ウィングマン』は自分の墓地に存在する『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくカード一枚につき３００ポイントアップする！墓地に存在する『Ｅ・ＨＥＲＯ』は三枚！よって攻撃力が９００ポイントアップだ！」

『シャイニング・フレア・ウィングマン』
攻２５００↓３４００

「攻撃力３４００か……」

「バトル！『シャイニング・フレア・ウィングマン』で『ダーク・シムルグ』に攻撃！シャイニング・シュート！！これで俺の勝ちだ

！」

「悪いが負けるつもりは全く無い！トラップ発動！『プライドの咆哮』！！戦闘ダメージ計算時、俺のモンスターの攻撃力が相手モンスターより低い場合、その差分ライフを払って発動！ダメージ計算時のみ、自分のモンスターの攻撃力は相手モンスターの攻撃力の差分＋３００ポイントアップする！迎撃しろ『ダーク・シムルグ』！ダーク・フレア！！」

「くっ、行っけぇぇ！！『シャイニング・フレア・ウィングマン』！！」

俺　ＬＰ１７００→１０００

『ダーク・シムルグ』
攻２７００→３７００

クシルと『シャイニング・フレア・ウィングマン』がぶつかる。始めは押されていたクシルだが『シャイニング・フレア・ウィングマン』を押し返す。

【クェー！！】

大きく叫び『フレイム・ウィングマン』を倒した時よりもずっと大きい炎を吐き出す。

そして……『シャイニング・フレア・ウィングマン』は炎に呑まれて消えた。

十代　ＬＰ３０００→２７００

「ターンエンドだ。クッソォォォ！！！」

「俺のターン！バトル！『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！ダーク・フレア！！」

十代　ＬＰ２７００→０

クシルが吐き出した炎により十代のライフは０になった。

同時にデュエルディスクから終了を告げるブザーが鳴る。

「ふ～何とか勝てたか……」

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「あの～アニキに貴志君」

「あれ？翔居たのか？」

「ずっと居たっスよ！」

居たんだ。すっかり忘れてたな。

「ってそれはどうでも良いっス」

良いんだ……

「早くしないと歓迎会が始まるっスよ」

「マジでか!?早く行こうぜ貴志、翔」

十代はそう言うと走って行った。てか、アイツ脚速いな。

っと俺も早く行かないとな。

第４話　弟子ＶＳ継ぐ者（後書き）

感想やアドバイス、ミスがあったら指摘等お願いします！

第5話　VS取巻……てか、自分？（前書き）

アニメのセリフと一部違う箇所があるかもしれません。

第5話　VS取巻……てか、自分？

寮の歓迎会が終わり部屋でのんびりしていると支給された携帯端末ＰＤＡにメールが2通来た。

どうやら今日会った万丈目という奴とその取り巻きからのメールのようだ。なんだ？と思ったがメールを開いて見てみる。

「え～と、『今日午前0時にデュエルフィールドにて待つ。貴様等ドロップアウトボーイ達と我々オベリスク・ブルーの格の違いを見せてやる』と『お前の相手はこの俺だ』……か」

どうも万丈目って言葉に聞き覚えがあるな……

【どうかしたのか？主よ】

アレクが聞いてきた。俺の精霊達は基本的に冥界か精霊世界に居るか俺の近くに居る。

「やっぱり万丈目って言葉に聞き覚えがあってな」ほんと何だったっけ？

【万丈目グループではないのか？】

「万丈目グループ？……あ～あの中堅企業の」

引っ掛かってた事が解決してスッキリした。万丈目って名字は珍しいし多分、御曹司なんだろうな……

【それで、どうするのだ?】

「どうするって何を?」

【デュエルを受けるか受けないかだ】

「やめておく」

眠いし面倒だし。校則破りだし。

【えぇ~面白そうだし行こうぜ~】

「悪いなゴーズ。俺は逃走を発動して全ての面倒事を避けさせてもらう」

俺が行かないと言った事に反応してゴーズが言ってきたが、面倒なのは面倒だ。何より眠い。

大体、何故夜中にデュエルをやるんだ?明日でいいだろ……夜中の0時にやるから明日と言えば明日だけど。

【残念だけど私達は先回りを発動して逃走の効果を無効にするわ】

ベッドの中に入ろうとしたら、実体化したゴーズとカイエンに阻まれた。

「え~眠【私達のデートを邪魔した制裁を受けたい?】さーて行く準備をしますか」

カイエンはゴーズの為なら、実力行使も辞さないというのを忘れてた。多分、カイエンから出てるどす黒いオーラは見間違いじゃ無い

な……

てか、主を脅すカイエンといい、カイエンを止めないゴーズとアレクといい、寝ているクシルと里帰り中のアスディと冥界で修行中のマルスは良いとして、この3体は精霊として大丈夫なんだろうか……

部屋を出ると、十代と翔も出てきた。どうやら十代も俺と同じく呼び出されたようで、翔はその付き添いらしい。

そんなこんなでデュエルフィールドに着いた。

「臆病風に吹かれなかったようだな。ドロップアウトボーイ達よ」

中心地に立っている万丈目が言った。

「どうでも良いから、さっさとデュエルしようぜ」

「フン。その余裕がどこまで続くか見物だな。行くぞ取巻」

「はい！万丈目さん」

万丈目がそう言って十代の前に立つ。

俺の前には、眼鏡を掛けた万丈目の取り巻きが立つ。

てか、アイツ取巻って名前だったんだ……

「さぁ行くぞドロップアウトボーイ！」

「ちょっと待ってくれ。使うデッキをまだ決めてない」

そう言ってデッキケースを取り出す。どれにしようか……これにするか。

【主よ。済まぬが我も使ってくれぬか？】

アレクの言葉に手を止める。確かに今手元に無い、アスディとマルスを除けば、アレクだけ出してないし、まぁ良いか。

いつも使うデッキからアレクを取り出す。

手札に来たとして、アレクはどうやって出そうか……相手次第で出しやすいんだけど。

「終わったのか？」

「ああ、始めよう」

「「デュエル！」」

俺　ＬＰ４０００　取巻　ＬＰ４０００

「俺の先攻！ドロー！　俺は『ゴブリン突撃部隊』を攻撃表示で召喚！」

取巻の場に金棒を持ったゴブリン達が現れる。

『ゴブリン突撃部隊』
レベル４　地属性　効果　戦士族　攻２３００　守０

ＫＣグランプリの時に、城之内さんが双六さんとのデュエルの時に

使ってたけど、攻撃する様ががおやじ狩りに見えたんだよなぁ～っと今はどうでも良いか。

「更にカードを二枚セットしてターンエンドだ！どうだドロップアウトボーイ！」

取巻　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『ゴブリン突撃部隊』
（攻２３００）

魔法・罠
伏せ　２

「どうだと言われても……俺のターン！ドロー！俺は手札から永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』を発動！俺がエキストラデッキから選ぶのは『Ｆ・Ｇ・Ｄ（ファイブ・ゴッド・ドラゴン）だ」

場にＦ・Ｇ・Ｄのカードが現れて消えた。

「そして融合素材を墓地に送る「ちょ、ちょっと待て！」　何だ？」

いきなり慌て出してどうしたんだ？

「お前が今使ってるデッキは入学試験の時に使ってたデッキじゃないのか！？」

「ん？ああ、そうだ」

俺がそう言うと黙り込んだけど、大丈夫なのか？てか、続けて良いのか？

「『未来融合－フューチャー・フュージョン』の効果で『F・G・D』は発動後二回目の自分のスタンバイフェイズ時に特殊召喚される。更に俺は『封印の黄金櫃（ふういんのおうごんひつ）』を発動するが、チェーンして使うカードはあるか？」

「いや、無い」

「なら俺はデッキから『龍の鏡《ドラゴンズ・ミラー》』をゲームから除外し、発動後二回目の自分のスタンバイフェイズ時に手札に加える」

闘いの儀で師匠がアテム師匠とのデュエルで使った『封印の黄金櫃』のエラッタ版。結構使いやすいんだよね。

ふと十代の方を見ると

「デュエルは９９％の知性と１％の運でできている。運が良いだけで勝ち続けるのは不可能だ！」

と万丈目が言っていた。

確かに運だけじゃ勝てないけど、運は重要だと思う。それに、運が１％しか無いなら、城之内さんはどうなるんだろう。

あの人は……一回のコイントスで手札補充をしたり、人の場を全滅させる。

しかも、九割失敗なし……どれだけ運が良いのだろうか。

「どうした!?ターン終了か?」

「いや、モンスターをセット。カードを一枚セットしてターンエンド」

危ない危ない。思い出してちょっとナーバスになってた。集中しないと

俺　ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター
伏せ　１

魔法・罠
『未来融合－フューチャー・フュージョン』
（永続魔法）
伏せ　１

取巻　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『ゴブリン突撃部隊』
（攻２３００）

魔法・罠
伏せ　２

「俺のターン！（くそ！デッキが違うなら、伏せた『調律師の陰謀』は多分、あまり意味が無い……）俺は魔法カード『二重召喚（デュアルサモン）』を発動！この効果で俺はこのターン二回まで通常召喚できる。俺は『可変機獣　ガンナードラゴン』を召喚！更に『神獣王バルバロス』を召喚！」

取巻の場に『ガンナードラゴン』と『バルバロス』が現れる。

『可変機獣　ガンナードラゴン』
レベル７　闇属性　効果　機械族
攻２８００（１４００）
守２０００（１０００）

『神獣王バルバロス』
レベル８　地属性　効果
獣戦士族
攻３０００（１９００）
守１２００

あれ？これって……

「『ゴブリン突撃部隊』と『可変機獣　ガンナードラゴン』に『神獣王バルバロス』ってまさか……」

「オシリス・レッドのドロップアウトボーイのくせによく分かったな！そうだこのデッキはカードプロフェッサー《Ｔ．Ｔ》のデッキを模した物だ！」

「……」

「驚いて声も出ないようだな」

そりゃあ、自分のデッキを模した人とデュエルしてるんだから驚くよ。

「明日香さん。カードプロフェッサーってなんなんスか？」

翔がいつの間にか来ていた天上院さんに聞いた。

「カードプロフェッサーはとあるプロデュエリスト集団の事よ。ちなみに《Ｔ．Ｔ》という人は今のカードプロフェッサーのトップの事よ」

「その通り！しかも、若手のプロデュエリストの中では《エド・フェニックス》とトップを争う程の実力を持っている！」

凄い評価だな……俺的には変装して、声変えて、シークレットブーツを履いてデュエルするというただの黒歴史なんだけど……

「どうでも良いから早くしてくれ」

このまま黒歴史をほじくり返されたら恥ずかしさで死んでしまう。ゴーズ達はなんか笑ってるし……

「チッ！俺は伏せていた永続罠『スキルドレイン』を発動！発動コストでライフを１０００ポイント失うが、このカードがフィールド上に存在する限り、フィールド上で表側表示で存在する効果モンスターの効果は無効になる」

取巻　ＬＰ４０００→３０００

『可変機獣　ガンナードラゴン』
攻１４００→２８００

『神獣王バルバロス』
攻１９００→３０００

「アニキも貴志君もヤバイっスよ～」

「フハハハ！行くぞ！バトル！『ゴブリン突撃部隊』で守備モンスターに攻撃！」

金棒を持った『ゴブリン』達が襲いかかってくる。
守備モンスターの『仮面竜（マスクド・ドラゴン）』が破壊される。どう見ても、リンチにしか見えないのは気のせいだろうか……

「守備モンスターは『仮面竜』だ。『仮面竜』の効果は墓地で発動する効果の為、有効。『仮面竜』の効果で、デッキから二体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚」

俺の場に顔に仮面のような物を付けている胴体が赤と白の竜が現れる。

『仮面竜』
レベル３　炎属性　ドラゴン族
攻１４００　守１１００

「なら、『可変機獣　ガンナードラゴン』で『仮面竜』に攻撃！」

「『仮面竜』の効果で、三体目の『仮面竜』を守備表示で特殊召喚」

「ぐっ、『神獣王バルバロス』で『仮面竜』に攻撃！」

二体目の『仮面竜』は『ガンナードラゴン』のブレスに焼かれ三体目の『仮面竜』は槍で串刺しにされた。

「『仮面竜』の効果で、デッキから『ミンゲイドラゴン』を守備表示で特殊召喚」

俺の場に竜……と言うより、亀に羽が生えた感じのモンスターが現れる。

『ミンゲイドラゴン』
レベル２　地属性　効果　　ドラゴン族
攻４００　守２００

「俺は魔法カード『タイムカプセル』を発動。デッキからカードを一枚除外すし、発動後二回目の自分のスタンバイフェイズ時に手札に加える。これ以上する事は無い。ターン終了だ」

俺　ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター
『ミンゲイドラゴン』
（守２００）

魔法・罠
『未来融合ーフューチャー・フュージョン』
（永続魔法）

伏せ　１

取巻　ＬＰ３０００　手札０

モンスター
『ゴブリン突撃部隊』
（攻２３００）
『可変機獣　ガンナードラゴン』
（攻２８００）
『神獣王バルバロス』
（攻３０００）

魔法・罠
『スキルドレイン』
（永続罠）
『タイムカプセル』
伏せ　１

「俺のターン。ドロー　魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを二枚ドローする。……モンスターセットしてターンエンド」

後、二体墓地に行けば……

俺　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『ミンゲイドラゴン』
（守２００）

伏せ　１

魔法・罠
『未来融合ーフューチャー・フュージョン』
（永続魔法）
伏せ　１

取巻　ＬＰ３０００　手札０

モンスター
『ゴブリン突撃部隊』
（攻２３００）
『可変機獣　ガンナードラゴン』
（攻２８００）
『神獣王バルバロス』
（攻３０００）

魔法・罠
『スキルドレイン』
（永続罠）
『タイムカプセル』
伏せ　１

「俺のターン！（『タイムカプセル』で選んだ『ライトニング・ボルテックス』が来るのは次のターン。だが……）ドロー！（よし！ついてる）」

引いたカードを見て、ニヤニヤしだしたけど何を引いたんだ？

「バトル！『ゴブリン突撃部隊』で『ミンゲイドラゴン』を『可変機獣　ガンナードラゴン』で守備モンスターに攻撃！」

『ゴブリン突撃部隊』のリンチで『ミンゲイドラゴン』が『可変機獣　ガンナードラゴン』のブレスで守備モンスターとして出した『神竜　ラグナロク』が破壊される。

「更に『神獣王バルバロス』でダイレクトアタック！トルネード・シェイパー！！」

「リバース・カード『くず鉄のかかし』を発動。この戦闘によって『神獣王バルバロス』の攻撃を無効にする」

『神獣王バルバロス』が突き出した槍がかかしに防がれる。かかし強いな！

「更に『くず鉄のかかし』は発動後墓地に送らず、セットされる」

「くっ……だが、俺は魔法カード『光の護封剣』を発動する。これでＦ・Ｇ・Ｄが召喚されても攻撃できねぇぜ。ターンエンドだ！」

俺の場に空から無数に降ってきた光の剣が突き刺さる。あ～だから笑ってたのか、納得。

俺　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
無し

魔法・罠

『未来融合ーフューチャー・フュージョン』
（永続魔法）
伏せ　１

取巻　ＬＰ３０００　手札０

モンスター
『ゴブリン突撃部隊』
（攻２３００）
『可変機獣　ガンナードラゴン』
（攻２８００）
『神獣王バルバロス』
（攻３０００）

魔法・罠
『スキルドレイン』
（永続罠）
『タイムカプセル』
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！俺のスタンバイフェイズ時に『未来融合ーフューチャー・フュージョン』の効果によって『Ｆ・Ｇ・Ｄ』を攻撃表示で特殊召喚！」

俺の場に闇、風、炎、水、地属性をそれぞれ司る五つの首を持ったドラゴンが現れる。

『Ｆ・Ｇ・Ｄ』
レベル１２　闇属性　融合／効果　ドラゴン族
攻５０００　守５０００

「俺は更に『封印の黄金櫃』の効果で『龍の鏡』を手札に加える。ちなみに『ミンゲイドラゴン』の効果は発動しない」

これで墓地にドラゴンが１０体溜まったな。

「俺は手札から『巨竜の羽ばたき』を発動。『Ｆ・Ｇ・Ｄ』を手札に戻し、フィールド上の魔法・罠を全て破壊する！」

『Ｆ・Ｇ・Ｄ』が羽ばたき何処かに飛び去る。その時に起こった風によって、フィールド上の魔法・罠も何処かに飛んでいく。

「クッ、だが！『龍の鏡』でエキストラに戻った『Ｆ・Ｇ・Ｄ』を出してもライフは削りきれないぜ！（何とか時間を稼がないと）」

「んな事は分かってる。俺は『龍の鏡』を発動。更に「ガードマンが来るわ！時間外に施設を無断で使ってるから、最悪退学になるわよ！」チッ……」

「このデュエルは俺の勝ちだな」

「ちょっと待てよ！」

「待たん。行くぞ取巻、幕谷」

「今回は引き分けにしてやる！」

「さいですか」

万丈目が帰った後に、駄々をこねた十代を無理矢理連れていき外に

出た。

「どうだったかしらオベリスク・ブルーの洗礼は？」

「大した事ねぇーな」

「でも、危なかった様に見えたわよ？」

「最後に引いたカードはなんだったんスかアニキ？」

「へへ、これさ」

そうして十代が出したカードは……

「『死者蘇生』……」

「ああ！これで墓地の『フレイム・ウィングマン』を特殊召喚して攻撃すれば俺の勝ちだぜ」

どんな状況かは知らんが十代の引きって一体……

「貴方が『龍の鏡』を使った時に使おうとしたカードは何だったの？」

「ん？これだけど」

そう言ってカードを一枚見せる。

「れ、『連続魔法』……まさか」

「そう。これで『F・G・D』を二体出そうと思ったんだけど、時間切れとはね」

せっかくボコボコにできると思ったのに残念だ……

そういや、アレク手札に来なかったな。あの状況なら特殊召喚できたんだが……

「んじゃ眠いんで俺はこれで」

そう言って寮への帰路つく、ゴーズ達も満足したみたいだし、良かった良かった。

第5話　VS取巻……てか、自分？（後書き）

デュエルを1から考えるのは、難しいですね。

ルールミスの指摘や感想やアドバイス等、お願いします！

第６話　覗☆き☆王？（前書き）

アニメや漫画等のオリカの効果は未ＯＣＧＷｉｋｉの奴と漫画の効果そのままにする等、ごちゃ混ぜにします。一部とんでもない効果のもあるので。

第6話　覗☆き☆王？

万丈目と取り巻きーズとのデュエルから三日。
特に何も起こらず、平和な日常を送っている。
今はクロノス先生の授業中だ。
7年前に教わった事を復習するだけだから正直、暇だ。
そう思っていると、翔が当てられた。どうやらフィールド魔法について答える様言われたみたいだ。

「えっ、あ、え～と」

翔が答えられず、しどろもどろになっているとブルーの生徒から茶々が入る。

「もう良いノ～ネ。流石はオシリス・レッド。こんな問題にも答えられないとは驚きなノ～ネ」

それで、更に慌てて答えられくなった所でクロノス先生が打ち切り、笑みを浮かべるが

「でも、先生。実戦と知識は関係ないですよね。だって俺、入学試験の時に先生に勝っちゃったし」

十代の発言により、一気に不機嫌になった。

でも、十代よ知識は大事だと思うぞ。

知識があれば多彩な戦術を考えられるし、俺は知識と才能でデュエルを始めてたった二ヶ月で、カードプロフェッサーになった人を知っている。

てか、十代ってクロノス先生に勝ってたんだな。

いつの間にか、クロノス先生に当てられた天上院さんがフィールド魔法について答えた所で授業の終了を告げるチャイムが鳴った。

次は……確か体育だったな。

――――――――――――――――――――

室内運動場に移動しだが、今日の体育の内容は自由にして良いらしい。

「なぁ、貴志。翔が見当たらないんだけど、知らねぇか？」

「いや、知らないな」

十代に言われて周りを見ると、確かに翔が見当たらない。

自由と言っても、運動場から出るなんて事は無いよなぁ～

「ん？十代。あそこに居るのは翔じゃないのか？」

「あっ、本当だ」

入り口付近に水色の髪をした人が居たので、十代に言ってみたが、当たったみたいだ。

二人で駆け寄るが、どうも様子がおかしい。

顔が赤く、フラフラしている。風邪かなんかか？

「十代。翔の様子がおかしいぞ」

「そうだな。取り敢えず、鮎川先生の所に連れていくか」

「大丈夫っスよ～アニキに貴志君。ニヘヘ～」

さっきの様子に、顔のにやつきが足され、どうみても大丈夫そうに見えない。

というか、まるで危ない薬を服用している人に見える。本当に大丈夫なんだろうか？……特に頭の方が。

「それじゃあ僕はこれで」

そう言って翔はバドミントンをしている人達の方に行った。

「本当に大丈夫なのか？あれは」

「本人がああ言ってんだし大丈夫だろ。

おっ！あっちでサッカーを始めるみたいだし、行こうぜ」

「そうだな」

取り敢えず、翔の事は保留にして俺達はサッカーに加わった。

オシリス・レッド対ラー・イエローで試合をしたが、十代が４ゴールを決める等して、俺達オシリス・レッドが７対０で勝った。

オーバーヘッドキックを決めるとか凄すぎだろ……

――――――――――――――――――

「ん～『グリード・グラード』はやっぱり使えないか。デッキから抜いて変わりに『精神操作』でも入れるか……でも、ドロー系が減るのもなぁ～」

寮で晩飯を食べ、風呂に入った後にデッキ編成をしている。

やっぱりシンクロを使う人があまり居ないから、外すか。

ドロー系が減るのは痛いけど、他にも色々入れてるからまだ大丈夫だと思うし。

「お～い、貴ってうわぁ！」

十代が部屋に入って来ようとしてドアを開けたが、飛んできたカード手裏剣に慌ててドアを閉める。

俺は溜め息を吐きながら、天井から垂らしてある紐を引いて罠を解除してドアを開ける。

「貴志、危ねぇじゃねぇか！」

「ただの防犯用だし、ノックすれば外れる仕掛けだから、普通は大丈夫。それで？なんか用か？」

ドアの前で腰を抜かしている十代に問い掛ける。

「ああ、そうだった。大変なんだ翔が攫われちまったんだ！」

「どういう事だ？」

十代に訳を聞くとこんな感じだった。

今から一時間程前、翔が何処かに出ていく。

今から五分前程、十代のＰＤＡに『丸藤　翔は預かった。返して欲しければ、天道　貴志と共にブルー女子寮の裏手に来い』というメールが来る。以上。

何故だろう……凄い面倒事に巻き込まれた気がする。

このメールの内容だと俺も行かないといけないみたいだし……

それ以前に、翔を攫う理由も無いと思うが……ふむ。

「はぁ。取り敢えず、行くか」

「ああ。それで……女子寮って何処だっけ？」

「さぁ？俺も知らん」

その後、試しにメールの送り主に女子寮の位置が分からない旨を伝えると、島の見取り図を添付したメールを送って来てくれた。

しかも、ご丁寧に校内に掲示されているでかい見取り図を……これで部外者が誘拐した可能性は低くなったが、どうなる事やら……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「アニキ～貴志君～」

「何をどうしたらそんな状態になるんだ？」

ボートを漕いで湖を渡り、女子寮に着くと、天上院さんと女子生徒二人に囲まれ、ロープでぐるぐる巻きにされた翔が居た。

「来たわね」

「明日香。お前がメールの送り主なのか？」

十代、それより先に聞く事があるって、翔がぐるぐる巻きにされてる訳とか……まぁ良いか。

「んじゃ、翔は返してもらうぞ」

「そうはいきませんわ」

翔を引き取ろうとしたら、翔を囲んでいた二人の内、一人が言った。

「何で？」

「こいつ覗きをしたのよ！」

【女の敵ね】

【土の風上にもおけぬな】

翔を囲んでいたもう一人の言葉に俺の精霊達が反応した。

ん？ゴーズだけ何も言ってないな……

【これぞ覗☆き☆王だな】

ゴーズの反応が一番ひでぇ。

その後、翔が覗いてないと叫び、俺達が呼び出された訳も話された。

簡単に言えば、翔が十代宛の偽ラブレターに引っ掛かり、女子寮に来て今に至る。

偽ラブレターを見せてもらったが、ナメクジが這ったような汚い字で書かれており、気持ち悪いキスマークまで付いていた。

天上院さんの書いた字を見た事が無いからどうとも言えないが、よく鵜呑みにしたな……

その後、俺と十代が天上院さんとデュエルして勝てば、今日の事は不問にして、翔を解放するという話になった。

「翔、明日ドローパン五つ奢ってもらうぞ」

「えぇ～！」

「じゃ、俺はこれで」

「ああー！！奢るッス奢るッスから行かないで～！」

「毎度あり」

今回は翔の注意不足が招いた事なので、これぐらいのお灸は据えないと。

デュエルアカデミア内の通貨であるＤＰ（デュエリストポイント）をカードを買う以外はあまり使いたくないという理由もあるけど……

――――――――――――――――――――

ボートで湖の中心地まで行きデュエルの準備をする。

始めに十代がデュエルする事になり、デュエルした。

デュエル内容は簡単に纏めれば融合合戦だった。

勝者は十代でフィニッシャーは『Ｅ・ＨＥＲＯ　サンダー・ジャイアント』召喚時の効果で天上院さんの『サイバー・ブレイダー』を破壊してダイレクトアタックを決めた。

「次は俺か」

ボートを漕いで、天上院さんの前に出る。

「貴志君～頼むっスよ～！！」

丁度中間地点に居る翔が言った。

「分かってるよ。じゃ、始めますか」

「「デュエル！」」

俺　ＬＰ４０００
天上院　ＬＰ４０００

「私の先攻！ドロー！私は『ソニックバード』を召喚するわ」

天上院さんの場にゴーグルとジェットエンジンを着けた鳥が現れる。

『ソニックバード』
レベル４　風属性　効果　　鳥獣族　攻１４００　守１０００

「更に『ソニックバード』の効果でデッキから『機械天使の儀式』を手札に加える。カードを一枚伏せてターンエンドよ」

天上院　ＬＰ４０００　手札５枚

モンスター
『ソニックバード』
（攻１４００）

魔法・罠
伏せ　１

『ソニックバード』か……デッキを変えた素振りは無かったから、天上院さんのデッキは融合モンスターと儀式モンスターが主力なのか？そうだとしたらかなりの確率で手札事故を起こすと思うけど……

「俺のターン！ドロー」

今は考えても仕方ないか……

「相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、このカードは手札から特殊召喚できる。現れろ！チューナーモンスター『ＴＧ（テックジーナス）ストライカー』！」

俺の場に黒と青を基調とした戦士が現れる。

『ＴＧストライカー　ＷＡ－０１』
レベル２　地属性　効果　戦士族／機械族
攻８００　守０

「『ＴＧ』！？貴方、珍しいカードを持ってるわね……」

「数枚しか持ってないけどな」

現に『ＴＧ』シリーズはかなり珍しい。ペガサスミニオンの俺ですら、持ってるのは四枚だけだし……

「俺は更に『ラーニング・エルフ』を召喚し、レベル３『ラーニン

グ・エルフ』にレベル2『TGストライカー』をチューニング！
五つの絆の証が集いし時、現れる正義を冠する物よ……その力で他の者を滅せよ！シンクロ召喚！
現れろ『A・O・J　カタストル（アーリー・オブ・ジャスティス）』！」

俺の場に知的な女性『ラーニング・エルフ』が現れた後、『TGストライカー』が光の輪となり、それを『ラーニング・エルフ』が通過する。

そして俺の場に白と金をメインカラーとし、中心に黒と赤が彩られた四つ脚の機械が現れる。

『ラーニング・エルフ』　（遊戯王R）
レベル3　風属性　効果　天使族　攻1400　守1500
効果
このカードがフィールド上から墓地に送られた時、自分のデッキからカードを一枚ドローする。

『A・O・J　カタストル』レベル5　闇属性　シンクロ／効果
機械族
攻2200　守1200

「『ラーニング・エルフ』の効果でカードを一枚ドロー。バトル！『カタストル』で『ソニックバード』に攻撃！『カタストル』は闇属性以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する！」

「っ！そうはいかないわ！トラップ発動！『攻撃の無力化』！」

『カタストル』が顔？から放った光線は渦に吸い込まれた為、『ソニックバード』には届かなかった。

「破壊できなかったか……カードを二枚伏せてターンエンド」

俺　ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』（攻２２００）

魔法・罠
伏せ　２

天上院　ＬＰ４０００　手札５枚

モンスター
『ソニックバード』
（攻１４００）

魔法・罠
無し

明日香Ｓｉｄｅ

「私のターン！」

『ＴＧ』を持ってるなんて彼は何者なのかしら？いや、まずは目の前のデュエルに集中しないとね。

「私は『マンジュ・ゴッド』を攻撃表示で召喚し、効果発動！このカードが召喚・反転召喚に成功した時、自分のデッキから儀式モンスターか儀式魔法を手札に加える事ができる。私は『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』を手札に加えるわ」

私の場に泥？みたいな物で形成されたモンスターが現れる。正直、本当に天使族なの？と思ってしまう。

『マンジュ・ゴッド』
レベル４　光属性　効果　天使族　攻１４００　守１０００

何はともあれ、今引いたカードと合わせてこれで一気に私のエースモンスターが出せるわね。

明日香Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』か……面倒だな。
「私は手札から儀式魔法『機械天使の儀式』を発動。場の『ソニックバード』と『マンジュ・ゴッド』を生け贄に『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』を儀式召喚！」

天上院さんの場に四つの手に、二振りの剣と一つな薙刀を持った機械天使が降臨した。これで天使族と言うのだから、天界という場所はおっかない所だと思う。

『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』
レベル８　光属性　儀式／効果　天使族
攻２７００　守２４００

「更に『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』が特殊召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するモンスター一体を相手が選択して破壊するわ」

「俺の場には『カタストル』のみ。よって『カタストル』を破壊する」

『茶吉尼』に切り刻まれて『カタストル』はバラバラにされた。

「更に私は魔法カード『融合』を発動！手札の『エトワール・サイバー』と『ブレード・スケーター』を融合！現れなさい『サイバー・ブレイダー』！」

天上院さんの場にスケート選手のような滑り方をしている人物が現れた。

さっきの十代とのデュエルでは『フレイム・ウィングマン』を倒してたな。

『サイバー・ブレイダー』
レベル７　地属性　融合／効果　戦士族
攻２１００　守８００

「バトルよ！『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』でダイレクトアタック！」

「トラップ発動！『ガード・ブロック』戦闘ダメージを０にし、カードを一枚ドローする」

剣と薙刀が俺に振り下ろされたが、バリアに阻まれる。

「っ！なら『サイバー・ブレイダー』でダイレクトアタック！！」

水上を滑り向かってきた『サイバー・ブレイダー』が上段蹴りを顔付近に放つ。それをデュエルディスクで防ぐ。

「ぐっ、ぅ！！」

俺　ＬＰ４０００→１９００

「私はターンを終了するわ」

俺　ＬＰ１９００　手札４枚

モンスター
無し

魔法・罠
無し

天上院　ＬＰ４０００　手札１枚

モンスター
『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』
（攻２７００）
『サイバー・ブレイダー』
（攻２１００）

魔法・罠

無し

「俺のターン！ドロー！俺は手札を一枚墓地に送り『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚！更に手札を一枚デッキの上に戻し、墓地の『ゾンビキャリア』を特殊召喚！」

俺の場に全体的に少し太めのゾンビが現れる。

『ゾンビキャリア』
レベル２　闇属性　効果
アンデット族
攻４００　守２００

「『ＴＨＥ　トリッキー』の召喚時に墓地に送ったのね」

「そういう事。じゃあ一気にせて貰う！レベル５『ＴＨＥ　トリッキー』にレベル２『ゾンビキャリア』をチューニング！
七つの絆の証が集いし時、現れる魔術師よ
魔力を用いて我が障害を滅殺せよ！シンクロ召喚！
現れろ！『アーカナイト・マジシャン』！！」

うーん。『ＴＨＥ　トリッキー』が光の輪を通過しているのは良いんだが、『トリッキー』の顔が『？』のせいで笑いそうになってしまう。まぁ、それは置いといて……

俺の場に白と紫を基調としたローブを纏っている魔術師が現れる。

『アーカナイト・マジシャン』
レベル７　光属性　シンクロ／効果　魔法使い族

攻４００　守１８００

「『アーカナイト・マジシャン』がシンクロ召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを二つ置く。そして『アーカナイト・マジシャン』の攻撃力は自身に乗っている魔力カウンター一つにつき、攻撃力は１０００ポイントアップする！」

『アーカナイト・マジシャン』
魔力カウンター０→２
攻４００→２４００

「攻撃力２４００……でも貴方のモンスターは一体……『サイバー・ブレイダー』は戦闘で破壊できないし、『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』の攻撃力にも届かないわ！」

「そんな事は分かってるさ。俺は『アーカナイト・マジシャン』の効果発動！自分フィールド上に存在する魔力カウンターを一つ取り除く事で、相手フィールド上に存在するカードを一枚破壊する。俺は『アーカナイト・マジシャン』に乗っている魔力カウンター二つを取り除き、『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』と『サイバー・ブレイダー』を破壊する！」

『アーカナイト・マジシャン』が杖に自身の魔力を集約する。そして杖に溜まった魔力を天上院さんのフィールド目がけて解き放った。

杖から出た魔力は『サイバー・ブレイダー』と『サイバー・エンジェル－茶吉尼－』に当たり、この二人を葬った。

「サイバー・エンジェル達が……」

『アーカナイト・マジシャン』
魔力カウンター2→0
攻２４００→４００

「更に俺は墓地の『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』と『ラーニング・エルフ』をゲームから除外して手札から『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！現れろ！クシル！！」

水上に火柱が立ち、その火柱の中からクシルが現れる。

その様子に焼き鳥にならないのか？と思ったら睨まれた……

「バトル！『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！！ダーク・フレア！」

「うっ、くっ……でもまだライフは残るわ！」

天上院　ＬＰ４０００→１３００

「この瞬間、トラップカード『連撃』を発動！自分フィールドのモンスター一体が相手プレイヤーに戦闘ダメージを与えた時に発動できる。そのモンスターはもう一度だけ攻撃を行う！」

「なんですって！？」

『連撃』（遊戯王Ｒ）
通常罠
効果（遊戯王未ＯＣＧＷｉｋ）
自分フィールド上のモンスター一体が相手プレイヤーに戦闘ダメー

ジを与えた時に発動できる。
そのモンスターはもう一度攻撃を行う。

クシルがもう一度炎を溜める。このデュエルを終わらせる為に……

「行くぞクシル！追撃のダーク・フレア！！」

【クゥエェ－！！！】

「きゃあぁぁぁ！！」

天上院　ＬＰ１３００→０

デュエルディスクから終了を告げるブザーが鳴り、カードが消える。

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「約束通り、翔は解放してもらう」

「ええ。分かったわ」

あの後、女子生徒二人が騒いだが、天上院さんが宥め、陸地に戻り、翔を解放してもらった。

「うぅ～アニキ、貴志君ありがとうッス～」

「気にすんなよ翔」

「明日ドローパン五つな」

「うぅ～分かってるスよ～」

よしこれでＤＰが浮いた。

その後、それぞれＰＤＡのアドレスを交換して帰った。

ー翌日ー

「これとこれとこれ。後、これとそれだな。じゃ会計よろしく～」

昼休みに約束通り翔にドローパンを五つ奢って貰い、食べ始める。

「一つ目……納豆パンかよ」

完全にパンに合わないな……外れか。

「二つ目……クサヤパン……」

これも外れか……

「貴志。大丈夫か？」

二回連続の外れを引いた為か、十代が心配してきた。

「大丈夫だ。気を取り直して三つ目ドロー！……って辛ぁぁぁ！！！み、水！水～！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「だ、大丈夫っすか？」

「ぜぇぜぇ、だ、大丈夫だ…」

あの後、俺は近くの自動販売機で水（1．5？）を買って飲み、何とか助かった。

「激辛唐辛子パン……外れの中の外れパン。まさか引き当てるとはな」

「そ、そうだな三沢。だが！これより下は無い！四つ目ドロー！！……こ、この訳の分からない味が交じりあってるパンはまさか伝説の……ディ、ディスティニーパン……」

「と、取り敢えず水で流し込むんだ！」

水で無理矢理流し込む。少し気持ち悪い。

「な、何故ここまで外ればかり……」

ここまで来れば、最後のパンは一体どうなるんだ？

「もうやめるんだ貴志！」

「そうっス！次は何が起こるか分からないっす！」

「十代達の言う通りだ！止めた方が良いと思うぞ」

「ありがとう皆。だが、俺は最後まで諦めない。これ以上、下は本当に無い！行くぞ、ラストドロー！！」

五つ目のパンを食べるが……味が無い

「カードパンか……」

「確か、カードが数枚付いてるパンだったな」

パンが入っていた袋を探るとカードが入った袋が出てきた。

「何のカードが当たるか……これが真のラストドローだ！」

入っていたカードは……

「「「ス、スカゴブリン……」」」

「グフッ……」

「た、貴志！」

正直、これが一番ダメージがでけぇ……

あぁ何だか十代達の声が遠く聞こえるよ……

―ガクッ―

「貴志ー！！」「貴志！」「貴志君！」

俺は昼休み後、その日の授業は全て欠席する羽目となった。

第6話　覗☆き☆王？（後書き）

鷹「今日の最強カードは」

貴志「おい。急に何してんだ？」

鷹「これだ！」

貴志「無視かよ」

『スカゴブリン』
レベル１　闇属性　通常
悪魔族　攻４００　守４００

完璧な『スカ』の文字を極めるため、日々精進するゴブリン。その全てを一筆に注ぐ。

貴志「ふざけんなぁ！！普通は『連撃』だろうが！！」

鷹「ある意味止めを刺した的な感じで？」

貴志「余計ふざK…」

鷹「てな訳でまた次回！」

貴志「ふ・ざ・け・ん・なぁー！！」

第7話　VS取巻再び

ドローパンの悲劇から数日、俺は明日の月一試験に備えてデッキの調整をしている……しているんだが、集中できない。何故なら……

【ウフフ。ゴーズ、あ～ん】

【あ～ん。いや～カイエンが食べさせてくれる冥府リンゴは美味しいなぁ～】

ゴーズ、カイエンの精霊という名のバカップルが居るからだ。

おかげで気が散ってしょうがない。

さっきなんて【見てごらん。あんなに数多く輝く星も君の美しさの前では霞んで見える】とかほざいてたし。

「お前等何故、まだ此処に居る？愛の巣とやらに帰るんじゃないのか？」

『冥界リンゴって何だよ。』とか、『今更だが、精霊って飯食うのかよ』とか突っ込みを入れたい所はあるが、一番疑問に思った事を聞く。

時刻は２３時。本来ならこのバカップル達は冥界にある家（愛の巣）に帰ってるから、居ない筈だ。

【ん？あ～今日は駄目なんだわ。バ○サン焚いてるからな】

バ〇サン？冥界で……バ〇サン？

「百歩譲ってバ〇サンを焚いてる事にしよう。だが、此処でイチャつくのは、気が散るから止めてくれ」

【しゃ～ねぇでしょうよ。俺達は現世と冥界しか行き来出来ねぇし、現世じゃマイブラザーの近くにしか居られねぇんだから】

【ちなみに私達がイチャつかないという選択肢は無いわ。何故ならゴーズが其処に居るんですもの】

【俺も同じ気持ちさマイハニー】

駄目だこのバカップル達、早く何とかしないと……もう手遅れに見えるけど。

【ただいま～あれ？皆どしたん？】

「アスディ……帰ってきたか」

【へ～い『堕天使アスモディウス』ただいま里帰りを終えて主の元に帰って来ました～】

「ふむ。それじゃあ構成を練り直すか」

バカップル達は放っておく事にして、アスディをデッキに入れる為に構成を練り直す事にした。

「え～と『万能地雷グレイモヤ』に『炸裂装甲≪リアクティブアー

マー』に『破壊指輪』それに『爆弾かめ虫』っと……はっ！俺は何をしてるんだ？」

アスディをデッキに入れる為に、構成を練り直してるのに、何故こうも爆発系のカードを選んだんだ？ほぼ使わねぇぞ……真面目にやるか。

後ろでゴーズが【俺達は爆発しねぇぞ？】と言っているが、何の事何だろうか？

――――――――――――――――――――

「やっと終わった～」

時刻は０時を回った頃、やっとデッキの調整が終わった。

「そろそろ寝るか」

部屋の明かりを消して、ベッドに入る。

「ふぁ～おやすみ～」

睡魔は直ぐに襲ってきた。

朝飯を食べ、準備をして校舎に向かう。

クシルのおかげで、頭は痛いが寝坊はしなかった。

ハネクリボーに頼まれ、夢の中に居る十代達を起こそうとしたが、

起こそうとしても起きず、時間も無くなったので放置した。
流石に実体化した幼鳥状態のクシルに頭を突かせるというのは止めておいた。
そんなこんなで筆記試験の時間になったが、十代達は現れない。
まぁ十代は実技で何とかなるとして、翔だけでも起こすべきだったか……
結局、十代達は筆記試験終了１５分前に来た。
――――――――――――――――――――
「あ～もう～終わりっス～！」
「翔。気にすんなって、次の実技で頑張れば良いじゃねぇか」
「アニキは強いからいいっスけど僕は」
確か実技試験は、実力が拮抗してる人どうしで当たるから、強い弱いは関係無いと思うが……
と思っていたら翔も気を取り直したようだ。購買部に行ってカードを買うと言って、十代と共に購買部に向かって行った。
俺は……別にいいや。さっさと実技試験会場に行こっと。
―その頃とある場所にて―

「クソッ！一体誰なんだ！？カードを買い占めた奴は？」

「それは私なノーネ！」

苛立つ万丈目の取り巻きである取巻の問い掛けにアタッシュケースを持った男が答えた。

「誰だ貴様は？」

「シニョール万丈目。この私にそんな口を聞いていいノーネ？」

アタッシュケースを持った男が変装を解く……すると其処には

「「「クロノス教諭！」」」

クロノスが居た。

「シニョール万丈目。シニョール取巻。アナタ達～が入学式の時～にドロップアウトボーイズとデュエルしたのは知ってるノーネ」

「な、何故それを！」

「私を甘く見てはいけないノーネ。そこでアナタ達～にやってもらいたい事がアル～ノ」

クロノスはアタッシュケースを開けて、万丈目達に中身を見せる。

「このカードを使ってデッキを強化してドロップアウトボーイズを倒すノーネ！」

「分かりましたクロノス教諭。取巻やるぞ！」

「はい！」

「おっと忘れる所だったノーネ。シニョール取巻にはこれも渡すノーネ」

クロノスは一枚のカードを取り出し取巻に渡した。

「こ、このカードは!?クロノス教諭ありがとうございます！！」

「絶対にドロップアウトボーイズを倒すノーネ（私～の給料二ヶ月分をかけてるか～ら色んな意味で勝って欲しいノーネ）」「何故こうなった……」

筆記試験の後、何者かがカードを買い占めた為、十代達はカードが買えなかったらしい。

十代はカードを貰えたらしいが、翔は意気消沈していた。

ただ、実技試験でレッド生と当たり、勝ってからは一気に元気が出た。

まぁそんな事はどうでも良い……だが、

「さぁデュエルだ！ドロップアウトボーイ！」

何故俺の相手が取巻なんだ?後ろのデュエルコートの十代の相手は万丈目みたいだし……

「オッホン！オシリス・レッド～の遊城十代～と天道貴志～ハ入学試験～デ、この私を倒してるノーネ。
ナノーデ、同じオシリス・レッドの生徒ではな～くオベリスク・ブルーであるシニョール万丈目とシニョール取巻とデュエルしてもらうノーネ」

クロノス先生からの説明が入る。負けた事を気にしてる割には、自分で負けた事を広めるのな……

「はぁ……まぁ良いか」

相手が誰であろうとやる事は変わらないし。

「あの時の決着を付けてやる！」

「はいはい」

「「デュエル！」」

俺　ＬＰ４０００
取巻ＬＰ４０００

「先攻は貰う！ドロー！
俺は『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』を攻撃表示で召喚！」

取巻の場に黒の衣に身を包み、赤のマントを羽織った戦士が現れた。

『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』

レベル４　闇属性　効果　　戦士族　攻２１００　守５００

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

取巻　ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』
（攻２１００）

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン。ドロー！」

『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』か。融合素材に使うんじゃなければ、デッキは前と同じく『Ｔ．Ｔ』を模した物か……全く何が嬉しくて自分のデッキを模した物と、デュエルしないといけないのやら。

手っ取り早く行くか……この手札なら、このターンで終わらせられる事ができる。

「手札を一枚捨てて『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚。更にデッキの一番上を墓地に送り、墓地の『グローアップ・バルプ』を特殊召喚」

墓地に行ったのはクシルか……むしろラッキーだな。

俺の場に球根の部分に目玉がある花が現れる。

『ＴＨＥ　トリッキー』
レベル５　風属性　効果
魔法使い族
攻２０００　守１２００

『グローアップ・バルプ』
レベル１　地属性　効果
植物族　攻１００　守１００

「モンスター二体を特殊召喚だと!?」

この程度なら、師匠達は難なくやってのけるぞ?特にアテム師匠は、後攻一ターン目に、モンスターを三体特殊召喚して神を召喚してきた事があったぞ……っと脱線したな。

「ちなみに『グローアップ・バルプ』はチューナーモンスターだ。行くぞ!レベル５『ＴＨＥ　トリッキー』にレベル１『グローアップ・バルプ』をチューニング!
六つの絆の証が揃いし時、現れる魔術師よ
我が可能性を生贄に、我が敵を葬れ!シンクロ召喚!現れろ!『マジックテンペスター』!!」

『グローアップ・バルプ』が輪になり、その輪を『トリッキー』が通過する。

そして俺の場にローブを身に纏い、死神等が持つであろう鎌を持った魔術師が現れる。

『マジックテンペスター』
レベル６　闇属性　シンクロ／効果　魔法使い族
攻２２００　守１４００

「『マジックテンペスター』はシンクロ召喚に成功した時、自身に魔力カウンターを一つ置く」

『マジックテンペスター』
魔力カウンター０→１

「フハハハハ！掛かったな！俺は永続トラップ『調律師の陰謀』を発動！『マジックテンペスター』は頂くぜ！」

紳士風の男性が現れ『マジックテンペスター』を捕えて取巻の場に連れて行った。

「マジかよ……」

―観客席Ｓｉｄｅ―

「『調律師の陰謀』か……」

「知ってるんスか？三沢君」

「ああ、相手フィールド上にシンクロモンスターが特殊召喚された時に発動できる永続トラップで効果はそのシンクロモンスターのコントロールを得るものだった筈だ。だが、シンクロモンスターを使う人があまり居ない以上、入れる人は居ないと思うが……」

「あれ？そういえば何でシンクロモンスターを使う人が少ないんっスか？僕は単純に持ってないからっスけど」

「簡単に言えば、出て直ぐに禁止カードになったカードが多いのよ『ゴヨウ・ガーディアン』に『ダーク・ダイブ・ボンバー』、『氷結界の龍　トリシューラ』と『ミスト・ウォーム』とかはパックの発売二ヶ月後に禁止カードになったわ」

「天上院君の言う通りだ、その為、殆どの人はシンクロモンスターを敬遠する。直ぐに禁止になるかもしれないからな。だから、シンクロモンスターを対策するカードを入れる人も居ないと思うんだが……」

「試験の日にそこまで相手よがりのカードを入れているという事は……試合を仕組んだクロノス先生が怪しいわね」

「それだと、アニキもヤバイッスよ～」

「普通はそうだが、十代と貴志の表情を見る限りだと大丈夫そうだな」

―観客席Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ―

「面倒だな」

『マジックテンペスター』が奪われたせいで、このターンで終わらせられないじゃないか……

「どうだ！お前のシンクロモンスターを奪ってやったぞ！」

「……俺は手札の『デッド・ガードナー』と『スピード・ウォリアー』をゲームから除外して墓地の『ダーク・シムルグ』を特殊召喚する」

「何だと!?」

黒炎が立ち上ぼりクシルが姿を現す。

『ダーク・シムルグ』
レベル7　闇属性　効果
鳥獣族　攻2700　守1000

「更に俺は『左腕の代償』を発動。手札を全て捨て、デッキから魔法カードを一枚選択して手札に加える。『天よりの宝札』を手札に加え、発動。互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドローする」

『左腕の代償』（アニメ）
通常魔法
効果
このカードの発動時、手札を全て捨てる。その後、自分のデッキから魔法カードを一枚選択して手札に加える。

『天よりの宝札』（原作）
通常魔法
効果
お互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにカードを引く

「バトル！『ダーク・シムルグ』で『マジックテンペスター』に攻撃！ダーク・フレア！」

クシルの口から放たれた炎に飲み込まれ、『マジックテンペスター』は消滅した。

「クッ、クソッ！」

取巻　ＬＰ４０００→３５００

「『ラーニング・エルフ』を守備表示で召喚。更に　『封印の黄金櫃』を発動。『レベル・アワード』を選択し、カードを二枚伏せてターンエンド」

布石は打った。後は強力なモンスターを出すことを祈るか。

『ラーニング・エルフ』
レベル３　風属性　効果　　天使族　攻１４００　守１５００

俺　ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター
『ダーク・シムルグ』
（攻２７００）
『ラーニング・エルフ』（守１５００）

魔法・罠
伏せ　２

取巻　ＬＰ３５００　手札６枚

モンスター
『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』
（攻２１００）

魔法・罠
無し

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード『大嵐』を発動！フィールド上の魔法・罠を全て破壊する！」

大きな竜巻が発生し、フィールド上に存在する魔法・罠を全て破りさった。

「俺は更に『可変機獣　ガンナードラゴン』を召喚し、手札から『禁じられた聖杯を発動！『ガンナードラゴン』攻撃力４００ポイントアップし、効果を無効にする！」

『可変機獣　ガンナードラゴン』
レベル７　闇属性　効果
機械族
攻２８００（１４００）守２０００（１０００）

『可変機獣　ガンナードラゴン』
攻１４００→１８００→３２００

伏せていた『フローラル・シールド』と『くず鉄のかかし』が破壊されたから、防ぐのは無理か。

「バトル！『可変機獣　ガンナードラゴン』で『ダーク・シムルグ』を攻撃！」

クシルが炎を吐いて迎撃するが、『ガンナードラゴン』のブレスと相殺になり、『ガンナードラゴン』が放った砲撃が当たり倒された。

「済まんクシル……」

俺　ＬＰ４０００→３５００

「行くぜ！『ダーク・ヒーロー・ゾンパイア』で『ラーニング・エルフ』に攻撃！」

『ダーク・ヒーロー・ゾンパイア』が放った光線により、『ラーニング・エルフ』は破壊される。

『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』
攻２１００→１９００

「俺は『ラーニング・エルフ』の効果でカードを一枚ドローする」

「はん！俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

『可変機獣　ガンナードラゴン』
攻３２００→２８００

俺　ＬＰ３５００　手札３枚

モンスター及び魔法・罠
無し

取巻　ＬＰ３５００　手札３枚

モンスター
『可変機獣　ガンナードラゴン』
（攻２８００）
『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』
（攻１９００）

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード『強欲な壺』を発動してカードを二枚ドロー。更に『天使の施し』を発動。カードを三枚引いて二枚捨てる。俺はカードを二枚伏せてターンエンド」

俺　ＬＰ３５００　手札３枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　２

取巻　ＬＰ３５００　手札３枚

モンスター
『可変機獣　ガンナードラゴン』

（攻２８００）
『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』
（攻１９００）

魔法・罠
伏せ　２

「俺のターン！（来た！クロノス教諭に貰ったカード！）俺は手札の『可変機獣　ガンナードラゴン』と『不屈闘士レイレイ』をゲームから除外して『獣神機王バルバロスＵｒ』を特殊召喚！」

『獣神機王バルバロスＵｒ』
レベル８　地属性　効果
獣戦士族
攻３８００　守１２００

マジか……正直面倒過ぎるが、問題無いな……

「更に俺は伏せておいた『スキルドレイン』を発動！「リバース・カードオープン『砂塵の大竜巻』！『スキルドレイン』を破壊する！」何だと!?」

『大嵐』が起こした竜巻よりかは小さい竜巻が『スキルドレイン』を破壊した。

『スキルドレイン』の発動コストで取巻のライフが減る。

取巻　ＬＰ３５００→２５００

「無駄にライフが減ったな」

「うるさい！ならば『ダーク・ヒーロー　ゾンパイア』と『可変機獣　ガンナードラゴン』、『獣神機王バルバロスＵｒ』を生贄にして『神獣王バルバロス』を召喚！」

『神獣王バルバロス』
レベル８　地属性　効果
獣戦士族
攻３０００　守１２００

「『神獣王バルバロス』の効果発動！三体のモンスターを生贄にしたこのカードが召喚に成功した時、相手フィールド上に存在するカードを全て破壊する！」

「ならば速攻魔法『サイクロン』を発動！そちらの最後の伏せカードを破壊する！」

カードから竜巻が出て取巻のセットカードを破壊する……って『歓喜の断末魔』だと！？破壊できて良かった……

その後、『バルバロス』が地面に槍を突き刺して地震を起こす。

それによって盛り上がった土によってカードが串刺しにされた。

だが、これで取巻の手札と伏せカードは無くなった。

それと同時に俺が負ける可能性無くなった……

「バトル！『神獣王バルバロス』でダイレクトアタック！」

「この瞬間、手札の『バトルフェーダー』の効果発動。このカードを特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる！」

俺の場に時計の針を模したモンスターが現れ、ベルを鳴らして攻撃を止めた。

『バトルフェーダー』
レベル１　闇属性　効果
悪魔族　攻０　守０

「くっ、ターンエンドだ…」

俺　ＬＰ３５００　手札２

モンスター
『バトルフェーダー』
（守０）

魔法・罠
無し

取巻　ＬＰ２５００　手札０

モンスター
『神獣王バルバロス』
（攻３０００）

魔法・罠

無し

「俺のターン。ドロー！スタンバイフェイズに『レベル・アワード』は手札に加わる。俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！効果で墓地の『闇の仮面』を特殊召喚！」

「なっ！いつの間に！？」

「『左腕の代償』の時だ。更に魔法カード『精神操作』を発動し、『神獣王バルバロス』のコントロールを得る。そして『レベル・アワード』を発動して『神獣王バルバロスのレベルを1にする！」

『レベル・アワード』
（遊戯王R）
効果
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター一体を選択して、1～8を宣言する。
このターンのエンドフェイズ時まで選択したモンスターのレベルは宣言した数字と同じになる。

『神獣王バルバロス』
レベル8→1

「これで終わりだ！レベル2『闇の仮面』にレベル3『ジャンク・シンクロン』をチューニング！
五つの絆の証が揃いし時、現れる戦士よ
戦友の力を結集し、己の力とせよ！シンクロ召喚！
現れろ！『ジャンク・ウォリアー』！！」

『ジャンク・ウォリアー』
レベル５　闇属性　シンクロ／効果　戦士族
攻２３００　守１３００

「『ジャンク・ウォリアー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードの攻撃力は自分フィールド上に存在するレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計分アップする！俺の場にはレベル１となった『神獣王バルバロス』が居る。よって攻撃力３０００ポイントアップ！」

『ジャンク・ウォリアー』
攻２３００→５３００

「攻撃力５３００だと！？」

「バトル！『ジャンク・ウォリアー』でダイレクトアタック！スクラップ・フィスト！！」

『ジャンク・ウォリアー』が繰り出した拳は正確に取巻を捕えてぶっ飛ばした。

「うわあぁぁ！！！」

取巻　ＬＰ２５００→０

さてと十代の方はっと……

「『フェザーマン』でダイレクトアタック！」

「ぬわぁぁ！！」

丁度終わったみたいだな。

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ！」

「良いデュエルを見させて貰いました」

十代がいつもの挨拶を言った所で、ハゲッターじゃなかった校長が出てきた。

「あなた方のカードを信じる心とデュエルタクティクスを賞してラー・イエローへの昇格を認めます」

昇格……ねぇ。俺はやめとこ。

ここ数日でこの学園の事は把握した。正直言って、オシリス・レッドが一番気楽でいい。

「校長先生。済みませんが、昇格は辞退させていただきます」

「俺も昇格は止めときます」

「ふむ。そうですか、まぁそれも良いでしょう」

こうして、月一試験は終わった。

第7話　VS取巻再び（後書き）

貴志「今日の最強カードはこれだな」

『レベル・アワード』
通常魔法
自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター一体を選択して、1～8のいずれかを宣言する。
エンドフェイズ時まで選択したモンスターのレベルは宣言した数のレベルとなる。

貴志「夜行義兄さんがアテム師匠とのデュエルの時に使ったカードで『スターレベル・シャッフル』とのコンボで墓地の『神獣王バルバロス』を場の『メタルデビル・トークン』と入れ替えてたな」

正直ＯＣＧ化したらヤバイカード。作者は『ジャンク・ウォリアー』の効果用にするか、シンクロ素材のレベルを操作するぐらいしか思い浮かびませんでしたが……

第8話　怒り（前書き）

デュエル無しです。

後、ＤＭキャラクターが名前を変えて出てきます。

第8話　怒り

ー波止場ー

其処では三人の男が何やら話をしていた。

「あなた達～が闇のゲームを行なえ～る闇のデュエリストナノ～ネ？」

その中のオカッパの男……クロノス・デ・メディチが二人組に言った。

「そうだ。私の名はタイタン。闇のデュエリストだ」

「俺は……ヤミーと名乗っておこうか。それで、ターゲットは？」

二人組……仮面のような物を付けているタイタンとフードを被っているヤミーが言った。

「この二人。遊城十代と天道貴志ナノーネ」

クロノスは二人に写真を見せる。

「承知した。では、お前の給料六ヶ月分を指定の口座に振り込んでもらうぞ」

「きゅ、給料六ヶ月分!?そ、それはちょっと高過ぎナノーネ……」

「だめだ。どんな事があっても、報酬は依頼主の給料六ヶ月分だ」

クロノスがごねようとしたが、タイタンがそれを拒否する。

「わ、分かったノーネ」

「交渉成立だ。フフフ……」

「き、消えたノーネ！？」

クロノスが渋々、了承するとタイタンとヤミーは消えた。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「皆さん何をやってるのかにゃ～？」

十代、翔、二人と同室の隼人達と食堂で怪談話をしているとレッド寮の寮長であり、錬金術の講師である大徳寺がヌッと後ろから現れた。

「カードを引いてそのレベルに見合う怪談話をしてたっス」

「今、俺と十代の話が終わった所なんですよ」

「十代のはともかく、貴志のは怖かったんだな～」

「そうっス。朝起きたら、頭が血だらけになってるとか怖過ぎるっス」

クシルが俺を起こす時に、力加減を間違えた時の話をしただけだけどな。まぁあの時はヤバかったが……

「ん～それなら、私もやってみますのにゃ」

十代がカードの束を先生に渡し、先生がカードを引く。それは……

「「「「『F・G・D』」」」」

レベル１２のF・G・Dだった。

「これは凄いのが出たな」

「ああ、そうだな。あっ、先生。使うならこの懐中電灯をどうぞ」

先生に懐中電灯を渡す。さて、どんな話なのか。

先生は椅子に座り、語りはじめた。

「皆さんはこの島の北にある今は、廃寮を知ってますかにゃ～？」

おお！それっぽい入り方だ。語尾が残念だけど。

「その寮は特待生専用の寮だったんだにゃ～。

その寮が廃寮になった訳は、その寮で幽霊を見た人や行方不明になった人が続出したからなんだにゃ」

翔と隼人が若干、震えはじめた。

「必死の捜索にも関わらず、行方不明の人達は見つからなかったのですにゃ。

その後、その寮を取り壊す事にしたけど、壊そうとした人は必ず事

故に遭った為、取り壊さずに残す事にしたのにゃ」
そう言って、先生は立ち上がった。どうやら話は終わりのようだ。
「あ、そうそう。その寮は今は立ち入り禁止ににゃってるけど、絶対に行っては駄目なのですにゃ」
先生はそう言って食堂から出ていった。
でも先生。そういう言い方をすれば、逆に十代は行きたがりますよ。
その後、十代が廃寮に行くと言いだし、俺達も一緒に行く事になった。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

そんなこんなで廃寮に着いた。
「うぉー！スッゲー！」
「中々、雰囲気があるな」
「うぅ。怖いっス」
「翔の言う通りなんだな～」
四者四様の反応を見せたが、廃寮はかなりそれっぽい雰囲気を放っていた。
お化け屋敷が開けるんじゃないか？と思えるぐらい。

しかし、子供の様に目を輝かせる十代と怯える翔達……見てて面白いな。

「あれ？明日香じゃないか」

十代が指差す方を見ると、確かに明日香が居た。あっ、こっちに気付いたみたいだ。

「十代、貴志。翔君と……「前田隼人なんだな」隼人君。何をしているの？此処は立ち入り禁止よ」

「アニキ～立ち入り禁止なら、帰ろうよ～」

「明日香は何故此処に居るんだ？」

俺が聞くと明日香は俯いた。真面目そうだから、わざわざ立ち入り禁止の場所に来ないと思って聞いたんだが……

「此処で兄が行方不明になったのよ。いつか帰ってくる事を信じてこうして花を飾っているの」

行方不明……ねぇ。てっきり、先生の話はただの怪談話と同様、嘘八百だと思ったんだが。

「なら、俺達が何か手掛かりがないか探して来るぜ。それなら、立ち入り禁止の場所に入っても大丈夫だろ？」

十代の肝の太さには感心するな。実際に行方不明になったと聞いて、即断するとはな。

だが、十代よ……問題は問題だと思うぞ。

「でも、それがクロノス先生に知れたら」

「知られなきゃ大丈夫だって。それに明日香の為になるなら、咎められる事じゃないさ」

まぁ見張りも居る訳じゃないし、知られる事は無いし良いか……

「勝手になさい」

【素直じゃないねぇ～】

そっぽを向いた明日香を見てゴーズが言った。

てか、愛の巣に帰らなくて良いのか？

【何か面白そうな事がありそうだからな。ちなみにハニーも居るぞ】

心を読むな心を。

――――――――――――――――――――

「千年眼（ミレニアムアイ）に千年パズルか……懐かしいな」

廃寮に入って数十分。とある部屋で見付けた千年アイテムが描かれ

ている壁画を見て呟く。

冥界に居るから元気とか言うのは変だが、アテム師匠は元気なんだろうか……マルスが帰ってきたら、アテム師匠の様子でも聞こうかな。

「ん？何だこれ？」

どうやら、十代が何か見つけたみたいだな。

十代が見付けたのは写真で、１０ＪＯＩＮとサインがしてあった。

「この写真の人、明日香に似てねぇか？」

「言われてみれば、そんな気がするんだな～」

「ふむ。後で明日香に見せてみよう。違えばそれで良いし、あってたら手掛かりになるかもしれない」

「そうだな。じゃあひとまず出「キャアァァァ！！！」何だ！？」

いきなり女性の悲鳴が聞こえてきた。

「行ってみよう！」

「大丈夫だ。もしもの時はこれで……」

そう言ってスタンガンを取り出す。

「何でそんな物を持ってるんスか！？」

「護身用」

「ある意味貴志が恐ろしく見えるんだな」

他にもカード手裏剣用の絵柄が何も描かれて無いカードとかもあるんだがな……言わないでおこう。

その後、部屋を出て悲鳴が聞こえた方に行くと『サイバー・ブレイダー』や『エトワール・サイバー』のカードが道しるべの様に落ちており、それを辿ると大広間に出た。

大広間には奇妙な二人組とその後ろに棺に入れられている明日香が居た。

「お前等は一体何者だ！」

「私の名はタイタン。こちらはヤミー。私達は闇のゲームを行う、闇のデュエリストだ」

『私は［●●●●●●●●］を発動！』

『●●●●●●でプレイヤーにダイレクトアタック！』

「……っ！」

「だ、大丈夫っスか？」

「あ、ああ。大丈夫だ」

嫌な事を思い出したな……あの時から、かなり時が経ったと言うのに、闇のゲームと聞いただけで思い出すとはな。

あのカードは存在しない。たとえ、こいつらの言う闇のゲームが本物と言えど恐れる事は無い。

何より、師匠達から学んだ筈だ。心の強さを……

「闇のゲーム？そんな物、あるもんか！？」

「フフフ、遊城十代よ。普通はそう思うだろうな。だが、私の持つ千年パズルか」

「この千年眼を使えば、闇のゲームをする事が可能なんだよ。現にこの少女の意識は深い闇に沈んでいる」

「解放するには私達と闇のデュエルを行い、勝たなければならない」

そう言って二人は、千年パズルと千年眼を出した。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ゴーズ　Ｓｉｄｅ

「良いだろう。デュエルしてやる」

タイタンとヤミーが千年アイテムを出した瞬間、マイブラザーの雰囲気が変わった。

いつもの余裕がある感じから、怒りを全面に押し出している感じにだ。

マイブラザーの精霊になって三年経つが、周りがかなり落ち着いた年上揃いの為か、マイブラザーも基本的には冷静な方だ。誰かに対してこんなにも怒りを顕にしたのは、正直初めて見た。

【アレクのオッサン。マイブラザーは一体どうしたんだ?】

喋れないクシルを除けば、俺達の中で一番古株のオッサンに聞いた。オッサンなら何かを知ってるかもしれねぇからな。

【そうか……お前達は知らぬのであったな】

俺の予想通り、オッサンは何かを知ってるらしく、俺達に話してくれた。

【主の養父であるペガサス殿は以前、千年眼を所持していた。師である武藤殿は以前、千年パズルをを所持していた

あれが本物にせよ偽物にせよ、悪用しているのだから主にとっては養父と師を侮辱されたようなものなのだろう。あの事を思い出したせいもあるかもしれぬが】

だから、マイブラザーはあんなに怒っていたのか。

だが、あの事ってなんだ?

【あの事ってなんなの？】

ハニーも気になったらしく、オッサンに聞いていた。

【それはな……】

－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－

【それは……ヘビーな話だな】

それが、オッサンの話を聞いた俺の感想だった。

正直に言うと重い話だ。

【武藤殿に弟子入りしたのも、邪神を相手に一歩も引かなかった心の強さを学ぶ為だったのでな】

【そうだったのか、ありがとうなオッサン】

【どう……オッサンと言うでない！】

【突っ込み遅っ！！】

ゴーズ　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

「分かった。デュエルしてやる」

俺がそう言うと、タイタンと名乗った男は顔に笑みを浮かべた。

「慌てるなぁ。まずはこの私と遊城十代がデュエルを行う。お前の相手をするのはその後だぁ」

「貴様等は二人居るじゃねぇか。俺はそっちのヤミーって奴でも良い」

どちらにせよ、ペガサス様と師匠を侮辱したこいつ等だけは許せない。

「ふん。せっかく怒りを顕にしているんだ……焦らさせてもらうよ」

「黙れ。ならタイタンが俺と「俺達が人質をとってる事を忘れてないか？」チッ！」

思わず舌打ちが出る。挑発と分かってはいるが、それとこれとは話が別だ。

「さぁ、遊城十代。デュエルだぁ！」

「ああ！やってやるぜ！」

隼人が取り出したデュエルディスクを十代が受け取り、十代とタイタンのデュエルが始まった。

第9話　十代ＶＳタイタン　闇のデュエル！？（前書き）

十代ＶＳタイタンです。

原作と違い過ぎますが……

第9話　十代VSタイタン　闇のデュエル!?

「「デュエル!」」

十代とタイタンのデュエルが始まった。

十代　ＬＰ４０００
タイタン　ＬＰ４０００

「先攻は貰うぞ。ドロー!私は『インターセプト・デーモン』を攻撃表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

タイタンの場に六つの腕を持つフットボールの選手のようなモンスターが現れた。

『インターセプト・デーモン』
レベル４　闇属性　効果
悪魔族　攻１４００　守１６００

タイタン　ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『インターセプト・デーモン』
（攻１４００）

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！俺は魔法カード『融合』を発動。手札の『スパークマン』と『ネクロダークマン』を手札融合！現れろ！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン』！」

金色の鎧を纏った黒いヒーローが十代の場に現れた。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン』
レベル６　闇属性　融合／効果　戦士族
攻２０００　守１０００

「更に俺は『融合回収（フュージョン・リカバリー）』を発動！墓地の『融合』と『スパークマン』を手札に加える。そして『スパークマン』を召喚！」

『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』
レベル４　光属性　通常
戦士族　攻１６００　守１４００

「バトル！『スパークマン』で『インターセプト・デーモン』に攻撃！」

「この瞬間、『インターセプト・デーモン』の効果により、貴様に５００ポイントのダメージを与えるぅ」

『スパークマン』が手から電撃を放つと同時に『インターセプト・デーモン』が手を伸ばし、十代に襲い掛かる。

「くっ！でも『スパークマン』の攻撃で『インターセプト・デーモン』は破壊されるぜ」

『インターセプト・デーモン』は少し焦げて破壊された。

十代　ＬＰ４０００→３５００

タイタン　ＬＰ４０００→３８００

「アニキの体が消えてくっス！？」

翔の言うとおり、十代の右足が少し消えていた。

どうやらあの千年パズルは本物のようだ。

なら、あっちの千年眼も本物か……クソが！絶対に許せねぇ……

「行くぜ！『ダーク・ブライトマン』でダイレクトアタック！」

「そうはいかぬぅ！伏せていた『リビングデッドの呼び声』を発動ぅ！『インターセプト・デーモン』を復活させるぅ！」

『ダーク・ブライトマン』とタイタンの間に『インターセプト・デーモン』が再び現れた。

「なら、『ダーク・ブライトマン』で『インターセプト・デーモン』に攻撃！」

「先程と同じく、『インターセプト・デーモン』の効果により５００ポイントのダメージを受けてもらう」

『ダーク・ブライトマン』の攻撃が届く前に『インターセプト・デ

ーモン』が自身の手により十代に攻撃を加えるが、その直後に破壊された。

十代　ＬＰ３５００→３０００

タイタン　ＬＰ３８００→３２００

「『ダーク・ブライトマン』は攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になる。俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ」

十代　ＬＰ３０００　２枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ダーク・ブライトマン』（守１０００）
『Ｅ・ＨＥＲＯ　スパークマン』（攻１６００）

魔法・罠
伏せ　１

タイタン　ＬＰ３２００　手札４枚

モンスター・魔法・罠
無し

ライフと手札はタイタンが上だが、場は十代が制圧した。しかも『ダーク・ブライトマン』には破壊された時に相手フィールド上のモンスターを一体破壊する効果がある。

十代の方が有利だな。

「私のターン　ドロー！私は永続魔法『天変地異』を発動するぅ！このカードの効果により互いのプレイヤーはデッキを裏返してデュエルを進行するぅ。私は更に永続魔法『デーモンの宣告』を発動ぅ！1ターンに1度ライフを５００支払いカード名を宣言する。デッキの一番上をめくり、それが宣言したカードならば手札に加え、違った場合は墓地に送るぅ」

「えっ、それじゃあ……」

「『天変地異』の効果でデッキの一番上は分かっているから、毎ターン手札を増やせるんだな」

「私が宣言するのは『万魔殿ー悪魔の巣窟ー《パンディモニウムーアクマノソウクツー》』だぁ。当然、一番上のカードはこれだ。よって、手札に加えるぅ」

タイタン　ＬＰ３２００→２７００

「私は手札に加えたフィールド魔法『万魔殿ー悪魔の巣窟ー』を発動するぅ」

周りの風景が変わり、まさしく悪魔の巣窟と言える感じになった。

「私は『二重召喚』を発動し、手札から『ジェネラルデーモン』と『ジェノサイドキングデーモン』を召喚するぅ！」

タイタンの場に威風堂々と言う言葉が合う悪魔将軍と王が現れる。

『ジェネラルデーモン』
レベル４　闇属性　効果
悪魔族　攻２１００　守８００

『ジェノサイドキングデーモン』
レベル４　闇属性　効果
悪魔族　攻２０００　守１５００

「攻撃力が２１００と２０００のモンスターっス！」

『ジェノサイドキングデーモン』か。かなりまずいな……

「バトルぅ！『ジェネラルデーモン』で『スパークマン』に攻撃力するぅ」

『スパークマン』が放つ電撃を剣で防ぎながら、近づき『スパークマン』を両断した。

「くっ！」

十代　ＬＰ３０００→２５００

「更に『ジェノサイドキングデーモン』で『ダーク・ブライトマン』に攻撃！炸裂ぅ！五臓六腑ぅ！」

『ジェノサイドキングデーモン』が放った沢山の蟲に包まれ、『ダーク・ブライトマン』は破壊された。正直、あまり見たくないな……

「トラップ発動！『ヒーローシグナル』！更に『ダーク・ブライトマン』の効果発「無駄だぁ！『ジェノサイドキングデーモン』が戦闘で破壊したモンスターの効果は無効となるぅ」何だって！？くっ、『ヒーローシグナル』の効果でデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン』守備表示で特殊召喚する」

十代の場に粘土でできたヒーローが現れる。

レベル４以下の壁役としてはおそらく、十代のデッキ内では一番のカード。加えて、十代の手札には『融合』もある。十分、逆転は可能だ。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン』
レベル４　地属性　通常
戦士族　攻８００　守２０００

「フフフ、私はターンを終了する」

十代　ＬＰ２５００　手札２枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　クレイマン』
（守２０００）

魔法・罠
無し

タイタン　ＬＰ２７００　手札１枚

モンスター
『ジェネラルデーモン』
（攻２１００）
『ジェノサイドキングデーモン』
（攻２０００）

魔法・罠
『デーモンの宣告』
（永続魔法）
『天変地異』
（永続魔法）
『万魔殿－悪魔の巣窟－』
（フィールド魔法）

「あわわ、アニキがヤバイっスよ～」

「十代と十代の引きを信じるしかないんだな」

次に引くカードは『強欲な壺』か……十代ならきっと大丈夫だろう。

「俺のターン！ドロー！手札から『強欲な壺』を発動して２枚ドロー！更に『融合』を発動！場の『クレイマン』と手札の『バーストレディ』を融合して『Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー』を守備表示で融合召喚！」

十代の場に盾とマシンガンのような物を持ったヒーローが現れる。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー』
レベル６　地属性　融合／効果　戦士族
攻２０００　守２５００

「何をするのかと思えば時間稼ぎか……」

「いいや！『ランパートガンナー』は自身が守備表示の場合、相手プレイヤーにダイレクトアタックする事ができる！」

「何ぃ！？」

「尤も、与えるダメージは半分になっちまうけど。行くぜ！『ランパートガンナー』でダイレクトアタック！ランパート・ショット！」

ランパートガンナーが無数のミサイルをタイタンめがけ放った。

「ぬぅ！おのれぇ！」

タイタン　ＬＰ２７００→１７００

「カードを２枚伏せてターンエンド！」

十代　ＬＰ２５００　手札１枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　ランパートガンナー』

（守２５００）

魔法・罠
伏せ　１

タイタン　ＬＰ１７００　手札１枚

モンスター
『ジェネラルデーモン』
（攻２１００）
『ジェノサイドキングデーモン』
（攻２０００）

魔法・罠
『デーモンの宣告』
（永続魔法）
『天変地異』
（永続魔法）
『万魔殿－悪魔の巣窟－』
（フィールド魔法）

「私のターン！ドロー！」

タイタンの口元が緩んだ。一体何を引いたんだ？表になってても、こっからじゃ見えないし……

「私は『サイクロン』を発動し、私から見て右側のカードを破壊するぅ」

タイタンが発動した『サイクロン』によって十代の伏せた『聖なるバリア　―ミラーフォース―』が破壊された。

「更に『デーモンの宣告』の効果を発動！私が宣言するのは『死者蘇生』当然、これも当たりだぁ」

タイタン　ＬＰ１７００↓１２００

「私は『死者蘇生』を発動し、墓地の『インターセプト・デーモン』を特殊召喚！更に『インターセプト・デーモン』と『ジェノサイドキングデーモン』を生贄に『プリズンクインデーモン』を召喚するぅ！」

タイタンの場に今までの悪魔達より、まがまがしい感じがする悪魔が現れる。

『プリズンクインデーモン』
レベル８　闇属性　効果
悪魔族　攻２６００　守１７００

「バトルだぁ！『プリズンクインデーモン』で『ランパートガンナー』に攻撃ぃ！」

『プリズンクインデーモン』が『ランパートガンナー』を殴り倒し、上に乗って更に打撃を加えていく……『ランパートガンナー』はバラバラにされ、場から消えた。

「この瞬間、トラップ発動！『ヒーロー逆襲』！このカードの効果

により、相手は俺の手札からカードをランダムに選択する。それが『E・HERO』と名のつくモンスターの場合、相手フィールド上のモンスター1体を破壊し、選択したカードを自分フィールド上に特殊召喚する！俺の手札は1枚！よって選ばれるのもこのカードだぜ」

「おのれぇ！」

「『プリズンクインデーモン』を破壊して『E・HERO　ワイルドマン』を守備表示で特殊召喚！」

『ワイルドマン』が上空から降りてきて、『プリズンクインデーモン』を両断する。

その後、十代の場に行き守備態勢をとった。

『E・HERO　ワイルドマン』
レベル4　地属性　効果
戦士族　攻1500　守1600

「ぬぅ！ならば『ジェネラルデーモン』で『ワイルドマン』に攻撃い！」

上段から振り下ろされた剣を自身の持つ剣で必死に防ぐが、弾かれ剣を落とした隙に斬られる。

「私はターンを終了する」

十代　ＬＰ２５００　手札０

モンスター・魔法・罠
無し

タイタン　ＬＰ１２００　手札０

モンスター
『ジェネラルデーモン』
（攻２１００）

魔法・罠
『デーモンの宣告』
（永続魔法）
『天変地異』
（永続魔法）
『万魔殿－悪魔の巣窟－』
（フィールド魔法）

「俺のターン！俺は魔法カード『ホープ・オブ・フィフス』を発動！墓地の『スパークマン』『バーストレディ』『クレイマン』『ダーク・ブライトマン』『ランパートガンナー』をデッキに加えてシャッフル。その後、カードを2枚ドローする。だが、このカードの発動時に自分フィールド上と手札に他のカードが存在しない場合はカードを3ドローする！」

「何だとぉ！？」

狼狽えるタイタン。まぁあんたが『天変地異』を使ったからだけどな……

「俺は墓地の『ネクロダークマン』の効果を発動！このカードが墓地に存在する限り1度だけ、レベル5以上の『E・HERO』と名のついたモンスター1体を生贄無しで召喚できる。現れろ！『E・HERO　エッジマン』！

十代の場に金色に光る筋肉質なヒーローが現れた。

『E・HERO　エッジマン』
レベル7　地属性　効果
戦士族　攻2600　守1800

「バトル！『エッジマン』で『ジェネラルデーモン』に攻撃！パワー・エッジ・アタック！」

『エッジマン』が『ジェネラルデーモン』に突撃を仕掛ける。『ジェネラルデーモン』も応戦しようと剣を構えたが、それよりも早く懐に飛び込んだ『エッジマン』に倒される。

「ぬわぁ！？」

タイタン　LP1200→700

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

【おい、ヤミーって奴が逃げようとしてるぞ】

ゴーズ言葉を聞きヤミーの方を見ると、確かに逃げようとしていた。

「隼人、デュエルディスクを貸してくれ」

「どうしたんだな？」

「ヤミーって奴が逃げようとしてる」

「それならそれで良いんじゃないっスか？

「頼むから貸してくれ」

「……分かったんだな」

俺の言葉に隼人は一瞬、迷ったが、デュエルディスクを貸してくれた。

「ありがとう。悪いが、十代と明日香を頼む」

俺はそう言ってヤミーを追い掛けた。

逃がす訳にはいかない……あいつだけでも絶対にぶっ潰す！

第9話　十代ＶＳタイタン　闇のデュエル！？（後書き）

次回、ヤミーの正体が明らかに！？……は置いといて、サイコロ効果を一度も使えなかったなぁ……

主人公は冷静になろうとしたけど、なりきれなかったと思ってください。

第１０話　貴志ＶＳヤミー（前書き）

ヤミーの正体が明らかに！てか、俺ネーミングセンスが無いな。

第１０話　貴志ＶＳヤミー

ヤミーを追い掛けだして少しすると、相手も追われている事に気付いたのか走る速度を上げた。

「逃がすか！」

懐からカードを取り出して投げる。

「おっと」

カードはヤミーの後頭部に当たるかに見えたが避けられる。

「チッ！」

【おい、冷静になれって】

「俺は至って冷静だ！」

ゴーズとの会話の最中、ヤミーが角を曲がるのが見えた。後を追って角を曲がると、ヤミーが待ち構えていた。

「観念したか？」

「（逃げようとしたら窓が開かねぇ！？どうなってんだ！どうやって逃げる？そうだ……）まぁ待て、俺とデュエルをしよう。お前が勝ったら、この千年眼をやる。ただし俺が勝ったら、見逃してもらう（こいつは多分、ペガサスか小僧の関係者。でなければ、千年アイテムを出した時にあそこまで反応を示さない筈だ。ならば絶対に

乗ってくる）」

「良いだろう。受けてやる」

隼人にデュエルディスクを借りたのはこいつを完全にぶっ潰す為だしな。

千年眼を奪うだけなら、持っているスタンガンで気絶させいる。

「デュエル！」

俺　ＬＰ４０００
ヤミー　ＬＰ４０００

「先攻は貰う。ドロー！俺は『ラーニング・エルフ』を守備表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドだ」『ラーニング・エルフ』
レベル３　風属性　効果
天使族　攻１４００　守１５００

俺　ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『ラーニング・エルフ』
（守１５００）

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー！手札からフィールド魔法『ダークゾーン』を発動。このカードの効果で全ての闇属性モンスターの攻撃力は５００アップし、守備力は４００ダウンする」

空が曇り、雷が雲を割いて落ちてくる。周りを見ると焼け野原でモンスターは見当たらない。

「更に『ミストデーモン』を召喚！」

ヤミーの場に下半身が霧状の悪魔が現れる。この環境が体に合うのか元気に見える。

『ミストデーモン』
レベル５　闇属性　効果
悪魔族　攻２４００　守０

『ミストデーモン』
攻２４００→２９００

「バトル。『ミストデーモン』で『ラーニング・エルフ』に攻撃！」

「トラップ発動！『亜空間物質転送装置』！このカードの効果で『ラーニング・エルフ』を除外する」

突如現れた機械から放たれた光線が、『ラーニング・エルフ』に当たり、消えた。だが、遮る者が消えた事で『ミストデーモン』の攻撃が直撃する。

「ぐっ！」

ＬＰ４０００→１１００

「馬鹿め自らを犠牲にしてモンスターを守るとはな」

「勝手にほざいてろ！手札の『冥府の使者ゴーズ』の効果発動！『冥府の使者ゴーズ』を特殊召喚！更に俺が受けたダメージと同じ攻撃力・守備力の『冥府の使者カイエントークン』を特殊召喚する」

【二回ぶりの登場～】

【見参……】

『冥府の使者ゴーズ』
レベル７　闇属性　効果
悪魔族　攻２７００　守２５００

『冥府の使者カイエントークン』
レベル７　光属性　トークン　天使族
攻？（２９００）　守？（２９００）

「更にゴーズは『ダークゾーン』の効果で攻撃力が５００アップする」

『冥府の使者ゴーズ』
攻２７００→３２００
守２５００→２１００

「ぐぅ！カードを２枚伏せてターンエンドだ。この瞬間、生贄無し

で召喚した『ミストデーモン』は破壊され、俺は１０００ポイントのダメージを受ける」

『ミストデーモン』が狂ったような叫びをあげ、ヤミーに襲い掛かり、霧散した。

ヤミー
ＬＰ４０００→３０００

『ミストデーモン』の攻撃の拍子にヤミーがかぶっていたフードが落ちる。

「っ！てめぇは闇のプレイヤーキラー！」

「ほう。俺を知っているのか」

闇のプレイヤーキラー……デュエリストキングダムの時に師匠達を倒す為に、雇われたデュエリストの１人デュエリストキングダムの前に会ったから面識はあるが……何故此処に？

「どうした？デュエルの途中だぞ？」

「ぐっ。この瞬間、『ラーニング・エルフ』は俺の場に戻ってくる」

俺　ＬＰ１１００　手札３枚

モンスター
『冥府の使者ゴーズ』
（攻３２００）

『冥府の使者カイエントークン』
（攻２９００）
『ラーニング・エルフ』
（守１５００）

魔法・罠
無し

闇のプレイヤーキラー
ＬＰ３０００　手札２枚

モンスター
無し

魔法・罠
『ダークゾーン』
（フィールド魔法）
伏せ　２

「俺のターン、ドロー！」

奴が何故、千年眼を持っているかは分からないがまぁ良い。奴をぶちのめした後に聞けば良い事だ。

「俺は手札の『レベル・スティーラー』を墓地に送り、チューナーモンスター『クイック・シンクロン』を特殊召喚。更に『クイック・シンクロン』のレベルを１つ下げて、墓地の『レベル・スティーラー』を特殊召喚する」

『クイック・シンクロン』

レベル５　風属性　効果
機械族　攻７００　守１４００

『クイック・シンクロン』
レベル５→４

『レベル・スティーラー』
レベル１　闇属性　効果
昆虫族　攻６００　守０

「レベル３『ラーニング・エルフ』とレベル１『レベル・スティーラー』にレベル４となった『クイック・シンクロン』をチューニング！
８つの絆の証が揃いし時、現れる魔神よ
その力で名の通り破壊者となれ！シンクロ召喚！
現れろ『ジャンク・デストロイヤー』！！」

『クイック・シンクロン』が光の輪となり、『ラーニング・エルフ』と『レベル・スティーラー』が通過する。

そして俺の場に４つの腕を持つ破壊者が現れる。

『ジャンク・デストロイヤー』
レベル８　地属性　シンクロ／効果　戦士族
攻２６００　守２５００

「『ジャンク・デストロイヤー』は自身のシンクロ召喚に成功した

時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数分フィールド上に存在するカードを選択して破壊できる。俺は貴様の伏せカード2枚を破壊する！」

「ならば、この瞬間トラップカード『喜劇の断末魔』を発動する。このカードの効果により、お前の場に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力を0にし、元々の攻撃力分ライフを回復する」

『喜劇の断末魔』（アニメ）
通常罠
効果
相手ターンのメインフェイズのみ発動する事ができる。
相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力を0にする。
その後、そのモンスターの元々の攻撃力の合計値分、自分のライフポイントを回復する。

【ち、力が抜けるぅ～】

【くっ、あぁん……】

『ジャンク・デストロイヤー』が放った衝撃波がヤミーのカードに届く前にゴーズとカイエンが膝をつき、『ジャンク・デストロイヤー』も元気が無くなった様にうなだれる。

『冥府の使者ゴーズ』
攻3200→0

『冥府の使者カイエントークン』
攻2900→0

『ジャンク・デストロイヤー』
攻２６００→０

ヤミー　ＬＰ３０００→８３００

「フハハハ！礼を言うぞ」

「ぐっ……俺は『ラーニング・エルフ』の効果でカードを１枚ドローする」

来たカードは……良し！

「『強欲な壺』を発動してカードを２枚ドロー！ゴーズとカイエンを守備表示に変更。カードを２枚伏せてターンエンドだ」

俺　ＬＰ１１００　手札２枚

モンスター
『冥府の使者ゴーズ』
（守２１００）
『冥府の使者カイエントークン』
（守２９００）
『ジャンク・デストロイヤー』
（攻０）

魔法・罠
伏せ　２

闇のプレイヤーキラー
ＬＰ８３００　手札２枚

モンスター
無し

魔法・罠
『ダークゾーン』
（フィールド魔法）

面倒なカードを使いやがって！ライフを削ってゴーズ達を出してこれとは……まさか読まれていたのか！？いや、千年眼を使った素振りは無かった筈だが……

「俺のターン！俺は『デーモン・ソルジャー』を召喚する」

闇のプレイヤーキラーの場に刀を持ち、マントを羽織っている悪魔が現れる。

『デーモン・ソルジャー』
レベル４　闇属性　通常
悪魔族　攻１９００　守１５００

『デーモン・ソルジャー』攻１９００→２４００

「バトル！「この瞬間、トラップ発動！『マジカルシルクハット』！」何！」

「デッキからモンスター以外のカード2枚と場の『ジャンク・デストロイヤー』を選択し、デッキをシャッフル。更に選択したカードをシャッフルし、フィールド上にセットする。『マジカルシルクハット』の効果でデッキからセットされたカードは、攻守共に0のモンスターとして扱う」

俺の場に『？』と書かれたシルクハットが3つ降ってきて、その内1つが『ジャンク・デストロイヤー』を隠す。そしてシルクハットが幾度も重なり合い闇のプレイヤーキラーには、どのシルクハットに『ジャンク・デストロイヤー』が入っているのか分からなくなる。

「くっ、ならば『デーモン・ソルジャー』で『冥府の使者ゴーズ』に攻撃！」

「この瞬間トラップ発動！『遅れた召喚劇』！『マジカルシルクハット』で呼び出されたシルクハット2体を生贄に、手札から『堕天使アスモディウス』を特殊召喚する！」

『遅れた召喚劇』
（遊戯王ＯＣＧＷｉｋｉ）
通常罠
効果（遊戯王ＯＣＧＷｉｋｉ）
相手モンスターの攻撃宣言時に発動する事ができる。
自分フィールド上のモンスター2体を生贄にして、手札からレベル5以上のモンスター1体を選択して特殊召喚する。

シルクハット2つが燃え上がり、紫の翼を生やし、白のローブと漆

黒の鎧を纏っている堕天使……アスディが姿を現す。

『堕天使アスモディウス』
レベル８　闇属性　効果
天使族　攻３０００　守２５００

【ふぁ～何？俺も戦うの？】

「……『アスモディウス』は闇属性。『ダークゾーン』の効果で攻撃力が上がる」

『堕天使アスモディウス』
攻３０００→３５００

「モンスターが召喚された事で巻き戻しが発生する。俺は『冥府の使者ゴーズ』に攻撃し直す！」

【何か俺がやられ役になるの多くね？】

『デーモン・ソルジャー』に斬られた時に、ゴーズが何か言ってた気がするが、スルーしよう。

【ゴーズ！！絶対に許さない……】

カイエンも何か言ってるが、今はどうしようもない。

「俺は魔法カード『光りの護封剣』を発動。更にカードを１枚伏せてターンエンドだ」俺　ＬＰ１１００　手札１枚

モンスター
『堕天使アスモディウス』
（攻３５００）
『冥府の使者カイエントークン』
（守２９００）
『ジャンク・デストロイヤー』
（守２５００）

魔法・罠
無し

闇のプレイヤーキラー
ＬＰ８３００　手札０

モンスター
『デーモン・ソルジャー』
（攻２４００）

魔法・罠
『ダークゾーン』
（フィールド魔法）
『光りの護封剣』

（通常魔法）
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！俺は手札から俺は手札から『左腕の代償』を発動！手札を全て捨て、デッキから『命削りの宝札』手札に加え、発動！手札が５枚になるようにドローし、発動後、５ターン目のスタンバイフェイズ時に手札を全て捨てる」

この手札は……デッキが俺の怒りに呼応でもしたのか？

「手札から『シンクロキャンセル』を発動！『ジャンク・デストロイヤー』をエクストラデッキに戻して、墓地から『クイック・シンクロン』、『レベル・スティーラー』、『ラーニング・エルフ』を特殊し、再度『ジャンク・デストロイヤー』を再度シンクロ召喚！」

『クイック・シンクロン』
レベル５　風属性　効果
機械族　攻７００　守１４００

『レベル・スティーラー』
レベル１　闇属性　効果
昆虫族　攻６００　守０

『ラーニング・エルフ』
レベル３　風属性　効果
天使族　攻１４００　守１５００

『ジャンク・デストロイヤー』
レベル８　地属性　シンクロ／効果　戦士族
攻２６００　守２５００

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果により、貴様の伏せカードを破壊する！」

「ぬぅ！（魔法の筒が破壊されたか）」

「『ラーニング・エルフ』の効果でカード1枚ドロー。更に『レベル・スティーラー』を生贄に『神禽王アレクトール』を召喚！」

俺の場に体が白く赤い翼を生やしているモンスターが現れる。

『神禽王アレクトール』
レベル６　風属性　効果
鳥獣族　攻２４００　守２０００

【主よ。１つ気になったのだが、あの千年眼は偽物ではないか？】

「（どういう意味だ？）」

【あれが本物なら奴はゴーズ達が出る前に「馬鹿め」と言っていた。主の考えが読める筈なのにだ。それに『マジカルシルクハット』にも驚かぬ筈】

言われてみればそうだ。奴は今までも千年眼を使っていない。

そもそも、千年アイテムは地底深くに沈んだ筈だ……パズルに関しては、その時にバラバラになってもおかしくない。マリクさん達がマヌケをやらかすとも思えない。

くそっ！完全に見落としていた。ただ見せられただけで、こうまで周りが見えなくなるとは……

だが！あれが偽物であろうが、ペガサス様や師匠達を侮辱している事にはかわりない……どのみちぶっ潰す！

「『アレクトール』の効果発動！1ターンに1度、フィールド上に表側表示で存在するカードを1枚選択する。選択されたカードの効果はこのターン中無効になる。俺は貴様の『光りの護封剣』を選択する！エフェクト・スタン！」

アレクが起こした風により、地面に突き刺さっていた光りの剣は空高く舞い上がった。

「俺は墓地の『レベル・スティーラー』と『ラーニング・エルフ』をゲームから除外し、手札の『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！『ダーク・シムルグ』は闇属性。よって『ダークゾーン』の効果で攻撃力アップ！」

『ダーク・シムルグ』
レベル7　闇属性　効果
鳥獣族　攻2700　守1000

『ダーク・シムルグ』
攻2700→3200

「ば、ばかなこんな事が……」

「バトル！『ジャンク・デストロイヤー』で『デーモン・ソルジャー』に攻撃！」

『ジャンク・デストロイヤー』が4つの腕で、『デーモン・ソルジャー』を連続で殴り続けて破壊した。

闇のプレイヤーキラー
ＬＰ８３００→８１００

「行くぞ！『ダーク・シムルグ』、『堕天使アスモディウス』、『神禽王アレクトール』の３体でダイレクトアタック！」

「ぐわぁあああ！！！」

闇のプレイヤーキラー
ＬＰ８１００→３９００→４００→－２０００

「１つ聞く。何故、偽物の千年アイテムを使い闇のデュエリストと名乗った？」

スタンガンを取り出して闇のプレイヤーキラーに近づく。

「ふ、復讐だ。俺を地のどん底に叩き落としたペガサスとあの小僧に復讐する為だよ！」

「そうか……なら「掛かったな！」なっ！」

闇のプレイヤーキラーが偽物の千年眼を地面に叩きつけると辺り一面が光に包まれた。

「くそっ！閃光玉か！」

【目が、目がぁ～！】
【きゃあ！】
【ぬぅ！】

【眩し！】
【クェ～！】

「フハハハ！サラバだ！ぬぁ！何だこれは！」

数分後、やっと周りが見えるようになり、辺りを見回すが当然、闇のプレイヤーキラーは居ない。

「くそっ、逃げられた！」

【まぁしょうがないだろ。十代達の所に戻ろうぜ】

【後で月行殿にでも知らせればよかろう】

「……そうだな」

――――――――――――――――――――

十代達と合流し、寮の外に出る。

十代の話によると、タイタンとのデュエルは本物の闇のゲームになり、俺が戻ってくる数分前にデュエルの決着が付いたが、その後タイタンは闇にのまれたらしい。

「あ～！もう朝っスよ～」

翔の言う通り少しずつ明るくなってきた。

どうりでさっきから眠いわけだ。

「授業はどうするんだな」

「出る」

まぁレッドは出席日数が足りなくても進級できるが、出ないわけにもいかない。

今なら少しだけ寝られるし。まぁその前に月行義兄さんに電話しないといけないけど。

「う、うぅん」

「あっ！明日香さんが起きたみたいっスよ」

「明日香。これ、お前のだろ？あとこれも」

十代が落ちていたカードと例の写真を明日香に渡した。

「！これは兄さんの……ありがとう」

「へへっ！困った時はお互い様だろ？」

何はともあれ、偽者の闇のデュエリスト騒動は幕を閉じた。

第１０話　貴志ＶＳヤミー（後書き）

鷹
「さて今回はちょくちょく名前が出てくるマルスを除いて貴志の精霊を全部出してみました」

？？？
【ちょっと待てや！】

鷹
「何ですか？ゴーズさん」

ゴーズ
【何で俺だけ最後、墓地なんだよ！】

鷹
「だって、『ジャンク・デストロイヤー』居たし」

ゴーズ
【それでも何とかして出せよ！てか、俺とハニーって精霊の中で一番デュエル時の登場回数多いけど悲惨な目にしか会わないよな？特に俺！】

鷹
「……さぁ今日の最強カードは！」

ゴーズ
【無視か！それと、目を背けるな～！】

『歓喜の断末魔』（アニメ）
通常罠
効果
相手ターンのメインフェイズ時のみ発動する事ができる。
相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力を０にする。
その後、そのモンスターの元々の攻撃力の合計値分、自分のライフポイントを回復する。

鷹
「絶対にどっかのＭデコが「インチキ効果もたいがいにしやがれ！」と言う事間違い無しのカード。まぁんな事言ったら、原作のカードは全体的にヤバイですが……
うろ覚えですが、アニメで確か、闇バクラＶＳ闇マリク戦で闇マリクが使用。
闇バクラがラーの翼神竜を出す前に使って、生贄モンスターの攻撃力を０にし、ラーの翼神竜の攻撃力を０にした。
それより何でゴーズをついついやられ役にしてしまうんだろう……謎だ」

第１１話　制裁デュエルへの序曲（前書き）

始めらへんは、ＴＦ５の龍亜のイベント（ジャックやクロウが罠にはまる奴）を意識してみたんですが、どうですかね？

第11話　制裁デュエルへの序曲

ゴーズ　Ｓｉｄｅ

さて、闇のプレイヤーキラーと廃寮でデュエルし、廃寮を出たのが、およそ二時間前。

マイブラザーは部屋に戻ってくるなり、月行に電話をして、事のあらましを話した後、泥の様に眠っちまった。

そろそろ起きねぇとマジィが、幼鳥状態になってるクシルも眠っちまってるから、マイブラザーを起こす事はできねぇな。

俺達が無理矢理起こそうにも、こっちの世界で実体化できるのは、マイブラザーとクシルが起きていて尚且つ、近くに居る時だけだしな。

【オイ、どうするオッサン？】

【オッサンと言うでない！……クシルが寝ておる以上、儂等ではどうしようも無かろう。儂等がいくら叫んだ所で起きはせぬて】

【クシルは昨日……というより、今日か。とにかく遅い時間に、デュエルに出されたから、疲れて起きねぇだろうし】

【でも私達じゃ起こせないわよ？】

【マルスが居りゃ良いんだけどな。そういや、あいつは何時帰ってくんだ？】

【【【さぁ？】】】

【……しゃあねぇから放っておくか】

こうして俺等、精霊の方針が決まった所で、ドアが激しく叩かれた。

「我々はアカデミア倫理委員会の者だ！天道貴志！貴様を連行するように命令を受けている！至急、扉を開けて出頭しろ！さもなくば、扉を爆発し、強制連行する！」

【どうする～？】

【どうするも何も……どうしようもないわね】

【今見て来たが、マジで爆弾を持ってたぞ】

【……流石に殺傷能力は無かろう。だが、倫理委員会の者とやらが哀れだな】

【【【まったくだ（よ～）（ね）】】】

珍しく、俺等の意見がまた合った瞬間、ドアが爆音と共に吹き飛んだ。

あ～あ、知～らね。てか、マイブラザー……まだ寝てるよ。

「突入ー！」

そう言いながら、緑の服を着た連中が部屋に入って来ようとするが

「うわ！」
「ぎゃあ！」
「のわぁあ！」

入る前にマイブラザーが仕掛けていた罠。カード手裏剣乱れ打ちに襲われ、返り討ち（？）に遭う。

腕や肩、眉間に刺さったりと被害は様々みてぇだな。

3回だけノックすれば、罠が解除されてたのにな。

ドアが吹き飛んだから、奥にある紐を引っ張らねぇと罠を解除できねぇぞ。

「おのれ！抵抗するか！第2班突入！」

玄関先の屍を乗り越え、またやられに部屋に入ってくる。

「何だこれは？『手錠龍（ワッパー・ドラゴン）』？」

ああ、2つ目はそれか。

【ラッキーだね～】

【確かに、3つ目以降の方がえげつないわね】

【死ぬ事は無いと思うんだがのぅ】

ハニー達の言う通り、罠は後になればなる程ヤバくなる。むしろ運が良いな。

「何だこれは！手錠！？ぬわぁぁああ！！！」壁から射出された大型の手錠に倫理委員会の奴等数名が捕われ、外に出される。

ちなみに校長と寮長には許可を貰っていて、罠は全てマイブラザーが作っている。

マイブラザーに罠の作り方を教えたカーク・ディクソン恐るべしだな。

「おのれぇ！第３班、第４班突入！！」

【どれくらいが、意識を保てるかしらね？】

【え～と、１０人居るから、２人ぐらいかな】

【いや、居ねぇだろ】

「これは『ハンマーシュート』のカード？って、ぎゃぁあああ！！！」

天井に仕掛けていた槌に潰され、倫理委員会の奴等１０人は意識を失った。

殺傷能力は無いから。とマイブラザーが言ってたが、大丈夫なんだろうな？それといい加減起きてくれよ……

「何だぁ!?一体どうしたんだ?」

十代達が部屋から出て来たみてぇだな。

「丁度良い所に!君達、天道貴志を連れ出してくれ!」

倫理委員会のリーダーらしき女性が十代達に言った。

【止めとけ。どうなっても知らねぇぞ?】

【怪我をしたいならどうぞ?】

【死にはせぬがススメもせぬ】

【五体満足で居たいでしょ～】

俺達は手を組んで×印つくり、玄関先に現れた十代に見せて、同時に忠告をする。

「済みませんが、無理です」

【賢明な判断ね】

「くっ!第2班、第5班、第6班。突入!」

復活した奴らに新たに10人を加え、総勢15人で部屋に入ってくる。

ホント……ご苦労様だな。

「『ダブルトラッ』総員退避ー！！！」

1人の賢明な判断のお陰で、15人全員が鉄球ではなく、木で作られた球の餌食にならずに済んだ。

【クェ～？】

あっ、クシルが起きた。

【クシル！直ぐに主を起こしてくれ！】

【クェ～♪】

クシルがマイブラザーの布団に入って2秒程経つと島全体に響き渡るんじゃないのか？と思う程の悲鳴が揚がった。

結局、『強制脱出装置』や『ジャスティブレイク』、『全弾発射（フルバースト）』とか迄には辿り着かなかったか……

最後の最後には『自爆スイッチ』もあったんだが……

ゴーズ　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

クシルに強制的に起こされると何故か部屋のドアが無くなっていた。

その事に戸惑っていると、十代や翔と一緒に倫理委員会と名乗る傷だらけの奴等に、校長室に連行された。

校長室に入ると、校長とクロノスが居り、2人とも傷だらけの倫理委員会の人達を見て驚いた。

「それで？俺達が連行された理由は何なんですか？」

「それには私が答えよう」

此処に来る途中、俺達の質問や部下の呪言を無視し続け、一切喋らなかった倫理委員会のリーダーらしき女性が前に出た。

「昨夜未明、遊城　十代、丸藤　翔、天道　貴志の3名は立ち入り禁止区域に指定してある廃寮に侵入し内部を荒らした為、退学させる事となった！」

女性の言葉に十代と翔が驚いている。

「ちょっと待ってくれよ！せめてチャンスをくれよ！」

「良いでしょう。では退学をかけて、シニョール十代と翔には制裁タッグデュエルをシニョール貴志には制裁デュエルを受けて貰うーノ」

「ちょっと待ってください。確かに禁止区域に侵入しましたが倫理委員会はどうやってその事実を知ったのですか？」

「機密事項だ」

「でも、証拠の提示ぐらいはできますよね？証拠が無いのに退学問題にする筈は無いでしょうし」

「匿名の通報だ」

「それは証拠になるんですか？」

「だが！遊城　十代とお前が事実と認めた！」

「ほーう？ならば、俺の部屋を爆破した時は、事実かどうか分からなかったと？それと爆破によって破損した物の弁償はしてくださいよ」

「ぐっ……」

俺の言葉に女性が黙る。部屋を爆破されたんだ……これぐらいは当然だ。

「「失礼します（するんだな～）」」

「明日香と隼人！どうしたんだよ？」

明日香と隼人が校長室に入ってきた。

「どうかしましたかな？」

「私も昨日、禁止区域に侵入しました。彼等が制裁デュエルを受けるなら私も受けるべきです」

「俺も侵入したんだな。だから、俺も受けるべきなんだな」

2人の言葉に校長は考える素振りを見せた。

「ふむ。2人の言い分が本当なら、確かに2人にも制裁デュエルを受けてもらう必要がありますね」

校長は2人の意見を認めた。

「それでーは1週間後に、此方が用意したデュエリストとデュエルして貰うノーネ（しまったノーネ。シニョーラ天上院が来る事を計算に入れてなかったノーネ……）」

さて、1週間後に制裁デュエルが決まったがどうなる事やら……

第１１話　制裁デュエルへの序曲（後書き）

貴志
「今日の最強カードはこれだ！」

『自爆スイッチ』
通常罠
自分なライフポイントが相手より７０００以上少ない時に発動する事ができる。お互いのライフポイントは０になる。

貴志
「俺の部屋に仕掛けてある罠の最後の１つだな」

鷹
「発動したらどうなるんだ？」

貴志
「寮がゲフンゲフン！部屋がまるごと吹っ飛ぶ程度だ」

鷹
「セキュリティってレベルじゃねぇ！しかも程度て……」

第１２話　兄弟（前書き）

あれ？何故か主人公が熱血っぽくなってしまった……

第１２話　兄弟

制裁デュエルをする事が決まった翌日、制裁デュエルについての説明が書面にて知らされた。

書面の内容を簡単に纏めると

・十代と翔のタッグはそのまま。
・デュエルを行う順番と相手は十代、翔ペアは決まっているが、俺、明日香、隼人はくじ引きで決まる。
・代役は認められない
・負けた場合は退学、勝った場合はレポートの提出

という感じだな。最後のを見た時に十代が「えぇ～」と言っていたが、しょうがない事だと思う。

幾つか引っ掛かる……というよりスルーできない事はあるが、俺達が立ち入り禁止区域に侵入した事実は変わらないからな。

そしてその後、十代と翔がお互いのデッキ内容を確認するという名目でデュエルをしたのだが、呆気なく終わった。

『パトロイド』の効果を使わなかったり、攻撃時は『スチームロイド』の方が攻撃力が高いのに『融合』を使って『スチームジャイロイド』を出して攻撃する等、翔のプレイングミスが目立っていた。

ついでに言うと引いたカードで一喜一憂したり、攻撃を防がれて異常にテンションが落ちたりしてた。

デュエルが終わった後、翔はどこかに走り去り、戻ってきた十代が翔の手札に『パワー・ボンド』あったと言っていた。だが、翔が言うには『パワー・ボンド』は兄に封印されているらしい。

そして、明日香から翔にはカイザーと呼ばれる兄、丸藤亮が居る事を教えられた。

カイザー。優れた兄……か。

そして次の日……

「翔が行方不明になった……と」

「そうなんだよ！部屋に手紙が置いてあったんだ！」

俺の部屋に入ってきた十代から手紙を受け取る。

ちなみに罠はドアが吹き飛んだままだと、ついうっかり入る人が居るかもという理由で解除させられている。

十代から受け取った手紙には探さないでくださいと書かれていた。

「普通に考えて島から出る方法は定期船が来るまで無いから、島の中に居る筈だ。取り敢えず探すぞ」

翔の手紙の内容を聞いて、それって探してくれって言ってるようなもんだぞと思ったが口には出さなかった。

【ぜってー探してくれって言ってるよなこれ】

心を読むな心を……

――

十代が俺の部屋に来たのは昼前だったが、翔を海岸で発見した時は既に夕方になっていた。

「十代……お前は何がしたいんだ？」

「うっ、悪ぃ」

翔を発見した時、翔は自作の筏で島から出ようとしていた。

それを阻止しようと十代が筏に飛び乗り、その衝撃で筏が壊れ、2人は海に落ちた。

幸い2人は普通に泳げたので、自力で陸に着いたが風邪を引いてはという事で今、焚き火をしている。

【その度胸は評価できるのだがのぅ】

【筏で海を渡る度胸をデュエルに活かしなさいよ…】

アレクやカイエンの言う通りだな。

「さてと、翔。何故島を出ようとしたんだ？」

「それは……僕がパートナーじゃアニキの迷惑になるから」

「それで逃げたら、代役が認められてない以上、十代は1人でデュエルする事になる。そっちの方が迷惑にならないか？」

「でも、僕はアニキや貴志君みたいに強くないし、三沢君や明日香さんみたいに頭が良い訳でもない。僕なんかじゃ足を引っ張るだけ。僕なんか居ても居なくても……」

「ふざけてんのか？」

ボソッと口から零れた。いつもより声のトーンが低い。

「俺や十代が強い？始めから強かったと思ってんのか？三沢や明日香が頭が良い？始めから頭が良かったとでも？
皆、それ相応の努力を積み重ねたから今があるんだ！
それに対してお前は何かやったのか！試験の時は神頼み！デュエルは途中で投げ出す！挙げ句の果てには現実から、俺達からすら逃げ出す！それで強くなると思ってんのか！」

途中で声が大きくなり、怒鳴る感じになったが、止まらなかった。

「負け犬と呼ばれていたが、必死に努力して認められた人を俺は知っている！
パーフェクトと呼ばれる兄が居る為に、その兄の劣化コピーと呼ばれ、その事がコンプレックスになって、1度道を踏み外した人も知っている！だが、その人は立ち直り、努力して兄を越えた！
俺自身だって1度も勝てなかった義兄（あに）を越える為に必死に努力した！
お前は……越える為の努力も、追い付く為の努力もせずに諦めてるだけじゃねぇか！」

そこまで言って一息つく。

気付くといつの間にか、明日香と三沢と隼人、それと、見知らぬ白服？みたいな物を着ている人が居た。

無関係の人を連れてくるとは思えないから、おそらくあの人が翔の兄なのだろう。

翔から一旦離れる。

【……】

「どうしたんだお前等？」

皆に聞こえないように小声で聞いた。

皆とは少し離れた所に移動したから、これぐらいなら聞こえない筈だ。

【マイブラザーはそんなに熱血だったのか？と思ってな】

「確かに俺らしくないな」

多分だが、城之内さんや夜行義兄さん。そして、俺自身と重ねて見たんだろうな。名前こそ出さなかったものの普通に例にあげてたし。

城之内さんは海馬さんに最初は負け犬と呼ばれていたと聞いたけど、海馬さんも今じゃ完全に城之内さんの実力を認めてる。

夜行義兄さんも『邪神』という力に縋ったけど、『アバター』が消えた後は努力して、月行義兄さんを越えた。

俺はミニオンになる前は神童と呼ばれていたが、月行義兄さんには1度も勝てなかった。

越える為に初めて努力した。

きっとその時の事を思い出したんだろうな。

【まぁ俺達的には熱血系の方が良いけどな（からかいがいがあるし）】

【冷静過ぎて我も時々だが、主が14歳か？と思う時があるからのぅ】

マジでか。俺自身は熱血じゃなくて、アテム師匠や師匠みたいに落ち着き払った感じになりたいんだがな……

ゴーズ達と話していたが、翔の方を見ると、カイザーが翔に歩み寄っていた。

「翔。逃げるのか？」

「お兄さん……」

俯く翔に言葉を投げ掛ける。翔は蹲った状態でそれに答えた。

「まぁそれも良いだろうな」

カイザーの言葉を聞いた翔が立ち上がり、筏の残骸の方に歩み寄って、筏の残骸を集め始めた。

「行っちまうぜ！アンタの弟！」

「仕方のない事だ……」

【止めなくて良いのか？】

「止めようが止めまいが最後に決めるのは翔だ」

ゴーズが【だがよ】と言ったのに対して、だがなと続ける。

「考えを変える事はできるかもな」

そう言って十代の方を見ると

「じゃあさ、俺とアンタで翔に餞別を送ろうぜ。
デュエルという名の餞別をな！」

大体だが、十代の性格が分かってきたな。

やっぱり、城之内さんと結構似ている。

さて、カイザーは十代の挑戦を受けるのか受けないのか……まぁ逃げるのか？と翔に聞いた手前、断れないと思うが。

「良いだろう。受けて立つ」

港に移動した後、十代とカイザーのデュエルが始まり、デュエルはカイザーの勝利に終わった。だが、『サイバー・ドラゴン』やその融合体に怯まず、諦めずに闘う十代の姿を見て翔も考え直したみた

いだ。

「次はお前か」

カイザーがデュエルディスクを構えたまま言った。ああ、次はお前が言った事を示せ的なものか……

まぁ俺としても口だけと思われたくはない。

「ええ。そうですね」

デュエルディスクにデッキをセットして構える。

「クロノス教諭を敗った実力、見せてもらうぞ」

「ご期待に添えるかは分かりませんが、本気で行きますよ」

「「デュエル！」」

第１２話　兄弟（後書き）

てな訳で、次回はカイザーとのデュエルです。

感想やアドバイス等、ありましたら、お願いします！

第１３話　ＶＳアカデミアの頂点のデュエリスト（前書き）

題名のエイベックスで、ぱっと頂点が浮かべば、貴方はＭｒ．クロケッツファン……ですかね？

ちなみにこの小説のＴＧはＴＦ５の効果でやってます。

第１３話　ＶＳアカデミアの頂点のデュエリスト

俺　ＬＰ４０００
カイザー　ＬＰ４０００

「先攻は譲ろう」

「それではお言葉に甘えて」

カイザーの主力モンスターは『サイバー・ドラゴン』。明らかにカイザーは後攻型のデュエリスト……だが、３枚入れているとしても初っぱなから『サイバー・ドラゴン』が来るとも考えにくい。ここは先攻を取り、先に手を打つ！

「俺のターン！俺はモンスターをセット。更にカードを１枚伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
伏せ　１

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー！俺は『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！更に『サイバー・フェニックス』を召喚！」

カイザーの場に一見、龍にも蛇にも見える機械と鳥に見える機械が現れる。

『サイバー・ドラゴン』レベル５　光属性　効果
機械族
攻撃力２１００
守備力１６００

『サイバー・フェニックス』
レベル４　炎属性　効果
機械族
攻撃力１２００
守備力１６００

初っぱなから来るか……当てが外れたな。

それと『サイバー・ドラゴン』はともかく『サイバー・フェニックス』の効果が分からねぇな。

デュエルディスクを操作して『サイバー・フェニックス』のカードをディスプレイに表示させる。面倒な効果だな……

「最初から飛ばして来ますね」

「悪いが全力で行かさせてもらう。バトル！『サイバー・ドラゴン』で守備モンスターに攻撃！エヴォリューション・バースト！」

『サイバー・ドラゴン』の口から放たれた光線が守備モンスターとして出した『クリッター』を貫いた。

「墓地に送られた『クリッター』の効果により、『ＴＧワーウルフ』を手札に加えます」

「続けて『サイバー・フェニックス』でダイレクトアタック！」

「ぐぅ！」

『サイバー・フェニックス』が吐いた炎が直撃する。

俺
ＬＰ４０００→２８００

「カードを1枚伏せてターンエンドだ」

俺
ＬＰ２８００　手札５枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　１

カイザー
ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『サイバー・ドラゴン』
（攻撃力２１００）

『サイバー・フェニックス』
（攻撃力１２００）

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！」

さて、『サイバー・フェニックス』の効果を考えると優先して除去するべきだが、取り敢えずは……

「俺は『ＴＧストライカー』を守備表示で特殊召喚！」

「何だと！？」

「このモンスターは『サイバー・ドラゴン』と同じ特殊召喚効果を持っているんですよ。更にさっき手札に加えた『ＴＧワーウルフ』は自分がレベル２以下のモンスターの特殊召喚に成功した時に特殊召喚できる！現れろ！『ＴＧワーウルフ』！」

俺の場に『ＴＧストライカー』と獣が己自身の体の一部を機械化させたモンスターが現れる。

『ＴＧストライカー』
レベル２　地属性　効果
戦士族・チューナー
攻撃力８００
守備力０

『ＴＧワーウルフ』
レベル３　闇属性　効果
獣戦士族
攻撃力１２００
守備力０

「更に手札から『死者蘇生』を発動！『クリッター』を守備表示で特殊召喚！」

『クリッター』
レベル３　闇属性　効果
悪魔族
攻撃力１０００
守備力６００

「１ターンで３体並べるか……」

「まだまだ行きますよ。レベル３『クリッター』にレベル２『ＴＧストライカー』をチューニング！
５つの絆の証が揃いし時、現れる魔術師よ
その身に宿す数多の知識を用いて、我が可能性を広げよ！シンクロ召喚！現れろ『ＴＧハイパー・ライブラリアン』！！」

俺の場に白と黒の衣に身を包み、左手に本を持ち、マントを羽織っている魔術師が現れる。

『ＴＧハイパー・ライブラリアン』
レベル５　闇属性
機械族・シンクロ／効果
攻撃力２４００

守備力１８００

「墓地に送られた『クリッター』の効果によりデッキから『ゾンビキャリア』を手札に加えます。そして『ゾンビキャリア』を召喚！」

『ゾンビキャリア』
レベル２　闇属性
アンデット族・チューナー
攻撃力４００
守備力２００

「レベル３『ＴＧワーウルフ』にレベル２『ゾンビキャリア』をチューニング！
５つの絆の証が揃いし時、現れる正義を冠する物よ
その力で他の者を滅せよ！シンクロ召喚！『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』！」

『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』
レベル５　闇属性
機械族・シンクロ／効果
攻撃力２２００
守備力１２００

「『ＴＧハイパー・ライブラリアン』の効果発動！このカードが自分フィールド上に存在し、自分か相手がシンクロ召喚に成功した時、カードを１枚ドローする！」

これで手札は４枚。『ＴＨＥ　トリッキー』が手札に有れば更に行けたんだが……まぁ良い。

カイザーの伏せカードが気になるが……ここは

「バトル！『カタストル』で『サイバー・ドラゴン』に攻撃！『カタストル』は闇属性モンスター以外のモンスターと戦闘を行う場合、ダメージ計算を行わずそのモンスターを破壊する！」

「何！？」

『カタストル』が放った黒い光線を受けた『サイバー・ドラゴン』が膨張し破裂した。

「『ＴＧハイパー・ライブラリアン』で『サイバー・フェニックス』に攻撃！」

『ライブラリアン』が放った光弾に貫かれた『サイバー・フェニックス』が爆発する。

カイザー
ＬＰ４０００→２８００

「『サイバー・フェニックス』の効果でカードを１枚ドロー」

「俺はカードを１枚伏せてターンエン「この瞬間、トラップ発動『砂塵の大竜巻』。今伏せたカードを破壊する」……ターンエンド」
『くず鉄のかかし』が破壊されたか……

俺
ＬＰ２８００　手札３枚

モンスター
『ＴＧハイパー・ライブラリアン』
（攻撃力２４００）
『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』
（攻撃力２２００）

魔法・罠
伏せ　１

カイザー
ＬＰ２８００　手札４枚

モンスター・魔法・罠
無し

カイザー　Ｓｉｄｅ

１ターンでここまでやるとはな。明日香から聞いた実力は本物のようだな。正直に言って『カタストル』は厄介だが、今引いたカードを使えば破壊できない訳では無い。

「俺のターン、ドロー！俺は2体目の『サイバー・ドラゴン』を特殊召喚！更に魔法カード『エヴォリューション・バースト』を発動して『Ａ・Ｏ・Ｊ　カタストル』を破壊する！」

「なっ！ぐっ！」

『サイバー・ドラゴン』

レベル５　光属性
機械族・効果
攻撃力２１００
守備力１６００

『エヴォリューション・バースト』の効果で『サイバー・ドラゴン』はこのターンは攻撃できないが、問題無い。

問題無いが、あのリバース・カードが気になるな。

さっきのターン、天道は『サイバー・フェニックス』の効果を調べていた……だから、さっきの攻撃の時にトラップを使わなかった可能性がある。

だが！

「俺は『融合呪印生物－光』を召喚し、効果発動！このカードと『サイバー・ドラゴン』を生贄に捧げ『サイバー・ツイン・ドラゴン』を特殊召喚！」

『融合呪印生物－光』
レベル３　光属性
岩石族・効果
攻撃力１０００
守備力１６００

『サイバー・ツイン・ドラゴン』レベル８　光属性
機械族・融合／効果
攻撃力２８００
守備力２１００

俺は一歩も退く気は全く無いぞ天道。

カイザー　Ｓｉｄｅ　ｏｕｔ

２体目か……マジかよ。そして『サイバー・ツイン・ドラゴン』か伏せカードの『フローラル・シールド』だけじゃあ『ＴＧライブラリアン』を守り切れないか。

何より『カタストル』が破壊されたのが痛過ぎるな。さっき調べた『エヴォリューション・バースト』のリスクも回避しているし。

「更に装備魔法『ブレイク・ドロー』を装備しバトル！『サイバー・ツイン・ドラゴン』で『ＴＧライブラリアン』を攻撃！エヴォリューション・ツイン・バースト！」

「トラップ発動！『フローラル・シールド』このカードの効果により、『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃を無効にしカードを１枚ドローします」

突如、無数の花びら、『サイバー・ツイン・ドラゴン』の攻撃は防がれた。

「成る程。『フローラル・シールド』だったのか」

「ええ。さっきは『サイバー・フェニックス』が居たので、使えませんでしたけど」

「だが、『サイバー・ツイン・ドラゴン』は１度のバトルフェイズ

で2回攻撃できる。『サイバー・ツイン・ドラゴン』で再度攻撃する！」

『サイバー・ツイン・ドラゴン』が2つの首から放った光線を『TGハイパー・ライブラリアン』が魔方陣を展開して防ぐが、『サイバー・ツイン・ドラゴン』が出力を上げたのか、放つ光線が太くなる。

徐々に押されて魔方陣が割れると光線が『TGハイパー・ライブラリアン』を貫いた。

『TGハイパー・ライブラリアン』が持っていた本が地に落ち程なくして燃えた。

「ぐっ、」

俺
LP2800→2400

「『ブレイク・ドロー』の効果により、カードを1枚ドロー、ターンエンドだ」

俺
LP2400　手札4枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　１

カイザー
ＬＰ２８００　手札２枚

モンスター
『サイバー・ツイン・ドラゴン』
（攻撃力２８００）

魔法・罠
『ブレイク・ドロー』
（装備魔法）

「俺のターン！ドロー！『強欲な壺』を発動！カードを２枚ドロー！」

良し！いける。

「俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！このカードも『サイバー・ドラゴン』等と同じ効果を持ってます。まぁ自身の効果で特殊召喚このカードの元々の攻撃力・守備力は半分になりますけど」

俺の場に紫色の体の龍が現れるが、その瞬間、体が縮んだ。

『バイス・ドラゴン』レベル５　闇属性
ドラゴン族・効果
攻撃力２０００（１０００）

守備力２４００（１２００）

「更に手札から魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動。手札の『スピード・ウォリアー』を墓地に送り、デッキから『ダークシー・レスキュー』を特殊召喚！そして、『ダーク・スプロケッター』を通常召喚！」

『ダークシー・レスキュー』
レベル１　闇属性
機械族・効果
攻撃力０
守備力０

『ダーク・スプロケッター』
レベル１　地属性
悪魔族・チューナー
攻撃力４００
守備力０

「レベル５『バイス・ドラゴン』とレベル１『ダークシー・レスキュー』にレベル１『ダーク・スプロケッター』をチューニング！
７つの絆の証が揃いし時、現れる悪魔よ
その名の如く、場に混沌をもたらせ！シンクロ召喚！現れよ『デーモン・カオス・キング』！」

俺の場に紅蓮の炎を腕に纏うまがまがしき、悪魔が現れる。

『デーモン・カオス・キング』
レベル７　闇属性

悪魔族・シンクロ／効果
攻撃力２６００
守備力２６００

「『ダーク・スプロケッター』が闇属性のシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地に送られた場合、表側表示で存在する魔法または罠カードを破壊できます。この効果で『ブレイク・ドロー』を破壊！」

地中から突き出された鎖が絡んだ『ブレイク・ドロー』が地中に持っていかれる。

「更に『ダークシー・レスキュー』がシンクロモンスターのシンクロ召喚に使用され墓地に送られた場合、自分はデッキからカードを１枚ドローします」

引いたカードは……アレクか。

「バトル！『デーモン・カオス・キング』で『サイバー・ツイン・ドラゴン』に攻撃！『デーモン・カオス・キング』は攻撃時に相手フィールド上に表側表示で存在する全てのモンスターの攻撃力・守備力をバトルフェイズ終了時まで入れ替える事ができる。当然、効果を発動！」

『デーモン・カオス・キング』が『サイバー・ツイン・ドラゴン』めがけて黒い球のような物を打ち出し、『サイバー・ツイン・ドラゴン』がそれに包まれると、『サイバー・ツイン・ドラゴン』が若干、錆びた。

『サイバー・ツイン・ドラゴン』

攻撃力２８００→２１００
守備力２１００→２８００

「くっ、『サイバー・ツイン・ドラゴン』迎撃だ！」

『デーモン・カオス・キング』が『サイバー・ツイン・ドラゴン』が放つ光線をいなしながら近づき、羽根？のような部分で切り裂いた。

「ぬぅ！」

カイザー
ＬＰ２８００→２３００

「カードを１枚伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ２４００　手札２枚

モンスター
『デーモン・カオス・キング』
（攻撃力２６００）

魔法・罠
伏せ　１

カイザー

ＬＰ２３００　手札２枚
モンスター・魔法・罠
無し

十代　Ｓｉｄｅ

「カードを１枚伏せてターンエンド」

貴志のターンが終わってカイザーのターンに移った。

でも２人共すげぇ！貴志がシンクロモンスターを並べたと思ったら、カイザーがそれを全部倒す。カイザーが有利になったと思ったら返しのターンで貴志は新しいシンクロモンスターを出して、カイザーの『サイバー・ツイン・ドラゴン』を倒した。

どっちが勝つか全く分からねぇ！この２人とまたデュエルしてぇな～

「俺のターン！ドロー！」

カイザーの場にはモンスターも魔法・罠も無いだが、気を抜く訳にはいかない。

さぁカイザーはどう出る！？

「俺は『強欲な壺』を発動、カードを２枚ドロー！更に墓地の『エヴォリューション・バースト』、『ブレイク・ドロー』、『強欲な

壺』をゲームから除外して『埋葬呪文の宝札』を発動！カードを2枚ドロー！」

『埋葬呪文の宝札』
（アニメ）
通常魔法
自分の墓地に存在する魔法カード3枚をゲームから除外して発動する。
自分のデッキからカードを2枚ドローする。

こ、ここで4枚ドローかよ……俺もドロー運には自信があるけど、普通ここで引くかぁ！？

「更に魔法カード『ジャンク・ディーラー』を発動！墓地の『サイバー・ドラゴン』2体選択してこの2体を元々の攻撃力を半分にして特殊召喚！」

『サイバー・ドラゴン』
×2
レベル5　光属性
機械族・効果
攻撃力2100（1050）
守備力1600

ええ！？何だあのカード……

『ジャンク・ディーラー』
（アニメ）
自分の墓地に存在する機械族または戦士族モンスターを2体まで選

択して発動する。
選択したモンスターの元々の攻撃力を半分にして特殊召喚する。
このカードを発動したターンのエンドフェイズまでこの効果で特殊召喚したモンスターは生贄にできず、攻撃宣言を行う事ができない。

「このカードの効果で特殊召喚されたモンスターは発動ターンのエンドフェイズまで生贄にできず、攻撃もできないが、ここで『パワー・ボンド』を発動！手札の『サイバー・ドラゴン』と場の2体の『サイバー・ドラゴン』を融合！『サイバー・エンド・ドラゴン』を融合召喚！」

『サイバー・エンド・ドラゴン』
レベル１０　光属性
機械族・融合／効果
攻撃力４０００（８０００）
守備力２８００

俺の時にも出てきた『サイバー・エンド・ドラゴン』。貴志は一体どうやって対抗するんだ？

「『パワー・ボンド』によって融合召喚されたモンスターは、元々の攻撃力アップする！バトル『サイバー・エンド・ドラゴン』で『デーモン・カオス・キング』に攻撃！エターナル・エヴォリューション・バースト！！」

「トラップ発動！『ドレインシールド』！『サイバー・エンド・ドラゴン』の攻撃を無効にし、攻撃力分ライフを回復する！」

「何！？」

『デーモン・カオス・キング』に向かっていた攻撃が方向を変えて貴志に当たる。でも、その攻撃はデュエルディスクに吸収されて、ライフが回復した。

貴志
ＬＰ２４００→１０４００

「まだ俺は通常召喚できる『サイバー・ジラフ』を召喚！」

『サイバー・ジラフ』
レベル３　光属性
機械族・効果
攻撃力３００
守備力８００

『サイバー・ジラフ』？出して一体どうするつもりなんだ？

「『サイバー・ジラフ』を生贄に捧げ、このターンのエンドフェイズ時まで、俺への効果ダメージを無効にする。ターンエンドだ」

うめぇ！『パワー・ボンド』のリスクを回避しやがった！

さぁ貴志はどうするんだ！？

十代　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

「俺のターン！ドロー！」

よく1ターンで『サイバー・ドラゴン』が2体墓地に居るのに『サイバー・エンド・ドラゴン』なんて出せたな……だが！

「魔法カード『蜘蛛の糸』を発動！これでカイザーの墓地の『ジャンク・ディーラー』を手札に加えて発動！墓地の『ＡＯＪ　カタストル』と『ダークシー・レスキュー』を特殊召喚！」

『蜘蛛の糸』
（アニメ）
1ターン前に相手の墓地に送られたカードを1枚選択して自分の手札に加える。
墓地に送られる場合は元々の持ち主の墓地へ送られる。

『ＡＯＪ　カタストル』
レベル５　闇属性
機械族・シンクロ／効果
攻撃力２２００（１１００）
守備力１２００

『ダークシー・レスキュー』
レベル１　闇属性
機械族・効果
攻撃力０
攻撃力０

「だが、『ジャンク・ディーラー』で特殊召喚されたモンスターは、このターン攻撃できない」

「分かってますよ。更に手札を1枚デッキの上に戻して墓地の『ゾ

ンビキャリア』の効果発動！墓地から『ゾンビキャリア』を特殊召喚！」

『ゾンビキャリア』
レベル２　闇属性
アンデット族・チューナー
攻撃力４００
守備力２００

「レベル５『カタストル』とレベル１『ダークシー・レスキュー』にレベル２『ゾンビキャリア』をチューニング！
８つの絆の証が揃いし時、現れる暗黒の龍よ
その力で相手に闇による終焉を与えよ！シンクロ召喚！『ダークエンド・ドラゴン』！」

俺の場に胴体にもう１つの顔を持っている黒いドラゴンが現れる。

『ダークエンド・ドラゴン』
レベル８　闇属性
ドラゴン族・シンクロ／効果
攻撃力２６００
守備力２１００

「『ダークシー・レスキュー』の効果でカードを１枚ドロー！更に『ダークエンド・ドラゴン』は１ーンに１度このカードの攻撃力・守備力を５００ダウンし、相手モンスター１体を墓地へ送る事ができる！」

「何だと！？」

「『ダークエンド・ドラゴン』の効果発動して『サイバー・エンド・ドラゴン』を墓地へ！闇に呑まれよ『サイバー・エンド・ドラゴン』！！」

『ダークエンド・ドラゴン』の胴体にある口が開くとそこから闇のブレスが吐かれる。『サイバー・エンド・ドラゴン』は抵抗するものの、闇に呑み込まれた。

「バトル！『デーモン・カオス・キング』でダイレクトアタック！」

「この瞬間、『速攻のかかし』を手札から捨てる。その攻撃を無効にし、バトルフェイズを終了する」

「カードを1枚伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ１０４００　手札１枚

モンスター
『デーモン・カオス・キング』
（攻撃力２６００）
『ダークエンド・ドラゴン』
（攻撃力２１００）

魔法・罠
伏せ　１

カイザー

ＬＰ２３００　手札０枚
モンスター・魔法・罠
無し

「俺のターン！ドロー！『貪欲な壺』を発動！墓地の『サイバー・ドラゴン』３体と『サイバー・ジラフ』、『サイバー・フェニックス』をデッキに戻してシャッフル。そして、２枚ドロー！」

「天道。このデュエル、このデッキで『サイバー・エンド・ドラゴン』に並ぶ切り札で幕を降ろそう」

『サイバー・エンド・ドラゴン』に並ぶ！？何だ、何が来る！？

「永続魔法『未来融合－フューチャー・フュージョン』を発動！選ぶのは『キメラテック・オーバー・ドラゴン』だ！」

カイザーのデッキが急速に減っていく。そんなに融合素材が必要なのか？でも、『未来融合－フューチャー・フュージョン』でモンスターが呼び出されるのは２ターン後の筈……

「更に『オーバーロード・フュージョン』を発動！自分のフィールド上・墓地から、融合モンスターカードによって決められた融合素材モンスターをゲームから除外し、闇属性・機械族の融合モンスター１体を融合召喚する！俺は墓地の『サイバー・ドラゴン』３体、『サイバー・ジラフ』２体、『サイバー・フェニックス』２体、『サイバー・ドラゴン・ツヴァイ』２体、『プロト・サイバー・ドラゴン』２体、『サイバー・ヴァリー』３体、『サイバー・レーザー・

ドラゴン』１体、『サイバー・バリア・ドラゴン』１体、『サイバー・ラーヴァ』２体、『サイバー・エスパー』１体、『サイバー・エルタニアン』１体、『サイバー・ツイン・ドラゴン』１体、『サイバー・エンド・ドラゴン』１体をゲームから除外し『キメラテック・オーバー・ドラゴン』を融合召喚！」

カイザーの場に箱みたいな物から、え～と首が２０個あるモンスターが現れた。

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』
レベル９　闇属性
機械族・融合／効果
攻撃力？
守備力？

「攻撃力と守備力が決まってない！？」

ディスプレイに表示されたカードの攻撃力を見て驚く。

「『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の融合召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを全て墓地に送る。そして、このカードの元々の攻撃力・守備力は融合素材にしたモンスターの数×８００ポイントの数値になる。融合素材としたモンスターは２２体。よって『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の攻撃力・守備力は１７６００！！」

「「「「「１７６００！！！」」」」」

カイザーを除く全員が驚く。

「バトル！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』で『デーモン・カオス・キング』に攻撃！エヴォリューション・レザルト・バースト！！！」

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の攻撃に『デーモン・カオス・キング』はなす術無く呑み込まれた。

その攻撃は無論、俺を呑み込もうとする。

「悪いが、諦めるつもりは全く無い！リバース・カードオープン！『ガード・ブロック』！戦闘ダメージを0にし、カードを1枚ドロー！」

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の攻撃力・守備力は融合素材モンスターの数で決まる。ならば次の俺のターンでアレクを出して効果を無効する。そして、アレクで攻撃すれば俺の勝ちだ！

「甘い！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』は融合素材としたモンスターの数だけ、相手モンスターに攻撃できる！行くぞ！天道！『キメラテック・オーバー・ドラゴン』で『ダークエンド・ドラゴン』に攻撃！エヴォリューション・レザルト・バースト！2連打ァ！」

「くっ！受けて立つ！行け！『ダークエンド・ドラゴン』！ダーク・フォッグ！」

『ダークエンド・ドラゴン』が放った攻撃と『キメラテック・オーバー・ドラゴン』の放った攻撃が2体の中間あたりでぶつかる。押し合ったのは一瞬で『ダークエンド・ドラゴン』は自身の攻撃と共に呑み込まれた。

そして、『ダークエンド・ドラゴン』を呑み込んだ攻撃は俺の所まで届き、俺を呑み込んだ。

「うわぁあああ！！！」

俺
ＬＰ１０４００→－５１００

デュエルの終了を告げるブザーが鳴り響いた。

「『プライドの咆哮』か……」

『ガード・ブロック』の効果で最後にドローしたカードを見て呟く。

そういや、デュエル中に負けが確定しているのにあそこまで叫んだのは、一体何時ぶりだ？

第１３話　ＶＳアカデミアの頂点のデュエリスト（後書き）

鷹
「今日の最強カードは『ジャンク・ディーラー』と悩んだけどやっぱこれ！

『キメラテック・オーバー・ドラゴン』
レベル９　闇属性
機械族・融合／効果
攻撃力？
守備力？
『サイバー・ドラゴン』＋機械族モンスター１体以上このカードは融合召喚でしか特殊召喚できない。
このカードの融合召喚に成功した時、このカード以外の自分フィールド上のカードを全て墓地に送る。このカードの元々の攻撃力・守備力は融合素材にしたモンスターの数×８００ポイントの数値になる。このカードは融合素材にしたモンスターの数だけ相手モンスターを攻撃する事ができる。

鷹
「融合素材がゆるゆるの融合モンスターだな。『サイバー・ドラゴン』だけじゃなく、『プロト』や『ツヴァイ』も居るし。
そして、俺がＴＦシリーズで出して攻撃したら『魔法の筒』で逆にワンキンされたモンスターでもある……」

貴志
「お前、何やってんだよ……」

鷹

「現実で持ってないから出せてテンションがハイになってしまって……」

貴志
「馬鹿な奴だな。まぁＴＦ５で、『フォーミュラ・シンクロン』が無いという理由で『呪縛牢』を使って『シューティング・スター・ドラゴン』を出すお前にはぴったりかもな」

鷹
「失礼な！『スカーレッド』や『ブレード・ガンナー』も呼び出すぞ！」

貴志
「お前はもう……色んな所に謝りに行ってこい」

第１４話　迷と宮（前書き）

十代以外にも、チートドローの持ち主が！

第１４話　迷と宮

カイザーとデュエルしてからは特に是といった事も……いや、４日前に隼人を連れ戻すとか言って、隼人の父親がアカデミアに来たり、３日前にまたドローパンの悲劇と更に、十代達の奇跡的な運を再確認した事以外は特に無く、制裁デュエルの日がきた。

くじ引きの結果、十代と翔ペアの後にデュエルする順番は隼人、明日香、俺という順番になった。

十代と翔はデュエルリングに向かい、俺達は観客席に向かった。

「クロノス教諭が用意したデュエリストって、一体誰かしら？」

「さぁな。まぁクロノス先生は俺と十代と翔を退学にしたいから、それなりのデュエリストだと思うが……」

『デンジャラスマシン　ＴＹＰＥ－６』の様なマシンでくじ引きをしたが、一番最初に引いた俺の時だけ、３と４が出たら、また回りだし、５が出るまでそれが続くという不自然な物だった。

十代と翔と俺の相手はかなり手強いかもしれないな。

「さぁそれでは、退学か在学かをかけた制裁デュエル第１回戦を開始します！」

司会進行役の生徒がデュエリストの紹介を始めた。

今更だが、わざわざ授業を潰して生徒に観戦させる辺りに悪意を感

じるな。

「先ずはチームアカデミアから遊城　十代選手と丸藤　翔選手の２人だぁー！遊城　十代選手は知っての通り、ブルーの生徒を上回る実力を持っている！そして、丸藤　翔選手の力はまだ未知数。これは面白い組み合わせだぁー！」

司会進行役の言葉の後に十代と翔がデュエル場に入場して来た。

その瞬間、主にオシリス・レッドとラー・イエローを中心に歓声が起こる。

「何だこれ？」

「凄い歓声なんだな」

「十代達ってこんなに人気者だったの？」

「イエローの生徒の中にもブルーの生徒に痛い目に合わされた生徒が多い。だから、ブルーの生徒を倒した十代と貴志はかなり人気がある様だな」

「そうか……」

三沢の解説に疑問が解けるが、俺もなのかよ。

疑問が解けた所でデュエル場に目を向けると、十代はいつも通り振る舞っているが、翔は緊張してるみたいだ。

「それではクロノス教諭が用意した刺客の入場だぁー！」

十代と翔が入って来た入り口の反対の方からフードを被った2人組が入場して来た。

その2人組は入って来るなり、空中に跳んで、無駄にアクロバティックな動きをしたり、組み手をしたりといきなり何?と思う動きをした後、フードを取った。

その2人組の正体は……

「な、何とクロノス教諭からの刺客は伝説のデュエリスト迷宮兄弟だぁー!」

迷宮兄弟……デュエリストキングダムで師匠を倒す為に雇われたデュエリスト。

そして、切り札はペガサス様があの2人の為に作ったカード『ゲート・ガーディアン』。その攻撃力は師匠の持つ『アルカナ　ナイトジョーカー』を除けば戦士族ではトップ。

「迷宮兄弟は伝説の決闘王武藤　遊戯と伝説のデュエリスト城之内　克也のタッグを追い詰めた程の猛者。果たしてこの2人に勝てるのかぁー!」

「くぅ～伝説のデュエリストとデュエルできるなんて、ワクワクしてきたぜ!
頑張ろうな翔」

「う、うん」

「汝等２人。栄光という名の光に辿り着くか」

「絶望という名の闇に辿り着くかは」

「この」

「デュエルで」

「「決まる！」」

迷宮兄弟の前口上が入る。２人交互に話す辺りに息ピッタリだな。

「ルールはタッグフォースルールで行います！ＬＰは８０００。フィールドや墓地、除外ゾーン等は共通。攻撃は２人目のプレイヤーから可能。カードの使用権はターンプレイヤーにのみあります！それではデュエル開始ィー！！！」

「「「「デュエル！！」」」」

迷・宮ペア
ＬＰ８０００

十・翔ペア
ＬＰ８０００

順番は迷宮兄→翔→迷宮弟→十代という順番になったみたいだ。

「私のターン、ドロー！私はライフを１５００支払い手札から『スター・ブラスト』を発動！手札の『風魔神ーヒューガ』のレベルを

エンドフェイズまで、３つ下げる。そして、レベル４となった『風魔神ーヒューガ』を攻撃表示で召喚する！」

迷・宮
ＬＰ８０００→６５００

迷宮兄弟のライフが減った後、迷宮兄弟の場に顔？の部分に［風］と刻まれた魔神が現れる。

『雷魔神ーヒューガ』
レベル７（４）　風属性
魔法使い族・効果
攻撃力２４００
守備力２２００

ライフを犠牲にして、いきなり魔神の一体を召喚するか……早いな。

「更に魔法カード『アンティ勝負』を発動。それぞれのプレイヤーは手札からカードを１枚選択し、お互いにレベルを確認する。レベルの高いモンスターを選択したプレイヤーのカードは手札に戻り、レベルの低いモンスターを選択したプレイヤーは１０００ポイントのダメージを受け、選択したカードを墓地に送る。ちなみに、モンスター以外のカードを選択した場合はレベル０とする。私が選択したのはこのカードだ！」

この場合、効果を受けるのは十代か……

「俺が選ぶのはこのカードだ！」

十代と迷宮兄が選んだカードが表示される。
十代が選んだのはレベル５の『Ｅ・ＨＥＲＯ　ネクロダークマン』。
そして、迷宮兄が選んだカードは……

「「「「ゲ、『ゲート・ガーディアン』！！！」」」」
レベル１１の『ゲート・ガーディアン』だった。
もう手札に来ていたのか……どんな引きしてんだよ。
「『アンティ勝負』の効果により、１０００ポイントのダメージを受けて貰う！更に『ネクロダークマン』も墓地に送って貰うぞ！」
フィールド上にプレイされていた『アンティ勝負』から『ミスト・ウォーム』の様なものが出てきて、確認する為にフィールド上に出ていた『ネクロダークマン』を食い破り、十代達にダメージを与える。

「ぐっ！くっ……」

十代・翔ペア
ＬＰ８０００→７０００

「カードを2枚伏せてターンエンド」

『風魔神ーヒューガ』
レベル4↓7

迷・宮ペア
ＬＰ６５００
迷宮兄　手札１枚
迷宮弟　手札５枚

モンスター
『風魔神ーヒューガ』
（攻撃力２４００）

魔法・罠
伏せ　２

1ターン目に魔神の1体を召喚し、尚且つダメージを与えるか……だが、墓地に『ネクロダークマン』が置かれた。悪い事ばかりじゃない。

あれ？迷宮兄の手札は『ゲート・ガーディアン』だけ……『スター・ブラスト』が無かったら終わってないか？

「僕のターン！ドロー！」

翔のターンから攻撃は可能だが、迷宮兄弟の場には自身への攻撃を

1度だけ無効にする攻撃力２４００の　『風魔神ーヒューガ』が居る。さて、どう動く？

「僕は永続魔法『マシン・デベロッパー』を発動！更に『スチームロイド』を召喚！『マシン・デベロッパー』の効果で攻撃力が２００アップ！」

翔の場に人面機関車が現れて、整備士らしき人達に整備される。

『スチームロイド』
レベル４　地属性
機械族・効果
攻撃力１８００（２０００）
守備力１８００

「『マシン・デベロッパー』……フィールド上の機械族モンスターの攻撃力を２００アップし、フィールド上の機械族モンスターが破壊される度にカウンターを置き、後続を出しやすくするカードか……」

三沢の解説が入る。攻撃力２００アップ……『スチームロイド』自身の効果と合わせれば、『ヒューガ』の攻撃力を上回るが……

「バトル！『スチームロイド』で『風魔神ーヒューガ』に攻撃！『スチームロイド』はこのカードが攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が５００アップする！」

「くっ、ならば『風魔神ーヒューガ』の効果を発動！『スチームロイド』との戦闘で発生するダメージを０にする！ストーム・バリケード！！」

『スチームロイド』が突撃を試みるが『ヒューガ』が発生させた暴風によってそれで壁に激突した。

痛そうに顔を歪めているが、可愛くもなんともないな。

だが、１回限りの効果を使わせたのは大きいな。

「僕はカードを1枚伏せてターンエンド！」

迷・宮ペア
ＬＰ６５００
迷宮兄　手札１枚
迷宮弟　手札５枚

モンスター
『風魔神ーヒューガ』
（攻撃力２４００）

魔法・罠
伏せ　２

十代・翔ペア
十代　手札４枚
翔　手札３枚

モンスター
『スチームロイド』
（攻撃力２０００）

魔法・罠
『マシン・デベロッパー』
(永続魔法)
伏せ　1

「私のターン！ドロー。私は兄者が伏せたトラップカード『レベル変換実験室』を発動！私が選択するのは『水魔神ースーガ』だ！」

若干薄くなった『水魔神ースーガ』が場に現れる。そして、『スーガ』の前にサイコロも現れる。

「『レベル変換実験室』……自分の手札のモンスター1枚を選択し、サイコロを振る。1が出た場合は選択したカードを墓地に送り、それ以外の数字の時は、選択したモンスターのレベルにするカードか」

三沢の解説が再び入る。流石はラー・イエロー首席。知識が豊富だ。

「さぁ行くぞ！ダイスロール！」

振られたサイコロの出た目は……

「5か……」

これなら、生け贄がいるが、どうするか……

「出た目は5か。ならば、もう1枚のリバース・カードオープン！『デビルズ・サンチュクアリ』！このカードの効果によって、『メ

タルデビル・トークン』を特殊召喚する！更に『メタルデビル・トークン』を生け贄にして、レベル５となった『水魔神ースーガ』を召喚！」

迷宮兄弟の場に今度は『水』という文字が刻まれた魔神が現れる。

『水魔神ースーガ』

レベル７（５）　水属性
水族・効果
攻撃力（２５００）
守備力（２４００）

２体目の魔神か……てか、魔神以外のモンスターは無いのか？

「バトル！『風魔神ーヒューガ』で『スチームロイド』に攻撃！魔風波！！」

「トラップ発動！『攻撃の無力化』！攻撃は無効だ！」

『ヒューガ』の口から吐き出された暴風が『スチームロイド』に迫るが、渦に吸い込まれる。

「ぬぅ！私はカードを２枚伏せてターンエンド」

『水魔神ースーガ』
レベル５→７

迷・宮ペア
ＬＰ６５００
迷宮兄　手札１枚
迷宮弟　手札３枚

モンスター
『風魔神－ヒューガ』
（攻撃力２４００）
『水魔神－スーガ』
（攻撃力２５００）

魔法・罠
伏せ　２

十代・翔ペア
ＬＰ７０００
十代　手札４枚
翔　手札３枚

モンスター
『スチームロイド』
（攻撃力２０００）

魔法・罠
『マシン・デベロッパー』
（永続魔法）

「俺のターン！ドロー！『強欲な壺』を発動！更に『サイクロン』

を発動！俺から見て右側のカードを破壊する！」

破壊したカードは……『魔法の筒』か。

「よっしゃ！行くぜ！墓地の『ネクロダークマン』の効果発動！このカードが墓地に存在する限り１度だけ、レベル５以上の『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のついたモンスター１体を生け贄無しで召喚できる！『Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン』を召喚！」

「なんと……」

「兄者の『アンティ勝負』を利用したのか！」

「更に『融合』を発動！手札の『フェザーマン』と『バーストレディ』を手札融合！出でよ『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』！」

『Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン』
レベル７　地属性
戦士族・効果
攻撃力２６００
守備力１８００

『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』
レベル６　風属性
戦士族・融合／効果
攻撃力２１００
守備力１２００

「ぬぅ！だが、『フレイム・ウィングマン』では『スーガ』や『ヒ

ユーガ』には適わぬ！」

「まだだ！ヒーローには戦う舞台がある！フィールド魔法『摩天楼―スカイスクレイパー―』を発動！」

十代がフィールド魔法ゾーンにカードを置いた瞬間、十代達の周りに高層ビルが立ち並ぶ。

「『―スカイスクレイパー―』がある限り、『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくモンスターが攻撃する時、攻撃モンスターの攻撃力が攻撃対象モンスターの攻撃力よりも低い場合、攻撃モンスターの攻撃力はダメージ計算時のみ１０００ポイントアップする！」

「「何だと！？」」

迷宮兄弟が驚いているが、俺は別の意味で驚いたな。

十代の奴、どんだけドロー運が良いんだ？

もしかするとあいつのドロー運は師匠達に匹敵するかもな。

「行くぜ！『スチームロイド』で『水魔神―スーガ』に攻撃！」

「ぬぅ！『水魔神―スーガ』の効果発動！戦闘によるダメージを０にする！魔水障壁！」

『スチームロイド』が今度は水に流されて壁に激突した。哀れだな。

「今度は『フレイム・ウィングマン』で『水魔神―スーガ』に攻撃

！スカイスクレイパー・シュート！！」

「ぐぅ！『水魔神ースーガ』は既に効果を使ってしまっている！」

『フレイム・ウィングマン』が摩天楼の一番高い所に立ち、『スーガ』を見下ろす。

そして、『スーガ』目がけて飛び降りると、右腕から出した炎を身に纏った。

『スーガ』が迎撃しようと口から大量の水を出すが、『フレイム・ウィングマン』の炎が衰える事は無い。

炎の矢となった『フレイム・ウィングマン』が『スーガ』を貫いた。

「「ぬわぁあああ！！」」

迷・宮ペア
ＬＰ６５００→５９００

「更に『フレイム・ウィングマン』の効果発動！戦闘で破壊し墓地へ送ったモンスターの攻撃力分のダメージを相手に与える」

『スーガ』を貫いた後、姿が見えなかった『フレイム・ウィングマン』が床から出て来て、迷宮兄弟を燃やす。

「「ぐわぁあああ！！！」」

迷・宮ペア

ＬＰ５９００→３４００

「今度は『Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン』で『風魔神ーヒューガ』に攻撃！パワー・エッジ・アタック！」

『エッジマン』が『ヒューガ』が起こした暴風ごと『ヒューガ』を貫いた。

「ぐぅ！馬鹿な魔神が倒されるなど」

迷・宮ペア
ＬＰ３４００→３２００

「ターンエンドだ」

十代がエンド宣言した瞬間、周りの生徒から歓声が上がる。

まさかここまで圧倒的とはな……驚いたな。

迷・宮ペア
ＬＰ３２００
迷宮兄　手札１枚
迷宮弟　手札３枚

モンスター
無し

魔法・罠

伏せ　1

十代・翔ペア
ＬＰ７０００
十代　手札０
翔　手札３枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　エッジマン』
（攻撃力２６００）
『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』
（攻撃力２１００）
『スチームロイド』
（攻撃力２０００）

魔法・罠
『マシン・デベロッパー』
（永続魔法）
『摩天楼　―スカイスクレイパー―』
（フィールド魔法）

「弟よ！気を引き締めて掛かるぞ！」

「おうとも！兄者！」

「私のターン！ドロー！私はカードを１枚伏せて、弟が伏せた『天よりの宝札』を発動する！」

タッグパートナーが伏せたカードをお互いに活かして戦う。流石に

戦い慣れてるな。だが……十代が手札を大量に補充した。十代のターンが来れば、迷宮兄弟の負けだな。

「私は伏せていた『死者蘇生』を発動！蘇れ『水魔神』よ！更に『早すぎた埋葬』を発動！ライフを８００支払い再び舞い戻れ！『風魔神』よ！」

迷・宮ペア
ＬＰ３２００→２４００

床を突き破り『スーガ』と『ヒューガ』が復活した。

『水魔神ースーガ』
レベル７　水属性
水族・効果
攻撃力２５００
守備力２４００

『風魔神ーヒューガ』
レベル７　風属性
魔法使い族・効果
攻撃力２４００
守備力２２００

「更に『地雷蜘蛛』を召喚して、魔法カード『生け贄人形』を発動！『地雷蜘蛛』を生け贄に手札から『雷魔神ーサンガ』を特殊召喚する！」

迷宮兄弟の場に顔に『雷』と刻まれた魔神が現れる。ってその引き

の良さどうなってんの！？

「『雷魔神』、『水魔神』、『風魔神』を生け贄に手札の『ゲート・ガーディアン』を特殊召喚！出でよ！『ゲート・ガーディアン』！」

３魔神が『スーガ』の上に『ヒューガ』が、『ヒューガ』の上に『サンガ』が乗っただけのモンスターになる。

『ゲート・ガーディアン』
レベル１１　闇属性
戦士族・効果
攻撃力３７５０
守備力３４００

今更だが、何故乗っただけで強くなるんだろうか？『竜騎士ガイア』しかり『究極竜騎士（マスター・オブ・ドラゴンナイト）』しかり。

そういえば、『暗黒騎士ガイア』って始めから馬に乗ってるな。馬から降りたらどうなるんだろうか？

……今はどうでも良いか。

「バトル！『ゲート・ガーディアン』で『スチームロイド』に攻撃！魔神衝撃波！！」

「うわぁあああ！！」

十代・翔ペア

ＬＰ７０００→４７５０

『ゲート・ガーディアン』が放った衝撃波によって『スチームロイド』が破壊される。うーむ、雨にも負けず風にも負けなかったが、衝撃波には負けたか。

「でも『スチームロイド』が破壊された事により、『マシン・デベロッパー』にジャンクカウンターが２つ乗るぜ！」

『マシン・デベロッパー』
カウンター０→２

「フッ！構わぬ。ターンエンド……だが！私はエンドフェイズに速攻魔法『闇からの奇襲』を発動！再び我等のバトルフェイズとなる！」

「何だと！？」

「更にこのターン戦闘を行ったモンスターはもう１度攻撃できる！『ゲート・ガーディアン』で『Ｅ・ＨＥＲＯ　フレイム・ウィングマン』に攻撃！魔神衝撃波！」

先程、『スチームロイド』を襲った衝撃波が今度は『フレイム・ウィングマン』を襲う。

「ぐわぁあああ！！」

十代・翔ペア

ＬＰ４７５０→３１００

「これで本当にターンエンドだ！」

『闇からの奇襲』（アニメ）

速攻魔法

効果

自分のターンのエンドフェイズ時に発動する事ができる。

エンドフェイズからバトルフェイズに戻す。

その後、このターン戦闘を行ったモンスターはもう１度攻撃を行える。

迷・宮ペア

ＬＰ２４００

迷宮兄　手札０

迷宮弟　手札３枚

モンスター

『ゲート・ガーディアン』

（攻撃力３７５０）

魔法・罠

無し

十代・翔ペア

ＬＰ３１００

十代　手札６枚

翔　手札３枚

モンスター
『E・HERO　エッジマン』
（攻撃力2600）

魔法・罠
『マシン・デベロッパー』
（永続魔法）カウンター2
『摩天楼　－スカイスクレイパー－』
（フィールド魔法）

「僕のターン！ドロー！」

ドローしたカードを見た翔の様子が変わる。

「翔！お前の引いたそのカードで、このデュエルの決着を付けようぜ！」

「アニキ……分かったよ！僕は魔法カード『パワー・ボンド』を発動！アニキの『E・HERO　エッジマン』と僕の手札に居る『ユーフォロイド』を手札融合！現れよ『ユーフォロイド・ファイター』！！！」

十代達の場に『エッジマン』がユーフォーに乗っただけのモンスターが現れる。

「『ユーフォロイド・ファイター』の元々の攻撃力・守備力は、融合素材となったモンスターの元々の攻撃力と同じになる！」

『ユーフォロイド・ファイター』
レベル１０　光属性
機械族・融合／効果
攻撃力？（３８００）
守備力？（３８００）

「攻撃力が……」

「『ゲート・ガーディアン』を上回っただと……」

「まだだ！『パワー・ボンド』で特殊召喚されたモンスターの元々の攻撃力は倍になる！更に『ユーフォロイド・ファイター』は機械族！『マシン・デベロッパー』の効果で攻撃力２００アップ！」

『ユーフォロイド・ファイター』
攻撃力３８００→７６００→７８００

「「何だとぉー！！」」

「バトル！『ユーフォロイド・ファイター』で『ゲート・ガーディアン』に攻撃！パワー・ロイド・アタァーク！！」

『エッジマン』が攻撃する時よりも明らかに早く的モンスター……『ゲート・ガーディアン』に接近し、そのまま『ヒューガ』の部分を貫く。

バランスを失った『ゲート・ガーディアン』はバラバラになって迷宮兄弟を下敷きにした。

「「ぐわぁあああ！！！」」

迷・宮ペア
LP2400↓－1650
辺りにデュエル終了を告げるブザーが鳴り響く。
「決まったぁー！！遊城　十代選手と丸藤　翔選手がクロノス教諭が用意したデュエリスト迷宮兄弟を降したぁー！！」
観客席から、十代コールと翔コールが起こる。
今、思ったが迷宮弟以外凄いドロー運だな。
「次の前田　隼人選手対刺客その3のデュエルは30分後。それまで休憩を挟みます！」
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
「2人とも凄かったわよ」
俺達が与えられた控え室に着いて5分くらいして、控え室に戻ってきた2人に明日香が言った。
「へへッ。まぁな」
「そういや、十代。最後の手札は何だったんだ？」
「ああ、え〜と確か『E－エマージェンシーコール』、『H－ヒートハート』、『R－ライトジャスティス』、『O－オーバーソウル』

、『ヒーローフラッシュ！！』、『天よりの宝札』だったな」

「……そうか」

どんなドロー運だよホント……

「次は隼人君だね」

「親父にも在学が認められたから、負ける訳にはいかないんだな」

「頑張れよ！」

さて、隼人の相手は一体誰になるのやら……

第１４話　迷と宮（後書き）

※今更ですが後書きの世界は本編とは違う世界なのでトリップ、憑依してない主人公もＴＦの事等、平気で喋ります。

貴志
「迷宮弟を除いて、皆チートドローだったな」

鷹
「いや、迷宮弟も少しはチートドローだと思うよ。王国編では普通に兄に続いて魔神引いてたし」

貴志
「だが、十代や迷宮兄には遠く及ばないな」

鷹
「否定はしない。それでは今日の最強カードは」

鷹・貴志
「これだ！」

『ユーフォロイド・ファイター』
レベル１０　光属性
機械族・融合／効果
『ユーフォロイド』＋戦士族モンスター
このモンスターの融合召喚は、上記のカードでしか行うない。このカードの元々の攻撃力・守備力は、融合素材にしたモンスター２体の元々の攻撃力を合計した数値になる。

貴志
「伝統の乗っただけ融合した奴だな」

鷹
「何故乗っただけで強くなるのか？それは誰にも分からない」

貴志
「冗談抜きで思ったが、『暗黒騎士ガイア』とかって落馬したらどうなるんだろうな」

鷹
「そんな事もあろうかと考えてみた。疾風の方で」

『疾風の騎士ガイア』
レベル４　闇属性
戦士族・効果
攻撃力１８００
守備力１５００
効果
相手フィールド上にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在していない場合、このカードは手札から特殊召喚する事ができる。

鷹
「『巨大戦艦　アサルト・コア』総ステータスを一緒に『疾風の暗黒騎士ガイア』と同じく闇属性にしたんだけど、どうだろうか？」

貴志
「どうだろうか？と言われてもな。正直に言って判断しずらい」

鷹
「まぁ自分の作品に使うオリカを作るのは初めてで、自信は全く無い。オリカのマルスはステータスは決まってるけど、効果の一部はまだ決め切れてないし」

貴志
「優柔不断な奴め」

鷹
「名前は直ぐに決まったけどね。ゲームから取っただけだけど。あっ、そろそろ時間だ」

鷹・貴志
「「それでは感想やアドバイス、ミスの指摘等、お待ちしております！！」」

鷹
「試しに作ったオリカ『疾風の騎士ガイア』についての感想もお願いします！」

第１５話　海の男（前書き）

制裁デュエル第２戦目です。タイトルで相手バレバレですけど。

第15話　海の男

「さて、隼人の相手は誰になるんだろうな？」

控え室から、観客席に戻った所で疑問を口にした。

「十代達の相手が伝説のデュエリストだったからな。おそらく、残る三人も……」

「でも、こう言うのは何だけど学園側に呼べるような予算はあるのかしら？」

「確かに……」

明日香の疑問は尤もだ。迷宮兄弟も暇じゃない……ファイトマネーは多分出る。それは残る三人も同じ筈だ。

一体何処から金は出てるんだ？

――――――――――――――――童実野町　KC本社ビル

「ハックション！！」

「瀬人様。大丈夫ですか？」

「大丈夫だ。心配するなキサラ」

――――――――――――――――

「そういえば、貴志や明日香はデッキの方は大丈夫なのかよ？」

「昨日少しカードを入れ替えたが、大丈夫だ」

「私はあのカードを使える用に改造したぐらいよ」

「あ～あのカードか」

3日前に皆でカードを買った時、十代は『ジャンク・ディーラー』と『天よりの宝札』を。明日香は新たな切り札を隼人や翔もかなり良いカードを手に入れたもんな～特に明日香や隼人は俺が持ってないカードを……結構羨ましいな。

「それでは！制裁デュエル第2戦を開始します！」

司会進行役の言葉に周りの生徒が騒ぎだす。

「チームアカデミアからは主力がコアラの獣使い、前田隼人選手～！」

隼人がデュエル場に入場してくる。

意外にも緊張はしてないみたいだ。

「対するクロノス教諭の刺客はこの男だ～！」

「おう！やっとワシの番か！？」

隼人が入場してきた入り口の反対側から入場したのは、先がとんが

ってる髪型と日に焼けている肌が特徴的なデュエリスト梶木漁太さんだった。

「な、なんと！3人目のクロノス教諭の刺客はかつてデュエリストキングダムで武藤遊戯と闘い、バトルシティでは城之内克也とも闘った伝説のデュエリスト梶木漁太だぁー！！」

そして元全日本第3位のデュエリストでもある……しかし、未だにあの人が羽蛾か竜崎さんに負けたのは、信じられないんだよな。

「よ、宜しくなんだな」

「こちらこそじゃ。あぁ、それとそがいに緊張せぬようにの。緊張しょったら出せる力も出せんからのぅ」

普通に対戦相手を気遣ってるよ……流石城之内さんに真のデュエリストと言われた人だな。

「それでは制裁デュエル第2戦開始ィー！！！」

「デュエルじゃ！」
「デュエルなんだな」

梶木
ＬＰ４０００

隼人
ＬＰ４０００

「先攻は貰う！ドローじゃ！ワシは手札からフィールド魔法『伝説の都　アトランティス』を発動じゃ！」

デュエル場が海底神殿と思わしき場所に変わった。

「このカードは『海』としても扱い、このカードが有る限り、手札とフィールド上の水属性モンスターはレベルが１つ少なくなるぜよ！更にフィールド上の水属性モンスターの攻撃力と守備力は２００ポイントアップじゃ！そしてワシはレベル４となった『ジェノサイドキングサーモン』を攻撃表示で召喚！これでターンエンドじゃ」

梶木さんの場に巨大なシャケが現れる。

『ジェノサイドキングサーモン』
レベル５（４）　水属性
魚族　通常
攻撃力２４００（２６００）
守備力１０００（１２００）

梶木
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『ジェノサイドキングサーモン』
（攻撃力２６００）

魔法・罠

『伝説の都　アトランティス』
（フィールド魔法）

「お、俺のターン、ドロー！俺は魔法カード『天使の施し』を発動するんだな。効果でカードを3枚ドローして2枚捨てる。更に『巨大ネズミ』を守備表示で召喚。カードを1枚伏せてターンエンドなんだな」

隼人の場に名の通り、巨大なネズミが現れる。

『巨大ネズミ』
レベル４　地属性
獣族・効果
攻撃力１４００
守備力１４５０

梶木
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『ジェノサイドキングサーモン』
（攻撃力２６００）

魔法・罠
『伝説の都　アトランティス』
（フィールド魔法）

隼人

ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『巨大ネズミ』

（守備力１４５０）

魔法・罠
伏せ　１

「『巨大ネズミ』で時間を稼いで、策を講じるつもりか」

「それもあるだろうが、隼人の手札にあのカードがあれば、反撃もできる」

そしておそらくあるな。『天使の施し』を使い、わざわざ攻撃を誘うかの様に『巨大ネズミ』をセットせずに、表側守備表示で出したんだから。

「ワシのターン！ドローじゃ！ワシは『ガガギゴ』を攻撃表示で召喚するぜよ！」

梶木さんの場に人型トカゲが現れた。

『ガガギゴ』
レベル４（３）　水属性
爬虫類族　通常
攻撃力１８５０（２０５０）
守備力１０００（１２００）

「バトルじゃ！『ガガギゴ』で『巨大ネズミ』を攻撃するぜよ！」

『巨大ネズミ』が『ガガギゴ』によって蹴り倒される。

「自分の場に存在する獣族モンスターが戦闘によって破壊され、墓地に送られたこの瞬間、墓地の『不幸を告げる黒猫』と『魂虎（ソウル・タイガー）』を除外して手札の『森の狩人　イエロー・パブーン』を特殊召喚するんだな。更に『巨大ネズミ』の効果も発動。デッキから2体目の『巨大ネズミ』を特殊召喚するんだな」

隼人の場に再び『巨大ネズミ』が現れ、その後弓をつがえた黄色の獣が現れる。

『巨大ネズミ』
レベル４　地属性
獣族・効果
攻撃力１４００
守備力１４５０

『森の狩人　イエロー・パブーン』

レベル７　地属性
獣族・効果
攻撃力２６００
守備力１８００

「馬鹿な！いつの間……さっきの『天使の施し』ん時か」

「そうなんだな」

「くっ、じゃが2体目の『巨大ネズミ』は攻撃表示じゃ！『ジェノサイドキングサーモン』で2体目の『巨大ネズミ』に攻撃するぜよ！」

『ジェノサイドキングサーモン』が『巨大ネズミ』に食らい付き、破壊した。

隼人
ＬＰ４０００→２８００

シャケがネズミを食べる……なんかシュールだ。

「ぐぅ！『巨大ネズミ』の効果を発動！デッキから『コアラッコ』を特殊召喚するんだな」

隼人の場に頭はコアラ、体はラッコのモンスターが現れる。

『コアラッコ』
レベル２　地属性
獣族・効果
攻撃力１００
守備力１６００

「カードを1枚伏せてターンエンドじゃ」

流石に『イエロー・パブーン』は予想外だったのか梶木さんの表情に焦りが見える。

梶木
ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『ジェノサイドキングサーモン』
（攻撃力２６００）
『ガガギゴ』
（攻撃力２０５０）

魔法・罠
『伝説の都　アトランティス』
（フィールド魔法）
伏せ　１

隼人
ＬＰ２８００　手札３枚

モンスター
『森の狩人　イエロー・パブーン』
（攻撃力２６００）
『コアラッコ』
（攻撃力１００）

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー！俺は『強欲な壺』を発動してカードを２枚

ドロー！そして、『ラッココアラ』を守備表示で召喚するんだな」

隼人の場に頭はラッコ、体はコアラのモンスターが現れた。

『ラッココアラ』
レベル２（１）　水属性
獣族・効果
攻撃力１２００（１４００）
守備力１００（３００）

「『ラッココアラ』の効果発動！このカード以外の獣族モンスターが自分フィールド上に表側表示で存在する場合、自分フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の攻撃力をエンドフェイズ時まで１０００ポイントアップさせるんだな。俺は『森の狩人　イエロー・パブーン』を選択するんだな」

『森の狩人　イエロー・パブーン』
攻撃力２６００→３６００

「攻撃力３６００じゃと！」

「更に『コアラッコ』の効果も発動！こいつの効果の発動条件は『ラッココアラ』と同じなんだな。でもこいつは相手フィールド上に存在するモンスター１体の攻撃力をエンドフェイズ時まで０にできるんだな。俺は『ジェノサイドキングサーモン』を選択するんだな」

『ジェノサイドキングサーモン』
攻撃力２６００→０

「すげぇぜ隼人！」

「確かにこれなら大ダメージを与えられるな」

三沢がああ言ってるが、そううまく行くかな？

「バトル！『森の狩人　イエロー・パブーン』で『ジェノサイドキングサーモン』に攻撃するんだな！」

「ワシはこの瞬間、永続罠『竜巻海流壁（トルネード・ウォール）』を発動！『海』が表側表示で存在する限り、攻撃モンスターからのダメージは０になるぜよ！フィールド上には『海』として扱う『伝説の都　アトランティス』がある。よってワシのダメージは０じゃ！」

『イエロー・パブーン』が放った矢が『ジェノサイドキングサーモン』を貫き、そのまま梶木さんに刺さるかと思いきや、竜巻の壁に阻まれる。

「どうじゃ！ワシのダメージは０ぜよ！」

「でもモンスターは破壊できるんだな。リバース・カードオープン『キャトルミューティレーション』！自分フィールド上の獣族モンスター１体を手札に戻し、手札から同じレベルの獣族モンスターを特殊召喚するんだな。出でよ『ビッグ・コアラ』！」

隼人の場に居た『イエロー・パブーン』が姿を消して代わりに『コアラッコ』や『ラッコアラ』の数倍はあろうかという巨大なコアラが現れた。

『ビッグ・コアラ』
レベル７　地属性

獣族　通常
攻撃力２７００
守備力２０００

「うまい！『森の狩人　イエロー・パブーン』が手札にあるから、相手は迂闊にモンスターを攻撃できない」

「それにバトルフェイズ中の召喚だから、追撃もできるわ」

「てか、よくもまぁそんなに上級モンスターをぽんぽんと出せるな」

「それ、貴志君が言えるんスか……」

「……」

まさか、翔にツッコミされるとは。

「『ビッグ・コアラ』で『ガガギゴ』に攻撃！」

『ビッグ・コアラ』が振り下ろした拳をなんとか受けとめていた『ガガギゴ』だが、耐え切れずに押しつぶされた。

「『コアラッコ』を守備表示にしてターンエンド」

梶木
ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター

無し

魔法・罠
『伝説の都　アトランティス』
（フィールド魔法）
『竜巻海流壁』
（永続罠）

隼人
ＬＰ２８００　手札４枚

モンスター
『ビッグ・コアラ』
（攻撃力２７００）
『コアラッコ』
（守備力１６００）
『ラッコアラ』
（守備力１００）

魔法・罠
無し

「ワシのターンドロー！ワシは『二重召喚』を発動！これでワシはこのターン２回通常召喚できるぜよ！ワシは『コダロス』を攻撃表示で召喚！更に『コダロス』を生け贄にしてレベル６となっている『海竜（リバイアドラゴン）ダイダロス』を召喚するぜよ！」

いくらか小ぶりの竜が現れたと思ったら、直ぐに消えて代わりに３倍の大きさはあるであろう巨大な海竜が現れた。

『コダロス』
レベル４（３）　水属性
海竜族・効果
攻撃力１４００（１６００）
守備力１２００（１４００）

『海竜ーダイダロス』
レベル７（６）　水属性
海竜族・効果
攻撃力２６００（２８００）
守備力１５００（１７００）

「ワシはワシの場にある『海』として扱う『伝説の都　アトランティス』を墓地に送って、『海竜ーダイダロス』の効果を発動するぜよ！自分フィールド上に存在する『海』を墓地に送る事で、このカード以外のフィールド上の全てのカードを破壊する！ダイダル・ウェーブ！」

『ダイダロス』が起こした津波によって、隼人の場に居た3体のコアラが流される。

「バトルじゃ！『海竜ーダイダロス』でダイレクトアタックするぜよ！」

「うわぁあああ！」

先程、コアラ達を襲った津波が今度は隼人を襲い、ライフを削る。

隼人
ＬＰ２８００→２００
「ターンエンドじゃ」
梶木
ＬＰ４０００　手札１枚
モンスター
『海竜ー ダイダロス』
（攻撃力２６００）
魔法・罠
無し
隼人
ＬＰ２００　手札４枚
モンスター・魔法・罠
無し

隼人のライフは残り２００。だが、梶木さんを守っていた『竜巻海流壁』は消えている。攻めるなら今がチャンスだな。

「俺のターン、ドローなんだな！俺は魔法カード『黙する死者』を発動して、墓地の『ビッグ・コアラ』を守備表示で特殊召喚！更に『融合』を発動！手札の『デス・カンガルー』と場の『ビッグ・コアラ』を融合！現れろ『マスター・オブ・ＯＺ』！！」

隼人の場の『ビッグ・コアラ』とボクシンググローブを装着したカンガルー……『デス・カンガルー』が融合してボクシンググローブを装着したコアラが現れた。

『ビッグ・コアラ』
レベル７　地属性
獣族　通常
攻撃力２７００
守備力２０００

『マスター・オブ・ＯＺ』
レベル９　地属性
獣族・融合
攻撃力４２００
守備力３７００

「こ、ここでそんなモンスターを出すんか」

梶木さんの表情が若干引きつっている。まぁ場が０の状態からだもんな～

「バトル！『マスター・オブ・ＯＺ』で『海竜－ダイダロス』に攻撃！エアーズ・ロッキー！！」

『マスター・オブ・ＯＺ』が『ダイダロス』の尾を掴み、地面に叩きつけて破壊した。

「グッ、ぬぉおおお！！」

梶木
ＬＰ４０００→２４００
「ターンエンドなんだな」

梶木
ＬＰ２４００　手札１枚
モンスター・魔法・罠
無し

隼人
ＬＰ２００　手札２枚
モンスター
『マスター・オブＯＺ』
（攻撃力４２００）
魔法・罠
無し

「ワシのターン！ドローじゃ！このカードが前のターンに来とったならのぅ……ワシはこのままターンエンドじゃ」

梶木さんは何もせずにターンを終了した。出せるカードが無かったのか？

「俺のターン、ドロー！そして、バトル！『マスター・オブ・ＯＺ』でダイレクトアタック！」

「ぐわぁあああ！！」

梶木
ＬＰ２４００→０

「決まったぁー！！制裁デュエル第２戦もチームアカデミアの勝利に終わったぁー！！！！」

司会進行役の言葉に観客席の生徒が歓声を上げる。

「次のデュエルは３０分後、アカデミアの女王。天上院明日香対クロノス教諭の刺客のデュエルだぁー！！！！」

「「女王？」」

「周りが勝手に言ってるだけよ！私はもう行くわ」

十代と翔の疑問に明日香が顔を赤くして否定して控え室の方に向っていく。

俺自身、カードプロフェッサー時代に色々、異名を付けられたから分かるが、正直恥ずかしいもんな。

さて、それはさておき４人目の刺客は誰なんだろうな？

第１５話　海の男（後書き）

貴志
「今日の最強カードはこれだな」

『マスター・オブ・ＯＺ』
レベル９　地属性
獣族・融合
攻撃力４２００
守備力３７００

『ビッグ・コアラ』＋『デス・カンガルー』

鷹
「『青眼の究極竜』を除けば、効果がないモンスターでは攻撃力トップだな」

貴志
「まぁそれは良いとして、最後のターン何故梶木さんは何もしなかったんだ？」

鷹
「簡単に言えば、犠牲だな。いつもいつも起死回生のカードは引けねぇぞという」

貴志
「お前なぁ……」

鷹

「それはさておき、制裁デュエルも半分が終わりました。次の明日香の相手ですが、おそらく殆どの人の意表を突けると思ってるので、是非お楽しみに」

鷹・貴志

「感想やアドバイス、ミスの指摘等、お待ちしております！」

第１６話　Ｍ・ＨＥＲＯ　Ｇ－７７（前書き）

多分、この人が出てくるのは予想外でしょう……ではどうぞ！

アニメとかのオリカを出し過ぎたせいか、長さが過去最長に……

第16話　M・HERO　G－77

「さぁ制裁デュエルも後2試合を残すのみとなりました！次はどのようなデュエルが繰り広げられるのでしょうか！」

司会進行役の言葉に場内は歓声で溢れかえる。

「次の相手は一体誰なんだろうな」

「さっきの梶木さんから連想すると、手堅い所で明日香の相手がダイナソー竜崎。俺の相手がインセクター羽蛾だろうな」

正直に言えば、インセクター羽蛾が相手なら、かなり楽なんだが。

「それでは、チームアカデミアからはこの人！アカデミアの女王。天上院　明日香選手だぁー！！」

司会進行役がそう言って明日香がデュエル場に入場した瞬間、十代達が入場した時……いや、この制裁デュエル内で今まで起こった歓声とは比べ物にならない程の大歓声が起こった。

「何なんだ一体？」

「凄い歓声なんだな」

「天上院君はこのデュエルアカデミア内で1、2位を争う程の人気を誇っているからな」

「ああ、成る程」

三沢の答えに思わず納得する。確かにデュエルの実力が抜きん出ており、本人の人柄も良くて容姿もモデル並……人気が出ない方がおかしいか。

それでも入学してまだ日が浅いのに、これ程の人気が出るものなのか？

「皆さん。お静かに！」

司会進行役が声をあげる。流石にこのままでは、支障が出ると思ったのだろう。

「それでは、天上院　明日香選手とデュエルするデュエリストに入場してもらいましょう！どうぞ！」

司会進行役の言葉の後に入場してきたのは俺が予想したダイナソー竜崎でもインセクター羽蛾でも無く、頭に『6』と書かれたバンダナをして、目元と口元をマスクで隠しているデュエリストだった。

ってちょっと待て！まさかこの人は……

「な、なんと天上院　明日香選手の相手はＫＣグランプリに出場し、伝説のデュエリスト城之内　克也と互角のデュエルを繰り広げたデュエリスト。マスク・ザ・ロックだぁー！！！」

顔を隠してるけど、あれって双六さん……だよな。

双六さん……一体何やってんすか……

「そんなに凄いデュエリストなのか？」

「……さっき言われた通り、ＫＣグランプリ出場者で召喚条件が極めて難しい『古代竜－エンシェント・ドラゴン』というモンスターが切り札のデュエリストだ」

「へ～貴志詳しいな」

「デュエルを見たからな」

「確かＫＣグランプリのデュエル内容が収録されたＤＶＤ等はデュエリストキングダムの物よりも貴重な物だった筈……まさか持っているのか！」

三沢が身を乗り出して聞いてくる。ちょっと怖いんだが。

「……生で見ただけだ」

「「「「はぁ！！！」」」」

十代、三沢、翔、隼人の声が見事に重なった。

「ＫＣグランプリはアメリカで開かれたんだぞ！」

「デュエルを見る為にアメリカまで行ったんスか！？」

「アメリカまで行った？……ああ、そういや言ってなかったっけ。俺、産まれは日本だけど、育ちはアメリカなんだよ」

「「「「はぁ！！！」」」」

再び４人の声が見事に重なる。ただ、さっきよりも声が大きい為、

周りの人に睨まれた。

「お前等少しは静かにしろって。おっ、そろそろ始まるみたいだな」

デュエル場の方を見ると、明日香と双六さんがデュエルリングの中央で互いのデッキをシャッフルしていた。

今更だが、今までのデュエルでデッキをシャッフルしてたっけ？してたよな多分……

「さぁそれでは制裁デュエル第３戦開始ィー！！！」

「「デュエル！！」」

明日香
ＬＰ４０００

双六
ＬＰ４０００

「先攻はワシが貰う。ドロー！ワシはモンスターをセット、カードを１枚伏せてターンエンドじゃ」

双六
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター

伏せ　１
魔法・罠
伏せ　１

「私のターン、ドロー！私は魔法カード『増援』を発動して、デッキから『聖騎士の槍持ち』を手札に加えるわ。更に『花騎士団の駿馬』を攻撃表示で召喚！」

明日香の場に色々な装飾がされた馬が現れる。

『花騎士団の駿馬』
レベル３　風属性
獣族・効果
攻撃力４００
守備力８００

「『花騎士団の駿馬』は召喚に成功した時、デッキから『聖騎士の槍持ち』か『融合』を１枚手札に加える事ができるわ。私は『融合』を手札に加えて発動！手札の『聖騎士の槍持ち』と場の『花騎士団の駿馬』を融合！来なさい『ケンタウルミナ』！」

明日香の場に馬と女性が一体となったモンスターが現れた。

『ケンタウルミナ』
レベル６　光属性
獣戦士族・融合／効果
攻撃力２２００

守備力１６００

３日前に明日香が当てたカードの一部か。出るの早いな。

「バトル！『ケンタウルミナ』で守備モンスターに攻撃！」

「ならば、この瞬間リバース・カードオープン『モンスターＢＯＸ』！」

「そうはさせないわ！『ケンタウルミナ』のモンスター効果発動！１ターンに１度、自分のターンに相手が罠カードを発動した時、その場合を無効にしそのカードをセットする事ができる！私は『モンスターＢＯＸ』の効果を無効にしセットさせるわ」

「なんじゃと！？」

モグラ叩きゲームに使われそうな箱が現れたが、『ケンタウルミナ』に曳かれてまた伏せ状態になった。

そのまま、『ケンタウルミナ』が右手に持つ剣でセットされていたモンスターを切り捨てた。

破壊されたモンスターは『アステカの石像』か。危なかったな。

「私はカードを１枚伏せてターンエンドよ」

明日香
ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター
『ケンタウルミナ』
（攻撃力２２００）

魔法・罠
伏せ　１

双六
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　１

「ワシのターン、ドロー！ワシは永続魔法『悪夢の蜃気楼』を発動！そして、モンスターをセット、カードを2枚セットしてターンエンド！」

明日香
ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター
『ケンタウルミナ』
（攻撃力２２００）

魔法・罠
伏せ　1

双六
ＬＰ４０００　手札１枚

モンスター
伏せ　1

魔法・罠
『悪夢の蜃気楼』
（永続魔法）
伏せ　3

伏せカードが3枚……1枚は『モンスターＢＯＸ』そして、後2枚の内1枚は十中八九『悪夢の蜃気楼』のデメリットを打ち消す為のカードだろうな。

「私のターン、ドロー！」

「嬢ちゃんのスタンバイフェイズ時に『悪夢の蜃気楼』の効果発動！ワシは手札が4枚になるようドローさせてもらう。じゃが次のワシのターンのスタンバイフェイズ時に、このカードの効果でドローした枚数分だけカードを手札から捨てねばならん。そこでリバース・カードオープン！『ダブルサイクロン』！」

「っ！『ケンタウルミナ』の効果発動！『ダブルサイクロン』の効

果を無効にして、再びセットさせるわ」

「ほっほっほ。ならばもう1枚のリバース・カードオープン！『非常食』！ワシの場の『悪夢の蜃気楼』と『ダブルサイクロン』、『モンスターＢＯＸ』を墓地に送って３０００ライフポイント回復じゃ」

「何ですって！」

双六
ＬＰ４０００→７０００

両方とも『悪夢の蜃気楼』を消すカードだったか……そして、ライフ差も付けられた。これは少しヤバいな。

「私は『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロー！そして、『エトワール・サイバー』を攻撃表示で召喚！」

明日香の場にプリマのような姿をしたモンスターが現れた。

『エトワール・サイバー』
レベル４　地属性
戦士族・効果
攻撃力１２００
守備力１６００

「バトル！『ケンタウルミナ』で守備モンスターに攻撃！」

『ケンタウルミナ』が守備モンスターを剣で両断する。
守備モンスターは玉座のような物に座ったミイラだった。
「『ポイズンマミー』のリバース効果発動！嬢ちゃんに５００ポイントのダメージを与える」
「なっ！くぅ！」
地中から出てきた包帯が明日香に絡み付き、ダメージを与える。
ＬＰ
４０００→３５００
「でも壁モンスターはもう居ないわ！『エトワール・サイバー』でダイレクトアタック！『エトワール・サイバー』は相手プレイヤーにダイレクトアタックする場合、ダメージステップの間攻撃力が５００アップするわ！」
『エトワール・サイバー』
攻撃力１２００→１７００
「なんじゃｔぐわぁああ！」
『エトワール・サイバー』が驚く双六さんを意に介さずに蹴り飛ばす。
双六
ＬＰ７０００→５３００

『エトワール・サイバー』
攻撃力１７００→１２００

「カードを１枚伏せてターンエンドよ」

明日香
ＬＰ３５００　手札２枚

モンスター
『ケンタウルミナ』
（攻撃力２２００）
『エトワール・サイバー』
（攻撃力１２００）

魔法・罠
伏せ　２

双六
ＬＰ５３００　手札４枚

モンスター・魔法・罠
無し

「ワシのターンじゃ。ドロー！ワシは嬢ちゃんの『ケンタウルミナ』を対象に魔法カード『クロス・ソウル』を発動！そして、嬢ちゃんの『ケンタウルミナ』を生け贄に『古の巨人』を召喚する！」

明日香の場に居た『ケンタウルミナ』が消え、双六さんの場に髪型

（？）がアフロの石でできた巨人が現れた。大きさは双六さんの３倍ぐらいだろうか。

『古の巨人』（アニメ）
レベル５　地属性
岩石族・効果
攻撃力２２００
守備力１１００
効果
このカードが表側表示で存在する時にこのターン攻撃を行ってない場合、このカードのコントローラーはエンドフェイズ時に３００ポイントのダメージを受ける。

「更に永続魔法『古の鍵』を発動！このカードの効果により、『石の巨人トークン』２体を攻撃表示で特殊召喚！」

双六さんの場に『古の巨人』よりかはいくらか小さい石の巨人が２体現れた。

『古の鍵』（アニメ）
永続魔法
効果
このカードの発動時、『石の巨人トークン』岩石族・地属性・レベル３・攻撃力４００／守備力２０００
２体を攻撃表示で特殊召喚する。
このトークンは生け贄召喚のために生け贄にする事はできない。
『石の巨人トークン』がこのターン攻撃宣言を行ってない場合そのモンスターのコントローラーは５００ポイントのダメージを受ける。
このカードが存在する時、『石の巨人トークン』が表示形式の変更

を2回行った場合、そのモンスター2体を生け贄にする事で発動する事ができる。
このカードを墓地へ送る事でデッキ・手札・墓地から『古の扉』1枚を発動する。

「『クロス・ソウル』を発動したターン、ワシはバトルフェイズを行えん。じゃが、ワシはカードを1枚伏せて、魔法カード『命削りの宝札』を発動！手札が5枚になるようにドロー！ふむ……更にカードを1枚伏せてターンエンドじゃ」

双六さんがエンド宣言した瞬間、『古の巨人』、『石の巨人トークン』が双六さんに襲い掛かる。

「アイタタタタ」

双六
ＬＰ５３００→４０００

明日香
ＬＰ３５００　手札2枚

モンスター
『エトワール・サイバー』
（攻撃力１２００）

魔法・罠
伏せ　2

双六
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『古の巨人』
（攻撃力２２００）
『石の巨人トークン』
（攻撃力４００）
『石の巨人トークン』
（攻撃力４００）

魔法・罠
『古の鍵』
（永続魔法）
伏せ　２

「あれ？何で今ライフが減ったんだ？」

「『古の巨人』と『石の巨人トークン』は攻撃を行わなかった場合、そのターンのエンドフェイズ時にコントローラーはダメージを受けるんだよ」

「何でそんなカードを使うんスか？」

「切り札を出すための布石だな」

これで双六さんは後3枚……いや、実質2枚のカードを揃えれば切り札を出せる。さて、明日香はどう闘う？

「私のターン、ドロー！魔法カード『天使の施し』を発動！カードを3枚ドローして2枚捨てる。（『古の巨人』に『古の鍵』。おそらくあのデッキのキーカードと見て間違いないわね。なら！）速攻魔法『サイクロン』を発動！私は『古の鍵』を破壊するわ」

「そうはさせん！カウンター罠『魔宮の賄賂』！『サイクロン』の発動を無効にし破壊じゃ！」

「でも私は『魔宮の賄賂』の効果でカードを1枚ドローするわ。更に『埋葬呪文の宝札』を発動！墓地の『強欲な壺』『天使の施し』『サイクロン』をゲームから除外して、カードを2枚ドロー！そして、『聖騎士ジャンヌ』を攻撃表示で召喚するわ」

明日香の場に白銀の鎧を纏った戦士が現れた。

『聖騎士ジャンヌ』
レベル４　光属性
戦士族・効果
攻撃力１９００
守備力１３００

「『聖騎士ジャンヌ』で『石の巨人トークン』に攻撃！」

「そうはいかん。リバース・カードオープン『重力解除』！フィールド場に表側表示で存在するモンスターの表示形式を変更じゃ」

フィールド場のモンスターが浮き上がり、皆守備態勢になった。

『古の巨人』

（守備力１１００）
『石の巨人』
（守備力２０００）
『石の巨人』

（守備力２０００）
『エトワール・サイバー』
（守備力１６００）
『聖騎士ジャンヌ』
（守備力１３００）

「くっ、ターンエンドよ」

明日香
ＬＰ３５００　手札３枚

モンスター
『エトワール・サイバー』
（守備力１６００）
『聖騎士ジャンヌ』
（守備力１３００）

魔法・罠
伏せ　２

双六
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター

『古の巨人』
（攻撃力２２００）
『石の巨人トークン』
（守備力２０００）
『石の巨人トークン』
（守備力２０００）

魔法・罠
『古の鍵』
（永続魔法）

「ワシのターン、ドロー！ワシは『強欲な壺』を発動！カードを２枚ドロー！そして、『石の巨人トークン』２体の表示形式を変更する！」

『石の巨人トークン』
（攻撃力４００）
『石の巨人トークン』
（攻撃力４００）

「表示形式の変更を２回行った『石の巨人トークン』２体を生け贄にして、『古の鍵』の効果を発動！このカードを墓地に送りデッキから『古の扉』を発動！そして、手札から永続魔法『古の書物』を発動！デッキの１番上のカードと手札のカードを入れ換える。更にフィールド魔法『古の都－エンシェント・シティー』と永続魔法『フィールドバリア』を発動する！」

デュエル場に古代遺跡のようなものが建つ。

『古の扉』（アニメ）
永続魔法
効果
このカードは『古の鍵』の効果でのみ発動する。

『古の書物』（アニメ）
永続魔法
効果
デッキからカードを1枚ドローし、手札からドローしたカード以外のカード1枚をデッキの上に置く。
自分のスタンバイフェイズ時に手札を1枚墓地に捨てる。捨てなかった場合、このカードを破壊する。

『古の都ー エンシェントシティー』（アニメ）
フィールド魔法
効果
自分フィールド場に存在する『古の扉』『古の巨人』『古の書物』を1枚ずつ墓地へ送る事で、デッキ・手札・墓地から『古代竜ー エンシェント・ドラゴン』を1体選択して特殊召喚する。

このカードが自分フィールド上に存在する限り、『古代竜ー エンシェント・ドラゴン』のコントローラーは『古代竜ー エンシェント・ドラゴン』が破壊されたターンのエンドフェイズ時に『古の竜ー エンシェント・ドラゴン』を特殊召喚する。

「『古の扉』『古の巨人』『古の書物』揃いし時、都に眠りし伝説の竜が蘇る！ワシは『古の都ー エンシェントシティー』の効果を発動！『古の扉』『古の巨人』『古の書物』を1枚ずつ墓地へ送り、

デッキから『古代竜ーエンシェント・ドラゴン』を特殊召喚する！」

双六さんの口上の後、双六さんの後ろに現われていた遺跡の扉が開きその扉から1体の竜が姿を現した。

『古代竜ーエンシェント・ドラゴン』（アニメ）
レベル８　闇属性
ドラゴン族・効果
攻撃力２８００
守備力２０００
効果
このカードは通常召喚できない。
『古の都ーエンシェント・シティー』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する。

「魔法カード『スタンピング・クラッシュ』を発動！ワシから見て嬢ちゃんの左側のカードを破壊じゃ」

「キャッ！」

明日香
ＬＰ３５００→３０００

竜の足によって明日香の伏せていた『ドゥーブルパッセ』が破壊され、明日香にダメージを与えた。

「バトルじゃ！『古代竜ーエンシェント・ドラゴン』で『聖騎士ジャンヌ』に攻撃！」

「トラップ発動！『聖なるバリアー ミラーフォース ー』これで『エンシェント・ドラゴン』は破壊されるわ！」

『エンシェント・ドラゴン』が吐き出した火球が薄い膜のような物に跳ね返され、『エンシェント・ドラゴン』に直撃し、『エンシェント・ドラゴン』は破壊される。

「やったぜ明日香！」

「いや、これじゃあ完全に倒せない」

「どういう事なんだな？」

「見れば分かるさ」

「ほっほっほ。ワシはカードを2枚伏せてターンエンドじゃ」

双六さんがエンド宣言した瞬間、再び遺跡の扉が開き『エンシェント・ドラゴン』が現れる。

『古代竜ーエンシェント・ドラゴン』
レベル８　闇属性
ドラゴン族・効果
攻撃力２８００
守備力２０００

「これは一体……」

「『古の都ーエンシェント・シティー』がある限り『古代竜ーエン

シェント・ドラゴン』は破壊されたターンのエンドフェイズ時にフィールド上に特殊召喚されるんじゃよ」

「何てカードなの……」

明日香
ＬＰ３０００　手札３枚

モンスター
『エトワール・サイバー』
（守備力１６００）
『聖騎士ジャンヌ』
（守備力１３００）

魔法・罠
無し

双六
ＬＰ４０００　手札０

モンスター
『古代竜ーエンシェント・ドラゴン』
（攻撃力２８００）

魔法・罠
『古の都ーエンシェント・シティー』
（フィールド魔法）
『フィールドバリア』
（永続魔法）

伏せ　2

「私のターン！ドロー！私は魔法カード『死者蘇生』を発動！『ケンタウルミナ』を特殊召喚！更に『融合回収』を発動！墓地の『聖騎士の槍持ち』と『融合』を手札に加えるわ」

『ケンタウルミナ』
レベル６　光属性
獣戦士族・融合／効果
攻撃力２２００
守備力１６００

「そして、チューナーモンスター『フルール・シンクロン』を召喚！」

明日香の場に花に手足が付いたモンスターが現れた。

『フルール・シンクロン』
レベル２　光属性
機械族・チューナー
攻撃力４００
守備力２００

「行くわよ！レベル６『ケンタウルミナ』にレベル２『フルール・シンクロン』をチューニング！
白百合の騎士よ
私に未来を切り開く力を！シンクロ召喚！現われなさい『フルール・ド・シュヴァリエ』！」

明日香の場に花びらを散らしながら1人の騎士が現れた。

『フルール・ド・シュヴァリエ』
レベル８　風属性
戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２８００
守備力２３００

「更に『フルール・シンクロン』がシンクロ召喚の素材として墓地へ送られた場合、手札からレベル２以下のモンスター１体を特殊召喚できる！私は手札から『聖騎士の槍持ち』を特殊召喚！」

明日香の場に槍を持った戦士が現れた。『フルール・ド・シュヴァリエ』の後ろに控えているその姿はまるで従者のようだ。

『聖騎士の槍持ち』
レベル２　光属性
戦士族・効果
攻撃力８００
守備力４００

「『聖騎士の槍持ち』の効果発動！このカードを生け贄にする事で、デッキから装備魔法カード１枚を手札に加える。私は『ミスト・ボディ』を手札に加えて発動！『フルール・ド・シュヴァリエ』に装備するわ」

これで『フルール・ド・シュヴァリエ』は戦闘では破壊されない。
一気に攻める気か。

「『エトワール・サイバー』と『聖騎士ジャンヌ』を攻撃表示に変更するわ」

『エトワール・サイバー』（攻撃力１２００）

『聖騎士ジャンヌ』
（攻撃力１９００）

「バトル！『フルール・ド・シュヴァリエ』で『古代竜ーエンシェント・ドラゴン』に攻撃！フルール・ド・オラージュ！！」

「リバース・カードオープン！『くず鉄のかかし』これで『フルール・ド・シュヴァリエ』の攻撃は無効じゃ！」

「それはどうかしら？『フルール・ド・シュヴァリエ』の効果発動！相手が魔法・罠を発動した時にその発動を無効にし破壊するわ！ちなみにこの効果は自分のターンに１度だけ発動できるわ」

「なんじゃと！！？」

かかしが『フルール・ド・シュヴァリエ』の前に立ちふさがるが、あっさりと切り捨てられる。

そして、『フルール・ド・シュヴァリエ』を迎撃するべく『エンシェント・ドラゴン』が火球を放つが霧状になった『フルール・ド・シュヴァリエ』にはかすりもせず、一方的に切り捨てられた。

「『エトワール・サイバー』と『聖騎士ジャンヌ』でダイレクトアタック！『エトワール・サイバー』の効果はさっきした通りよ。『

聖騎士ジャンヌ』は攻撃する場合、ダメージステップの間攻撃力が３００ポイントダウンするわ」

『エトワール・サイバー』
攻撃力１２００→１７００

『聖騎士ジャンヌ』
攻撃力１９００→１６００

『エトワール・サイバー』と『聖騎士ジャンヌ』が立て続けにマスク・ザ・ロックもとい双六さんに攻撃する。

「ぬわぁあああ！！」

双六
ＬＰ４０００→２３００→７００

『エトワール・サイバー』
攻撃力１７００→１２００
『聖騎士ジャンヌ』
攻撃力１６００→１９００

「カードを1枚伏せてターンエンドよ」

「この瞬間、『古代竜ー エンシェント・ドラゴンは再び場に蘇る！」

『古代竜ー エンシェント・ドラゴン』
レベル８　闇属性

ドラゴン族・効果
攻撃力２８００
守備力２０００

明日香
ＬＰ３０００　手札１枚

モンスター
『エトワール・サイバー』
（攻撃力１２００）
『聖騎士ジャンヌ』
（攻撃力１９００）
『フルール・ド・シュヴァリエ』
（攻撃力２８００）
（ミスト・ボディ装備）

魔法・罠
『ミスト・ボディ』
（装備魔法）
（『フルール・ド・シュヴァリエ』に装備）
伏せ　１

双六
ＬＰ７００　手札０

モンスター
『古代竜ーエンシェント・ドラゴン』
（攻撃力２８００）

魔法・罠
『古の都－エンシェント・シティー』
（フィールド魔法）
『フィールドバリア』
（永続魔法）
伏せ　１

「ワシのターンドロー！ワシは速攻魔法『エネミーコントローラー』して『フルール・ド・シュヴァリエ』を守備表示にするぞい」

『フルール・ド・シュヴァリエ』
（守備力２３００）

「バトルじゃ！『古代竜－エンシェント・ドラゴン』で『聖騎士ジャンヌ』に攻撃！」

『エンシェント・ドラゴン』が放った火球を『聖騎士ジャンヌ』は避けたが、避けた所目がけて振るわれた尻尾が当たり、破壊された。

明日香
ＬＰ３０００→２１００

「嬢ちゃんに戦闘ダメージを与えたこの瞬間、リバース・カードオープン！『連撃』！『古代竜－エンシェント・ドラゴン』はもう１度だけ攻撃できる！」

「くっ、『聖騎士ジャンヌ』の効果は発動しないわ」

「こちらは『古代竜－エンシェント・ドラゴン』の効果が発動じゃ。このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する」

『エンシェント・ドラゴン』が地に向けて火球を放ち、そこから広まった炎は『フルール・ド・シュヴァリエ』を包み込んで破壊した。

「『連撃』の効果でもう1度だけ攻撃可能となった『古代竜－エンシェント・ドラゴン』で『エトワール・サイバー』に攻撃！」

『フルール・ド・シュヴァリエ』を葬った炎の残り火で逃げ場を失っていた『エトワール・サイバー』は『エンシェント・ドラゴン』が放った火球になす術無く、呑み込まれた。

「キャアアアア！！」

明日香
ＬＰ２１００→５００

「明日香！」

「明日香さん！」

「このままだとやばいんだな」

隼人の言う通りかなりヤバい状況だな……逆転できるのか？

「ワシはこれでターンエンドじゃ」

明日香
ＬＰ５００　手札１枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　１

双六
ＬＰ７００　手札０

モンスター
『古代竜ー エンシェント・ドラゴン』
（攻撃力２８００）

魔法・罠
『古の都ー エンシェント・シティー』
（フィールド魔法）
『フィールドバリア』
（永続魔法）

「私のターン、ドロー！私は『貪欲な壺』を発動！墓地の『フルール・ド・シュヴァリエ』『ケンタウルミナ』『フルール・シンクロン』『花騎士団の駿馬』『聖騎士の槍持ち』をデッキに戻してシャッフル。そして、２枚ドロー！」

「いよっし！これなら良いカードが引けるかもだぜ！」

十代の言う通りだが、はたして引けるかどうか……

「私は『聖騎士の盾持ち』を守備表示で召喚するわ」

明日香の場にでかい盾を持った戦士が現れる。

『聖騎士の盾持ち』
レベル４　光属性
戦士族・効果
攻撃力８００
守備力１３００

「『花騎士団の盾持ち』は召喚に成功した時、自分の墓地に存在する光属性・戦士族モンスターを1体ゲームから除外する事で、デッキからカードを1枚ドローする効果を持っているわ。私は『聖騎士ジャンヌ』をゲームから除外してカードを1枚ドロー！」

なんとかモンスターを出せたが、一体どうなる!?

「私は魔法カード『戦士の生還』を発動!墓地の『エトワール・サイバー』を手札に加えるわ。そして、『融合』を発動!手札の『エトワール・サイバー』と『ブレード・スケーター』を手札融合!出でよ『サイバー・ブレイダー』！！」

『サイバー・ブレイダー』
レベル７　地属性
戦士族・融合／効果
攻撃力２１００
守備力８００

「じゃが『サイバー・ブレイダー』の攻撃力じゃワシのモンスターには適わんぞい」

「ええ、だからこのカードを使わせて貰うわ！リバース・カードオープン！『ギブ&テイク』！このカードの効果で私の墓地に存在する『ブレード・スケーター』をあなたの場に守備表示で特殊召喚させて、『サイバー・ブレイダー』のレベルをエンドフェイズ時まで４つ上げるわ」

『ブレード・スケーター』
レベル４　地属性
戦士族　通常
攻撃力１４００
守備力１５００

「『サイバー・ブレイダー』のレベルを上げてどうするつもりなんスかね？」

「いや、レベルを上げた事より、相手の場のモンスターの数を増やした事の方に注目すべきだ」

「モンスターの数？ああ！？分かったっス！」

双六さんの場に攻撃を防ぐカードは無い。このデュエル、明日香の勝ちだ！

「『サイバー・ブレイダー』は相手の場のモンスターの数が2体のみの場合、攻撃力が倍になるわ！パ・ド・トロワ！！」

『サイバー・ブレイダー』
攻撃力２１００→４２００

「バトル！『サイバー・ブレイダー』で『古代竜－エンシェント・ドラゴン』に攻撃！！グリッサード・スラッシュ！！！」

『サイバー・ブレイダー』が『エンシェント・ドラゴン』が放った火球を跳んで避ける。

『エンシェント・ドラゴン』が空中の『サイバー・ブレイダー』目がけて火球を連続で放つが、ある火球は絶妙な動きで避けられ、またある火球は蹴りで、己自身に返される。

そして、最後に『サイバー・ブレイダー』の踵落としが『エンシェント・ドラゴン』の脳天に決まり、『エンシェント・ドラゴン』は地に伏した。

「ぬわぁあああ！！！」

双六
ＬＰ７００→－７００

「決まったぁー！！！制裁デュエル第３戦もチームアカデミアの勝利に終わったぁー！！！」

司会進行役の言葉が終わるやいなや凄まじい歓声がデュエル場を包み込んだ。

－２０分後－

「それでは制裁デュエル最終戦は３０分……えっ？」

長い歓声が漸く終わり、歓声を止めるために声を張り上げてお疲れの様子の司会進行役が次の予定を言おうとしたら、アカデミア倫理委員会の人が走って来て何か耳打ちをした。

「う、ううん！どうやら先方の予定が迫ってるらしく、次の制裁デュエル最終戦は今すぐ行います！天道　貴志選手は至急デュエル場に降りてきてください！」

「マジかよ……んじゃ行ってくるわ」

観客席の前列の方まで出て、手すりを掴む。

この程度の高さなら大丈夫だな。

「貴志、まさか……」

「そのまさかさ……イヤッッホォォォオオォォオウ！！」

昔、友とスカイダイビングをした時に友が発した叫び声を真似て、手すりを乗り越える。

【マイブラザーって時々だが、はっちゃけるよな】

ゴーズがなんか言ったが無視。

普通に着地に成功して、デュエルリングに上がる。

「お疲れさん」

「え、ええ。ありがとう」

観客席に戻る明日香と少し喋り、デッキを取り出す。

さて、双六さんが出て来た以上、レオンさんかレベッカさんあたりが出て来てもおかしくない。

俺の相手は一体誰になるのか……

入場口の方を見ると、相手のデュエリストがこっちに向かってきていた。

「なっ！あれは……」

そのデュエリストの左腕には俺が数ヵ月前まで、使っていたブラック・デュエルディスクが装着されていた。

第１６話　Ｍ・ＨＥＲＯ　Ｇ－７７（後書き）

鷹
「今日の最強カードは……まぁ出番がこれきりって事なんでこのカードを」

『古代竜－エンシェント・ドラゴン』
レベル８　闇属性
ドラゴン族・効果
攻撃力２８００
守備力２０００
効果
このカードは通常召喚できない。
『古の都－エンシェント・シティー』の効果でのみ特殊召喚する事ができる。
このカードが戦闘で相手モンスターを破壊した時、相手フィールド上の守備表示モンスターを全て破壊する。

貴志
「手間暇かけた割に攻撃力が低いモンスターだな。海馬さんの『青眼の白龍』に及ばない……」

鷹
「まぁ、究極のロマンカード……だよな」

貴志
「名前だけ見ると、どっかの他力本願竜の親戚に見えるモンスターでもあるな」

鷹
「原作・アニメでは、アニメオリジナルストーリーのＫＣグランプリ編城之内ＶＳマスク・ザ・ロック戦でマスク・ザ・ロックが使用。『ゴブリン突撃部隊』を戦闘破壊して、『スケープ・ゴート』で呼び出されていた羊トークン数体を効果で破壊。返しのターンで『ギルフォード・ザ・ライトニング』の効果で破壊されるも、エンドフェイズ時に『古の都－エンシェント・シティー』の効果で復活して、マスク・ザ・ロックのターンで『ギルフォード・ザ・ライトニング』と相討ちになり、エンドフェイズ時にまた復活するも……」

貴志
「途中で切るのかよ」

鷹
「全部言うのも野暮ってもんさ」

貴志
「てか、良いのか？ＫＣグランプリ……実質世界大会に出たマスク・ザ・ロックに勝たせて。羽蛾や竜崎あたりで良かったんじゃないのか？」

鷹
「最初は羽蛾や竜崎を出そうと思ったけど、あいつらもまがりなりに、ＫＣグランプリに出てたのを思い出して、どうせなら意外性を持たせようと思って、爺ちゃんにご足労をお願いした次第でございます」

貴志
「左様ですか」

鷹
「それではまた次回！まぁ次回の相手は今回と違って予想がつきやすいと思いますが」

鷹・貴志
「それでは、感想やアドバイス、ミスの指摘等ありましたら、是非ともお願いします！」

第17話　真のNo，1カードプロフェッサー（前書き）

デュエルが長いので、途中で区切ってます。

2話構成にしようと考えていますが、下手すりゃ3話構成になるかもです。

第17話　真のNo，1カードプロフェッサー

十代　Ｓｉｄｅ

「イヤッッホォォォオオォォウ！！」

そう言って貴志が手摺りを乗り越えて、デュエル場に飛び降りた。

【マイブラザーって時々だが、はっちゃけるよな】

貴志の精霊のゴーズが言ってる事には、凄く同意できるぜ。

貴志が明日香と少し話して、デッキを取り出した。

貴志の相手は誰で、どんなデュエルを見せてくれるのか……くぅー楽しみだぜ！

そう思っていたら、貴志が多分だけど、相手を見て驚いていた。

相手が入場してくる入場口は真正面にあるから、相手は見えるけど、さっきのマスク・ザ・ロックって人を除いて、相手は皆フードを被っていたんだよな。

貴志は何で見ただけで驚いてんだ？

十代　Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

「何故だ……」

思わず、呟きが洩れる。ブラック・デュエルディスクは、確かにペガサス様に返還した。

なのに、何故俺の対戦相手になるであろう相手が、ブラック・デュエルディスクを持っているんだ!?

あれはＮｏ，１カードプロフェッサーしか持っていないｈ……いや、ただ単純に俺の相手が現Ｎｏ，１カードプロフェッサーなだけか。

俺の後釜は正直、誰か分からない。

だが、相手が誰であろうとやる事は変わらない。

ただ、クロノスの野郎!どんだけ俺を退学にしたいんだよ!!とだけは言わせて欲しい。

「さて、落下入場という私の出番を取る入場をしてきたのは、遊城十代選手と並ぶオシリス・レッドの双璧、天道　貴志選手だぁー!!」

司会進行役の言葉に十代達の時と同様、歓声が上がる。

居るのをすっかり忘れてたな……後、俺ってオシリス・レッドの双璧だったのか。

「さぁ!天道　貴志選手とデュエルするデュエリストはこの人だぁー!!」

俺の対戦相手が入場してきた瞬間、観客が騒めきだす。

まぁ、左腕のブラック・デュエルディスクを見れば、そうなるよな。

「ヘッ！とっとと闘ろうぜ！」

そう言って、俺の対戦相手がフード取った。いや、ちょっと待て！

この声はまさか……

「な、なんと天道　貴志選手の対戦相手は伝説のデュエリスト城之内　克也だぁー！！！」

やっぱり、城之内さん！城之内さんが俺の相手って……1度も勝った事が無いんだが……

「このお方に関しては、解説は不要でしょう。何故、ブラック・デュエルディスクを付けているのは不明ですが、それは今置いといて、両者デッキを互いにシャッフルしてください！」

俺と城之内さんはデュエルリングの中央まで、歩み寄る。

「城之内さん。何故此処に居るんですか！？後、そのディスクは！？」

周りに聞こえない様に小声で城之内さんに聞いた。

「ん？ああ、え～と……色々あってな。ほいシャッフル終わったぜ」

「……ありがとうございます」

デッキを受け取り、こちらもデッキを返す。

指定位置に戻る途中に羨ましいという声が聞こえてきたが、冗談じゃない！負けたら退学のデュエルで、戦績５３戦０勝５３敗の相手と正直、闘いたくない。

だが、城之内さんに勝たないと退学になってしまう……たとえ勝ち目が薄くても、やるだけやるしかない。

「それでは、制裁デュエル最終戦。デュエル開始ィー！！！」

「行くぜ！」

「ええ……」

「「デュエル！！」」

俺
ＬＰ４０００

城之内
ＬＰ４０００

「先攻は貰うぜ。俺のターン、ドロー！俺は『切り込み隊長』を攻

撃表示で召喚！更に『切り込み隊長』が召喚に成功した時、手札からレベル４以下のモンスター１体を特殊召喚できる。現れろチューナーモンスター『トラパート』！！」

城之内さんの場に、２つの剣を持った金髪の戦士とかかしにシルクハットをかぶり黒いローブ着ているモンスターが現れた。

『切り込み隊長』
レベル３　地属性
戦士族・効果
攻撃力１２００
守備力４００

『トラパート』
レベル２　闇属性
戦士族・チューナー
攻撃力６００
守備力６００

「レベル３『切り込み隊長』にレベル２『トラパート』をチューニング！
シンクロ召喚！現れろ『Ｘ－セイバー　ウェイン』！そして、このカードがシンクロ召喚に成功した時、手札からレベル４以下の戦士族モンスター１体を特殊召喚する事ができる！現れろ『コマンド・ナイト』！」

城之内さんの場の『トラパート』が光の輪となり、『切り込み隊長』を包み込み、白く光る。

光が晴れるといかにも西部劇に出てきそうなガンマン風の銃士が現

れた。

現れた『ウェイン』が手をかざすとどこからともなく赤い服と帽子、マントを身に付けた女戦士が現れた。

『Ｘ－セイバー　ウェイン』
レベル５　地属性
戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２１００
守備力４００

『コマンド・ナイト』
レベル４　炎属性
戦士族・効果
攻撃力１２００
守備力１９００

「『コマンド・ナイト』の効果で俺の場の戦士族モンスターの攻撃力は４００ポイントアップ！」

『コマンド・ナイト』が剣を空高く掲げると『ウェイン』もそれに続けて、自身の武器である銃を掲げた。

それで士気が上がったのか、『コマンド・ナイト』と『ウェイン』の後ろに炎が立ち上った。

『Ｘ－セイバー　ウェイン』
攻撃力２１００→２５００

『コマンド・ナイト』

攻撃力１２００→１６００

「更に手札から永続魔法『連合軍』を発動するぜ！このカードの効果で俺の場の戦士族モンスターの攻撃力は俺の場に表側表示で存在する戦士族または魔法使い族モンスター１体につき、２００ポイントアップする。俺の場には戦士族モンスターが２体！よって攻撃力４００ポイントアップ！」

『ウェイン』と『コマンド・ナイト』が自身の武器を交差させ、振り上げた。

更に士気が上がったみたいだ。

振り上げた瞬間、桃園の誓いに見えたのは多分、気のせいだ。１人足りないしな。

『Ｘ－セイバー　ウェイン』
攻撃力２５００→２９００

『コマンド・ナイト』
攻撃力１６００→２０００

「カードを２枚伏せてターン終了だ」

城之内
ＬＰ４０００　手札０

モンスター
『Ｘ－セイバー　ウェイン』

（攻撃力２９００）
『コマンド・ナイト』
（攻撃力２０００）

魔法・罠
『連合軍』
（永続魔法）
伏せ　２

クソッ！城之内さんの引きがかなり良い方か。引きが悪かったら少しは付け込めたんだが……

「俺のターン！ドロー！」

だが、城之内さんの手札は０だ。ならば、場のカードを殲滅すれば優位に立てる。

「リバース・カードオープン！『ギャンブル』。こいつは相手の手札が６枚以上、俺の手札が２枚以下の時に発動できるトラップカード。こいつの効果で俺はコイントスをして裏表を当てる。当たった場合は俺は手札が５枚になるようにドローし、外した場合は次の俺のターンをスキップする」

城之内さんと俺の丁度中間辺りに、ソリットビジョンで投影されたコインが現れた。

『ギャンブル』か。これはかなりヤバいな。

「ちなみにこのコインの表には1、裏には0が描かれてるぜ。俺の予想は裏！行くぜ！コイントス！」

城之内さんの言葉と同時にコインが跳ね上がる。

空高く跳ね上がったコインは１０秒程して落ちてきた。

そして、出ている面に描かれている数字は0だった。

「コイントスの結果は裏！よって、手札が5枚になるようにドローだ！」

あれーさっきまで手札0だったのに5枚になってるー（棒読み）…むなしくなるから現実逃避はやめておこう。城之内さんの運が良いのはいつもの事だし。

取り敢えず、俺の手札で出来る限りの事をしよう。幸い手札はそこまで悪くない。

「俺は『ＴＧストライカー』を特殊召喚！このカードは相手の場にモンスターが存在し、自分フィールド上にモンスターが存在しない場合、特殊召喚できる！更に俺がレベル2以下のモンスターの特殊召喚に成功した時、このカードは特殊召喚できる！出でよ『ＴＧワーウルフ』！」

『ＴＧストライカー』
レベル２　地属性
戦士族・チューナー
攻撃力８００
守備力０

『ＴＧワーウルフ』
レベル３　闇属性
獣戦士族・効果
攻撃力１２００
守備力０

さて、これで『カタストル』がシンクロ召喚できるが、返しのターンで『サイコ・ショッカー』を出されるとアウトだ。ならば！

「『ＴＧストライカー』と『ＴＧワーウルフ』を生け贄に捧げ『堕天使アスモディウス』を召喚！」

【ふわ～何？俺の出番？】

ここは破壊された時にトークンを特殊召喚するアスディに託す！

『堕天使アスモディウス』
レベル８　闇属性
天使族・効果
攻撃力３０００
守備力２５００

「バトル！『堕天使アスモディウス』で『Ｘ－セイバー　ウェイン』に攻撃！黒翼の裁き！！」

【さ～てと、殺りますか～】

何かを感じたのか『ウェイン』が銃を構えて、アスディに向けて発砲した。

【む～楽に殺っちゃおうと思ってたのに～】

アスディが羽根を広げて飛び上がり、銃弾を避ける。銃弾が届かない所まで飛ばれたのか、無駄弾を撃ちたくないだけなのかは分からないが、『ウェイン』が銃を下ろした。

【冥府の扉開きし所に汝あり。我が雷を受けよ！】

掌を空に向ける。すると突如、雷雲が発生した。

【冥府を永久に彷徨うがいい！滅殺！！なーんてね～】

アスディが掌を『ウェイン』に振り下ろすと雷が『ウェイン』を貫いた。

「くっ」

城之内
ＬＰ４０００→３９００

『コマンド・ナイト』
攻撃力２０００→１８００

「俺の場の戦士族モンスターが1体減った事により、『連合軍』の効果での上昇値が２００に下がっちまったか」

「……カードを1枚伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター
『堕天使アスモディウス』
（攻撃力３０００）

魔法・罠
伏せ　１

城之内
ＬＰ３９００　手札５枚

モンスター
『コマンド・ナイト』
（攻撃力１８００）

魔法・罠
『連合軍』
（永続魔法）
伏せ　１

―――――――――――
―――――――――――
―――――――――――
―――――――――――
―観客席―

「カードを1枚伏せてターンエンド」

「なんとか貴志が先手を取ったな」

「ああ、それに『堕天使アスモディウス』か。かなり良い手だな」

「どうゆう意味なんスか三沢君？」

翔が自分の後ろの席に座っていた三沢の言葉に疑問を感じた様で彼に聞く。

「伝説のデュエリスト城之内　克也さんのデッキには、単体で攻撃力３０００を越えるモンスターは居ない。それに、『堕天使アスモディウス』は破壊されて墓地へ送られた時に、戦闘で破壊されないトークンとカード効果で破壊されないトークンを特殊召喚する効果を持っている。だからたとえ、『堕天使アスモディウス』が破壊されても、モンスターが2体残るのさ」

「でも何で貴志はあんなに険しい顔をしているのかしらね？」

「おそらく、緊張でもしているのだろう。相手はあの城之内　克也さんなんだからな」

明日香が疑問を口にしたが、それにも三沢が答える。

「でもさ、あんな険しい顔でデュエルして貴志は楽しいのかよ……」

「それは……どうだろうな」

しかし、十代の呟きには答える事はできなかった。

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーーー

先手は取ったが、与えたダメージは１００ポイント。楽観できる差じゃない。

城之内さんのターンで城之内さんの手札は６枚。

伏せた『砂塵の大竜巻』で『連合軍』を破壊できると言っても、城之内さんなら、この状況を打開するぐらい朝飯前だろう。

そもそも、城之内さん相手に楽観して闘える訳がないか。

「俺のターンだ！ドロー！俺は『蒼炎の剣士』を攻撃表示で召喚するぜ！」

城之内さんの場に蒼い火柱が立ち上ぼり、その火柱から蒼い兜や蒼い剣をはじめ、身に付けている物全てが蒼色の剣士が現れた。

『蒼炎の剣士』（アニメ）
レベル４　炎属性
戦士族・効果
攻撃力１８００
守備力１６００
効果
１ターンに１度、フィールド上のこのカード１体を選択して、このカードの攻撃力を１００の倍数だけダウンする。
選択したモンスターの攻撃力は、この効果でダウンした数値分アップする。
このカードが破壊され墓地へ送られた時、自分のエクストラデッキ

または墓地から『炎の剣士』１体を召喚条件を無視して特殊召喚する事ができる。

『蒼炎の剣士』も『ウェイン』と同じように『コマンド・ナイト』と共に武器を振り上げた後に武器を交差させて、振り上げた。

『コマンド・ナイト』
攻撃力１８００→２０００

『蒼炎の剣士』
攻撃力１８００→２２００→２６００

「『蒼炎の剣士』の効果発動！『コマンド・ナイト』を選択して、『蒼炎の剣士』の攻撃力を１１００ポイント下げて。変わりに『コマンド・ナイト』の攻撃力を１１００ポイントあげるぜ！」

『蒼炎の剣士』
攻撃力２６００→１５００

『コマンド・ナイト』
攻撃力２０００→３１００

『蒼炎の剣士』が己自身が纏っていた蒼い炎を『コマンド・ナイト』に分け与えた。

『蒼炎の剣士』が膝をつく。その表情には疲労の色が見える。

【あれ～？これってヤバくない？】

『砂塵の大竜巻』で『連合軍』を破壊できれば、返り討ちにできる

が……

「バトルだ！『コマンド・ナイト』で『堕天使アスモディウス』に攻撃！」

「トラップ発動！『砂塵の大竜巻』！このカードの効果で『連合軍』を破壊する！返り討ちにしろ！アスディ！！」

「そう来るか！？なら俺は手札から速攻魔法『突進』を発動！これで『コマンド・ナイト』の攻撃力は７００ポイントアップだ！」

「な……に……クソッ！」

竜巻が『連合軍』を破壊するが、竜巻が発生する前よりも『コマンド・ナイト』が己の剣に纏わせていた炎の勢いが増していた。

『コマンド・ナイト』
攻撃力３１００→２７００→３４００

『蒼炎の剣士』
攻撃力１５００→１１００

『コマンド・ナイト』が己の剣に纏わせた炎を鞭のような形にして、空中のアスディに向かって振るう。

【おっとっと～】

アスディがそれを声とは違い必死に避けているが、『コマンド・ナイト』が『蒼炎の剣士』から受け取った蒼い炎も鞭のように使いだすと、逃げ場を失った。

【あーもう！ただじゃやられないよ～だ！】

アスディが雷雲を発生させて、雷を『コマンド・ナイト』目がけて放つが、『コマンド・ナイト』が発生させた炎の壁に阻まれる。

【あちゃ～。んじゃ、後は任せたよ～】

２つの鞭によって翼をもがれてアスディが落下した。

俺
ＬＰ４０００→３６００

「アスディ……『堕天使アスモディウス』が破壊され墓地へ送られた事により、『アスモトークン』と『ディウストークン』を守備表示で特殊召喚！」

アスディが落下した所が光だし、其処から右半身がアスディと同じだが、左半身が白く染まっている堕天使と左半身がアスディと同じだが、右半身が白く染まっている堕天使が現れる。

『アスモトークン』
レベル５　闇属性
天使族・トークン
攻撃力１８００
守備力１３００

『ディウストークン』
レベル３　闇属性
天使族・トークン

攻撃力１２００
守備力１２００

「ちなみに『アスモトークン』はカードの効果では破壊されず、『ディウストークン』は戦闘では破壊されません」

「だが、『堕天使アスモディウス』は破壊したぜ。カードを1枚伏せてターンエンドだ」

『コマンド・ナイト』
攻撃力３４００→２７００

俺
ＬＰ３６００　手札２枚

モンスター
『アスモトークン』
（守備力１３００）
『ディウストークン』
（守備力１２００）

魔法・罠
無し

城之内
ＬＰ３９００　手札３枚

モンスター
『コマンド・ナイト』

（攻撃力２７００）
『蒼炎の剣士』
（攻撃力１１００）

魔法・罠
伏せ　２

「くっ、俺のターン、ドロー！チューナーモンスター『ダーク・リゾネーター』を召喚！」

『ダーク・リゾネーター』
レベル３　闇属性
悪魔族・チューナー
攻撃力１３００
守備力３００

「レベル５『ディウストークン』にレベル３『ダーク・リゾネーター』をチューニング！
８つの絆の証が揃いし時、現れる暗黒の龍よ
その力で相手に闇による終焉を与えよ！シンクロ召喚！『ダークエンド・ドラゴン』！！」

『ダークエンド・ドラゴン』
レベル８　闇属性
ドラゴン族・シンクロ／効果
攻撃力２６００
守備力２１００

「『ダークエンド・ドラゴン』の効果発動！『ダークエンド・ドラ

ゴン』の攻撃力・守備力を５００ポイント下げて『コマンド・ナイト』を墓地へ送る！闇に沈め、『コマンド・ナイト』！」

『ダークエンド・ドラゴン』の胴体にあった口から、闇の光線が放たれ、その闇は『コマンド・ナイト』を呑み込んだ。

『ダークエンド・ドラゴン』
攻撃力２６００→２１００守備力２１００→１６００

『蒼炎の剣士』
攻撃力１１００→７００

『蒼炎の剣士』から生気が消えた。そういえばずっと、膝をついたままだな。

「だぁー！普通このタイミングで出るか！？そんなカード～」

それを言うなら、城之内さん……あなたのギャンブル系カードが、ほぼ全て良いタイミングで出た上、９割以上の確率で成功するのは気のせいですか！？

「バトルフェイズに入ります。『ダークエンド・ドラゴン』で『蒼炎の剣士』に攻撃！闇を抱いて眠れ！ダーク・フォッグ！！」

『ダークエンド・ドラゴン』が２つの口から闇を吐き出す。

その２つの闇は『蒼炎の剣士』が迎撃しようとして、放った蒼い炎ごと、『蒼炎の剣士』を呑み込んだ。

城之内

ＬＰ３９００→２５００

「ぐっ！だが、『蒼炎の剣士』の効果発動！現れろ！『炎の剣士』！！」

『蒼炎の剣士』が居た所に刺さっていた剣から火柱が上がり、今度は身に付けている装備全ての色が赤になっている剣士が現れた。

『炎の剣士』
レベル５　炎属性
戦士族・融合
攻撃力１８００
守備力１６００

城之内さんが最も信頼するモンスター……今の手札じゃ、これ以上何もできないが、ブラフだけでもセットしておくか。

「カードを１枚伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ３６００　手札１枚

モンスター
『ダークエンド・ドラゴン』
（攻撃力２１００）
『ディウストークン』
（守備力１２００）

魔法・罠

伏せ　1

城之内
ＬＰ２５００　手札３枚

モンスター
『炎の剣士』
（攻撃力１８００）

魔法・罠
伏せ　2

「俺のターン！ドローだ！俺は『鉄の騎士　ギア・フリード』を攻撃表示で召喚！」

城之内さんの場に黒く塗装された鉄の戦士が現れた。

『鉄の騎士　ギア・フリード』
レベル４　地属性
戦士族・効果
攻撃力１８００
守備力１６００

「手札から装備魔法『味方殺しの魔剣ーバーニング・ソウルー』を発動！『炎の剣士』に装備！」

『味方殺しの魔剣ーバーニング・ソウルー』（アニメ）
装備魔法
効果

1ターンに1度、自分フィールド上のモンスター1体を生け贄にする。
装備モンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで生け贄にしたモンスターの元々の攻撃力の数値分アップする。

「俺は『鉄の騎士　ギア・フリード』を生け贄に捧げ、『炎の剣士』の攻撃力を１８００ポイントアップさせるぜ」

『ギア・フリード』と『炎の剣士』が左手を組んで、少し話す様な仕草をした後、『ギア・フリード』が光となって『炎の剣士』が持つ魔剣がその光を取り込んだ。

多分、「後は任せた。俺の分も頑張れよ」「ああ、任せろ！」という感じの会話内容だと思う。

『炎の剣士』
攻撃力１８００→３６００

『炎の剣士』の攻撃力が上がった瞬間、『炎の剣士』が金色に光だした。

って、光を取り込んだのは剣だけじゃないのか！？

「バトル！『炎の剣士』で『ダークエンド・ドラゴン』に攻撃！くらえ！バーニング・ソウル！」

「ぐっ、やれ！『ダークエンド・ドラゴン』！」

『炎の剣士』が剣から放った炎の竜巻と『ダークエンド・ドラゴン』が吐いた黒いブレスがぶつかり合う。

互角だったが、『炎の剣士』が【ハァ！】と気の入った声を出した同時に炎までも金色になった瞬間、押されだし、『ダークエンド・ドラゴン』は金色の竜巻に巻き込まれて、『ダークエンド・ドラゴン』は金色の粉になった。

「ぐぅ！」

俺
ＬＰ３６００→２１００

「ターンエンドだ」

『炎の剣士』
攻撃力３６００→１８００

城之内さんのエンド宣言と共に『炎の剣士』が普通の色に戻る。

正直、炎が金色になった時に『炎の剣士』じゃねぇだろ！と思ったんだけどな。

俺
ＬＰ２１００　手札１枚

モンスター
『ディウストークン』
（守備力１２００）

魔法・罠

伏せ　1

城之内
ＬＰ２５００　手札２枚

モンスター
『炎の剣士』
（攻撃力１８００）
（『味方殺しの魔剣－バーニング・ソウル－』を装備中）

魔法・罠
『味方殺しの魔剣－バーニング・ソウル』
（『炎の剣士』に装備中）
伏せ　2

「俺のターン、ドロー！」

よし！良いカードだ。

「魔法カード『貪欲な壺』発動！墓地の『ＴＧストライカー』、『ＴＧワーウルフ』、『堕天使アスモディウス』、『ダーク・リゾネーター』、『ダークエンド・ドラゴン』をデッキに戻し、２枚ドロー！」

くっ、『炎の剣士』を破壊できるモンスターを引けなかったか。

「俺は『ラーニング・エルフ』を守備表示で召喚。カードを１枚伏せてターンエンド」

『ラーニング・エルフ』
レベル３　風属性
天使族・効果
攻撃力１４００
守備力１５００

俺
ＬＰ２１００　手札１枚

モンスター
『ディウストークン』
（守備力１２００）
『ラーニング・エルフ』
（守備力１５００）

魔法・罠
伏せ　２

城之内
ＬＰ２５００　手札２枚

モンスター
『炎の剣士』
（攻撃力１８００）
（『味方殺しの魔剣－バーニング・ソウル－』を装備中）

魔法・罠
『味方殺しの魔剣－バーニング・ソウル』
（『炎の剣士』に装備中）

伏せ　2

「俺のターン！ドロー！」

ドローしたカードを見た城之内さんの表情が変わる。まるで待っていたカードが来た様な感じに。

「俺はチューナーモンスター『共闘するランドスターの剣士』を召喚！」

「っ！」

城之内さんの場に触角みたいな物が生えている帽子を被り、小さな剣と自身の顔が描かれている盾を持っている戦士が現れた。

『共闘するランドスターの剣士』
レベル３　地属性
戦士族・チューナー
攻撃力５００
守備力１２００

『共闘するランドスターの剣士』が剣を頭上に振り上げる。あのカードも『コマンド・ナイト』と同じく、戦士族モンスターの攻撃力を上げる効果を持っているが、問題はそこじゃない！レベル５のモンスターとレベル３のチューナーが揃った。これの意味する事は

「レベル５『炎の剣士』に」

来る……

「レベル3『共闘するランドスターの剣士』をチューニング！」

城之内さんのデッキ最強のモンスターで

「不屈の闘志を持つ戦士　今此処に現る」

シンクロモンスターの中で最も、城之内さんの闘志を体現しているモンスター

「その闘志で我が道を切り開け！シンクロ召喚！出でこい！『ギガンテック・ファイター』！！」

『ギガンテック・ファイター』が……

第17話　真のNo，1カードプロフェッサー（後書き）

貴志
「今日の最強カードはこれかな」

『味方殺しの魔剣ー バーニング・ソウルー』（アニメ）
装備魔法
効果
1ターンに1度、自分フィールド上のモンスター1体を生け贄にする。

装備モンスターの攻撃力は、このターンのエンドフェイズ時まで生け贄にしたモンスターの元々の攻撃力の数値分アップする。

鷹
「原作・アニメではアニメオリジナルストーリー乃亜編の城之内VSビッグ3（ジャッジ・マン）戦で城之内が使用。乃亜編オリジナルのデッキマスター能力を乱用し、攻撃力が下がっていた『炎の剣士』に装備され『ゴブリン突撃部隊』を生け贄にして、『炎の剣士』の攻撃力を上げて、フィニッシャーにした」

貴志
「モンスターを生け贄にして攻撃した瞬間に『魔法の筒』とか使われたら、目もあてられないカードだな」

第１８話　闘志（前書き）

内容が若干、ぐだぐだに……次で決着です。

今更ですが、今の状態の主人公のメンタル面は豆腐まではいかないにしても、弱い部類に入ります。

そういや、遊戯王シリーズで誰が１番メンタル面が強いんでしょうね？

第１８話　闘志

「出でよ『ギガンテック・ファイター』！！」

城之内さんの言葉に呼応するかの様に現れた巨大な戦士……城之内さんのデッキ最強モンスター『ギガンテック・ファイター』が咆哮を上げる。

『ギガンテック・ファイター』
レベル８　闇属性
戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２８００
守備力１０００

「『ギガンテック・ファイター』は墓地に存在するモンスター１体につき、攻撃力が１００ポイントアップする効果を持っている。お前の墓地にモンスターは居ねぇが、俺の墓地には戦士族モンスターが８体存在している。よって、攻撃力８００ポイントアップするぜ！」

『ギガンテック・ファイター』
攻撃力２８００→３６００

俺のデッキに単体であの攻撃力に太刀打ちできるモンスターは居ない。

いや、戦闘で破壊できたとしても、あのモンスターは自身の蘇る事ができる。

カード効果で場から取り除こうにも、今の手札じゃ無理だ。

俺は『氷結界の龍　ブリューナク』を持っていない。ブラフで伏せた『蜘蛛の糸』を使って『共闘するランドスターの剣士』を手札加えたとしても意味が無い。

戦闘耐性がある『ディウストークン』が居てもこのままでは……

「バトル！『ギガンテック・ファイター』で『ラーニング・エルフ』に攻撃！ギガントナックル！」

動きだした『ギガンテック・ファイター』が拳を『ラーニング・エルフ』目がけて振り下ろす。

「ぐっ、『ラーニング・エルフ』が墓地に送られた事により、カードを1枚ドロー！」

クシルか……クシルじゃ『ギガンテック・ファイター』には勝てない。

「俺はターンを終了するぜ」

俺
ＬＰ２１００　手札2枚

モンスター
『ディウストークン』
（守備力１２００）

魔法・罠
伏せ　2

城之内
ＬＰ２５００　手札２枚

モンスター
『ギガンテック・ファイター』
（攻撃力３６００）

魔法・罠
伏せ　2

「俺の……ターン！ドロー！……カードを1枚伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ２１００　手札２枚

モンスター
『ディウストークン』
（守備力１２００）

魔法・罠
伏せ　3

城之内
ＬＰ２５００　手札２枚

モンスター
『ギガンテック・ファイター』
（攻撃力３６００）

魔法・罠
伏せ　２

「俺のターン！ドロー！魔法カード『強欲な壺』を発動。デッキからカードを2ドローする」

引いたカードを見た城之内さんがニシシと笑った。

「俺は更に永続魔法『デンジャラスマシン　ＴＹＰＤ－６』を発動するぜ！」

「っ！リバース・カードオープン！速攻魔法『サイクロン』！『デンジャラスマシン　ＴＹＰＤ－６』を破壊する！」

竜巻が城之内さんの場に現れたスロットマシンを破壊する。

さっきのターンで『サイクロン』を引き当てて良かった。

毎ターンカードをドローされるか、俺のモンスターが破壊または、俺の手札が墓地に行くところだった。

「なら、俺は『ランドスターの銃士』を攻撃表示で召喚するぜ！」

「なっ！」

城之内さんの場にド○クエに出てくるスラ○ムの様な形の顔をしている銃を持った小人が現れる。

『ランドスターの銃士』
（アニメ）
レベル３　地属性
戦士族・効果
攻撃力９００
守備力１２００
効果
このカードが装備カードを装備している時、相手プレイヤーに直接攻撃する事ができる。

しまった！あのモンスターの効果はたしか……

「俺は『神剣－フェニックスブレード』発動。『ランドスターの銃士』に装備！これにより、『ランドスターの銃士』の攻撃力が３００ポイントアップするぜ！」

『ランドスターの銃士』が銃を地に置いて代わりに剣を構える。

『ランドスターの銃士』
攻撃力９００→１２００

「バトル！『ランドスターの銃士』は装備カードを装備している時、ダイレクトアタックできる！やれ！『ランドスターの銃士』！プレイヤーにダイレクトアタックだ！」

剣を構えた『ランドスターの銃士』が走りよって来る。

「ぐっ、トラップ発動！『ガード・ブロック』戦闘ダメージを０にしてカードを１枚ドロー！」

『ランドスターの銃士』が剣で斬り掛かってきたが、バリアに阻まれる。

「カードを１枚伏せて、ターンエンド！」

俺
ＬＰ２１００　手札３枚

モンスター
『ディウストークン』
（守備力１２００）

魔法・罠
伏せ　１

城之内
ＬＰ２５００　手札０

モンスター
『ギガンテック・ファイター』
（攻撃力３６００）
『ランドスターの銃士』
（攻撃力１２００）
（『神剣－フェニックスブレード』を装備中）

魔法・罠
『神剣－フェニックスブレード』
（『ランドスターの銃士』に装備中）
伏せ　３枚

クソッ！『デンジャラスマシン　ＴＹＰＥ－６』を恐れるあまり『サイクロン』を早く使ってしまった。

早くなんとかしないと……このままでは負ける！

「俺のターン、ドロー！」

俺の手札は『ジャンク・シンクロン』、『ダーク・シムルグ』、『連撃』そして今引いた『バトルフェーダー』の４枚。取り敢えず、伏せている『蜘蛛の糸』を使って、手札を増やすか。

「伏せていた『蜘蛛の糸』を発動！城之内さんの『強欲な壺』を俺の手札に加える」

カードから出た蜘蛛の糸が城之内さんのデュエルディスクに張り付き、１枚のカードを奪ってくる。

「なっ！ちょっ、待て！」

「手札に加えた『強欲な壺』を発動！カードを２枚ドロー！」

よし！これなら！

「俺はモンスターをセット、カードを１枚伏せてターンエンド」

「なら、この瞬間。トラップを発動させてもらうぜ。『第六感』！」

「マジですか……」

俺と城之内さんの中間辺りに今度はサイコロが現れる。

「このカードの効果で俺は1から6までの数字の内2つを宣言してサイコロを振る。宣言した数字が出たら、その数だけデッキからカードをドローし、外した場合は出た目の枚数分デッキの上からカードを墓地へ送る。俺が宣言するのは5と6！行くぜ！ダイスロール！」

サイコロが跳ねるが結果は分かる。

おそらく……いや、絶対

「サイコロの出た目は5！よってカードを5枚ドロー！」

やっぱり……

俺
ＬＰ２１００　手札４枚

モンスター
『ディウストークン』
（守備力１２００）
伏せ　１

魔法・罠
伏せ　１

城之内
ＬＰ２５００　手札５枚

モンスター
『ギガンテック・ファイター』
（攻撃力３６００）
『ランドスターの銃士』
（攻撃力１２００）
（『神剣－フェニックスブレード』を装備中）

魔法・罠
『神剣－フェニックスブレード』
（『ランドスターの銃士』に装備中）
伏せ　２枚

「俺のターン！ドローだ！」

城之内の手札が０枚になっても次の城之内さんのドローフェイズには手札が６枚になるのは何でなんだろうか……

はぁ……考えてもしょうがないか……

「俺は手札の『ランドスターの剣士』と『ランドスターの格闘士』を選択して魔法カード『集結！ランドスター戦隊』を発動！『ランドスター剣士』と『ランドスターの格闘士』を特殊召喚！」

城之内さんの場に剣を持った小人と何も持っていない小人が現れる。

『集結！ランドスター戦隊』（アニメ）
通常魔法
効果
自分の手札から『ランドスター』と名の付いたモンスターを任意の枚数分選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

『ランドスターの格闘士』
（アニメ）
レベル３　地属性
戦士族・効果
攻撃力１０００
守備力５００
効果
１ターンに１度、自分のメインフェイズ１の時に発動する事ができる。
手札のモンスターカード１枚を捨てる事で、このカードの攻撃力は８００ポイントアップする。

『ランドスターの剣士』
レベル３　地属性
戦士族　通常
攻撃力５００
守備力１２００

３人のランドスターが揃うと何やら話し始めた。

【我こそは、ランドスター１の狙撃手。ランドスター・ブラスト！】

【我こそは、ランドスター1の力持ち。ランドスター・ストロング！】

【我こそは、サイコロコンボを使わせたらランドスター1。ランドスター・ノーマル！】

【【【さぁ、我らランドスターの力。その目に焼き付けるがいい！】】】

「俺は『ランドスターの剣士』、『ランドスターの銃士』、『ランドスターの格闘士』を生け贄に捧げ『ギルフォード・ザ・ライトニング』を召喚するぜ！」

【【【な、ななな何だってー！！！】】】

そういって消えていくランドスター達。何なんだ今の茶番劇は……って、俺がヤバイじゃん！！

『ギルフォード・ザ・ライトニング』
レベル８　光属性
戦士族・効果
攻撃力２８００
守備力１４００

「『ギルフォード・ザ・ライトニング』が3体の生け贄を捧げて召喚された時、相手フィールド上のモンスターを全て破壊する！」

『ギルフォード・ザ・ライトニング』が剣を抜き、振り下ろすと2つの雷が俺の場のモンスターを貫いた。

「更に墓地の戦士族モンスターが増えた事により、『ギガンテック・ファイター』の攻撃力が更にアップ！」

『ギガンテック・ファイター』
攻撃力３６００→３９００

「バトル！『ギガンテック・ファイター』でダイレクトアタック！」

「手札の『バトルフェーダー』の効果発動！このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを終了させる！」

俺の場に『バトルフェーダー』が現れてベルを鳴らし、『ギガンテック・ファイター』を退かせる。

『バトルフェーダー』
レベル１　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力０
守備力０

「カードを１枚伏せて、ターンエンドだ」

俺
ＬＰ２１００　手札３枚

モンスター
『バトルフェーダー』
（守備力０）

伏せ　１

城之内
ＬＰ２５００　手札１枚

モンスター
『ギガンテック・ファイター』
（攻撃力３９００）
『ギルフォード・ザ・ライトニング』
（攻撃力２８００）

魔法・罠
伏せ　３枚

だんだん、しんどくなってきたな……

「俺のターン、ドロー！魔法カード『強欲な壺』発動！カードを２枚ドロー！」

これなら！

「俺はチューナーモンスター『ジャンク・シンクロン』を召喚！更に『ジャンク・シンクロン』の効果で墓地の『闇の仮面』を特殊召喚！」

『ジャンク・シンクロン』
レベル３　闇属性
戦士族・チューナー

攻撃力１３００
守備力５００

『闇の仮面』
レベル２　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力９００
守備力４００

「『闇の仮面』！んなカードいつの間に！」

「さっきの雷に打たれたセットモンスターですよ。更に俺は魔法カード『レベル・アワード』を発動！『ジャンク・シンクロン』のレベルを５に変更！」

『ジャンク・シンクロン』
レベル３→５

「レベル１『バトルフェーダー』とレベル２『闇の仮面』にレベル５となった『ジャンク・シンクロン』をチューニング！
８つの絆の証が揃いし時、現れる魔神よ
その力でその名の如く破壊者となれ！シンクロ召喚！現れろ！『ジャンク・デストロイヤー』！」

『ジャンク・デストロイヤー』
レベル８　地属性
戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２６００
守備力２５００

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスターの数までフィールド上に存在するカードを選択して破壊できる！俺は『ギガンテック・ファイター』と『ギルフォード・ザ・ライトニング』を破壊する！」

『ジャンク・デストロイヤー』が起こした衝撃波で『ギガンテック・ファイター』と『ギルフォード・ザ・ライトニング』が破壊される。

「ぐっ、やるじゃねぇか」

城之内さんのライフは２５００『ジャンク・デストロイヤー』の攻撃が通れば、俺の勝ち。

あの３枚伏せカードの内２枚は多分、攻撃に反応するカードじゃない。

城之内さんなら、既に使っている筈だ。

後１枚が分からないが、経験上『悪魔のサイコロ』の可能性が１番高い。ならば！

「墓地の『ラーニング・エルフ』と『闇の仮面』をゲームから除外して、『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！来い！クシル！」

【クェー！！】

『ダーク・シムルグ』
レベル７　闇属性
鳥獣族・効果

攻撃力２７００
守備力１０００

「バトル！『ジャンク・デストロイヤー』でダイレクトアタック！」

「リバースカードオープン！『悪魔のサイコロ』！」

黒装束に身を包んだ小さい生き物……悪魔が赤いサイコロを持って現れた。

よし！完全に読み通り！

「こいつは相手モンスター1体の攻撃力を出た目で割るトラップカード。行くぜ！ダイスロール！」

悪魔がサイコロが振り、サイコロが転がる。

「出た目は４！よって『ジャンク・デストロイヤー』の攻撃力は２６００÷４の６５０になるぜ。ぐぅ！」

悪魔の力で小さくなった『ジャンク・デストロイヤー』が城之内さんに殴りかかる。

『ジャンク・デストロイヤー』
攻撃力２６００→６５０

城之内
ＬＰ２５００→１８５０

「ならば『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！」

「リバース・カードオープン！」

城之内さんが何かを発動したが、クシルの炎がそれごと城之内さんを喫み込んだ。

「よし！……なんだ……と……」

炎がはれると其処には赤と白を基調とした鎧を着た城之内さんが立っていた。

「俺が発動したのはトラップカード『オーラアーマー』このカードは相手モンスターのダイレクトアタック時にライフを半分支払って半分できるトラップカード。その攻撃を無効にして、俺の場にアーマーモンスターを1体特殊召喚する」

「アーマーモンスター！？」

ヴァロンさんがアーマーモンスターを使う事は知ってたけど、城之内さんもアーマーモンスターを使うのか……完全に計算が狂った。

「そして、このカードで特殊召喚されたアーマーモンスターの攻撃力・守備力は俺のライフと同じになる！」

『オーラアーマー』
（アニメ）
通常罠
効果

相手モンスターが直接攻撃した時、自分ライフを半分支払って発動する。
そのモンスターの攻撃を無効にする。
その後、このカードはモンスターカード（戦士族・アーマー・地・星１・攻／守備？）となり、自分フィールド上に特殊召喚する。
自分フィールド上に表側表示で存在するアーマーモンスターは自分のターンに１体のみでしか攻撃できない。
このカードの攻撃力・守備力は自分のライフと同じになる。

城之内
ＬＰ１８５０→９２５

『城之内』
レベル１　地属性
戦士族・アーマー
攻撃力９２５
守備力９２５

「ぐっ、カードを２枚伏せてターンエンド！」

俺
ＬＰ２１００　手札０

モンスター
『ジャンク・デストロイヤー』
（攻撃力６５０）
『ダーク・シムルグ』
（攻撃力２７００）

魔法・罠
伏せ　３

城之内
ＬＰ９２５　手札２枚

モンスター
『城之内』
（攻撃力９２５）

魔法・罠
伏せ　１

意外な事もあったけど、このまま行けば、あるいは……

「俺のターン！ドロー！俺は『時の魔術師』を守備表示で召喚！」

「うげ！」

城之内さんの場に時計の様な物を内蔵したモンスターが現れた。

『時の魔術師』
レベル２　光属性
魔法使い族・効果
攻撃力５００
守備力４００

「『時の魔術師』の効果発動！タイム・ルーレット！」

城之内さんの掛け声と共に、ルーレットの針が回りだす。

頼むから外れてくれ！

やがて、針の勢いが衰えてきて、止まった。

針が止まった所は髑髏の所だった。

「勝っ「リバース・カードオープン！『確率変動』！」えっ……」

そう言って城之内さんが発動させたのは1ターン目から、ずっと伏せていたカードだった。

「『確率変動』こいつの効果は、コイントスやダイスロール、ルーレット、スロットをもう1度やり直す。ただし、同じ結果にはならねぇ。つまりはだ『時の魔術師』のルーレットで、もう外れは出ない」

「っ！」

『確率変動』（漫画）
通常罠
効果
コイントス・ダイスロール・ルーレット・スロットなどもう1度やり直す。
1度止まった目は出ない。

ルーレットの針が再び回りだす。だが、今回ばかりは完全にどこで止まるかは分かっている。

針が止まった所は当の所だった。

【タイム・マジック】

『時の魔術師』がそう言った瞬間、クシル達が苦しみだして砂になった。

やっぱり、何度見てもキツい……

「更に俺は魔法カード『運命の宝札』を発動！こいつはサイコロを振り、出た目の数だけデッキからカードをドローし、その後、同じ枚数分デッキのカードを除外する。行くぜ！ダイスロール！」

サイコロがまた現れて転がる。

出た数字は

「サイコロの目は5！よって、カードを5枚ドロー！」

「ははは……」

もう渇いた笑いしか出ねぇや。

『運命の宝札』（アニメ）
通常魔法
効果
サイコロを1回振る。出た目の数だけデッキからカードをドローする。
その後、同じ数だけデッキの上からカードをゲームから除外する。

「俺は儀式魔法『黒竜降臨』を発動！手札の『真紅眼の飛竜』を生け贄に『闇竜の黒騎士』を儀式召喚！」

城之内さんの場に黒竜に乗った騎士が現れた。

『黒竜降臨』（アニメ）
儀式魔法
効果
『闇竜の黒騎士』の降臨に必要。
自分の手札・フィールド上からレベル４になるようにモンスターを生け贄にしなければならない。

『闇竜の黒騎士』（アニメ）
レベル４　闇属性
ドラゴン族・儀式
攻撃力１９００
守備力１２００
効果
『黒竜降臨』により降臨。
このカードが裏側守備表示のモンスターを攻撃した場合、ダメージ計算を行わず裏側守備表示のままそのモンスターを破壊する。
また、このモンスターを生け贄にする事で手札またはデッキから『真紅眼の黒竜』１体を特殊召喚する事ができる。この効果によって『真紅眼の黒竜』が特殊召喚されたターン、『真紅眼の黒竜』は攻撃する事ができない。

「バトル！『闇竜の黒騎士』でダイレクトアタック！」

「トラップ発動！『くず鉄のかかし』！相手モンスター１体の攻撃

を無効にする！」

『闇竜の黒騎士』が放った黒炎をかかしが防ぐ。

「ならば！俺でダイレクトアタック！城之内ナックル！」

アーマーを装着している城之内さんが駆け寄って来て、拳を繰り出してくる。

「えっ、ちょ」

「お前は失ったものがある。それを取り戻さない限り、お前は俺達に勝つ事は一生ないぜ」

「どういう意味ゴフッ！」

城之内さんの言葉の意味を聞こうとしたら、ボディブローを決められた。

俺
ＬＰ２１００→１１７５

倒れた俺に背を向けて、城之内さんは自分の場に戻って行った。

「俺は『闇竜の黒騎士』の効果を発動して、『真紅眼の黒竜』を特殊召喚！更に魔法カード『命の水』を発動！墓地から『真紅眼の飛竜』を特殊召喚！更にカードを２枚伏せてターンエンド！」

城之内さんの場に２体の紅い眼の竜が現れたみたいだ。

『真紅眼の黒竜』
レベル７　闇属性
ドラゴン族　通常
攻撃力２４００
守備力２０００

『真紅眼の飛竜』
レベル４　風属性
ドラゴン族・効果
攻撃力１８００
守備力１６００

『命の水』（アニメ）
通常魔法
効果
自分の墓地に存在する攻撃力２０００以下のモンスター１体を選択して発動する。
選択したモンスターを自分フィールド上に特殊召喚する。

俺
ＬＰ１１７５　手札０

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　３

城之内

ＬＰ９２５　手札０

モンスター
『城之内』
（攻撃力９２５）
『真紅眼の黒竜』
（攻撃力２４００）
『真紅眼の飛竜』
（攻撃力１８００）
『時の魔術師』
（守備力４００）

魔法・罠
伏せ　２

「うっ、ぐぅ」

なんとか起き上がるが、同時に勝ち目が無い事を悟る。

城之内さんの場には相棒の『真紅眼』を加えて４体のモンスターと２枚の伏せカード。

対する俺の手札は０でモンスターも居らず、伏せカードも『くず鉄のかかし』を除けば、ブラフ同然のカード……はは、やるだけやったが、所詮俺はこの程度か。

翔に偉そうな口を聞いたが、人の事を言えないな。

「おい「諦めるんじゃねぇ！」な、なんだぁ！」

城之内さんが何かを言おうとしたが、十代の言葉が遮る形となった。

観客席の方を見ると、十代が身を乗り出して叫んでいた。「デュエルを途中で投げ出すんじゃねぇ！デッキにカードが有る限り、デュエルを諦めねぇのがデュエリストじゃねぇのかよ！」

「デッキにカードが有る限り……」

――――――――――――――――――「なんで？なんで諦めずに闘えるの？」

「デュエリストたる者。デッキにカードが有る限り、諦める訳にはいかないんだ！」

――――――――――――――――――

「うっ」

「それにさ、何でそんなにつまらなさそうな顔してやってんだよ！？デュエルってのは楽しむもんだろ？」

「つまらなさそう？楽しむ？」

――――――――――――――――――「『デビル・ドラゴン』の攻撃！！」

「くっ！」

「や、やったー月行義兄さんに勝ったー！！」

「やったじゃねぇか！」

――――――――――――――――――――

「うぅ！」

「もっとがむしゃらにやれば良いじゃねぇか。カイザーとデュエルした時みたいにさ」

「がむしゃらに……「カイザーとデュエルした時……」

――――――――――――――――――――「エヴォリューション・レザルト・バースト！第2打ァ！」

「くっ！受けて立つ！行け！『ダークエンド・ドラゴン』！ダーク・フォッグ！」

――――――――――――――――――――

「……そうか、そういう事か」

カードプロフェッサーの特性上、汚ない裏の事をたくさん見てきた……それのせいかいつの間にかデュエリストとしての闘志やデュエルを楽しむ事を忘れていたな。

「へっ！あいつの方がデュエルについて、よく分かってんじゃねぇか」

だが、今なら城之内さんがさっき言った事がはっきりと分かる。

「おっ！どうやら、思い出したみてぇだな」

昔の俺なら、この程度では諦めなかった……むしろ燃えてたな。

「えぇ。では行きますよ。俺のターン！」

正真正銘のラストターン……この引きに全てが掛かっている。

「ドロー！」

第１８話　闘志（後書き）

貴志
「今日の最強カードはこれだな」

『運命の宝札』（アニメ）
通常魔法
効果
サイコロを１回振る。
出た目の数だけデッキからカードをドローする。
その後、同じ枚数だけデッキの上からカードをゲームから除外する。

鷹
「『天よりの宝札』、『命削りの宝札』に続く宝札と名のついたチートカード。初出はアニメオリジナルの城之内ＶＳヴァロン戦で城之内が使用（だった筈）。手札を増強して、反撃の狼煙となった。その後もマスク・ザ・ロック戦などで使用。同様に反撃の狼煙となった」

貴志
「しかし、ひどい効果だな」

鷹
「まぁ、山札が湯水の如く減るけどな」

第１９話　決着（前書き）

題名通りです。ちょっと、以外な感じですが。

後ちょっとオマケ?付きです。

第１９話　決着

俺
ＬＰ１１７５　手札０

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　３

城之内
ＬＰ９２５　手札０

モンスター
『城之内』
（攻撃力９２５）
『真紅眼の黒竜』
（攻撃力２４００）
『真紅眼の飛竜』
（攻撃力１８００）
『時の魔術師』
（守備力４００）

魔法・罠
伏せ　２

「ドロー！」

これは……最高のタイミングじゃないか。

「魔法カード『命削りの宝札』発動！手札が５枚になるようにドローする。俺の手札は０！よって、５枚ドロー！」

手札に今すぐ出せて攻撃力１８５０以上のモンスターは来なかったか……だが！

「手札の『冥府の使者ゴーズ』と『神禽王アレクトール』をゲームから除外して、墓地の『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！蘇れクシル！」

【クェー！！】

黒い火柱が立ち上がり、クシルが蘇る。

『ダーク・シムルグ』
レベル７　闇属性
鳥獣族・効果
攻撃力２７００
守備力１０００

「更に魔法カード『ダブルアタック』を発動！手札からレベル８の『堕天使アスモディウス』を墓地に捨てる事によってこのターン『ダーク・シムルグ』は２回攻撃をする事ができる！」

これで俺の残りの手札は『カンパラブル・レベル』のみ……

だがたとえ、クシルで城之内さんに攻撃して、『1ドル銀貨』を使われたとしても、2回目の攻撃で城之内さんを倒す事ができる。

伏せカードの1枚が『天使のサイコロ』だとしても、城之内さんの攻撃力じゃ、効果の対象外。

攻撃力を上げてダメージを軽減されても、伏せている『連撃』と合わせれば、合計3回の攻撃ができる。

よし！

「バトル！『ダーク・シムルグ』でアーマー城之内さんに攻撃！ダーク・フレア！」

「へっ！なかなかやるじゃねぇか……だがな、俺は負ける気はこれっぽっちもねぇんだ。リバース・カードオープン！『シフトチェンジ』！更にチェーンして、『レッドアイズ・バーン』発動！」

「『シフトチェンジ』！？それにもう1枚のカードは一体……」

「『レッドアイズ・バーン』は俺の場の『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された時、互いのプレイヤーに『レッドアイズ』と名の付くモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受けさせるトラップカードだ」

『レッドアイズ・バーン』（アニメ）
通常罠
効果
自分フィールド上の『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された時、お互いのプレイヤーは『レッドアイズ』と名の付くモン

スターの元々の攻撃力分のダメージを受ける。

俺の疑問に城之内さんが答える。

『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された時……まさか！？

「更に『シフトチェンジ』の効果によって、『ダーク・シムルグ』の攻撃対象はアーマーの俺から『真紅眼の黒竜』に変更！頼むぜ……『レッドアイズ』！！黒炎弾！！」

城之内さんとクシルが吐いた炎の間に『真紅眼の黒竜』が割り込み、黒炎弾を放った。

クシルの炎と『真紅眼の黒竜』の炎がぶつかる。

「ぐっ、押し込め！クシル！」

【クェー！！！】

クシルが更に力を込めて、炎を大きくして、『真紅眼の黒竜』の炎を押し込んで行き、クシルの炎が『真紅眼の黒竜』を包み込んだ。

「ぐっ！」

城之内
ＬＰ９２５→６２５
『城之内』
攻撃力６２５
守備力６２５

「『レッドアイズ』と名の付くモンスターが破壊された事により、俺達は『レッドアイズ』と名の付くモンスターの元々の攻撃力分のダメージを受ける」

城之内さんの『真紅眼の黒竜』が蘇り、辺り一面に炎を吐いた。

「ぐぁあああ！」

「熱っ！」

俺
ＬＰ１１７５→０

城之内
ＬＰ６２５→０

炎が収まった瞬間、俺と城之内さんのデュエルディスクから、同時にデュエル終了を告げるブザーがなった。

「な、なんと！制裁デュエル最終戦は引き分けです！引き分けで終わりました！」

デュエルが終わった瞬間、観客席から歓声が上がった。

だが、そんな事は今はどうでもよく、俺は

「引き分け？俺と城之内さんが？」

城之内さんとのデュエルで、初めて負けなかった事実がいまいち信じられず、固まっていた。

――――――――――――――――

城之内　Ｓｉｄｅ

「ふぅ～終わった終わった」

「お疲れじゃったの城之内」

デュエル上を後にして、双六の爺さんと合流する。

「まっ、これで遊戯とペガサスからの頼み事は終わりだな」

つい先日、旅に出た遊戯とアメリカに居るペガサスから、貴志の制裁デュエルの相手をして欲しいって言われたから俺は此処に来た。

その時にあいつが自分の失った物に気付かないままなら、容赦せずに倒す様言われてたが、心配する事は無かったみてぇだな。

むしろ、いざという時の為に引き分けを狙う為に入れていたカードに助けられるという間抜けな形になっちまった……俺もまだまだだな。

「あ、あのー済みません」

「ん？どうしたんだ？」

俺達の控え室にデュエルアカデミアの教員が申し訳なさそうに入ってきた。

「じ、実は……」

城之内　Side　out

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「なんで、城之内さんが此処に居るんですか？」

制裁デュエルが終わった後に俺達の処分が言い渡された後に部屋に戻ると、何故か城之内さんが居た。

「いやぁー実はよ。本土の天候の問題で船が出せなくなって、俺達は一泊する事になったんだが、突然の事で部屋が用意しきれないらしくてな。それで、俺は今日だけ此処にお世話になる事になったんだ」

「そういう事ですか……でも、後少しでこの部屋は騒がしくなりますよ」

「ん？なんでだ？」

「この部屋で祝勝会とレポートを合同でやる事になったんですよ」

「うげっ！レポートかよ」

レポートという言葉を聞いた城之内さんが嫌な事を思い出したぜと呟いた。

確か後少しで卒業できるかどうかの瀬戸際に立たされたんだよな。

あの時、何故か9歳の俺も師匠達同様にレポート作成に駆り出されたんだよな……

俺は制裁デュエルの結果が勝ちでも負けでもないから、退学にならない上、レポート無しという事になったんだが、十代達のレポート作成を手伝う事になったんだよな……

俺はレポートに妙な縁でもあるのか？

「お邪魔するぜって、えぇー！！じょ、城之内さん！？」

部屋に入ってきた十代が叫ぶ。

「アニキ何言ってんスかってじょ、城之内さんだー！！」

続いて部屋に入ってきた翔が同じく叫ぶ。

「十代に翔何やっ……」

隼人は固まった。

それから明日香は三沢も来たが、２人共十代達と似たよう反応をしたが、カイザーが来た時にカイザーがうわらばぁ！！と言って驚いた事は此処に明記しておく。

そして、祝勝会の後にレポート作成に取り掛かったのだが……

「おっシャー！！また揃ったぜ！ディメンション・ダイス！レベル４『真紅眼の黒竜』を召喚！」

「ぬわー！またレベル４っスかー！！」

何故か俺達は俺が持ち込んでいた小型版のダンジョン・ダイス・モンスターズをやっていた。

許可を取ってまで、夜出歩ける様にしても、意味無い気がするがまぁ、良いか。

因みに城之内さんが俺達全員に連戦連勝中。

ダンジョン・ダイス・モンスターズで１番出しにくい筈のレベル４モンスターをばんばん出す上、アイコンも必要な物は直ぐに出るという脅威の運を披露している。

十代とカイザーのドロー運最強組すらも、レベル４モンスターは３回に１回出せるかどうかだというのに……

まぁ、十代やカイザーの運も十分凄すぎなんだけど……

俺も１回やったけど、何故かレベル１モンスターすらも出せずにぼ

ろ負けした。

運は……そういや、悪い方だったな俺。

そんなこんなで夜が更けていった。

十代達も自分の部屋に戻って、後は寝るだけだ。

「そういや、今更だが何でドアが無いんだ？」

「1週間前に爆破テロに巻き込まれて吹き飛ばされました」

三段ベットの1番上を陣取った城之内さんの疑問に答える。

因みに俺は1番下だ。

「そう言えば」

「どうした？」

「何でブラック・デュエルディスクを持ってるんですか？」

「ペガサスに渡されてな。簡単に言えば、俺もカードプロフェッサーになったって事だ。まぁ、定職に就ける上、デュエルの事だしな」

「そういう事ですか」

本来なら、ブラック・デュエルディスクは城之内さんが持って然るべき物だしな。

落ち着く所に落ち着いたって事だな。

【ん？そう言えば、遊戯さんは定職に就かずに旅をしてブラブラしてんだよな。それって、まさかニ【それ以上は言ってはならぬ！】ぐが！？】

ゴーズが何かを口走ろうとしたが、アレクが全力で阻止した。

まぁ、後2文字続いてたら……爆発してる所だけどな。

「ふわぁ～もう寝ますか」

目を瞑ると直ぐに睡魔が襲って来た。

第１９話　決着（後書き）

今回は今日の最強カードはお休みです。

デュエルの最後がちょっとぐだぐだでしたね……もっと精進せねば。

第２０話　日常（前書き）

デュエル無しです。

やっとアレクの一人称が安定した。

第２０話　日常

制裁デュエルが終わって早、１週間弱が経った。

今は英語の授業中だが、例によって隣の十代は寝ている。

昨日やっとレポートが終わったのだから眠いのは分かるが、後少しでテストがある……大丈夫なのか？まぁ、５科目のテスト内容よりも、デュエルのテスト内容の方が優先されるから、心配する必要は無いか。

因みにレポートが長引いた理由は、レポート作成中に、ことごとく脱線して他の事……主に遊びになったからだ。

ダンジョン・ダイス・モンスターズや三国〇双やマ〇オ〇ートのテレビゲーム等、色々やった気がする。

俺自身、同年代とあまり遊んだ事が無いせいか、止めるどころかノリノリだったし……

ペガサスミニオン内では俺と年が同じぐらいの人は居なかったもんなぁ～

月行義兄さん達は俺より７つ以上は年が上。弟妹達ともかなり年が離れていて確か、俺より６つ以上は年が下。

師匠達もかなり年が上だし、モクバさんやレベッカさん、レオンさんとは年が近いけど会う機会なんて殆ど無い。エドやヨハンもまた然り。

今思うとペガサス様はそういう所を心配してくださったのかもしれない。

「む、時間か。それでは授業を終了する」

いつの間にか授業が終わってたな。チャイムがなってるし。

「アニキ、起きてくださいっス！次は体育っスよ！」

「ん？おっ、国語の授業終わったのか！」

「ああ。次は体育で確か、野球をやるんだったな」

「おしっ！じゃあ早く行こうぜ」

―――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――

「仕方ない。例によってじゃんけんで決めるか」

「そうだな。でも、今度は負けないぜ！」

体育の授業はレッドとイエローが合同で野球。ブルーは自由という内容だったのだが、少し問題が起こった。

俺と十代……どっちがエースで４番をやるかだ。

覗き騒動の日のサッカーやその次の体育の授業で分かったのだが、

俺と十代の運動能力はレッド内……いや、学園内でずば抜けている上、ほぼ拮抗している。

だから、体育の時間で寮対抗で試合をする時はこういうポジションの取り合いになる。

剣道や柔道で言うなら、大将とかだ。

翔がどっちかが4番でもう片方がエースで良いんじゃ……と言ったが、速攻で俺と十代に却下された。

どっかの清〇と桑〇じゃ無いんだ……それに片方だけだとなんか負けた気になる。

十代も多分、同じ考えだと思う。

まぁ、そのせいでオーダーを決めるのに結構時間が掛かって、先生に早く決めろ！と言われたんだけど。

「じゃあ行くぞ」

「ああ」

「「最初はグー！じゃんけんぽん！あいこで……しょ！」」

「よっしゃ！俺の勝ち～！」

「負けか……」

くっ！初手でパーを出していれば。

十代が４番　投手に決まると他もスラスラと決まり、俺は１番　ライトになった。

プロ野球の球場と比べても遜色のない室内運動場でイエローの選手が守備につく。

「んじゃ、行ってくるわ」

ヘルメットを被ってバットを持ち、バッターボックスに立つ。

「さてと、挨拶変わりにボールをスタンドに叩き込みますかね」

軽く挑発をするも、相手は気にする様子は無い。

いくらかサインに首を振った後に投げられたボール目がけてバットをフルスイングする。

結果は見るまでもｎ

「アウトー！」

あるれぇーキャッチャーフライだ。

【マイブラザー……ちょっとダサ過ぎるぜ……】

【ゴーズの言う通りね】

【１球目は様子を見るべきでしたな】

【打ち上げるなんてね～】

【クッ、クェ～】

【クシルはなんて言ってんだ？】

【情けない。それでも僕の相棒かよ……と】

うぅ、返す言葉もございません。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ちょっと待ってくれ」

試合も9回の表に突入し、レッド寮の攻撃で先頭の8番、9番が連続でアウトになった後、ヒットと連続フォアボールでツーアウト満塁になった上、十代の5回目の打席が回って来た頃、三沢が遅れてやってきた。

オーダーを見た時に居なかったから、どうしたんだろうかと思っていたんだが、この場面で来るか。

三沢はイエロー内で唯一、俺と十代に対抗できる人物だからな……こりゃ交代だな。

案の定、三沢がピッチャーマウンドに立った。

「行くぞ！十代！」

「おう！俺のバットでこの試合を決めてやる！」

確かに今は７－４で俺達がリードしている。

更に十代の今までの成績は４打数４安打４打点４本塁打と絶好調だ。

ついでに言うと失点は全てエラー絡みで自責点は０だ。

因みに俺の成績は５打数４打数３打点３本塁打。

最初のキャッチャーフライがなぁ……はぁ。

「そして、お前と貴志と翔は俺の言いなりになるのだ！」

今なんかとんでもない言葉を聞いたぞ！三沢の奴、何言いだしてんだ！？

「ああ、いいぜ！俺のバットでお前のボールをスタンドに叩きこんでやるぜ！」

そう言いながらホームラン予告をする十代の後ろ……というより背景？が燃え上がり、更に龍の姿が見える。対する三沢の背景？も燃え上がり、虎の姿が見える。って、ちょっと待て！スポコンみたいな流れだが、十代！お前、以前剣道の時に太刀筋を見切られて負けた事あるだろうがぁぁぁ！！

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

【クリクリクリ、クリ～】

【ハネクリボーはなんて言ってんだ？ハニー】

【情けない。それでも僕の相棒かよ……って、言ってるわ】

あの後、十代は3球3振という俺のホームラン予告しといて、結果がキャッチャーフライに並ぶ醜態を晒した上、借りを返そうとわざと3連続でフォアボールを出して同じ状況を作った挙句、三沢に逆転サヨナラ満塁ホームランを打たれた。

さっきのはそれを見たハネクリボーの感想だ。

十代はそれに返す言葉もねぇと零した。

「さぁ、十代、貴志、翔。約束通り、俺の言いなりとなってもらうぞ」

「うぅ、分かったけど、一体何すんだ？言っとくけど、俺達金無いぜ」

「安心しろ。少し手伝って貰いたい事があるだけだ。それじゃあ放課後にな」

手伝いねぇ……一体なんなんだろうな。

【ん？わざわざ違う寮のマイブラザーや十代に頼むって事は三沢の

奴は、イエロー寮内に友達が居【それ以上は言わぬ方が良かろう。
主達の方が頼みやすいからという理由かもしれぬ】……そうだな】

最近、ゴーズの失言が多い気がするな……

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「邪魔するよー」

「おう、待っていたぞ」

そこは邪魔するなら、帰ってーじゃないのか……言われたら言われたらで即、帰ったのに。

壁に色々、書いてんな。え〜と、デュエル理論か……フム、中々興味深い内容だな。

「それで？俺達は何をすれば良いんだ？」

「お前達にはこの白のペンキで壁を塗り潰すビック・バンを手伝って貰いたい」

「そう言う事か……なら、場所を分担してやるか」

「ああ、頼む」

４つのエリアにわかれて作業を始める。

「しかし、かなりよくできた理論だな……！！」

【どうしたマイb！！】

【何かあっt！！】

【主よ。真面m！！】

【何かあったの～】

【クゥ～ェ～？】

見なかった事……いや、忘れよう。

他のデュエル理論の字よりも太く大きい字で端っこにピケルサイコー＼(^O^)／と書いてあった事は……

【これで三沢にロリコン疑惑が浮上したな】

あー聞こえない。聞こえない。

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

一一一一一一一一一一一一一一一一一一一

その後、ペンキ塗り立ての為に部屋で眠る事ができなくなった三沢（十代により、財布に大打撃を受けた）を連れて俺達はレッド寮に帰って来た。

三沢は部屋の人数の事もあるので、俺の部屋に泊まる事になった。

デュエル理論について話せるのは十代達じゃ正直、無理だから、語り合うのに絶好の機会な。

知識はいくら得ても損は無いからな。

「あーちょっと待ってくれ」

先日新たに取り付けられたドアを3回ノックする。

中から、カカカ、ガシャン！キュイーン、ボシュ！という効果音と射出！というニ〇動ゆっ〇りの声の後、罠が解除されるデデーンという効果音がした。

「よし」

「いや、待て！一体何がよしなんだ！？」

「色々」

「十代達は何とも思わないのか？」

「もう慣れたな」

「そうっスね」

「そ、そうか」

2人の反応に三沢が驚く。まぁ、普通はそうだよな。

【常識人　しかし残念　ロリコンだ　ゴーズ心の川柳】

【流石ねゴーズ。的を得ているわ】

【でも、文字数的に常識人は変えたいんだよな〜】

【なら、早く私達の家に帰って考えましょ♪】

突っ込みは一切しないぞ突っ込みは……これは完全にスルーさせてもらう。

――

「むっ……」

三沢と寝るまでデュエル理論について語り合った後、眠りについたが、携帯の着信音で目が覚める。

「まだ3時半だぞ。一体誰だ……って、月行義兄さんか。ここで出るのはまずいな」

多分、闇のプレイヤーキラーの事だから、三沢に聞かれるのはまずい。

部屋から一旦出ないとな。

部屋を出た後、少し待ってくださいと義兄さんに言って足早に寮から離れる。

「義兄さん。お久し振りです」

港の近くまで来た所で義兄さんに言った。

「こんな時間に済まない。以前言われた闇のプレイヤーキラーについて分かった事があったから、電話させて貰ったよ」

「義兄さんもお忙しい身なのですから、時間についてはお気になさらず。それで、何が分かったのですか？」

「分かった事と言っても、３つだけだけど、タイタンと闇のプレイヤーキラー彼等２人は、裏のデュエル界ではそれなりに有名なデュエリストという事。その人の給料６ヶ月分で雇われ、偽物の千年アイテムを使って、闇のデュエルを行っていたという事。そして」

義兄さんは若干、言うのを躊躇う様に言葉を切った。

「そして、どうしたんですか？」

「２人共、現在は行方不明になっている事が分かった事だね」

「そうですか……情報ありがとうございました」

「気にする事は無い。私達ペガサスミニオン全員に関係のある事だからね。ああ、それはそうと貴志」

「何です？」

「学園生活は楽しいかい？」

「ええ、とても楽しいですよ」

「それは良かった。じゃあな貴志」

義兄さんはそう言って電話を切った。

「2人共、行方不明か……潰す機会が無くなったな」

タイタンは闇に呑まれた。なら、闇のプレイヤーキラーも闇に呑まれたと考えるのが普通か……

てか、あいつ等を雇ったのは一体誰だ？給料6ヶ月分だろ……

確か、クロノスが金欠になっているという噂を聞いたな。今度、揺さぶりをかけてみるか……

そこまで考えて顔を上げると万丈目が辺りを窺う様にして港の方に向っているのが見えた。

「何やってんだあいつ？」

【さぁ？分かりませぬが、何やらデッキを持っているようですな】

アレクがそう言った瞬間、俺達は顔を見合わせる。

「【まさか】」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「こんな所で何やってんだ？万丈目？」

俺の言葉に万丈目がビクッと震える。

まさかと思ったが、そのまさかとはな。

三沢は今日、万丈目と寮入れ替えデュエルをすると言っていた。

それで、万丈目が人目の無い時間に辺りをキョロキョロと見渡しながらデッキを持って港に来た。

そして、デッキを海に捨てようとした。

完全に黒だな。

「て、天道　貴志！な、何でお前が此処に居る！」

万丈目がしどろもどろになりながらも、言い返して来る。

「まぁ、色々あってな。万丈目の方こそどうしたんだ？デッキを持って港に来たりして。ハッ！まさかお前には夜な夜な女子寮に侵入

して明日香のカードを盗み、此処でそれを眺めるという変態チックな趣味でもあったのか！？」

「そんな趣味あるわけなかろう！それに、このカードは天上院君のではなく、三沢の……」

そこまで言って万丈目がしまったと言わんばかりの顔をして喋るのを止めた。

いくらなんでもチョロ過ぎるぞお前……肯定したらしたで問題だけど。

さて、三沢のデッキを取り戻さないといけないけど今の万丈目じゃデュエルで取り戻すより、エリート意識を攻めた方が良いな。

「三沢のデッキを捨てようとしたお前に忠告をしよう」

「忠告だと？」

「ああ、カードを捨てる。そんな事をした時点でお前はデュエリストとしても、人としても終わる。そして、真の負け犬となるだろうな」

「俺が負け犬だと！？」

万丈目が俺を睨み付けて来るが、構わず続ける。

「だってそんな手を使っている時点で実力で勝てないと言ってる様なもんじゃないか。正直言って、イカサマを行ったグールズにすら劣るんじゃないのか？フッ、哀れなもんだな」

「黙れ！黙れ！デュエルだ……今すぐ俺とデュエルしろ！その言葉を撤回させてやる！」

「お互いデュエルディスクはおろか、デッキすら無いのにか？」

「ぐっ……」

俺の突っ込みに万丈目が黙り込む。

「……」

「……」

「なら、今日の午後9時に此処でデュエルって事で良いか？」

若干、変な空気になった中で口を開く。

「……分かった」

「ああ、そうそう。デュエルはデュエリストが行うもの。三沢のデッキは返して貰おうぞ」

「チッ！受け取れ」

万丈目から三沢のデッキを受け取る。

さてと、取り返したのは良いがどうやって元の位置に戻そうか忍び込む訳にはいかないし……そうだ。

「アレク済まんが頼む」

【やはり某の出番ですか】

万丈目が去った後に、アレクを呼ぶ。

「三沢のデッキを部屋に戻してやってくれ」

【承知ですが、１つよろしいですかな？】

「何だ？」

【何故あのような挑発するような手を？主なら、力づくで取り返せたのでは？】

「ペガサスミニオンに成り立ての頃の俺を見てるみたいだからかな」

【ほう。主にもそのような頃があったのですか】

「すぐに義兄さん達に叩き直されたけどね。ペガサス様はそれを見越した上で俺をペガサスミニオンにしたみたいだけど」

あれはきつかった……徹底的に負かされたからな。

たった１０日で３００回は負けたと思う。

あれは地獄だな。

その後、三沢が別に６つのデッキを持っている事が判明し、デッキを取り戻した苦労が水の泡になった事はここに明記しておく。

苦労して
　取り戻したが
　　水の泡
貴志心の川柳

【そのまんまだな。マイブラザー】

それぐらい分かってるさ……

第２０話　日常（後書き）

鷹
「今日の最強カードはお休みです」

貴志
「またかよ……」

鷹
「今回デュエル無かったし……」

貴志
「まぁ、良いか。それでは感想やアドバイス等、お待ちしております」

第２１話　ＶＳ万丈目（前書き）

何とか書けました。

次はＳＡＬか……何時になったら冬休みや考えてる過去編に入れるのやら……飛ばすのもなぁ……

第２１話　ＶＳ万丈目

―港―

「さてと、そろそろ時間か……」

時間を確認し、腰のデッキケースからデッキを取出し、シャッフルしてからディスクにセットする。

【で？来んのかあいつは？】

【確かに。昼の様子からするともしもという事があるやも……】

三沢とのデュエルに負けた後、あいつはどこかに走り去って行った。

ゴーズ達はそこを心配しているんだろうな。だが

「来るさ。絶対にな」

あいつ程プライドが高い奴があれだけ侮辱されれば、挽回したがる筈だ。

負けた後なら尚更な……

「……」

「おっ、来たか」

万丈目が来たので、ゴーズ達との会話を打ち切り、万丈目の方を向

く。

「……」

「格下と侮っていた相手に負け続ける気分はどうだ？万丈目？」

気が沈んでいる万丈目を挑発する。

「っ！黙れ！ここでお前を倒した後は遊城十代と三沢大地を必ず倒す！」

淡々とデッキをセットしていた万丈目が憤慨してディスクを構える。

これで良い。やる気が無い状態じゃ意味が無いからな。でも

「エリート意識に捕われている今のままだと、俺や十代達には絶対に勝てないぜ」

「ほざけ！俺は絶対に勝つ！」

「「デュエル！」」

俺　ＬＰ４０００
万丈目　ＬＰ４０００

「先攻は貰う。ドロー！俺は魔法カード『打ち出の小槌』（アニメ版）を発動！このカードと手札のカード２枚をデッキに戻してシャッフル。その後、カードを３枚ドロー！」

初手から手札交換か……それにしても『打ち出の小槌』の効果ってひでぇな。

「俺は永続魔法『前線基地』を発動！『前線基地』の効果により、俺は1ターンに1度、手札からレベル4以下のユニオンモンスター1体を特殊召喚できる！俺は『Z－メタル・キャタピラー』を特殊召喚！」

万丈目の場に黄色に塗装された戦車もどきが現れた。

『Z－メタル・キャタピラー』
レベル4　光属性
機械族・ユニオン
攻撃力1500
守備力1300

「更に『X－ヘッド・キャノン』を召喚し、『Z－メタル・キャタピラー』の効果発動！『Z－メタル・キャタピラー』を『X－ヘッド・キャノン』に装備して『X－ヘッド・キャノン』の攻撃力と守備力を600ポイントアップ！」

万丈目の場に両肩に砲台を装備したモンスターが現れ、『Z－メタル・キャタピラー』の上に乗った。

『X－ヘッド・キャノン』
レベル4　光属性
機械族　通常
攻撃力1800
守備力1500

『Ｘ－ヘッド・キャノン』
攻撃力１８００→２４００
守備力１５００→２１００

「カードを1枚伏せてターンエンドだ！」

万丈目
ＬＰ４０００　手札2枚

モンスター
『Ｘ－ヘッド・キャノン』
（攻撃力２４００）
（『Ｚ－メタル・キャタピラー』を装備中）

魔法・罠
『前線基地』
（永続魔法）
『Ｚ－メタル・キャタピラー』
伏せ　１

最初から飛ばすな。だが

「万丈目。1つ宣言しよう」

「宣言？一体何をだ？」

「このデュエル。お前からダメージを受けずに俺は勝つ」

「俺を馬鹿にしているのか？そんな事させる筈なかろう！」

「それはどうかな？エリート意識に拘っている今のお前に対してなら、そんな事は難しい事じゃないと思うがな」

こいつの考え方を変えるには、プライドを徹底的に叩き潰すのが手っ取り早い。

宣言された上での完封負けするのが１番こいつに堪えるだろう。

「さてと、俺のターンになったんだったな。ドロー！俺は『天使の施し』を発動。デッキからカードを3枚ドローし、手札からカードを2枚捨てる」

フム。

「俺は『バイス・ドラゴン』を特殊召喚！このモンスターはレベル５のモンスターだが、相手フィールド上のみモンスターが存在する場合、特殊召喚できる！まぁ、この効果で特殊召喚した場合、このモンスターの攻撃力と守備力は半分になるけどな」

『バイス・ドラゴン』
レベル５　闇属性
ドラゴン族・効果
攻撃力１０００
守備力１２００

「ふん！そんなモンスターで何ができる！」

小さい『バイス・ドラゴン』を見て万丈目が吠える。

「何がって言われてもねぇ……色々としか言い様がない」

シンクロ素材にするとか、上級モンスターの生け贄にするとかぐらいか？まぁ、良い。

「俺は更に魔法カード『ワン・フォー・ワン』を発動！手札からモンスター１体を墓地へ送り、デッキからレベル１のモンスター１体を特殊召喚する。俺は手札から『ゾンビ・キャリア』を墓地へ送り、デッキから『ダークシー・レスキュー』を特殊召喚！そして、墓地の『ゾンビ・キャリア』の効果発動！手札のカード１枚をデッキの１番上に置き、このモンスターを特殊召喚！」

『ダークシー・レスキュー』
レベル１　闇属性
機械族・効果
攻撃力０
守備力０

『ゾンビ・キャリア』
レベル２　闇属性
アンデット族・効果
攻撃力４００
守備力２００

「『ゾンビ・キャリア』だと！？まさか……」

「そのまさかさ。レベル５『バイス・ドラゴン』とレベル１『ダークシー・レスキュー』にレベル２『ゾンビ・キャリア』をチューニ

ング！
８つの絆の証が揃いし時、現れる暗黒の龍よ
その力で相手に闇による終焉を与えよ！シンクロ召喚！出でよ！『ダークエンド・ドラゴン』！」

『ダークエンド・ドラゴン』
レベル８　闇属性
ドラゴン族・シンクロ／効果
攻撃力２６００
守備力２１００

「シンクロ召喚に使用され墓地へ送られた『ダークシー・レスキュー』の効果により、デッキからカードを１枚ドロー！更に『ダークエンド・ドラゴン』の効果発動！攻撃力と守備力を５００ポイント下げて、相手フィールド上のモンスター１体を墓地へ送る。闇に沈め、『Ｘ－ヘッド・キャノン』！」

『ダークエンド・ドラゴン』の胴体にある口から放たれた黒いブレスにより、『Ｘ－ヘッド・キャノン』のみならず、『Ｚ－メタル・キャタピラー』も呑み込まれて姿を消す。

『ダークエンド・ドラゴン』
攻撃力２６００→２１００
守備力２１００→１６００

「ユニオンによって破壊耐性ができたと言っても、こんなもの……呆気ないな」

「くそっ！」

「さて、がらあきの本陣突破と行きますか！『ダークエンド・ドラゴン』でダイレクトアタック！ダーク・フォッグ！」

『ダークエンド・ドラゴン』の顔の方にある口から放たれた黒いブレスが万丈目に直撃する。

「ぐわあぁぁぁあ！！！」

万丈目
ＬＰ４０００→１９００

「モンスターとカードを1枚ずつ伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ４０００　手札１枚

モンスター
『ダークエンド・ドラゴン』
（攻撃力２１００）
伏せ　１

魔法・罠
伏せ　１

万丈目
ＬＰ１９００　手札２枚

モンスター
無し

魔法・罠
『前線基地』
（永続魔法）
伏せ　１

「ぐっ、俺のターン！ドロー！俺は『前線基地』の効果で『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』を守備表示で特殊召喚！」

万丈目の場に『オシリスの天空竜』を小さくし、機械化したようなモンスターが現れた。

『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』
レベル４　光属性
機械族・効果
攻撃力１５００
守備力１６００

「俺はカードを1枚伏せて、魔法カード『命削りの宝札』を発動！手札が5枚になるようにカードをドロー！そして、伏せた『打ち出の小槌』を発動！このカードと手札のカード3枚をデッキに戻し、カードを4枚ドロー！」

怒涛の手札交換だな。さて、どうなるか……

「リバース・カードオープン！『ゲットライド！』このカードの効果により、俺は墓地のユニオンモンスター『Ｚ－メタル・キャタピ

ラー』を『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』に装備！更に魔法カード『死者蘇生』を発動！『Ｘ－ヘッド・キャノン』を特殊召喚！」

『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』
攻撃力１５００→２１００
守備力１６００→２２００

『Ｘ－ヘッド・キャノン』レベル４　光属性
機械族　通常
攻撃力１８００
守備力１６００

「そして、『Ｘ－ヘッド・キャノン』、『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』、『Ｚ－メタル・キャタピラー』をゲームから除外して『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』を特殊召喚する！」

『Ｚ－メタル・キャタピラー』の上に『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』が乗り、更にその上に『Ｘ－ヘッド・キャノン』が乗って１台の戦車が現れた。

『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』
レベル８　光属性
機械族・融合／効果
攻撃力２８００
守備力２６００

「『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』か……」

「『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』は手札を１枚捨てる事で相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊できる。俺は手札を３捨て

て、貴様の場のカード全てを破壊する！」

「チェーンしてトラップ発動『和睦の使者』。このターン俺に発生する戦闘ダメージは０になる」

「チッ！面倒なカードを」

『Ｘ－ヘッド・キャノン』の肩の砲台、『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』の口、『Ｚ－メタル・キャタピラー』のキャタピラ部分から放たれた光線が俺の場のカードを貫く。

「破壊され、墓地に送られた『クリッター』の効果発動。デッキから、『ジャンク・シンクロン』を手札に加える」

「カードを１枚伏せてターンエンドだ」

俺
ＬＰ４０００　手札２枚

モンスター・魔法・罠
無し

万丈目
ＬＰ１９００　手札１枚

モンスター
『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』
（攻撃力２８００）

魔法・罠
『前線基地』
（永続魔法）
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！俺は『ジャンク・シンクロン』を召喚！更に『ジャンク・シンクロン』の効果で墓地から『ドッペル・ウォリアー』を特殊召喚！」

俺の場に現れた『ジャンク・シンクロン』が地の底から黒服の男性を引っ張り出す。

『ジャンク・シンクロン』
レベル３　闇属性
戦士族・チューナー
攻撃力１３００
守備力５００

『ドッペル・ウォリアー』
レベル２　闇属性
戦士族・効果
攻撃力８００
守備力８００

「ぐっ、またシンクロ召喚か！？」

「ああ。それもお前のモンスターを倒せる力を持つモンスターをな。行くぞ！レベル２『ドッペル・ウォリアー』にレベル３『ジャンク・シンクロン』をチューニング！

５つの絆の証が揃いし時、現れる戦士よ
戦友の力を結集し、己の力とせよ！シンクロ召喚！叩き潰せ！『ジャンク・ウォリアー』！！」

『ジャンク・ウォリアー』
レベル５　闇属性
戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２３００
守備力１３００

「更に『ドッペル・ウォリアー』シンクロ召喚の素材として墓地に送られた場合、『ドッペル・トークン』２体を特殊召喚できる！現れろ『ドッペル・トークン』！」

『ドッペル・ウォリアー』が居た場所に『ドッペル・ウォリアー』を小さくしたモンスターが２体現れる。

『ドッペル・トークン』？
レベル１　闇属性
戦士族　トークン
攻撃力４００
守備力４００

『ドッペル・トークン』？
レベル１　闇属性
戦士族　トークン
攻撃力４００
守備力４００

「ふん！そんな雑魚で一体何ができる！」

「……さっき言った事を少し訂正しよう。その態度も直さない限り、お前は俺達には決して勝てない！」

「何！？」

「『ジャンク・シンクロン』はシンクロ召喚に成功した時、自分フィールド上に存在するレベル２以下のモンスターの攻撃力の合計値分攻撃力がアップする効果を持っている。つまり、『ジャンク・ウォリアー』の攻撃力は８００ポイントアップする！」

『ジャンク・ウォリアー』
攻撃力２３００→３１００

「攻撃力３１００だと！？」

さて、仕上げに入るか。

「魔法カード『左腕の代償』を発動！手札を全て捨て、デッキから『蜘蛛の糸』を手札に加え、発動！お前の墓地の『命削りの宝札』を手札に加え、当然発動。手札が５枚になるように、カードドロー！」

ジャストで行けるけど、最後が締まらないぞこれ……まぁ、しょうがないか。

「手札から『サイクロン』を発動！伏せカードを破壊する！」

セットカードは『リビングデッドの呼び声』か……

「更に手札の『グローアップ・バルプ』を墓地へ送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！更に『グローアップ・バルプ』の効果発動！デッキの1番上のカードを墓地へ送り、特殊召喚！」

『クイック・シンクロン』
レベル５　風属性
機械族・チューナー
攻撃力７００
守備力１４００

『グローアップ・バルプ』レベル１　地属性
植物族・チューナー
攻撃力１００
守備力１００

モンスターゾーンが全部埋まったけど何だこれ？これが『ターボ・ウォリアー』や『ジャンク・アーチャー』とかを持ってない奴の末路か！？こんだけ居て実質シンクロ召喚できないって一体……

「バトル！『ジャンク・ウォリアー』で『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』に攻撃！スクラップ・フィスト！」

『ジャンク・ウォリアー』が『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』が放つ砲弾を腕に纏わせた『ドッペル・トークン』の力で防ぎながら、接近する。

そして、『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』の横に回り込むと『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』の『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』の部分を右腕で貫いた。

バランスを崩した『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』に左腕を叩き込み、止めを刺した。

「ぐぅ！」

万丈目
ＬＰ１９００→１６００

「終わりだ！『ドッペル・トークン』２体と『クイック・シンクロン』、『グローアップ・バルプ』でダイレクトアタック！」

『ドッペル・トークン』が左右から、『クイック・シンクロン』が正面から、『グローアップ・バルプ』が背後から万丈目に襲い掛かる。

「う、うわぁあああ！！！」

万丈目
ＬＰ１６００→１２００→８００→１００→０

「俺の勝ちだな」

デッキをケースに戻し、万丈目に近づく。

「クソッ！クソクソクソ！何故だ！？何故俺は勝てないんだ……」

「万丈目……いくつか聞く事がある。まず、お前は何の為にデュエルしてるんだ？」

「どういう意味だ！？」

「2人の兄」

「！！」

俺がそう言うと万丈目は目を見開き、驚いた。

「1人は財界、もう1人は政界で成功を治めている。当然、その2人の弟であるお前はデュエルの世界で頂点を取るように言われて来た……違うか？」

「何故それを……」

「俺はそれなりに情報通でね。金持ちの事は大体分かる」

少しＭｒ．クロケッツの力を借りたけどな。

「そして、お前のエリート意識もそこに起因しているんじゃないのか？幼い頃から周りにちやほやされて天狗になり、周りには自分を叩き潰せる人が居なかった……違うか？」

「……っ！」

思い当たる事があるのか、万丈目は黙り込んだ後、顔を歪めた。

「これを機に自分を見直すんだな。何の為にデュエルをしているかという事も含めてな」

そしてはい上がれとまでは言わずに背を向ける。

こいつなら、言う必要もなく、はい上がって来るという予感のよう

なものがある。

まぁ、実際はい上がるかどうかはこいつ次第だけどな。

「待て！1つ聞かせろ」

「何だ？」

「お前は何の為にデュエルをしてるんだ？」

「俺か？」

まさか、俺の理由を聞いてくるとはな。

だが、答えは単純明快ただ1つ。

つい最近まで目が曇っていて見失っていた事だが……

「俺はある人を越える為だ。俺が最も尊敬する人であり、俺に強さを教えてくれた人。まだ見えぬ遥か先の頂（いただき）に居るその人を俺の信じる相棒達と共に越える。それが今の俺がデュエルをする理由だ」

まぁ、その頂は本当に果てしなく遠いけどな……

だが、いつか絶対に……越えてみせる！こいつらと共にな。

【じゃあ、俺達をデュエルに出せよ】

【【【同感／ね／だな／だね～】】】

【クックエ、クックェー
（全く、その通りだよ）】

聞こえない
　聞こえないったら
　　聞こえない

【下手な川柳だな】

【【【同感／ね／だな／だね～】】】

【クックエ、クックェー
（全く、その通りだよ）】

最後くらい決めさせてくれよ……

第２１話　ＶＳ万丈目（後書き）

ゴーズ
【冥府の剣　斬撃剣！！】

カイエン
【冥府の舞　斬滅剣！！】

鷹
「うわっと！？何すんのいきなり」

ゴーズ
【俺達にも出番を寄越せ！！】

カイエン
【そうね。ゴーズと２人っきりっていうのも良いけれど、出番が無いのは嫌ね】

鷹
「アレクの方が出番無いだろ！それに、ゴーズお前に関しては何回か視点があったろうが！」

ゴーズ
【シャラープ！！あいつはあいつで俺達精霊の中でも、長老的な存在で冷静じゃなくなった主を冷静にさせたり、他の小説の感想にお邪魔してんじゃねぇか！！それに、前も言ったけどデュエル中の俺達の扱い酷すぎだろうが！？】

アスディ

【そんな事言ったら、今まで名前しか出てないマルスはどうなんの？】

鷹・ゴーズ・カイエン
「【【あっ……】】」

鷹
「（良し！よくぞ言ってくれた！）」

アスディ
「まぁ、でも僕も扱いには不満があるんだよね～羽根をもがれたし」

鷹
「ギクッ！！」

アスディ
【てな訳で皆でこの作者（アホ）を殺っちゃおう～】

ゴーズ・カイエン・クシル
【【【おー！！／クエ～（殺っちゃうデ～ス！】】】

鷹
「ちょっ！クシルお前は優遇して……ギャー！！」

貴志
「あいつら何やってんだ？」

アレク
「大方、自分達の扱いが気に入らぬのでしょう。作者殿も大変なのですから、某は不満はありませぬが……（こう言ってれば、出番が増える事間違い無し！！）」

貴志
「何かアレクから黒いオーラが出てんな……まぁ、それはさて置き、今日の最強カードは……これで良いのか？」

『ＸＹＺ－ドラゴン・キャノン』
レベル８　光属性
機械族・融合／効果
攻撃力２８００
守備力２６００
『Ｘ－ヘッド・キャノン』＋『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』＋『Ｚ－メタル・キャタピラー』
自分フィールド上に存在する上記のカードをゲームから除外した場合のみ、エクストラデッキから特殊召喚する事ができる（『融合』魔法カードは必要としない）。このカードは墓地から特殊召喚できない。自分のメインフェイズ時に手札を１枚捨てる事で、相手フィールド上に存在するカード１枚を破壊する。

貴志
「『Ｘ－ヘッド・キャノン』、『Ｙ－ドラゴン・ヘッド』、『Ｚ－メタル・キャタピラー』の３体が自分フィールド上に存在している時にそれらを除外してはじめて出せるモンスターだな。正規召喚さえすれば、蘇生はできないが帰還はできる。全く関係無いが作者がＤＳソフトのスピリット・サモナーで何故か切り札にしていたモンスターだな。アムナエル戦の時に『次元融合』を使って無理矢理召喚したりと、やりたい放題だったな」

本当は最強カードは『ＶＷＸＹＺ』にしようと思ったけど、長くなりそうだから出さなかったという裏話があったり無かったり……

第２２話　ＳＡＬ（前書き）

短めデュエル無しです。

第22話　SAL

「お～い。万丈目～どこだ～」

万丈目の名前を呼ぶ十代の声を皆から少し離れた所で聞く。

万丈目とのデュエルから数日、万丈目が突如行方不明になり、心配した十代に召集された俺達は今、万丈目を探している。

探しているのだが……

【言わずにおいて大丈夫なので？】

「男の門出をあまり無闇に語るべきじゃ無いだろ」

俺は万丈目がこの島に居ない事を知っている。何故なら

―――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

―――――――――――――――――

「いきなり呼び出して何の用だ万丈目。またデュエルしたいのか？」

夜遅くに万丈目に港に呼び出された俺は欠伸を堪えながら、万丈目に話し掛ける。

「天道。俺は旅に出ようと思う」

「旅？」

「ああ、お前に言われて気付いたんだ。俺は兄さん達にデュエル界のトップを取れと言われ続けていた。だが、そこに俺の意思は無かったという事に……だから、俺は旅に出る。俺の……俺だけの目標を見つける為に。そして、いずれお前や遊城　十代、三沢　大地にリベンジする為に此処に戻って来る！」

「そうか……頑張れよ。万丈目」

よく見れば、すぐ近くに見慣れない船があった。

おそらく、あれで島から出るつもりなのだろう。

「天道、礼を言う。お前のおかげで俺は自分を見直す事ができる」

「礼はいい。まぁ、せいぜい気を付けてな」

そう言って万丈目に背を向けて帰ろうとしたが、目の前に現れた3体のドラゴンを見て足を止める。

「『ライトエンド・ドラゴン』に『ダークエンド・ドラゴン』、『光と闇の竜』だと……」

目の前に現れた3体のドラゴンを確かに俺は持っている。

しかし、この3体に精霊は宿って居なかった筈……まさか、目覚めたと言うのか！？

【【【……】】】

3体のドラゴンは万丈目の方をずっと見ている。

そういう事か……

「万丈目！餞別だ受け取れ」

「何だこれは？」

「ただの餞別だ。旅に出るお前へのな」

ドラゴン達が万丈目の所に行きたがっているんだ……渡さない訳にはいかないだろう。

今の万丈目なら、渡してもこいつらが酷い扱いを受ける事は無いだろうしな。

【【【……】】】

【主よ。『ダークエンド・ドラゴン』だけ渡してないようですが……】

「いや、だって『ダークエンド・ドラゴン』は1枚しか持ってない上、デッキに入って【【【……】】】分かりましたよ。畜生……」

小声で愚痴りながら、万丈目に『ダークエンド・ドラゴン』のカードを渡す。

「良いのか？」

「そいつらがお前の元に行きたがってるからな。まぁ、使うかどうかはお前次第だがな」

――――――――――――――――――――――――――――――――

というやりとりが3日前にあったからだ。

今思い返すと俺が痛い目にあっただけだな。

【そういえば、主が赤の他人にカードをあげたのは初めてでしたな】

「俺はそういう事が嫌いだからな」

弟妹達等の1部を除き、俺は人にカードをあげた事は1度も無い。

どうも、そういう事は金持ちの子供が友達を作る為に、周りに物をばらまく様に思えてしまう。

世の中十代の様な人ばかりじゃ無いからな。

ブルーの生徒……以前の万丈目の様な人も居る。

まぁ、親しい人の誕生日とか、カードが望んで行きたがった万丈目の場合は例外だけどな。

【主よ。十代達に忠告をしないので？】

ああそういや、十代達に如何に万丈目が旅に出た事を悟らせずに万丈目の捜索を諦めさせるかを考えてたんだったな。

十代達はともかく問題は明日香だよなぁ……どう誤魔化すか……

「キャー！！」

「何事？」

悲鳴が聞こえたので、少し先に居る十代達の方を見るとジュンコが猿？に抱えられ連れ去られて行った。

「何故に猿？」

「取り敢えず追い掛けましょう！」

「ああ！」

猿の走り去って行った方に向かった十代達を見て、２年程前に本田さんが俺は猿にされた事があると言っていたのを思い出した。

確か、あの時本田さんは猿にされたが、美味しい思いをしたとも言ってたな。

そう言えば、あれは何だったんだろうか？それを聞いた本田さんの彼女である静香さんは顔を赤らめながら、本田さんを軽く叩き、城之内さんは髪を逆立て目を黄緑色にしながら本田さんに殴り掛かり、周りは笑うというカオスな状況になったんだよな。

【おーい、マイブラザー。思い出に浸るのも良いが、十代達を追い

掛けなくて良いのか】

「あっ……」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

「ガッチャ！楽しいデュエルだったぜ」

十代達追い付いた頃には、十代と猿のデュエルが終わっていた。

その後、変な老人と数人の黒服という怪しい連中が現れたが、いつの間にか周りに居た猿の群れに追われてどこかに走り去って行った。

そして、日が暮れて寮に戻ると大徳寺先生が先日、船で島を出る万丈目を見たと言い、更に俺が港に居たと皆に言って、俺が皆に散々搾られる事になった事を此処に明記しておく。

【そういや何で猿とデュエルしてたんだろうな？】

「さぁ？」

第２２話　ＳＡＬ（後書き）

今日の最強カードはお休みです。

ＳＡＬは飛ばそうかと思いましたが、万丈目にカードを渡す所を書きたかった為書きました。

第２３話　テスト（前書き）

デュエル無しです。

十代達が冬休みにアカデミアに居た理由を作ってみました。

第２３話　テスト

「連絡事項は今回の期末テストについてなのにゃ。詳細は今から配るプリントに表記されてるのにゃ」

ＨＲ中、大徳寺先生から、今回のテストについてのプリントが配られる。

連絡事項？明日テストなのにか？ん？これは……十代達がヤバイだろうな。

「連絡事項はこれぐらいなのにゃ。それじゃ、解散なのにゃ」

大徳寺先生の言葉を聞いて、教室の中に居る生徒は、来たるテストを嘆く者。早く帰って勉強する者。連絡事項を見て絶望感に打ちひしがれる者等に別れる。

因みに十代と翔の反応はと言うと

「ふわぁ～やっと終わったみたいだな」

「……」

十代は寝ていた為、話を聞いておらず、暢気そうにしており、翔は真っ白になっていた。

「ん？翔はどうしたんだ？」

「明日５教科のテストだからな」

「テストつっても、デュエルの内容がよければなんとかなるだろ」

「そんな十代に耳よりな情報が」

そう言って十代に大徳寺先生が配ったプリントを見せる。

「え～と、国語、数学、英語、理科、社会の5教科のテストの平均点が４０点に満たぬ者は冬休みに居残りで追試……って何じゃこりゃー！！」

状態を理解した十代が騒ぎだす。

まぁ、最近休憩時間と体育の授業以外は寝るという特技を身に付けて発揮している十代にとっては大問題だよな。

ちゃんと授業を受けてれば、平均４０点取るだけなら、楽勝な筈なんだが……

「テストは明日だが、どうするんだ？」

「頼む！貴志、勉強教えてくれ！」

「僕も頼むっス！」

「あー分かった。分かったから、落ち着け。目がヤバイぞ」

【これで十代達は冬休み居残り決定だな】

ゴーズ……それは一体どういう意味だ？

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー午後８時３０分ー

「てな訳でこれから、勉強会を始めます」

「「お～」」

夕食後、俺の部屋に集まり勉強会を始める。

因みに隼人は嫌な予感がするからやめとくんだなと言い、三沢達はそれぞれの寮で頼りにされているらしく、此処には居ない。

クシルを除く俺の精霊達は勉強の邪魔になるからと言って、それぞれ精霊世界に帰った。

「それじゃあ、言った物は持って来たか？」

「ああ、持って来たぜ」

「僕も持って来たっス」

２人から最近出された小テストを受け取る。

これを参考に苦手な所を直せば、平均４０は楽勝な筈だった。

そう……筈だったのだ。

「何これぇ？」

これが見終わった俺の感想だ。

「翔！お前は基礎が無茶苦茶過ぎるぞ！てか、何故、南瓜をなんこと読んだ！」

「あ、カボチャって言うんスか」

「……次に十代！名前と選択問題しか埋めてないってどういう事なんだ！」

「ははは……」

「ははは……じゃねぇー！何で５０点満点のテストで最高１６点と１７点何だよ！」

「おっ、俺翔に勝ってんじゃん！」

「そこで勝ってんじゃんとか言ってじゃねぇー！こんなの五十歩百歩じゃー！てか、こんなの絶対に追試じゃねーか！！」

【クゥーエー？】

クシルが不思議そうに俺の方を見る。

確かに俺はあまり声を荒げないが、これは酷過ぎる。

こんなのどうやって教えれば良いんだ……

「もう追試で良いんじゃないのか？」

「「それだけは嫌／だ／っス！！」」

「ですよねー」

仕方ない。こうなったら、出来る限りの基礎を叩きこもう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー午後１１時４０分ー

「フム、少しは出来る様になってきたな」

採点をして言葉が出る。

「よっしゃ～」

「やったっス～」

「さて、次は」

２人が問題を解いている間に作ったプリントを出そうとしたが、不意にぐぅ～という音がした。

「うぅ～。普段使わない所使ったから、腹減ったぜ」

「僕もお腹すいたっス～」

「お前等な……はぁ～うどんで良いか？」

「ああ、頼むぜ」

「貴志君、料理できるんっスね」

「このぐらいできて当然だろう。俺が戻るまでこのプリントをやってろよ」

そう言って、部屋を出て食堂に向かう。

以前大徳寺先生に食堂を使う許可は貰ってるから、大丈夫だろう。

飯を食ったら、眠くなるというオチが脳裏をよぎったが、その時はクシルに頭をクチバシで突かせて起こせば良いしな。

対策は万全だと思う。

――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

―数十分後―

「「あっ！」」

「お前等何してんだ？」

うどんを作って部屋に戻ってくると十代達は漫画……ファニーラビットを読んでおり、勉強をしていなかった。

因みにさっき部屋を出る前に渡した英語のプリントはほぼ、白紙だった。

「フフフ……取り敢えず、その本を置いてお話ししようか」

「ちょ、ちょっと待ってくれ！この巻だけ！これ読んだら、スゲーマジメにやるから！」

「それって勉強しねぇ奴の典型的な例じゃねぇか！」

「読み始めたら、面白くてつい」

「確かにそうかもしれないが」

「特にファニーラビットが警官のブルドッグをからかう姿が面白ぇよな」

「むっ、よく分かってるな。でも、次の巻で……っと言う訳にはいかないな」

「ええー！！気になるじゃんかよ～。一体どうなんだよ～」

「あっ！うどん冷めちゃうっスよ！」

「むっ、しょうがない。３０分休憩にするか」

「「やったー！」」

――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

―午前１時２０分―

「よっしゃー！目的地にまた着いたぜ！」

「貧〇神憑くのまた俺かよ……」

「貴志君、弱過ぎるっス」

「うるせー！」

――――――――――――――――――――
―――――――――――――――――――
――――――――――――――――――

―午前２時０５分

「ぎゃあー貧〇神がキングボ〇ビーになったぁー！！って、ちょ、キングデ〇ルとか呼ばないでー！！」

「貴志……運無さすぎだろ」

「流石に同情するっス」

「何故だ、何故俺に貧〇神が憑くとキングボ〇ビーになるんだ……

十代に憑いた時はボ◯ビーモ◯キーになるのに……」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー午前2時48分ー

「ちょっ！信長さん！やめて！カードを割らないで～」

「特◯周遊カードを引いた直後にこれかよ……」

「ダイ◯モンドカードも割れたっスよ」

「信長ェ……」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー午前3時ー

「ナマ◯ーゲン！てめぇコノヤロー！！」

「またカードが無くなったな」

「ある意味凄いっス」

「心が折れそうだ……」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー午前４時３０分ー

「…………」

「……………………」

「やっちまったな………」

「ああ」

「もうお終いっス〜！！」

俺が桃◯でマイナス３００億円でビリになったとかはどうでも良い。

いや、精神的なダメージはでかいけど……俺がナ◯スカード駅で急◯カードぐらいしか引かないのに、十代達は普通のカード駅で銀河◯道カードとか引いたりしたのは精神的にかなりキツイけど、そんな事は本当にどうでも良い。

それより、何故だ？何故、俺達は桃◯をやってたんだ？いや待て、原因究明よりも今は今できる事をしなければ！

「よし！後、３時間でできるだけ勉強するぞ！」

「「お、お〜」」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ー数日後ー

５教科のテスト及び、デュエルに関するテストのが終わって数日、５教科のテスト結果とデュエルに関するテストの結果が貼り出された。

結果は……問題無いな。

「貴志か……流石だな。だが、次は負けないぞ」

「流石は学年トップね」

「まぁね」

【なぁ、あっちに『岩石の巨兵』が２体居るぞ】

【顔だけ見たら『はにわ』じゃないかしら？】

【ゴーズもカイエンも違うよ～。あれは、『ウォー・アース』だよ】

【いや、あれは、『泣き神の石像』でしょう】

【クッ、クエクェ～】

【フム、クシルは『鋼鉄の巨神像』と申すか】

皆、何を言ってんだ？

あっ！そういや、十代達は……

「「……」」

十代達はテスト結果が貼りだされたボードの前で『王家の守護者』の様な顔をして固まっていた。

「十代？翔？」

「貴志？お前はどうだったんだ？」

「そうっス！貴志君もあの時勉強ができてないから、結果はズタズタな筈っス！」

「見てこようぜ！」

「いや、２人には済まないが……って、行っちゃったよ」

数分後、再び石化した２人を見る事になった。

ーオマケー

桃〇の結果（ＣＰＵ無し）

１位
遊城　十代
総資産
７５億８７５０万円

２位
丸藤　翔
総資産
２５億６４７０万円

ビリ
天道　貴志
－３００億２６３０万円

テスト結果

天道　貴志
５００／５００（学年１位）

三沢　大地
４９８／５００（学年２位）

天上院　明日香
４９５／５００（学年３位）

遊城　十代
８８／５００（圏外）

丸藤　翔
８３／５００（圏外）

遊城　十代　丸藤　翔
冬休みに追試
決☆定！

「「り、理不尽だぁ～！！」」

【俺の予想、大当たりだったな】

【流石ゴーズね。相変わらず、格好いいわ】

【と言うより普段から、勉強してればこんな事にはならないよね～】

【確かに……それは否定できぬな】

【クゥ～クル（大変だね～ハネっちも）】

【クリ！クリクリ、クリクリクリ、クリ～（全くだよ！十代の頭の中は基本的にカラッポなんだ……僕がなんとかしないと）】

第２３話　テスト（後書き）

鷹
「さて、今日の最強カードはこの坊主丸」

貴志
「それは桃〇のカードじゃぁぁぁ！！！」

鷹
「ぐげふ！」

貴志
「桃〇のを出そうとするな！あっちのもカードだけどさ！てか、俺の運無さ過ぎだろ！」

鷹
「何か面白い欠点付けようと思ったら、ああなった。後悔も反省もしない！」

貴志
「いや、そこはしろよ！いくら何でも理不尽過ぎるだろ！」

鷹
「（＾皿＾）」

貴志
「これはうぜぇー！！！うざ過ぎる！！」

第２４話　冬休みその？（前書き）

またまたデュエル無しです。

貴志
「いい加減デュエルさせろよ……」

済まん。

第２４話　冬休みその？

十代Ｓｉｄｅ

「あ～もう！分かんないっスよ～！」

「うぅ。俺も全く分からないぜ」

俺達は追試の為に冬休みでも、島に残ってる。

今俺達の部屋で追試の前にオマケで大徳寺先生に渡された課題をやってるんだけどさっぱり分からねぇ。

このまま翔と一緒に悩んでてもしょうがねぇし……

「うぅ～あっ！そう言えば」

「どうしたんだ翔？」

「貴志君が確か、追試対策プリントを作ってくれてたような」

「あっ！」

翔の言葉を聞いて貴志が実家に帰る前に『お前達が追試を受ける羽目になった原因は俺にもあるから、先生の性格や出す問題の傾向から考えて作ったテスト対策プリントを俺の部屋の机の上に置いとくから、良かったら使ってくれ』って、言ってたのを思い出す。

先生に出された課題があまりにも多かったから、忘れてたぜ……

よし！そうなれば

「翔！早く取りに行こうぜ！」

貴志の教え方は確かなものだったから、なんとかなるかもしれない。

俺と翔は貴志の部屋に向かった。

十代Ｓｉｄｅ　Ｅｎｄ

――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――
――――――――――――――――――――

「ふわぁ～。眠ぃ……」

昨日、こっちの方に戻ってきたが、時差ボケとかで帰って早々、寝たんだがまだ眠い。

「あ～でも、荷物の整理はしとかないと」

【クェ～♪】

「どうしたクシル？」

ボストンバックに近づく俺の肩にクシルが乗ってきて加えている紙の束を突き出してくる。

「何だこれ？」

紙束を手に取り読む。

「伊吹先生は教科書の問題をそのまま出す事が多く、変えているとしても微々たるものなので、最悪教科書の内容を覚えておく事……って、これ十代達の為に作った対策プリントじゃん！」

部屋に置いて帰った筈なのに何で……まさか。

【ク、クェー♪】

クシルの方を見ると其処には、まるで『忘れ物があったから、僕が回収して来たよ』とでも主張するかのように翼を広げたクシルが居た。

「ははは―クシル偉いぞーでも、忘れ物じゃいんだよな～」

言いながら、クシルの頭を撫でる。

冬休みが終わったら、十代達に何か奢るか。

十代に翔、本当に済まない……

―――――――――――――――

―――――――――――――――

―――――――――――――――

―――――――――――――――

ゴーズＳｉｄｅ

はい！どーも～やられ役でお馴染みのゴーズでーす。

……って、俺は誰に対して自己紹介してるんだ？しかも、やけに自虐的な……

「ふ～やっと終わったか」

ん？マイブラザーが荷物の整理を終えたみたいだな。

その時を見計らった様にマイブラザーの部屋の扉が開け放たれた。

「貴志兄ちゃーん！」

其処から入ってきた5、6歳ぐらいの子供5人（全員ペガサスミニオン）にマイブラザーが取り囲まれる。

「サム、龍、ギン、ジュディー、明かどうしたんだ？」

「遊んでよー」

1人の子供が言った瞬間、他の子供達も口々に遊んでと言い始める。

てか、マイブラザー……よく、２００人近くは居るペガサスミニオンの名前を覚えてるな。

「分かった分かった。でも、お前達勉強は終わったのか？」

「「「「「……」」」」」

マイブラザーの言葉を聞いた5人全員が明後日の方向を向く。

中には口笛を吹いているのも居るな。

【分かりやすすぎんだろ】

【ええ……これは分かりやすいわね】

「お前達なぁ……分からない所は兄ちゃんが教えてやるから、早く終わらせよう。遊ぶのはその後な」

「「「「ハーイ」」」」

マイブラザーの言葉に息ぴったりに答える子供達。

【これって、勉強しないフラグだよな】

【【【確かに／そうね／な／ねぇ～】】】

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「はい。これでお終い」

「やっと終わったー！」

勉強を始めて３０分程で、子供達の課題は終わった。

十代や翔がこれを見たら、「解せぬ」って、言いそうだな。

あ～でも、脱線するのはだいたいあの２人の集中が途切れた時なんだよな。

そういう意味では自業自得と言えない事もないか……

「さて、一体何をして遊ぶんだ？」

「これ～」

「なっ……」

【プッ、ククク】

子供の1人……確か、龍だっけが出した物を見て思わず笑ってしまった。

「むっ」

【そんな怖い顔すんなって。子供達が怖がるぜ？」

マイブラザーが俺を睨んだが、俺の言葉を聞いて表情を戻す。

【ゴーズ、笑う事はなかろう】

【いや、しょうがねぇだろ】

龍が出したのは人生ゲーム。マイブラザーが苦手とする多大に運が絡むゲームだ。

これを狙ってやったんなら、龍は大した男だぜ。

――――――――――――――――

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

「……」

「兄ちゃん、弱ーい」

その言葉に他の４人も同調する。

まぁ、最初で就職できなかった上、給料のルーレットは全て１。そして、金が取られるマスに止まりまくって約束〇形がえ～と３２枚でぶっちぎりの逆１位……もといビリ。

遊んでいる姿は良い父親を彷彿とさせるものだったけどな。

そういや、何でマイブラザーはこんなに運がねぇんだ？まぁ、デュエルに反映されてないだけましだが……

「天道様。ペガサス様がお呼びです」

また折り良いタイミングでマイブラザーの部屋の扉がノックされた。

「分かった。じゃあなお前達」

マイブラザーの言葉に子供達は「ハーイ」や「お兄ちゃん、何か悪い事したの？」等言って部屋から出て行った。

ゴーズＳｉｄｅ　Ｅｎｄ

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

クロケッツさんに案内されて会長室に向かう。

今更会長室になんて案内されなくても行けるんだけどな。

それに、俺達ペガサスミニオンやペガサス様はインダストリアルイリュージョン社の社内に部屋がある。

その為、案内はいらないがクロケッツさんの仕事を奪う訳にもいかない。

「天道様。それでは私はこれで」

「ご苦労様」

クロケッツさんがお辞儀をして、部屋から離れる。

大抵、ペガサス様と共に居るクロケッツさんが離れる……何か重要な事でもあるのか？

「まぁ、良いか。入ればわかる事だ」

会長室の扉を前にする。一瞬、あの夜の事を思い出して体が震える。

【大丈夫か？】

「あ、ああ」

心配するゴーズに返事を返す。

大丈夫……あんな事は2度と起こらない。

深呼吸をして、自分を落ち着かせる。

「失礼します」

ノックをした後、会長室に入った。

番外編　遊戯王R　邪神を使う少年その？（前書き）

過去編です。また、この小説内の邪神等は原作効果です。

また、主人公の口調が若干、安定してません。

番外編　遊戯王R　邪神を使う少年その？

世界的大企業海馬コーポレーション本社ビルのモニタールームには今1人の少年が居た。

その少年の顔には幼さがかなり残っており、体も小さめ。少年の年齢はおそらく9、10歳ぐらいだろう。どう見ても其処に居るのは場違いと思える。

尤も、海馬コーポレーションの社長は高校生、副社長は小学生なのだから、子供が海馬コーポレーションに居るのは別段珍しい光景では無いのかもしれないが……

その少年がモニタールームにあるマルチモニターにとある人物を確認して呟く様に言った。

「武藤遊戯……パパを倒した人……倒す……この邪神で……」

少年から発せられた声はとても低く、とても年相応の声とは思えなかった。

「行かなきゃ……」

少年は振り返り、モニタールームを後にする。無人となったモニタールームには無機質な音がただ響いていた。

――

今海馬コーポレーションの屋上には2人の青年が向かっている。

その内1人はヒトデを連想させる髪型が特徴的な青年……武藤遊戯。

もう1人は水色の髪に端整な顔の作りが特徴的な青年……天馬月行。

武藤遊戯は攫われた仲間真崎杏子を助ける為、天馬月行は弟達を邪神の呪縛から解き放つ為、この事件の元凶であり、月行の双子の弟の天馬夜行の居る屋上に向かっている。

「まさか敗者がこの階（フロア）にまでやってくるとはな…」

「……」

その2人の前に謎の2人組が立ちふさがった。

「カード・プロフェッサー!?」

1人はインダストリアルイリュージョン社に雇われたカード・プロフェッサー　シーダー・ミール。

「貴志!」

もう1人は天馬兄弟と同じくペガサスミニオンの天道貴志。

「何故だ!?貴志、お前は私と共に夜行を止める為に動いて……まさか!」

月行は貴志を見るなり驚きの声を上げる。

何故なら、貴志は月行と共に夜行の愚行を止めようと動いていたからだ。

だが、月行はそこで1つの結論に至る。

自分は先程まで、邪神を通して夜行に操られていた。

邪神は全部で3体。夜行の持つ『邪神アバター』、自分が使った『邪神ドレッド・ルート』、そして後1体を貴志が持ち、その邪神を通して夜行に操られているという可能性がある。

しかし、その月行の考えは貴志の言葉により、打ち砕かれる事になる。

「兄さん、僕は月行兄さんと違って操られてないよ……ただ、考えが変わっただけ……僕がこの邪神で武藤遊戯に神罰を与える！」

その言葉にカード・プロフェッサーのシーダー・ミールが顔色を変えて言った。

「おいおい、それじゃあ俺の立場が無いだろ。俺が武藤遊戯の相手をするぜ」

シーダー・ミールの言う事は一理ある。

彼等13人のカード・プロフェッサーは武藤遊戯を倒す為に集められたからだ。

まぁ、武藤遊戯と闘わずに散ったカード・プロフェッサーも6人程

居るのだが……

自分の此処に居る理由を言ったシーダー・ミールを貴志は睨み付けた。

「うっ……」

ただ、睨み付けただけだが、その姿から放たれる気配は普通のものではなく、だいの大人のシーダー・ミールを怯ませた。

そんなシーダー・ミールから、武藤遊戯に視線を移した貴志が呟く様に言った。

「武藤遊戯を倒す事で得られる手柄も栄光も貴方にあげます。その代わり、貴方は月行兄さんと闘ってください」

文だけ見れば、お願いしている様に見えるが、実際には命令している様にしか捉えられない言い方だった。

「わ、分かった」

だが、シーダー・ミールは頷く事しかできなかった。

「さぁ、デュエルです。僕達を倒さないと先に進めません。無視した場合は屋上に向かうエレベーターを破壊します」

その言葉と共に貴志とシーダー・ミールの後ろに黒服が現れる。

「待つん「悪いがあんたは俺と闘って貰う！」くっ！」

月行が止めようとするが、シーダー・ミールが間に入って遮る。

【相棒！此処はオレが】

「（ううん。もう一人のボクはこの後に控える闘いの為に体を休めていて。此処はボクが闘うよ）」

【……分かった。頑張れよ相棒】

「（うん）さぁ、デュエルだ！」

「デプレ兄さんを倒したそっちの遊戯ですか……ならば、貴方ももう一人の遊戯も倒す！」

「「デュエル！！」」

天道貴志
ＬＰ４０００

武藤遊戯
ＬＰ４０００

「先攻は貰います。ドロー！」

貴志は手札を見て少し考える素振りをした後、カードを手に取った。

「カードを2枚伏せてターンエンド」

天道貴志
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　２

「ボクのターン！ドロー！　（１ターン目からモンスターを出さない！？手札事故？それとも罠？でも、彼のデッキにはまだ見ぬ邪神がある。たとえ罠だとしてもここは！）ボクは『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』を召喚して、バトル！『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

遊戯の場に赤と黒を基調とした服を着ている魔術師が現れる。

『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
レベル４　光属性
魔法使い族・効果
攻撃力１０００
守備力１０００

『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』が自分の手に持つ杖に魔力を溜め、その魔力を貴志に向けて解き放つ。

解き放たれた魔力は遮られる事なく、貴志に直撃して煙が立ち上る。

やがて煙が晴れると其処には、シールドの様な物に守られた貴志が先程と変わらず立っていた。

貴志
ＬＰ４０００

「ライフが減ってない！？」

「トラップカード『ガード・ブロック』の効果で僕が受ける戦闘ダメージは０。更に僕はカードを１枚ドロー！」

「くっ、相手がカードをドローした事により、『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』に魔力カウンターが１つ乗る。更に『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』は自身に乗っている魔力カウンター１つにつき、攻撃力が５００ポイントアップ！」

『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
魔力カウンター０→１
攻撃力１０００→１５００

「カードを２枚伏せてターンエン「その瞬間、今伏せられたカード２枚を対象に、トラップカード『心鎮壷』を発動！このカードがフィールド上に存在する限り、選択された魔法・罠カードは発動できません」……ターンエンド」

天道貴志
ＬＰ４０００　手札５枚

モンスター
無し

魔法・罠
『心鎮壷』
（永続罠。遊戯の伏せカード２枚を対象）

武藤遊戯
ＬＰ４０００　３枚

モンスター
『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
（攻撃力１５００）
（魔力カウンター１）

魔法・罠
伏せ　２
（『心鎮壷』の効果により、発動不可）

「僕のターン、ドロー！」

「相手がカードをドローした事により、『サイレント・マジシャンＬＶ４』に更に魔力カウンターが乗せられる」

『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
魔力カウンター１→２

攻撃力１５００→２０００

「僕は『キラー・トマト』守備表示で召喚。カードを2枚伏せてターンエンド」

貴志の場に人面トマトが現れる。

『キラー・トマト』
レベル４　闇属性
植物族・効果
攻撃力１４００
守備力１１００

天道貴志
ＬＰ４０００　手札3枚

モンスター
『キラー・トマト』
（守備力１１００）

魔法・罠
魔法・罠
『心鎮壷』
（永続罠。遊戯の伏せカード2枚を対象）
伏せ　２

武藤遊戯
ＬＰ４０００　３枚

モンスター
『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
（攻撃力２０００）
（魔力カウンター２）

魔法・罠
伏せ　２
（『心鎮壺』の効果により、発動不可）

「ボクのターン！ドロー！ボクは手札から魔法カード『大嵐』を発動！フィールド上の魔法・罠カードを全て破壊する！」

「『サイクロン』が来ると思ってたんだけどなぁ……カウンター罠発動！『神の宣告』！ライフを半分支払って『大嵐』の効果を無効にして破壊する！」

大きな竜巻がカードを吹き飛ばすべく現われたが、どこからともなく出てきた初老の男性が片手をかざすと竜巻は消えた。

天道貴志
ＬＰ４０００→２０００

貴志が『神の宣告』を使ったのを見て、遊戯は考える素振りを見せる。

「（ライフを半分支払ってでも、あの伏せカードは守りたいカード？いや、違う……彼は『サイクロン』が来るかと思っていたと言っ

ていた。さっきの状況で『サイクロン』を使ったとしても、破壊するのは『心鎮壺』の方だ。でも、彼の目的が『心鎮壺』を使ったロックなら、さっきの『大嵐』をライフを支払ってまで防ぐ必要は無い筈……もしかして、彼の目的はボクの場にカードを残す事？だとしたら、何の為に？まさか！？）」

考えが纏まったのか、遊戯は意を決した様に手札のカードを手に取り、高らかにこれから使うカード名を宣言した。

「ボクは魔法『強欲な壺』を発動！カードを2枚ドロー！」

ドローしたカードを見て遊戯は僅かに表情を歪める。

「（違う。このカードじゃない！こうなったら、少しでもライフを削るしかない）　ボクは『グリーン・ガジェット』を召喚！」

遊戯の場に手足と目が付いた緑色の歯車が現れる。

『グリーン・ガジェット』
レベル４　地属性
機械族・効果
攻撃力１４００
守備力６００

「更に『グリーン・ガジェット』が召喚に成功した事により、デッキから『レッド・ガジェット』１枚を手札に加える。そして、バトル！『グリーン・ガジェット』で『キラー・トマト』に攻撃！」

『グリーン・ガジェット』が右腕で『キラー・トマト』を殴り飛ばし、更にヘタの部分を掴んで持ち上げた後、地面に叩きつける。

『キラー・トマト』はぐちゃぐちゃに潰れて光となって消える。

「『キラー・トマト』の効果発動！戦闘で破壊され墓地へ送られた時、デッキから攻撃力１５００以下の闇属性モンスター１体を攻撃表示で特殊召喚できる。僕は２体目の『キラー・トマト』を特殊召喚！」

ぐちゃぐちゃになった『キラー・トマト』を見た貴志が顔を顰めたが、新たなモンスターを出すべく、デッキから１枚のカードを取り出し、ディスクに置いた。

『キラー・トマト』
レベル４　闇属性
植物族・効果
攻撃力１４００
守備力１１００

貴志の場に２体目の『キラー・トマト』が現れるが表情は暗い。

その様子はまるで死刑執行を待つ死刑囚のようだ。

「『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』で２体目の『キラー・トマト』に攻撃！サイレント・バーニング！」

遊戯の攻撃宣言の後、『キラー・トマト』はこうなりゃ自棄じゃぁーと言わんばかりの形相で特効していき、当然の様に『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』に破壊された。

天道貴志

ＬＰ２０００→１４００

「……『キラー・トマト』の効果でデッキから『クリッターを特殊召喚」

特効した『キラー・トマト』を見た貴志は一瞬だけ表情を曇らせたが、直ぐに機を取り直して新たなモンスターを召喚した。

『クリッター』
レベル３　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力１０００
守備力６００

「（もし、邪神の効果が想像通りなら、『心鎮壷』を破壊できるカードを引くまでは、これ以上カードを伏せない方が良い）ボクはこのままターンエンド」

天道貴志
ＬＰ１４００　手札３枚

モンスター
『クリッター』
（攻撃力１０００）

魔法・罠
『心鎮壷』
（永続罠。遊戯の伏せカード２枚を対象）
伏せ　１

武藤遊戯
ＬＰ４０００　４枚

モンスター
『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
（攻撃力２０００）
（魔力カウンター２）

『グリーン・ガジェット』
（攻撃力１４００）

魔法・罠
伏せ　２
（『心鎮壷』の効果により、発動不可）

「僕のターン、ドロー！」

「この瞬間、『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』に更に魔力カウンターが１つ追加される」

『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
魔力カウンター２→３
攻撃力２０００→２５００

「それがどうした！！僕は伏せていた永続罠『アポピスの化神』を発動！このカードは発動後、モンスターカードとなり、自分フィールド上に特殊召喚される。更に手札から魔法カード『死者蘇生』を発動！墓地から『キラー・トマト』を特殊召喚！」

貴志の場に剣と盾を持った蛇の様モンスターと先程ぐちゃぐちゃに潰された『キラー・トマト』が元の人面トマトの姿に戻って現れた。

『アポピスの化神』
レベル４　地属性
爬虫類族　通常
攻撃力１６００
守備力１８００

『キラー・トマト』
レベル４　闇属性
植物族・効果
攻撃力１４００
守備力１１００

「３体のモンスター……まさか！！」

「そのまさかさ……３体のモンスターを生け贄に捧げ出でよ『邪神イレイザー』！！」

『クリッター』、『アポピスの化神』、『キラー・トマト』が背中合わせに立つと、３体が黒い竜巻に呑み込まれる。

黒い竜巻は徐々に大きくなり、やがて黒い竜の形になっていった。

フィールドに降臨した黒い竜は刺々しい羽根を広げて咆哮を上げる。

その咆哮は凄まじく、まるで海馬コーポレーション全体が揺れていると錯覚してしまう程だ。

咆哮が治まった後、貴志は高らかに宣言した。
この邪神が貴方に神罰を与えると……

番外編　遊戯王R　邪神を使う少年その？（後書き）

邪神の種族はＷｉｋｉを参考にした捏造です。

一応、三幻神の幻神獣族の対になるようにしました。

貴志
「てか、なんで俺の相方があれなんだ？」

鷹
「あまりにも彼が出オチの神に愛されてて可哀想だったからつい…
…」

貴志
「まぁ、登場して２ページ後に俊殺されてるもんな」

鷹
「ちなみに流れとしては

シーダー・ミール登場
←
そのページの最後のコマでＡＩＢＯからＡＴＭに人格交代
←
次のページの半分くらいを使ってＡＴＭの『どけ！！』のコマ
←
次のコマで約１ページ半を使って『オシリスの天空竜』の攻撃を受
けているシーダー・ミール。
←
その後、エピローグにすら出ないシーダー・ミール。

登場して6コマ後に倒されるカード・プロフェッサー（笑）＋エピローグにすら出ない（泣）」

貴志

「ある意味最強だな（噛ませ犬として）」

番外編　遊戯王R　邪神を使う少年その？（前書き）

デュエルがぐだぐだに……なんとかして構成力を上げないと……

途中であれ？これっておかしくね？と思う所があると思いますが、

原作（遊戯王R）通りの処理にしただけなのでスルーしてください。

番外編　遊戯王Ｒ　邪神を使う少年その？

月行の表情には焦りの色が浮かんでいた。

早く貴志に真実を伝えてこの闘いを終わらせなければならない。

だが、伝えようと口を開くと目の前のカード・プロフェッサー、シーダー・ミールが悉く邪魔をする。

真実を伝える為には、何としてもこの男を倒さなければならない。

しかし、カード・プロフェッサーであるこの男は思いの外手強い。

今すぐには倒せない。

手間取っている内に貴志が邪神を出した。

咆哮を上げる邪神を見て月行は更に焦りの色を濃くした。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーー

『邪神イレイザー』

レベル１０　闇属性

邪神獣族・効果

攻撃力？

守備力？

「これが3体目の邪神……『邪神イレイザー』」

目の前に降臨した邪神を目の当たりにして遊戯が呟く様に言った。

「『邪神イレイザー』の本来の攻撃力と守備力は決まっていない。『邪神イレイザー』の攻撃力と守備力は相手フィールド上に存在するカードの枚数×１０００ポイントの数値となる」

『邪神イレイザー』
攻撃力０→４０００
守備力０→４０００

「攻撃力４０００！？」

遊戯はその事実を聞いて驚くが、同時に自分の仮説が半分だけ当たっている事に安堵した。

範囲や上昇するポイントが少々予想外だったが、先の『邪神アバター』や『邪神ドレッド・ルート』よりは対象しやすいと遊戯は思った。

「ああ、忘れる所だった。『クリッター』の効果でデッキから、『瞬着ボマー』を手札に加える」

カードを加えた貴志は遊戯の場のモンスターを見る。

「どっちにしようかな……決ーめた。『邪神イレイザー』で『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』に攻撃！ダイジェスティブ・ブレス！！」

攻撃力２５００……かの有名な『ブラック・マジシャン』と同じ攻撃力を誇る『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』だが、攻撃力４００の神の前には抵抗すら許されずに破壊される。

そして、『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』が受けきれなかった攻撃の余波が遊戯を襲う。

「うわぁあああ！！！」

武藤遊戯
ＬＰ４０００→２５００

【あ、相棒！】

「はぁ、はぁ……ボクは大丈夫だよ。もう一人のボク」

このデュエル、遊戯は初めてライフを削られたが、通常のデュエルで受ける衝撃とは明らかに違う衝撃を受けた。

先程、遊戯はカード・プロフェッサーのデプレ・スコットとのデュエルで攻撃力３６００の『グリード・クエーサー』のダイレクトアタックを受けたが、その衝撃よりも遥かに大きいダメージを受けた。

神。いや、邪神の攻撃……ただそれだけで遊戯はライフだけでなく体力をも容赦なく削られる。

「相手のフィールド上のカードの数が変わった事により、『邪神イレイザー』の攻撃力も変わる」

『邪神イレイザー』

攻撃力４０００→３０００

「手札から魔法カード『天使の施し』を発動。デッキから、カードを3枚ドローして手札から、カードを2枚捨てる。カードを2枚伏せてターンエンド」

天道貴志
ＬＰ１４００　手札１

モンスター
『邪神イレイザー』
攻撃力３０００

魔法・罠
永続罠『心鎮壺』
（遊戯の伏せカード2枚を対象）
伏せ　2枚

武藤遊戯
ＬＰ２５００　手札４枚

モンスター
『グリーン・ガジェット』
（攻撃力１４００）

魔法・罠
伏せ　2枚
（『心鎮壺』の効果で発動不可）

「はぁ、はぁ……ボクのターン、ドロー！」

先程のターンで邪神の攻撃でダメージを受けた遊戯だが、痛む体に鞭打ちカードをドローする。

「ボクは『グリーン・ガジェット』を守備表示に変更」

『グリーン・ガジェット』
守備力６００

「そして、カードを１枚伏せる」

「相手のフィールド上に存在するカードが増えた為、邪神の攻撃力は更に上がる！」

『邪神イレイザー』
攻撃力３０００→４０００

「ターン「今度は僕の伏せカードとそっちが今伏せたカードを対象に永続トラップ『心鎮壺』を発動！」２枚目の『心鎮壺』！？……くっ、ターンエンド」

天道貴志
ＬＰ１４００　手札１

モンスター
『邪神イレイザー』

攻撃力４０００

魔法・罠
永続罠『心鎮壷』？
（遊戯の伏せカード２枚を対象）
永続罠『心鎮壷』？
（遊戯と貴志の伏せカード１枚ずつを対象）
伏せ　１
（『心鎮壷』の効果で発動不可）

武藤遊戯
ＬＰ２５００　手札４枚

モンスター
『グリーン・ガジェット』
守備力６００

魔法・罠
伏せ　３
（『心鎮壷』２枚の効果で３枚とも発動不可）

「僕のターン、ドロー！僕は『瞬着ボマー』を攻撃表示で召喚！」

貴志の場に鉤爪の様な物を付けている球体の爆弾モンスターが現れる。

『瞬着ボマー』
レベル３　風属性

機械族・効果
攻撃力１０００
守備力１０００

「武藤遊戯……貴方が先程伏せたカードは十中八九、１枚目の『心鎮壷』を破壊するカードだった筈。それを封じた今、僕の勝利を遮るカードは無い！バトル！『瞬着ボマー』で『グリーン・ガジェット』に攻撃！」

螺旋回転した『瞬着ボマー』が『グリーン・ガジェット』を貫く。

『邪神イレイザー』
攻撃力４０００→３０００

「『邪神イレイザー』の攻撃力が下がったけど、ライフを削りきるには十分。バトル！『邪神イレイザー』でダイレクトアタック！ダイジェスティブ・ブレス！！」

邪神が放った漆黒のブレスは遊戯を包み込んだ。

「ペガサス様……やりました。武藤遊戯を打ち倒す事ができました」

「それは……どうかな？」

「えっ？」

武藤遊戯
ＬＰ２５００

邪神の攻撃でできた煙が晴れると其処には遊戯が変わらずに立っていた。

そして、そのまわりには沢山の茶色の毛玉の様なモンスターが居た。

「ボクは手札の『クリボー』を墓地へ捨てて、効果発動！ボクへの戦闘ダメージ０にする！」

「ぐぅ……カードを１枚伏せてターンエンド」

貴志は一瞬表情を歪めたが、この現状で邪神を越えられる訳が無いと思い直し、ターンを終了した。

しかし、念には念を入れる事は忘れずに……

天道貴志
ＬＰ１４００　手札０

モンスター
『邪神イレイザー』
攻撃力３０００
『瞬着ボマー』
攻撃力１０００

魔法・罠
永続罠『心鎮壷』？
（遊戯の伏せカード2枚を対象）
永続罠『心鎮壷』？
（遊戯と貴志の伏せカード1枚ずつを対象）
伏せ　2
（内1枚は『心鎮壷』の効果で発動不可）

武藤遊戯
ＬＰ２５００　手札3枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　3
（『心鎮壷』2枚の効果で3枚とも発動不可）

「ボクのターン！ドロー！ボクは魔法カード『天使の施し』を発動！3枚ドローして、2枚捨てる。そして、魔法カード『ハリケーン』を発動！フィールド上の魔法・罠カードを全て手札に戻す！」

「読み通り……カウンタートラップ『魔宮の賄賂』発動！『ハリケーン』の発動は無効になり、破壊される！」

「くっ……でも、ボクは『魔宮の賄賂』の効果でカードを1枚ドロー！……魔法カード『光の護封剣』を発動！」

貴志の場に天から光の剣が降り注ぐ。

「『光の護封剣』……僕のフィールド全体に影響のある魔法……邪神でも攻撃できないか。でも、邪神の攻撃力は上がる」

『邪神イレイザー』
攻撃力３０００→４０００

「モンスターをセットしてターンエンド！」

「邪神の攻撃力は更に上がる」

『邪神イレイザー』
攻撃力４０００→６０００

天道貴志
ＬＰ１４００　手札０

モンスター
『邪神イレイザー』
攻撃力６０００
『瞬着ボマー』
攻撃力１０００

魔法・罠
永続罠『心鎮壷』？
（遊戯の伏せカード２枚を対象）
永続罠『心鎮壷』？
（遊戯と貴志の伏せカード１枚ずつを対象）
伏せ　１
（『心鎮壷』の効果で発動不可）

武藤遊戯
ＬＰ２５００　手札０

モンスター
伏せ　１

魔法・罠
『光の護封剣』
伏せ　３
（２枚の『心鎮壷』の効果で発動不可）

「僕のターン、ドロー！」

貴志はドローしたカードを見て、ニヤリと笑った。

「武藤遊戯……『光の護封剣』を使って時間稼ぎも許されないみたいだね。僕は『邪神イレイザー』を生け贄に捧げる！」

「邪神を……生け贄に？」

『邪神イレイザー』が風を纏うと徐々に地に沈んで行く。

それと同時に『光の護封剣』や『瞬着ボマー』等のフィールド上のカードも共に沈んで行く。

「これは……一体？」

「『邪神イレイザー』が墓地へ送られる時、フィールド上のカードは全て道連れになる！」

「なんだって！？」

フィールド上のカード全てが邪神と共に消えた後、１体のモンスターが天から舞い降りた。

『神禽王アレクトール』
レベル６　風属性
鳥獣族・効果
攻撃力２４００
守備力２０００

「バトル！『神禽王アレクトール』でダイレクトアタック！」

『神禽王アレクトール』の両拳が遊戯を襲う。

「くっ、うわぁあああ！！」

武藤遊戯
ＬＰ２５００→１００

「ターンエンド」

天道貴志
ＬＰ１４００　手札０

モンスター
『神禽王アレクトール』
攻撃力２４００

魔法・罠
無し

武藤遊戯
ＬＰ１００　手札１

モンスター・魔法・罠
無し

「ボクのターン……カードを1伏せてターンエンド」

天道貴志
ＬＰ１４００　手札０

モンスター
『神禽王アレクトール』
攻撃力２４００

魔法・罠
無し

武藤遊戯
ＬＰ１００　手札１

モンスター
無し
魔法・罠
無し

「ボクのターン！ドロー！バトル！これで終わりだ！『神禽王アレクトール』でダイレクトアタック！」

「トラップ発動！『攻撃の無力化』！」

『神禽王アレクトール』の攻撃は渦によって阻まれた。

「何で？」

攻撃を防いで一息付いた遊戯に対して貴志が呟く様に言った。

「何で？なんで諦めずに向かって来れるの？」

この疑問はさっきから、貴志の中で沸き上がっていたもの。

貴志は邪神が出たにも拘らず、諦めずに戦う遊戯の姿を見てそう思い初めていた。

「デュエリストたる者。デッキにカードが有る限り、諦める訳にはいかないんだ！」

遊戯の気迫に貴志は気圧される様に引く。

「それにボク達は大切な人を助けだす為に闘っている！ボク達はその人を助けだすまで、立ち止まって居られないんだ！」

「僕達だって……僕達だって大切な人、ペガサス様の為に闘っている！」

「でも、それは他の人を犠牲にした上での事。そんな事は間違っている！」

「っ！うるさい！うるさい！うるさい！」

遊戯に指摘されると、だだっ子の様に貴志は反論した。

「たとえ間違っていも僕達はペガサス様を蘇らせる！その前にペガサス様の負の遺産は精算する！僕は墓地の『キラー・トマト』と『瞬着ボマー』をゲームから除外して、手札の『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」

貴志の場に彼が最も信頼する闇の力を纏った神鳥が現れる。

『ダーク・シムルグ』
レベル７　闇属性
鳥獣族・効果
攻撃力２７００
守備力１０００

「ターンエンド！」

「ボクのターン……」

遊戯は静かにカードをドローした。

番外編　遊戯王R　邪神を使う少年その？（後書き）

貴志
「なぁ作者。俺の性格が無茶苦茶過ぎる気がするんだが？」

鷹
「……邪神を使った影響だ。そのせいで、若干情緒不安定になっているんだ」

貴志
「お前なぁ、適当過ぎるだろ」

鷹
「うるさい。キースみたいにこいつシンナーでも、吸ってんのか？みたいにしないだけましだろう」

貴志
「確かにあんな顔芸みたいにはなりたくないが……いまいち釈然としないな」

鷹
「……さて、前書きで書いた原作通りの処理についてですが、イレイザーの生け贄についてです。

原作ではイレイザーを生け贄にした場合、先に墓地に送られたイレイザーの効果発動後、モンスターの召喚が行われていたので、そういう処理にしました。

因みに原作版のイレイザーは、場から墓地に行くと効果が発動した

みたいです。

番外編　遊戯王R　邪神を使う少年その？（前書き）

制裁デュエルの時と同様、デュエルが短め、その後オマケという名のメインに……

デュエルが短くなるのは分かっていたから、前の話に入れれば良かったと後悔中（ー＿ー）

番外編　遊戯王Ｒ　邪神を使う少年その？

天道貴志
ＬＰ１４００　手札０

モンスター
『神禽王アレクトール』
攻撃力２４００
『ダーク・シムルグ』
攻撃力２７００

魔法・罠
無し

武藤遊戯
ＬＰ１００　手札１

モンスター・魔法・罠
無し

おそらく次の遊戯のターンは回ってこない。

『ダーク・シムルグ』が居る限り遊戯はカードをセットできない。

たとえ遊戯が『聖なるバリアー ミラーフォース』を引いたとしても、
伏せる事すらできない。

戦闘で破壊されない効果を持つ『マシュマロン』を引いて守備表示で出しても、『神禽王アレクトール』の効果で『マシュマロン』の効果を無効にされた後、2体の攻撃で遊戯のライフは尽きる。

そして、遊戯の最後の手札は『融合』……この状況では全く意味がないカードだ。

「ボクのターン……ドロー！」

そんな状況下でも遊戯は諦めずにデッキからカードをドローする。

引いたカードを見た遊戯は、口元に笑みを浮かべた。そして、そのカードのカード名を言いながら、ディスクにプレイした。

「魔法カード『天よりの宝札』を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにカードをドローする！」

「そんな……この土壇場で……『天よりの宝札』を引くなんて」

貴志は明らかに驚き、狼狽えている。

だが、貴志の反応は当然の事なのかもしれない。

遊戯のデッキはまだ20枚以上はある。

そんな中、『天よりの宝札』がデッキの1番上にある確率はかなり低い。

デッキを心の奥底から信頼し、尚且つ絶対絶命の状況でも諦めなかった遊戯が起こした奇跡とも言っていい事だ。

「ボクの手札は1枚。よってカードを5枚ドロー！」

「ぼ、僕の手札は0枚。だから、カードを6枚ドロー」

これで貴志と遊戯の手札はお互いに6枚。

フィールド上では貴志が圧倒的に有利だが、流れは完全に遊戯の方に傾いている。

「ボクは魔法カード『死者蘇生』を発動！蘇れ『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』！！」

遊戯の場に描かれた魔方陣から、小さな魔術師が再び姿を現す。

『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』
レベル４　光属性
魔法使い族・効果
攻撃力１０００
守備力１０００

「更に魔法カード『レベルアップ！』を発動！このカードの効果で『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』はＬＶ８へと進化する！」

『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』をまばゆい光が包み込み、辺り一面も光だけとなる。

そして、光が晴れると先程まで『サイレント・マジシャン　ＬＶ４』が居た所には、一人前に成長した1人の魔術師が居た。

『サイレント・マジシャン　ＬＶ８』
レベル８　光属性
魔法使い族・効果
攻撃力３５００
守備力１０００

「攻撃力３５００!!クシルと『神禽王アレクトール』を上回った!?」

遊戯はクシルという呼び名に一瞬首を傾げたが、直ぐにあの『ダーク・シムルグ』の事だろうとあたりをつける。

そして、このデュエルを終わらせる為にバトルを開始する。

「バトル!『サイレント・マジシャン　ＬＶ８』で『神禽王アレクトール』に攻撃!サイレント・バーニング!」

『神禽王アレクトール』が貴志と『サイレント・マジシャン　ＬＶ８』の間に立ちふさがり、『サイレント・マジシャン　ＬＶ８』の攻撃を受ける。

その姿は主を守る為の行いに見えない事もなかった。

「くっ、うぅ」

天道貴志
ＬＰ１４００→３００

「はぁはぁ……まだライフは残ってる!」

「いや……このデュエルはこのターンで終わらせる！速攻魔法発動！『ディメンション・マジック』！『サイレント・マジシャン　ＬＶ８』を生け贄に手札から『闇紅の魔導師』を特殊召喚！」

『サイレント・マジシャン　ＬＶ８』が棺桶の様な物の中に消え、入れ替わるように赤黒いローブを身に纏っている魔導師が現れる。

『闇紅の魔導師』
レベル６　闇属性
魔法使い族・効果
攻撃力１７００
守備力２２００

『ディメンション・マジック』を使われた時、貴志は自分が負ける事が分かった。

いや、『天よりの宝札』を使われたあの時に、デュエリストとしての本能が伝えていたのかもしれない。

「『ディメンション・マジック』の効果には続きがある。それはモンスターを特殊召喚した後に、フィールド存在するモンスター１体を破壊できる。ボクは『ダーク・シムルグ』を破壊する！」

『闇紅の魔導師』が杖に魔力を蓄める。

それを見た『ダーク・シムルグ』は遊戯の方に背を向けながら、己の翼で貴志をやさしく包み込んだ。

やがて、魔力を蓄め終わった『闇紅の魔導師』が魔力を解き放ち、『ダーク・シムルグ』を破壊する。

「……バトル！『闇紅の魔導師』でプレイヤーにダイレクトアタック！」

「クシル……ごめん」

天道貴志
ＬＰ３００→０

――――――――――――――――――――

――インダストリアルイリュージョン社のとある場所――

「……」

３枚のカードがピラミッド形に安置されているショーケースの前で、師匠と初めてデュエルした時の事を思い出す。

思い出せば出す程、自分が無礼な事ばかりしていたと分かる。

邪神の力で負の感情が増長していたとはいえ、あれは酷かった。

今更だが、そんな俺をよく弟子にしてくれたなと思う。

あの時、何故かは分からないが、城之内さんや本田が師匠を後押ししてくれたから、俺は師匠の弟子になれた。

何故、２人が師匠を後押ししたのかは謎のままだ。

それと、クシル達と触れ合える様になったのも、初めて師匠とデュエルした後からだった。

５年前のあの時、夜行義兄さんや月行義兄さん、俺、キースが纏っていた邪神の力の殆どは俺の中に宿った。

ペガサス様が生きていたという事で負の感情が消えていたから、感情のコントロールができなくなるという事も無かった。

それよりも、ペガサス様が生きていた事や邪神の力で実体化できる様になったクシル、新たに精霊となったアレクと触れ合える様になれて嬉しかった。

邪神の力は日に日に大きくなっていったが、アテム師匠の記憶の世界でマルスと会って、無理矢理弟子にされた後は、完全に邪神の力をコントロールできる様になった。（それで、マルスに預けている力も合わせれば不本意極まりない事ができる様になったけど……）

その時にマルスから受けた説明で、何で俺に邪神の力が宿ったのかという疑問も氷解した。

っと、思い出に浸るのも悪くはないけど、此処に来た目的を果たさないと。

ショーケースの端の方にあるカードキーを差し込む場所に、専用のカードキーを差し込み、１５桁のパスワードを打つ。

その後の様々なロックを解除して、やっとショーケースの中のカー

ドが取り出せる様になる。

ピラミッド形の頂点に安置されている『ラーの翼神竜』のコピーカード以外の2枚……『邪神ドレッド・ルート』と『邪神イレイザー』のカードを手に取る。

「三幻魔か……できたら、復活して欲しくはないな」

ペガサス様に呼び出された俺は、俺が通うデュエルアカデミア本校の地下に封印されているカードについて聞かされた。

三幻魔……三幻神には及ばないものの、下手をすればデュエルモンスターズそのものが滅びかねないカード。

そのまま封印されたままなら良いが、つい先日、三幻魔を付け狙う輩が居るという情報が入った。

もし三幻魔が復活した場合、再び三幻魔を封印する為には、三幻魔を越える圧倒的な力で三幻魔を倒さなければならない。

だが、三幻魔を越える力を持っているのは、三幻神と海馬さんが持っている『青眼の光龍』、それに三幻神を越える三邪神（正確には二邪神だが……）のみ。

越える力を持っている可能性があるのが、エドが捜し求めている究極のDのカードとヨハンが捜し求めている究極宝玉神のカードだけ……

そして、三幻神はもうこの世に存在せず、海馬さんとエドには精霊に関する力は無いと言っていい。

海馬さんとエドは何か特別な事が無い限り、カードが持つ精霊の力は引き出せない。

つまり、現状では幻魔を倒し封印できるのは邪神のみ。

その上、邪神のカードを神の力を持つカードとして扱えるのは、この世では邪神の力を取り込んだ俺だけ……

ペガサス様は三幻魔を復活させる輩との闘いは十中八九、闇のゲームになり、その事を俺に託す事になるのを悔やんでおられた。

だが、三幻魔を付け狙う輩が居る限り、ペガサス様の心労になるのは確実。

それなら、俺は三幻魔を付け狙う輩を倒すだけ……

それが、俺の居場所を作ってくれたペガサス様への恩返しになる。

それに三幻魔が復活し、野放しにした結果、クシル達と離れる事になるのも絶対に嫌だ。

十代達という友の為にというも少しだけ、ほんの少しだけはあるけど。

……さてと、後はゴーズ達の帰り待つだけか。

ゴーズ達は冥界で修行中のマルスを呼びに行かせた。

マルスに預けている力を返して貰わないといけない……それに、性

格がちょっとアレだけど、マルスが居るととても心強い。
尤も、またデッキを組み直さないといけなくなるけど……

墓地にカードを送るのと除外されているカードを再利用するカードを探しださないとな。

久し振りに近くのカードショップに行くかな。

確か、新しいパックが出てた筈だし……

第２５話　冬休みその？（前書き）

冬休みその？です。

デュエル内容を書いてる途中に方針転換したら、こんな結果に……

どうしてこうなった。

第25話　冬休みその？

「むむむ」

【何がむむむだ！】

「いや、デッキを改造してんだから、悩むのはしょうがないだろ」

【今のマイブラザーは、あーでもないこーでもないややっぱりこっちを外すか、だけどそっちのカードもなぁーと独り言を呟く危ない人に見えんだよ】

「一晩中？何を言っ……あれ？」

またバル○ンを焚くからという理由で、此処に居たゴーズの言葉を聞いて時計を見ると既に朝の7時になっていた。

デッキの改造を始めたのって確か、昨日の夜9時くらいからだったと思うんだが……

「外は……もう明るいや……」

カーテンを開いて外を見るとやはり明るい。

マルスが戻ってきた事や昨日手に入ったカードの中に、使えそうなカードがそれなりにあったから、ついつい没頭してたな。

まぁ、ある程度デッキのカードは固まってきたが、まだまだだな。

【マスター。無理をなさらずに、お休みになられた方が宜しいのでは？】

「マルスか、俺は大丈夫だ。それと、前から言ってるが、俺に敬語を使うな。そして、マスターも止めてくれ。背中がむず痒くなる」

闇の力についてはマルスに教えて貰った事が多い。

つまり、マルスも師の様なものだからな……もう1つここ最近でハッキリと確信した別の理由もあるけど……

さてと、デッキの改造を再開するか……

「えーと、墓地落としのカードは……」

【この箱の中でしょうよ】

【これは、私やクシルの様に墓地のカードを除外するものと除外されたカードに関係のあるカードが入ったカードで……だ】

「ん、ありがとう」

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

――――――――――――――――

「だいたいこんな感じかな。時間は……もう昼か」

この後はどうしようかな？

眠気は全く無いし、せっかくデッキができたんだから、早く試したいんだけど……

月行義兄さんや夜行義兄さんの時間が開いてれば、昨日のリベンジをしたけど、2人は忙しいだろうし……

リッチー義兄さんやデプレ義兄さんが帰って来てるから、2人を探そうかな。

今日の行動方針を決めて、実行に移そうとしたら、ドアがノックされた。

「誰だろ？」

またチビ達が遊びに来たのかと思いながら、ドアを開けると月行義兄さんが居た。

「義兄さん、どうかしたんですか？」

「ちょっと手伝って欲しい事があってね。時間は空いてるかい？」

この時期に月行義兄さんが頼み事をするって事は、多分、新しいカードのテストだな。

「丁度空いた所ですよ」

テストデュエルじゃ、いくつかある決められたデッキを使うから、自分のデッキは使えないけど、こういう時はリッチー義兄さん達も新しいカードのテストをしてるから、時間を潰す意味でも、カードの知識を蓄える意味でも、良い事だろう。

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーインダストリアルイリュージョン社　社内　第４デュエル場ー

「あれ？フリンクさん、何故此処に？」

デュエル場に着くとフランク・リードの弟のフリンク・リードが居た。

「今回の新しいカードは彼がデザイン、製作したカードだからね」

「ああ、そういう事ですか」

フリンクさんはフランクさんと同じく、カードデザイナーだけど、兄とは違い、そこまでぶっ飛んだカードは作らないから、どんなカードなのか楽しみだな。

フランクさんの作るカードは明らかに強すぎる。

相手と自分の場のモンスターを１体ずつ除外したら、デッキ、墓地から特殊召喚可能な攻守４０００超えのとか……

まぁ、大抵がボツになるけど。

「さぁ、貴志。始めようか」

「了解」

「「デュエル！！」」

俺　ＬＰ４０００
月行　ＬＰ４０００

「先攻は私が貰う！私のターン、ドロー！私は『Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア』を守備表示で召喚！」

月行義兄さんの場に赤と白の衣装に身を包んだ女性のヒーローが現れる。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア』
レベル４　炎属性
炎族・効果
攻撃力１３００
守備力１０００

Ｅ・ＨＥＲＯって事は新しいカードはＥ・ＨＥＲＯ中心か……融合モンスターもあるのかな？シンクロや低いけど儀式モンスターって可能性もあるかもだけど。

「カードを1枚伏せてターンエンド！そして、『Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア』の効果発動！自分ターンのエンドフェイズ時に、自分フィールド上の『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のつくモンスターの数×２００ポイントのダメージを相手に与える！」

『レディ・オブ・ファイア』が両手に炎を集め、集まった炎の塊を俺に向かって放つ。

「ぐっ！」

見かけ倒しの炎だが、しっかりと俺のライフは削られる。

俺
ＬＰ４０００→３８００

月行
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア』
守備力１０００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！俺は『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を攻撃表示で召喚！」

俺の場に青い手甲を両腕に付け、青い服を身につけている魔術師が現れる。

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』
レベル４　光
魔法使い族・デュアル
攻撃力１９００

守備力１２００

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』……デュアルモンスターである為、効果は使えないが、レベル４以下の魔法使い族モンスターの中では高い攻撃力を持つモンスター。

このモンスターなら、容易にあのモンスターを破壊できるけど、あの伏せカードが気になるな。

攻撃反応型かそれとも……気にしてもしょうがないか。

あの伏せカードが『ミラーフォース』や『攻撃の無力化』だったとしたら、貴重なトラップを序盤で使わせたと思えば良い。

消されても、この２枚で攻撃を防ぎ、この１枚で次のターンに反撃できる。

まぁ、なんにせよこれを使うのは変わらないな。

「更に永続魔法『魔法族の結界』を発動！そして、バトル！『クルセイダー・オブ・エンディミオン』で『Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア』に攻撃！」

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』が右腕で『Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア』を殴り倒す。

お前……魔法使い族なのに、殴って攻撃すんのかよ！と思ってしまうな。

「私はこの瞬間、トラップカードを発動。『ヒーロー・シグナル』

！効果により、私はデッキから『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』を守備表示で召喚！」

『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』
レベル４　地属性
戦士族・効果
攻撃力１０００
守備力２０００

空に上がったＨのシグナルに反応するかの様に、体の一部が木でできているヒーローが現れた。

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』って事は義兄さん……まさかとは思うけど、『ジ・アース』は入って無いよね？」

「……」

目を背けたって事はあるんだ。

宇宙をモチーフにした世界に１枚ずつしか無いシリーズこと、プラネットシリーズ。

あのシリーズは、カード・プロフェッサーの上位ランカーが持っているカードなんだけど、『ジ・アース』は誰もＨＥＲＯデッキを使わないから、省られたんだよな……

まぁ、こんな形だけど、使われる時が来たのは良い事だ……多分。

「カードを１枚伏せてターンエンド！」

月行義兄さんは色々なデッキを使いこなせる。

昨日、月行義兄さんの息抜きでデュエルしたら、『タイム・イーター』、『端末世界』や『フエンリル』、『覇者の一括』、『ドレイン・タイム』等が中心のデッキを使って、俺は見事に術中にはまり、エンドフェイズしかできなかったし……あれは本当に心が折れかけた。

……脱線してしまったな。まぁ、とにかく油断できないな。

俺
ＬＰ３８００　手札３枚

モンスター
『クルセイダー・オブ・エンディミオン』
攻撃力１９００

魔法・罠
『魔法使い族の結界』
永続魔法
伏せ　１

月行
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』
守備力２０００

魔法・罠
無し

「私のターン、ドロー！スタンバイフェイズに『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』の効果発動！デッキまたは墓地から『融合』を手札に加える。当然、私はデッキから、『融合』を加える。そして、『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を召喚！」

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－

「むっ、何故か今、呼ばれた気がする」

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

月行義兄さんの場に両翼にプロペラの様なものを付けたヒーローが現れる。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』
レベル４　風属性
戦士族・効果
攻撃力１８００
守備力３００

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』の効果発動！このカードが召喚・特殊召喚に成功した時、このカードは２つの効果の内、１つを発動できる！１つ目の効果は、自分フィールド上に存在するこのカード以外の『ＨＥＲＯ』と名のついたモンスターの数まで、フィールド上に存在する魔法またはトラップカードを破壊する。２つ目の効果はデッキから、『ＨＥＲＯ』と名のついたモンスター１体を手札に加える。私は１つ目の効果を発動し、デッキから、２枚目の『フォレストマン』を手札に加える」

『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』か……サーチと破壊効果を持ってるって面倒なカードだな。

「私は魔法カード『Ｒ－ライトジャスティス』を発動！貴志の場の『魔法使い族の結界』と伏せカードをを破壊する！」

２つのＲのシグナルに俺の場の『魔法使い族の結界』と伏せていた『聖なるバリアー－ミラーフォース－』が破壊される。

ちょっと、ヤバイな。

「良いカードを破壊できたね。更に私は魔法カード『融合』を発動！場の『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』と手札の『Ｅ・ＨＥＲＯ　クノスペ』を融合！融合召喚『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』！」

月行義兄さんの場に大地から、巨大なヒーローが現れる。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』レベル６　地属性
戦士族・融合／効果
攻撃力２２００
守備力２６００

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』は『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のついたモンスターと地属性モンスターを融合素材とする大地を司るヒーローだ。そして、このカードが融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示で存在するモンスター１体の攻撃力を半分にし、その数値分攻撃力をアップする！」

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』がその豪腕を地面に叩きつけると、地面から出てきた地の柱が『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を襲った。

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』
攻撃力１９００→９５０

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』
攻撃力２２００→３１５０

あれ？これ、もう終わりだと思われるが、そうは問屋が下ろさない！

テスト用デッキには何故このカードが？と思ってしまうカードが入っている。

このデッキは魔法使い族を中心に構築されたデッキだが、『クリボー』が２枚入っている。

そして、俺の手札には『クリボー』が１枚。そして、『カオス・ソーサラー』も来ている。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』の攻撃の時に『クリボー』の効果を使って、戦闘ダメージを防ぐ。次のターンで『クルセイダー・オブ・エ

ンディミオン』と『クリボー』を除外して『カオス・ソーサラー』を特殊召喚。そして、『カオス・ソーサラー』の効果で『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』を除外すれば、このデュエルの勝敗はまだまだ分からない。

【マイブラザー……それはフラグってやつだぜ】

【私もそう思う】

何だと？

「私は魔法カード『融合回収』を発動！墓地から『融合』と『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を手札に加える。更に手札に加えた『融合』を発動！場の『Ｅ・ＨＥＲＯ　フォレストマン』と手札の『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』を融合！『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』を　融合召喚！」

吹き荒れる暴風と共に、漆黒のマントを身に纏っているヒーローが現れる。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』
レベル８　風属性
戦士族・融合／効果
攻撃力２８００
守備力２２００

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』は『Ｅ・ＨＥＲＯ』と名のついたモンスターと風属性モンスターを融合素材とする風を司るヒーロー。そして、『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』が融合召喚に成功した時、相手フィールド上に表側表示

で存在するモンスター全ての攻撃力・守備力を半分にする！ダウン・バースト！」

『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』が巻き起こす暴風が容赦なく『クルセイダー・オブ・エンディミオン』を襲う。

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』
攻撃力９５０→４２５
守備力１２００→６００

……

……

……

【【フラグ回収乙】】

うるさい！

「貴志、確か、そのデッキには『クリボー』が２枚入っていたね。此処は念には念を入れさせて貰うよ！魔法カード『ミラクル・フュージョン』発動！墓地の『Ｅ・ＨＥＲＯ　エアーマン』と『Ｅ・ＨＥＲＯ　レディ・オブ・ファイア』をゲームから除外して、『Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター』を融合召喚！」

月行義兄さんの場に今度は炎を纏うヒーローが現れる。

『Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター』
レベル８　炎属性
戦士族・融合／効果

攻撃力２６００
守備力２１００

義兄さん、深読みし過ぎだよ……

『クルセイダー・オブ・エンディミオン』が可哀想過ぎる。

「バトル！『Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター』で『クルセイダー・オブ・エンディミオン』に攻撃！」

様々な自然災害？にあった『クルセイダー・オブ・エンディミオン』には既に抵抗する力が無く、無抵抗のまま破壊される。

「ぬおぉぉぉぉぉ！！！」

俺
ＬＰ３８００→１６２５

「『Ｅ・ＨＥＲＯ　ノヴァマスター』の効果発動！戦闘で相手モンスターを破壊した場合、カードを１枚ドローする！そして、『Ｅ・ＨＥＲＯ　Ｇｒｅａｔ　ＴＯＲＮＡＤＯ』と『Ｅ・ＨＥＲＯ　ガイア』でダイレクトアタック！」

月行義兄さんの号令と共に俺目がけて襲い掛かってくる竜巻と柱……こうなったら、自棄だ！

「手札の『クリボー』を墓地へ捨てて、効果発動！戦闘ダメージを１度だけ、０にする！」

俺の前に現れた無数の『クリボー』が先に俺に襲い掛かって来た竜巻を防ぐが、柱は防げずに、柱は俺に直撃する。

「うわぁあああああ！！」

俺
ＬＰ１６２５→－１５２５

－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－
－－－－－－－－－－－－－－－－－－－－

俺がフルボッコになった後、何度かデュエルしたが、分かった事がある。

『Ｚｅｒｏ』が酷過ぎる事と、『Ｚｅｒｏ』と『ジ・アース』は並べるなという事が。

後、どうでも良いが、『Ｔｈｅ　シャイニング』と『シャイニング・フレア・ウィングマン』と『シャイニング・フェニックス・ガイ』の３体は並べちゃ駄目だ。

眩しくてフィールドが見えなくなる。

という感じでテストデュエルを重ねていると、デプレ義兄さんが慌てた様にやってきた。

無口、無表情のデプレ義兄さんが慌てるとは珍しい。

「大変だ……夜行が変になった」

「夜行義兄さんが変になった？」

「ああ、取り敢えず……ついて来てくれ」

デプレ義兄さんのについて行って、第２デュエル場に着くと、其処には……

「ぐっ……クソッ！」

デュエルに敗れたであろうリッチー義兄さんと

「こんなんじゃあ満足できねぇ！この俺を満足させてくれる奴は居ねぇのか！ヒャーハハハハハ！！」

デプレ義兄さんの言葉通り、変になった夜行義兄さんが居た。

第２５話　冬休みその？（後書き）

貴志
「デュエル内容は置いとくが、最後のあれは何だ？」

鷹
「あれは、この小説を書くにあたり、特に書きたい事の１つだ」

貴志
「使うデッキの予想がつくが、回せるのかお前？」

鷹
「ＯＣＧから離れて久しいから、絶対に無理。だから、ＴＦ６とかでデッキを作ったり、ＣＰＵのデッキを見たりして研究してくる」

貴志
「これが、あれを書きたいだけで進んだ者の末路か……」

鷹
「うるさい！」

第２６話　冬休みその？前編（前書き）

ＴＦ６でインフェルニティデッキを作ったけど、結構戦いやすいですね……メインにしようかな。

最後に少し妙なアンケートを実施するので、良かったら、投票してください。

第２６話　冬休みその？前編

「デプレ義兄さん、何故夜行義兄さんは、あんな厨二病患者みたいになったんですか？」

「よくは分からない……だが、デッキを持った瞬間、何かに取り憑かれた様に夜行が豹変した」

「デッキを持った瞬間に豹変したなら、デッキを取り上げたら良いんじゃないのか？」

「やったが……あの通りだ」

月行義兄さんの提案にデプレ義兄さんは首を横に振ってある所を指差した。

指差した先には……

「……ぐふっ」

「うぅ……」

「……」

「きゅう～」

インダストリアルイリュージョン社が誇るＳＰの皆様が倒れていた。

「まさか全員夜行義兄さんが？」

「そうだ」

「ふむ。取り敢えず、全員減給だな」
月行義兄さん……あなた鬼ですか？

まぁ、今はＳＰの皆様の事は置いといて、夜行義兄さんをどうするかだ。

マルスが何も言わないという事は、闇の力は関係していない筈。

俺自身、夜行義兄さんから闇の力を感じない。

尤も、俺の場合、感知に関してはアテにならないが……

デプレ義兄さんが言った様にデッキを持ってから、ああなったのなら、あのデッキを取り上げたら、元に戻りそうだが、少々、骨が折れそうだ。

【はっ！そうか、そういう事か！】

考え事をしているといきなりゴーズが何かを閃いた様に声を上げた。

「（ゴーズ、何か分かったのか？）」

闇の力が増えれば、テレパシーの様なものでマルス達と話せるので、そちらでゴーズに聞く。

【おそらく今、夜行の奴にはデュエルに満足できずに散って行ったデュエリストの霊が取り憑いているに違いない！】

「（そんな訳あるか！！とも言えない事もない……な）」

現に、マルスやゴーズの様な存在がこの世に居るわけだし……しかも、マルスに至っては正真正銘の霊みたいなもんだ。

肉体を持たない霊の1つや2つが現世に留まり、誰かに取り憑いてもおかしくない。

【今、何か失礼な事を考えませんでしたか？】

「（き、気のせいだよ気のせい」

何で分かるんだよ！思うだけで止めたのに！

「さぁ！次の相手はどいつだ！？こんなんじゃあ俺は満足できねぇぜ」

さて、仮に霊が取り憑いているとして、成仏させるならこの場合はデュエルで勝てば良いのか？

リッチー義兄さんが負けても、変化は無かったみたいだし。

「月行義兄さん、デプレ義兄さん。俺が夜行義兄さんとデュエルをするので、お二人は病院の手配とリッチー義兄さん達を離れた所に連れていってください」

「分かった」

「頼んだ……」

二人がいつの間にか気絶していたリッチー義兄さんとＳＰ達を連れていったのを確認して、夜行義兄さんの方を向く。

「お前が次の相手か？」

「そうだ」

「良いだろう。今度はこの俺を満足させてくれよ」

「「デュエル！」」

俺　ＬＰ４０００
夜行　ＬＰ４０００

「先攻は貰う。ドロー！」

最初は……様子見だな。

「モンスターをセット、カードを1枚伏せてターンエンド」

俺
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
伏せ　１

魔法・罠
伏せ　１

夜行義兄さんが使っているデッキも、シリーズ物と見て間違いない筈。

どんなカードが飛び出して来るのやら……

「俺のターン！ドロー！俺は『インフェルニティ・ビースト』を攻撃表示で召喚！」

夜行義兄さんの場に現われたのは１体の獣。

ただ、その獣が醸し出す雰囲気は不気味の一言に尽きる。

『インフェルニティ・ビースト』
レベル３　闇属性
獣族・効果
攻撃力１６００
守備力１２００

「バトルだ！『インフェルニティ・ビースト』で守備モンスターに攻撃！」

『インフェルニティ・ビースト』が食い千切らんばかりの勢いで守備モンスターに襲い掛かる。

『インフェルニティ・ビースト』の攻撃力は１６００。セットモン

スター『ラーニング・エルフ』の守備力１５００では太刀打ちできずに破壊される。

「『ラーニング・エルフ』の効果発動！このカードが墓地へ送られた時、カードを1枚ドローする」

「カードを2枚伏せてターンエンドだ」

俺
ＬＰ４０００　手札５枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　１

夜行
ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『インフェルニティ・ビースト』
攻撃力１８００

魔法・罠
伏せ　２

さて、今の内に『インフェルニティ・ビースト』のテキストを読ん

で……テキストが表示されない……だと！？

ああ、そうか。制作途中で効果が完全に決まって無いんだったな。

ステータスやイラストは決まってるから、前もってＫＣ社に申請した通りにソリットビジョンに投影されるが、確定していない効果は表示されないのか。

チッ、少し不利だな。

「俺のターン、ドロー！」

取り敢えず、探りを入れるつもりで攻めるか。

「リバース・カードオープン！永続トラップ『強化蘇生』発動！このカードの効果で俺は墓地の『ラーニング・エルフ』を守備表示で特殊召喚！」

『ラーニング・エルフ』
レベル３　風属性
天使族・効果
攻撃力１４００
守備力１５００

「『強化蘇生』は自分の墓地のレベル４以下のモンスター１体を効果を無効にし、尚且つレベルを１つ上げて蘇生させる永続トラップ。因みにこのカードがフィールド上に存在しなくなった時、対象のモンスターは破壊され、対象モンスターがフィールドから離れた時、このカードは破壊される」

『ラーニング・エルフ』
レベル3→4

後、自分のスタンバイフェイズに1000ポイントのダメージを受けるデメリットがあるが、直ぐに処理するから問題は無い。

「魔法カード『調律』発動！このカードの効果でデッキから『シンクロン』と名のついたチューナーを手札に加え、デッキをシャッフル。その後、デッキの1番上のカードを墓地へ送る。俺はデッキから、『マッハ・シンクロン』を手札に加える」

落ちたのは『蜘蛛の糸』か……悲しい様な嬉しい様な……微妙だな。

「俺はチューナーモンスター『マッハ・シンクロン』を召喚！」

俺の場に手足の生えた戦闘機の様なモンスターが現れる。

『マッハ・シンクロン』
レベル1　風属性
機械族・チューナー
攻撃力0
攻撃力0

レベルも攻守も低いが、俺がデッキを作り直す際に入れた蘇生系カード3種類に対応しているのに加え、効果も手札を維持するのに中々に役立つ。

何より、クシルの特殊召喚条件の片方を満たす風属性の良いカードだ。

さて、レベル5のシンクロモンスターを呼ぶ準備はできたが、何を呼ぼうか……こっちかな。

「レベル4『ラーニング・エルフ』にレベル1『マッハ・シンクロン』をチューニング！
数多の知識を蓄えし魔術師よ。その知識を我に授けよシンクロ召喚！いでよ！『TG　ハイパー・ライブラリアン』！」

『TG　ハイパー・ライブラリアン』
レベル5　闇属性
魔法使い族・シンクロ／効果
攻撃力2400
守備力1800

「『ラーニング・エルフ』の効果でカードを1枚ドロー！そして、バトル！『TG　ハイパー・ライブラリアン』で『インフェルニティ・ビースト』に攻撃！」

『TG　ハイパー・ライブラリアン』が呪文を唱えて『インフェルニティ・ビースト』を中心に据えて魔方陣を展開させる。

『インフェルニティ・ビースト』が魔方陣から出ようと動くも、見えない壁に阻まれて出る事は適わない。

『TG　ハイパー・ライブラリアン』がカードを1枚取り出して、魔方陣に投げ込むと魔方陣の内部が爆発した。

夜行
LP4000→3200

「ぐっ、この瞬間、俺は手札を全て捨ててトラップ発動『インフェルニティ・リフレクター』！このカードの効果でたった今、戦闘で破壊されたモンスターを墓地から特殊召喚し、相手ライフに１０００ポイントのダメージを与える！」

倒した筈の『インフェルニティ・ビースト』が蘇り、俺にキバを突き立てんと向かって来る。

「何！？ぐぅ！」

俺
ＬＰ４０００→３０００

手札を全て捨てて迄、俺にダメージを与えたかったのか？

それとも、蘇生させた『インフェルニティ・ビースト』には何か恐ろしい効果でもあるのか？

それか『インフェルニティ』というシリーズは墓地で強力な効果を発揮するのか？

まだ判断仕切れないな……取り敢えず、次に備えるか。

「カードを2枚伏せてターンエンド。この時、墓地の『マッハ・シンクロン』の効果の効果により、このターン、このカードと共にシンクロ召喚の素材として、墓地へ送られたモンスター1体を選択して手札に加える事ができる。俺は効果を発動して『ラーニング・エルフ』を手札に加える」

俺
ＬＰ３０００　手札５枚

モンスター
『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』
攻撃力２４００

魔法・罠
伏せ　２

夜行
ＬＰ３２００　手札０

モンスター
『インフェルニティ・ビースト』
攻撃力１６００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー！俺は伏せていた『ダーク・バースト』を発動して、墓地から『インフェルニティ・ミラージュ』を手札に加え、『インフェルニティ・ミラージュ』を召喚！」

夜行義兄さんの場にインディアンの様な姿をしたモンスターが現れる。

『インフェルニティ・ミラージュ』

レベル１　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力０
守備力０

「更にカードを1伏せる。そして、自分の手札が０のこの時、『インフェルニティ・ミラージュ』の効果発動！『インフェルニティ・ミラージュ』を生け贄に墓地から現れろ！『インフェルニティ・ビートル』！『インフェルニティ・デストロイヤー』！」

『インフェルニティ・ミラージュ』が消えたと思ったら、夜行義兄さんの場に新たに、クワガタの様なモンスターとその出で立ちから、正しく悪魔と呼ぶに相応しいモンスターが現れる。

『インフェルニティ・ビートル』
レベル２　闇属性
昆虫族・チューナー
攻撃力１２００
守備力０

『インフェルニティ・デストロイヤー』
レベル６　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力２３００
守備力１０００

「『インフェルニティ・ビートル』の効果発動！手札が０枚の時、自身を生け贄に捧げる事でデッキから、『インフェルニティ・ビートル』を2体まで特殊召喚する！俺はデッキから、『インフェルニ

ティ・ビートル』を2体特殊召喚する！」

『インフェルニティ・ビートル』
レベル２　闇属性
昆虫族・チューナー
攻撃力１２００
守備力０

『インフェルニティ・ビートル』
レベル２　闇属性
昆虫族・チューナー
攻撃力１２００
守備力０

手札が０の時……だと！？だから、わざわざ手札を全て捨てたのか。
という事は『インフェルニティ・ビースト』も『インフェルニティ・デストロイヤー』も何らかの効果が発動できるのか。

「行くぜ！レベル６『インフェルニティ・デストロイヤー』にレベル２『インフェルニティ・ビートル』をチューニング！
死者と生者、ゼロにと交わりしとき、永劫の檻より魔の竜ははなたれる。シンクロ召喚！いでよ！『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！」

『インフェルニティ・ビートル』が２つの星となり、『インフェルニティ・デストロイヤー』に力を与えて、姿を変えさせる。

その後、光に包まれたと思ったら、其処には１体の黒竜が居た。

頭頂のあたりは脳みそが出ており、その黒竜を不気味に見せていた。

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』
レベル８　闇属性
ドラゴン族・シンクロ／効果
攻撃力３０００
守備力２４００

「くっ、『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』の効果発動！シンクロモンスターのシンクロ召喚が成功した時、カードを１枚ドローする。ドロー！」

「はん！それがどうした！俺はこのターン、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の攻撃を封じる変わりに、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の効果発動！フィールド上のモンスター１体を破壊し、破壊した相手モンスターの攻撃力の半分のダメージを相手に与える！『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』を破壊！くらえ！インフェルニティ・デス・ブレス！」

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が吐き出した黒い煙幕の様な物が俺と『ＴＧハイパー・ライブラリアン』を取り囲む。

煙幕の様な物に取り囲まれた瞬間、『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』が胸元を抑えながら苦しみ出し、膝を折る。

やがて、俯せに倒れるとそのまま動かなくなった。

すると煙幕の様な物は『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』の形になり、俺に襲い掛かる。

「ぬっ、ぐわぁああ！」

俺
ＬＰ３０００→１８００

「バトルだ！『インフェルニティ・ビースト』でダイレクトアタック！」

「くっ、トラップ発動…できない！？」

「無駄だ！自分の手札が０の時、『インフェルニティ・ビースト』が攻撃する場合、相手はダメージステップ終了時まで魔法・トラップは発動できねぇぜ！」

「なっ！？うわぁああ！」

「ヒャーハハハハ！！踊れ！死のダンスを！」

俺
ＬＰ１８００→２００

「さぁ、行くぜ！……と言いたい所だが、わざわざ罠に掛かってやる必要はねぇ……ターンエンドだ」

「この瞬間、トラップ発動『エンジェル・リフト』！蘇れ『マッハ・シンクロン』！」

『マッハ・シンクロン』
レベル１　風属性

機械族・効果
攻撃力０
守備力０

さて、なんとか俺の場にモンスターが残ったが、ヤバイ状況には変わり無い。

だが、若干、厨二患者みたいになった夜行義兄さんを元に戻すため、このデュエル……負ける訳にはいかない！

第２６話　冬休みその？前編（後書き）

中途半端で切ってすいません。

１話辺りを５、６ページにしようとしたら、こんな感じに。

以下がアンケートの内容です。

『オジャマ・イエロー』に特殊効果が付くとしたら？

？１ターンに１度、自分フィールド上に『オジャマ・ブラック』、『オジャマ・グリーン』が表側表示で存在する時にライフを半分支払って発動できる。相手フィールド上のモンスター又は魔法・罠を全て破壊する。

？自分フィールド上に存在する『オジャマ』と名のつくモンスターを任意の数だけ、生け贄に捧げる事で発動できる。生け贄に捧げた『オジャマ』と名のつくモンスターの数だけ、使用されていない相手フィールド上のモンスターカードゾーン又は、魔法・罠ゾーンを指定する。指定された箇所を相手ターンで数えて２ターンの間、使用不可にする。

？自分フィールド上に存在する『オジャマ』と名のつくモンスターを任意の数だけ、生け贄に捧げる事で発動できる。生け贄に捧げた『オジャマ』と名のつくモンスターの数だけ、相手の手札をランダムに選択し、選択したカードをデッキに戻す。

この３つです。

これは一年目終了時～二年目開始の間に入れるオリジナルのストーリーで使おうと思っているものです。

このアンケートは別にオリカ等とは関係ありません。

期限はまだ先は長いですが、一年目終了時までです。

第27話　冬休みその?後編

俺
ＬＰ２００　手札６枚

モンスター
『マッハ・シンクロン』
攻撃力０

魔法・罠
『エンジェル・リフト』
永続罠
伏せ　１

夜行
ＬＰ３２００　手札０枚

モンスター
『インフェルニティ・デス・ドラゴン』
攻撃力３０００
『インフェルニティ・ビースト』
攻撃力１６００
『インフェルニティ・ビートル』
攻撃力１２００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！」

これで手札は7枚……これなら行ける！

「手札1枚をコストに魔法カード『ライトニング・ボルテックス』を発動！相手フィールド上に表側表示で存在するモンスターを全て破壊する！」

「そうはいくかよ！カウンタートラップ『インフェルニティ・バリア』発動！こいつは自分の場に、『インフェルニティ』と名のつくモンスターが攻撃表示で存在し、自分の手札が0枚の時に発動できるカウンタートラップ。こいつの効果でお前が発動した『ライトニング・ボルテックス』の効果は無効になり、破壊される！」

「なっ！？くっ……」

雷鳴が轟き、雷が夜行義兄さんの場のモンスターに襲い掛かるが、夜行義兄さんの場のモンスターの前にシールドが現れ、雷は防がれる。

失敗したか……だが、これで伏せカードは無くなった。

最善の手は打てなくなったが、そうなれば次善の手を打つだけだ！

「手札を1枚墓地へ捨てて、『ＴＨＥ　トリッキー』を特殊召喚！」

『ＴＨＥ　トリッキー』
レベル５　風属性
魔法使い族・効果

攻撃力２０００
守備力１２００

「そして、『マッハ・シンクロン』と『ＴＨＥ　トリッキー』を生け贄に捧げ『堕天使アスモディウス』を召喚！」

【よいしょっと～さて、行きますか！】

『堕天使アスモディウス』
レベル８　闇属性
天使族・効果
攻撃力３０００
守備力２５００

「バトル！『堕天使アスモディウス』で『インフェルニティ・デス・ドラゴン』に攻撃！黒翼の裁き！」

「チッ！向かい打て『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！デス・ファイア・ブラスト！」

アスディが生み出した雷と『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が吐き出したブレスがぶつかり爆発が起こる。

【ウォリャアアァー！】

爆煙に紛れて『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の背後に回り込んだアスディが『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の翼をへし折る。

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が苦痛の雄叫びを上げて倒れるが、最後の力を振り絞ってしっぽをアスディに叩きつける。

【痛たたた……ちぇ、後は任せたよ】

「『堕天使アスモディウス』の効果発動！このカードが破壊され墓地へ送られた時、カード効果で破壊されない『アスモトークン』と戦闘で破壊されない『ディウストークン』を特殊召喚する！俺は『アスモトークン』を攻撃表示、『ディウストークン』を守備表示で特殊召喚！」

アスディが光となって消えた所から、２つの光が俺の場に来て、２人の天使となる。

『アスモトークン』
レベル５　闇属性
天使族・トークン
攻撃力１８００
守備力１３００

『ディウストークン』
レベル３　闇属性
天使族・トークン
攻撃力１２００
守備力１２００

礼を言うぞアスディ。お前のおかげて、デュエルを優位に進められる。

「バトルフェイズ中に攻撃表示で特殊召喚された『アスモトークン』

には、まだ攻撃が残されている！『アスモトークン』で『インフェルニティ・ビースト』に攻撃！」

『インフェルニティ・ビースト』が『アスモトークン』を食い千切ろうとして、、『アスモトークン』に襲い掛かるが、『アスモトークン』は襲い掛かって来た『インフェルニティ・ビースト』を蹴りあげる。

翼を使い先回りして、今度は宙に浮いた『インフェルニティ・ビースト』を地面に叩きつける様に叩き落とす。

「ぐっ、チィッ！」

夜行
ＬＰ３２００→３０００

「カードを1枚伏せてターンエンド」

夜行義兄さんの場は『インフェルニティ・ビートル』だけ。

『ライトニング・ボルテックス』で全滅させて、『マジック・テンペスター』で殴って後、効果で決着は決まらなかったが、場は殆ど制圧できた。

このまま押し切れれば良いんだが……

俺
ＬＰ２００　手札２枚

モンスター
『アスモトークン』
攻撃力１８００
『ディウストークン』
守備力１２００

魔法・罠
伏せ　２

夜行
ＬＰ３０００　手札０枚

モンスター
『インフェルニティ・ビートル』
攻撃力１２００

魔法・罠
無し

「俺のターン、ドロー！フッ、魔法カード『天使の施し』発動！」

普通、そういうカードをここで引くか！？

何が来るか予想つかない分、怖いんだが……

「カードを3枚ドローしてカードを2枚捨てる。『インフェルニティ・ビートル』を守備表示に変更して、『インフェルニティ・ガーディアン』を守備表示で召喚！ターンエンドだ」

夜行義兄さんの場に中心に髑髏を据えている盾の様なモンスターが現れた。

『インフェルニティ・ガーディアン』
レベル４　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力１２００
守備力１７００

俺
ＬＰ２００　手札２枚

モンスター
『アスモトークン』
攻撃力１８００
『ディウストークン』
守備力１２００

魔法・罠
伏せ　２

夜行
ＬＰ３０００　手札０枚

モンスター
『インフェルニティ・ビートル』
守備力０

『インフェルニティ・ガーディアン』
守備力１７００

魔法・罠
無し

また新たなインフェルニティモンスターか……効果が分からないのが厄介だが、『ジャイアントウィルス』みたいな戦闘で破壊された時にダメージを与える効果では無さそうだ。

ただ、『インターセプト・デーモン』の様な効果だったら、攻撃したら終わる。

それか、『ガーディアン』って名が付いているくらいだから、攻撃されたら守備力が上がる効果かもしれない。

せめて、アレクが手札にくれば悩まずに済むんだが……

「俺のターン！ドロー」

『魔導戦士ブレイカー』か……このカードじゃ駄目だ。

それなら、次に打つ手はこれだ！

「リバース・カードオープン！永続トラップ『リミット・リバース』！このカードの効果で墓地から、攻撃力１０００以下のモンスター１体を攻撃表示で特殊召喚する！蘇れ！『クイック・シンクロン』！」

『クイック・シンクロン』
レベル５　風属性
機械族・効果
攻撃力７００
守備力１４００

「チッ！さっきの手札コストか……」

舌打ちか……本当に冗談抜きでキャラ変わり過ぎだな……

「俺は更に『ラーニング・エルフ』を召喚！」

『ラーニング・エルフ』
レベル３　風属性
天使族・効果
攻撃力１４００
守備力１５００

疲労の色を濃くして現れる『ラーニング・エルフ』。そう言えば、このデュエル、同じ『ラーニング・エルフ』を使い回してるな。

もう１枚デッキにあると思うんだが……来ないな。

まぁ、今来られても困るが……

さて、『ラーニング・エルフ』には悪いが、墓地へ行ってもらうか。

「レベル３『ラーニング・エルフ』にレベル５『クイック・シンクロン』をチューニング！破壊を司る魔神よ、我が前に出でて彼の者

を粉砕せよ！シンクロ召喚！現れろ『ジャンク・デストロイヤー』！」

『ジャンク・デストロイヤー』
レベル８　地属性
戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２６００
守備力２５００

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、シンクロ素材となったチューナー以外のモンスターの数だけフィールド上のカードを破壊できる！俺は『インフェルニティ・ガーディアン』を破壊する！」

『ジャンク・デストロイヤー』が腕を地面に叩きつけて、辺りを揺らす。

揺れた衝撃で落石が起こり、『インフェルニティ・ガーディアン』を潰す。

立ち上った砂塵に視界を遮られるが、程なくして砂塵がはれる。

砂塵がはれると何事も無かったかの様に『インフェルニティ・ガーディアン』が先程と変わらぬ場所に居た。

「無駄だ！自分の手札が０枚の場合、『インフェルニティ・ガーディアン』は戦闘及びカード効果では破壊されねぇ！」

「なっ！……『ラーニング・エルフ』の効果でカードを１枚ドロー！」

くそっ！面倒な効果を持ちやがって。

「『アスモトークン』を守備表示に変更してバトル！『ジャンク・デストロイヤー』で『インフェルニティ・ビートル』に攻撃！」

『ジャンク・デストロイヤー』が『インフェルニティ・ビートル』を腕で握り潰して破壊する。

「カードを1枚伏せて、ターンエンド」

俺
ＬＰ２００　手札２枚

モンスター
『ジャンク・デストロイヤー』
攻撃力
２６００

『アスモトークン』
守備力１３００

『ディウストークン』
守備力１２００

魔法・罠
『リミット・リバース』
永続罠
伏せ　２

夜行
ＬＰ３０００　手札０枚

モンスター
『インフェルニティ・ガーディアン』
守備力１７００

魔法・罠
無し

「俺のターン！ドロー！ヒャーハハハ！」

ドローしたカードを見た瞬間、笑いだす夜行義兄さん。

早く正気に戻さないと……いつもの夜行義兄さんとのギャップがあり過ぎる。

「俺はカードをセットして、即オープン！魔法カード『ＺＥＲＯ－ＭＡＸ』！こいつは自分の手札が０の場合に、自分の墓地の『インフェルニティ』と名のついたモンスター１体を選択して、発動できる魔法カード。その効果は、選択したモンスターを墓地から特殊召喚し、特殊召喚したモンスターの攻撃力より低い攻撃力を持つ、表側表示モンスターを全て破壊する！」

「ぐっ！それじゃあ蘇らせるのは……」

「当然、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』だ！蘇りやがれ！『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！」

アスディがその身を犠牲にして討ち取った『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が地を割りながら、現れる。

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』
レベル８　闇属性
ドラゴン族・シンクロ／効果
攻撃力３０００
守備力２４００

蘇った『インフェルニティ・デス・ドラゴン』が黒いブレスを吐き出し、辺りを包む。

その黒いブレスに包まれた『ジャンク・デストロイヤー』と『ディウストークン』が苦しみ出して、『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』と同じく倒れる。

「『ＺＥＲＯ－ＭＡＸ』を使ったターン、バトルフェイズは行えねぇ。どの道、罠には掛かってやらねぇがな。ターンエンドだ」

俺
ＬＰ２００　手札２枚

モンスター
『アスモトークン』
守備力１３００

魔法・罠
『リミット・リバース』

永続罠
伏せ　2

夜行
ＬＰ３０００　手札０

モンスター
『インフェルニティ・デス・ドラゴン』
攻撃力３０００
『インフェルニティ・ガーディアン』
守備力１７００

魔法・罠
無し

「俺のターン、ドロー！」

アレク……今更来るのかよ……今は出せねぇぞ。

俺の今の手札なら、レベル６かレベル８のシンクロモンスターが出せるが、どちらも『インフェルニティ・デス・ドラゴン』は倒せない。

あっちが攻撃してくるなら、一気に行けるが、伏せカードの１枚が攻撃反応型のトラップと分かっている以上、攻撃はおそらく無い。

だが、あっちは何らかのカードを待っている。

その時が勝負だ！

「俺はこのままターンエンド」

俺
ＬＰ２００　手札３枚

モンスター
『アスモトークン』
守備力１３００

魔法・罠
『リミット・リバース』
永続罠
伏せ　２

夜行
ＬＰ３０００　手札０

モンスター
『インフェルニティ・デス・ドラゴン』
攻撃力３０００
『インフェルニティ・ガーディアン』
守備力１７００

魔法・罠
無し

「俺のターン！ドロー！ヒャーハハハ！このターンでお前はお終いだ！永続魔法『インフェルニティ・ガン』発動！そして、『インフェルニティ・ガン』の効果発動！手札が０枚の場合、フィールド上のこのカードを墓地へ送る事で、自分の墓地から、『インフェルニティ』と名のついたモンスターを２体まで特殊召喚できる！現れろ！『インフェルニティ・ビースト』！『インフェルニティ・ドワーフ』！」

夜行義兄さんの場に威嚇しながら『インフェルニティ・ビースト』が、斧を持った小さいオッサンが屈んだ状態で現れた。

『インフェルニティ・ビースト』
レベル３　闇属性
獣族・効果
攻撃力１６００
守備力１２００

『インフェルニティ・ドワーフ』
レベル２　闇属性
戦士族・効果
攻撃力８００
守備力５００

「自分の手札が０枚の場合に『インフェルニティ・ドワーフ』が自分フィールド上に存在する限り、自分フィールド上のモンスターは全て貫通効果を得る！これで終わりだ！『インフェルニティ・ビースト』で『アスモトークン』に攻撃ぃ！」

夜行義兄さんの手札が0枚の今、『インフェルニティ・ビースト』の攻撃時に魔法・トラップは発動できない。

だが、既に手は打ってある！

「墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！墓地のこのカードをゲームから除外する事で、相手モンスターの攻撃を1度だけ無効にする！」

「チッ！そいつも手札コストで送ってやがったのか。ターンエンドだ」

俺
ＬＰ２００　手札2枚

モンスター
『アスモトークン』
守備力１３００

魔法・罠
『リミット・リバース』
永続罠
伏せ　2

夜行
ＬＰ３０００　手札０

モンスター

『インフェルニティ・デス・ドラゴン』
攻撃力３０００
『インフェルニティ・ガーディアン』
守備力１７００
『インフェルニティ・ビースト』
攻撃力１６００
『インフェルニティ・ドワーフ』
守備力５００

魔法・罠
無し

「俺のターン！ドロー！」

下準備は全て整った！一気に行かせて貰う！

「相手フィールド上に同じ属性のモンスターがいる時、こいつは特殊召喚できる！現れろ！『神禽王アレクトール』！」

【主の求めに答えて、某、ただ今、推参！】

『神禽王アレクトール』
レベル６　風属性
鳥獣族・効果
攻撃力２４００
守備力２０００

「更に『ジャンク・シンクロン』を召喚！『ジャンク・シンクロン』召喚に成功した時、自分の墓地から、レベル２以下のモンスターを

守備表示で特殊召喚できる！『マッハ・シンクロン』を特殊召喚！」

『ジャンク・シンクロン』
レベル３　闇属性
戦士族・チューナー
攻撃力１３００
守備力５００

『マッハ・シンクロン』
レベル１　風属性
機械族・チューナー
攻撃力０
守備力０

「そして、永続罠『闇次元の開放』発動！除外されている闇属性モンスター１体を特殊召喚する！来い！『ネクロ・ガードナー』！」

『ネクロ・ガードナー』
レベル３　闇属性
戦士族・効果
攻撃力６００
守備力１３００

「まだまだ行くぞ！レベル３『ネクロ・ガードナー』にレベル１『マッハ・シンクロン』をチューニング！戦友に力を与えうるものよ、今こそ彼の者を打ち破る為に我が前へ！シンクロ召喚！来たれ！『アームズ・エイド』！」

『マッハ・シンクロン』が作りし、星の輪を『ネクロ・ガードナー』が通過して辺りが光に包まれる。

そうして現われたのは１つの腕。

『アームズ・エイド』
レベル４　光属性
機械族・シンクロ／効果
攻撃力１８００
守備力１２００

「そんなモンスター達に何ができる！ただ、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』にやられる奴が増えただけじゃねぇか！」

「今に分かるさ！『アームズ・エイド』の効果発動！１ターンに１度フィールド上のモンスター１体にこのカードを装備できる！俺は『神禽王アレクトール』に『アームズ・エイド』を装備！」

『アームズ・エイド』が広がり、空洞を作るとアレクの右腕に装着された。

「『アームズ・エイド』が自身の効果でモンスターに装備されている時、装備モンスターの攻撃力は１０００ポイントアップする！」

『神禽王アレクトール』
攻撃力２４００→３４００

「『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の攻撃力を上回っただと！？」

「バトル！『神禽王アレクトール』で『インフェルニティ・デス・ドラゴン』に攻撃！神風・剛力礼賛！」

【覚悟なされい！ふん！】

アレクが『インフェルニティ・デス・ドラゴン』に突っ込む。

「クソが！やれ！『インフェルニティ・デス・ドラゴン』！・デス・ファイア・ブラスト！」

アレクを迎撃しようと、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』がこちらのモンスターを葬ったブレスを吐く。

アレクはブレスを悉く避けて、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の懐に入る。

【当らぬよ。さて、先ずは『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』の分！】

アレクが『アームズ・エイド』を装着している右腕で『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の腹部を殴る。

【これがアスディの分！『ディウストークン』の分！『ジャンク・デストロイヤー』の分！】

その後、アッパー、裏拳と続き、更に『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の尻尾を掴み、上空に放り投げる。

【そして、これが

出番が無い某のストレス発散の分だーーーー！！！】

最後それ！？そこは主の分だーーーー！とかじゃないのか！？

【最後にアレクがどこかの戦争男という名の超人の必殺技みたいに回転しながら、『インフェルニティ・デス・ドラゴン』を貫いた。
ｂｙゴーズ】

夜行
ＬＰ３０００→２６００

「ぐっ、だが、ライフはまだ残っている！」

「……『アームズ・エイド』の効果発動。このカードを装備しているモンスターが、戦闘で相手モンスターを破壊した時、破壊したモンスターの攻撃力分のダメージを与える」

「何だってぐわぁあああ！」

夜行
ＬＰ２６００→０

【アレクが倒した『インフェルニティ・デス・ドラゴン』の残骸が、夜行を押しつぶすかの様に降り、夜行は倒れた。それと同時に、デュエルディスクからデュエルの終了を告げるが鳴った。ｂｙマルス】

何故だ……何故デュエルに勝ってテンションが下がるんだろう……

第２８話　冬休みその？（前書き）

日常パートで、短めです。

第２８話　冬休みその？

夜行義兄さんが検査入院し、俺が精霊との信頼関係について本気で考えだす様になってから数日が経ったある日、俺はある事について考え事をしていた。

「さて、どうするか……」

【今度はなんの事で悩んでんだ？】

「ん？ああ、十代と翔に対する詫びの品について考えててな」

追試対策プリントを作ったって言ったのに、それをクシルが持って帰ってきてたからな。

多分、あいつらはそれなりに困ったと思う。

精霊の不始末は主の責任でもあるし、何より俺も荷物の確認を疎かにしていたしな。

それで詫びの品について考えていたのだが、何が良いのやら……

【……】

「どうしたんだゴーズ？」

ゴーズが俺を……そう、まるで哀れむ様に見ていたので、嫌な予感がしながらも疑問に思って聞いてみる。

【いや……普通クリスマスにそんな事を考えるか？】

【あっ！ゴーズそれは……】

――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――

――――――――――――――――――

ゴーズSide

【あっ！ゴーズそれは……】

マルスに言われて、マイブラザーにその手の話は禁句だったのを思い出して、マイブラザーの方を見る。

「クリスマス？ああ、確か今日はなにかしらの特別な日の名前を借りて、客の財布の紐を緩くさせて、商品を大量に買わせるという店側の策略が炸裂する日だったな」

やべぇ手遅れだ……へそ曲げやがった。

こりゃあ、冗談抜きでやべぇぞ。

マルスも慌てだして。

【ゴーズ、どうする気だ！？】

【悪ぃ、宥めるの手伝ってくれ！】

【ふざけるな！この状態のマスターを宥めるのに、どれだけの時間がかかると思っているんだ！？】

【い、１日？】

【本当にその程度で済むと思っているのか？】

【……いや、済まんと思う】

アレクのオッサンが居れば、時間はあんまし掛からねぇと思うが、数日前から、精霊世界に帰ってるし……今日中には絶対に無理だ。

【良し！ゴーズ、土下座だ。土下座をするんだ！もう、それで許しを請うしかない！】

【くっ！それしか無いか……】

俺はマイブラザーの方を向いて、両膝をつく。

【済まないマ「別に良いぞ」へっ？】

両膝をついて許しを請おうとしたら、何故かあっさりと許された。

【えっ？マスター……良いのですか？】

隣で土下座してくれているマルスも驚いている。

「ああ」

【本当にですか？】

「ああ」

マルスが繰り返して聞いているが、しょうがない事だと思う。

前は確か、クリスマスやバレンタインデーがいかに店側の策略なのかを延々と聞かされた上、レポート提出まで義務付けられたからな……何も無いという訳が無い。

というより、無かったら、無かったで気味が悪い。

【本当に本当ですか？】

マルスも俺と同じ気持ちだったらしく、マイブラザーに何度も聞いている。

「くどいぞ、マルス。それとも、前みたいにレポートを書きたいのか？」

【そういう訳では……】

マルスが引き下がるが、釈然としない様子だ。

これはいよいよ何かあるぞ。

「あ、そうだ」

マイブラザーが椅子から立ち上がると共に、俺とマルスは身構える。

くっ！せめて、アスディかハニーが居れば……クシルは直ぐ近くに

居るが、寝てるし……

【『波動キャノン』とか使って来たら、頼むぜマルス】

【ああ、任せろ】

「あった、あった。ほらよ」

俺とマルスの緊張感が漂う中、マイブラザーは何かを取り出して、俺に投げてきた。

【うわぁあああ！……あれ？】

咄嗟に避けるが、いつまで経っても変化は起こらなかった。

【爆発……しない？】

【待て、ゴーズ。時間差で爆発するかもしれん】

俺達の言葉にマイブラザーは深い溜め息をついた。

「お前等は俺を一体何だと思っているんだ？それは、どっからどう見ても、ただの財布だろ？」

【【えっ？】】

マイブラザーに言われて、投げられた物を見ると、確かにどう見てもただの財布だった。

【マイブラザー……これは一体？】

「今日はクリスマスだからな。今日ぐらいは、お前達にはゆっくりしてもらおうと思ってな。ほら、ゴーズはカイエンと街とかでデートすれば良いし、マルスは行かないといけない所があるんだろ？」

【マスター……】

【マイブラザー、本当に良いのか？】

おそるおそるマイブラザーに聞いてみる。

「ああ、お前等にはいつも助けてもらってるからな。たまには労わないとな」

【マスター、申し訳ございません！】

【ああ！疑ったりして悪かった！】

今回ばかりは俺達が完全に悪ぃな……冗談抜きで反省しねぇといけねぇな。

「んな事、いちいち気にすんな。ほら、早く行かないと、時間はどんどん過ぎていくぞ。あっ、服は用意してあるから、ちゃんと着替えて行けよ？」

【マスター、本当にありがとうございます！】

【それじゃあ行ってくるぜ】

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー
ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

マルス達を見送った後、椅子に座り直して机に向かう。

別に今日、マルス達を送り出した事は思いつきではなく、少し前から考えていた事だ。

アレクとアスディ、カイエンには、昨日の内に言っておいた。

ただ、マルスとゴーズは悪読みするのが目に見えていたから、中々言いだせなかっただけだしな。

俺が急に優しくなったら、十中八九、あの2人は疑心暗鬼に陥る。

そうなったら、カイエンがゴーズに言っても無駄だ。

確かに以前、俺が否リア充という事を弄ったマルスとゴーズに『サイクロンレーザー』をぶっ放したり、『六芒星の呪縛』を使って、動きを止めた後に『稲妻の剣』で斬り掛かったりしたけどさ……少しは信用して欲しいものだ。

まぁ、俺が急にこんな事を考えだしたのには理由がある。

これから先、幻魔を狙う輩と戦う事になったら、休む暇は無くなる。

その時が来るまでは、休める時に休んで貰いたいと思ったからだ。

さて、そろそろ十代達に渡す物を考えますかね……

しかし、クリスマスの日に野郎に渡す物を考えるのは、本当に虚しいな。

なんでだろう……急に爆弾系カードのみで構成されたデッキを作りたくなってきた……

第２９話　冬休みその？（前書き）

冬休み編は次で終わりの予定です。

やっぱり、遊戯、城之内とデュエルしたならこの人も……

因みに、とあるモンスターが出てきますが、原作・アニメオリカを書く際に参考にしているＷｉｋｉから、引っ張ってきましたので、自作オリカでは決してありません。

第２９話　冬休みその？

１月２日、冬休みが残り僅かとなった今日。

俺と月行義兄さんと検査入院が終わり、退院した夜行義兄さんの３人は、日本の海馬コーポレーション本社ビルに来ていた。

別に、新年の挨拶の為に来た訳ではない。

義兄さん達は海馬コーポレーションと合同で開く大会ＤＭＤＭＧＰの打ち合わせの為、俺は海馬コーポレーションが新たに作った新型デュエルディスクのテストの為、つまりは仕事で此処に来た。

因みにペガサス様が居られないのは、無駄に話がこじれるからしい。

まぁ、インダストリアルイリュージョン社の現社長は月行義兄さんだから、打ち合わせに支障をきたす事は無いんだろうけど……

それにしても、スケジュールの都合とはいえ、新年早々仕事って、海馬さん達も義兄さん達も大変だな。

受付の所で義兄さん達と別れてデュエル場に向かう。

義兄さん達が打ち合わせするＤＭＤＭＧＰの内容が正直気になるな……

始めのＤＭはおそらくデュエルモンスターズ、ＧＰはグランプリ、だとしたら、２つ目のＤＭは一体何なんだ？

そんな事を考えていると、いつの間にかデュエル場に着いていたので、思考を切り替える。

デュエル場に入ると、よく見知った人が2人居たので、取り敢えずその2人の下に向かい、挨拶をする。

「お久し振りです。レベッカさんにキサラさん」

「久し振りね天道」

「お久し振りですね～貴志さん」

「何故お2人が此処に？もしかして、俺の相手はレベッカさんなのですか？」

「いいえ。私は技術者として、自分が考案した機能の調子を見たいだけよ」

「私は、あの、その～。瀬人様の勇姿を見るためにです」

「成る程、そういう事ですか」

レベッカさんは数年前から、海馬コーポレーションの社員になっている。

レベッカさんの頭なら、新しいシステムの1つや2つが思い浮かんでも、おかしくない。

因みに、レベッカさんが海馬コーポレーションに入社した理由は、

師匠の側に居たいからという理由だ。

それを聞いて師匠がもの凄く驚き、杏子さんが炎のオーラを纏いだしたのを今でも覚えている。

それが、確か……アテム師匠と師匠の戦いの儀から少し後の事だから、もう5年前の事か……

そして、その1年後、今から4年前に、エジプトのとある遺跡の前で倒れていたキサラさんをインダストリアルイリュージョン社が保護したんだったな。

まぁ、その後色々あって、今キサラさんは海馬さんの所に居るんだけど。

キサラさんが近くに居るようになってから、海馬さんの性格が多少なりとも丸くなったのには、俺も含めて皆驚いた。

さて、さっきのキサラさんの言葉から考えるに俺の相手はどうやら、海馬さんらしい。

しかし、海馬さんは打ち合わせの真っ最中だ。

それまで、2人と雑談でもして待つ事になったのだが、正直言って、直ぐに後悔する事となった。

レベッカさんはいくらアピールしても師匠が振り向いてくれないという愚痴を言い、キサラさんは海馬さんのここがとても優しいとか、今度一緒に出掛ける事になったと若干、ノロケ話をしたりと……

師匠と海馬さん……ついでにムークさん、北森さん、舞さんという3人の女性に想われている城之内さんは爆発してくれないかなーと一瞬、思ってしまった。

雑談……というより、愚痴とノロケ話を数時間聞かされ続け、いい加減帰りたくなってきた頃、やっと海馬さんが来た。

言いたい事はそれなりにあるが、言ったとしても意味が無い事は解っているので、無言でデュエルディスクを受け取り、デッキをセットして指定の位置に立つ。

「おおっ！」

指定の位置にたった瞬間、デッキが自動でシャッフルされ、思わず声が出る。

「その程度で驚いてたら、この先、やっていけないわよ。新しい機能はまだまだあるんだからね」

レベッカさん、一体どれだけ考えたんですか……

「天道。城……凡骨から、少しはやるようになったと聞いている。その力を俺に見せてみろ」

海馬さん……わざわざ言い直さなくても良いでしょうに……ホントにキサラさんと会って、良い意味で変わったな。

「ええ、前の様に簡単にはいきませんよ！」

「ふん、行くぞ」

「「デュエル！」」

俺
ＬＰ４０００

海馬
ＬＰ４０００

新型デュエルディスクには先攻、後攻を決める機能もあるらしく、先攻は俺になった。

「俺のターン！ドロー！」

この手札は……このモンスター、ほぼ過労死決定だな。

「モンスターをセット、カードを2枚伏せて、ターンエンド」

俺
ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
伏せ　１

魔法・罠
伏せ　２

「俺のターン、ドロー。俺は『デュオス』を召喚する」

『デュオス』
レベル４　地属性
戦士族・効果
攻撃力１６００
守備力１０００
効果
１ターンに１度、自分フィールド上のこのカード以外のモンスターを任意の数だけ生け贄に捧げる事で、生け贄に捧げたモンスター１体につき、このカードの攻撃力を３００ポイントアップする。

海馬さんがカードをモンスターゾーンに置くと、海馬さんの場に現われたのは、白い戦士。

アテム師匠の記憶の世界で海馬さんによく似た人、セトさん?が使っていた精霊でもあり、マルスと同じく、キサラさんが倒れていた遺跡の中にあった石版に描かれていたモンスターの１体。

そういえば、遺跡の中にはマルスや『デュオス』以外にも石版はあったが、幾つかの石版は意図的に粉々にされていたとペガサス様から聞いた事があったな。

「行くぞ!『デュオス』で守備モンスターに攻撃!デュオスソード!」

海馬さんの『デュオス』が右手の剣で俺の場の守備モンスターを真っ二つにする。

「『クリッター』の効果発動！デッキから、『ＴＧ　ストライカー』を手札に加える」

「２枚の伏せカードを場に出し、ターンエンドだ！」

俺
ＬＰ４０００　手札４枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ４０００　手札３枚

モンスター
『デュオス』
攻撃力１６００

魔法・罠
伏せ　２

「俺のターン、ドロー！手札から速攻魔法『サイクロン』発動！俺から見て、右側のカードを破壊する！」

破壊したのは『完全破壊ジェノサイドウィルス』……だと!?なんつー物騒なカードを……まぁ、気を取り直して。

「自分フィールド上にモンスターが存在せず、相手フィールド上にモンスターが存在する時、このモンスターは特殊召喚できる。現れろ!『ＴＧ　ストライカー』!そして、自分がレベル４以下のモンスターの特殊召喚に成功した時、このカードを手札から特殊召喚する事ができる!現れろ『ＴＧ　ワーウルフ』!」

『ＴＧ　ストライカー』
レベル２　地属性
戦士族・効果
攻撃力８００
守備力０

『ＴＧ　ワーウルフ』
レベル３　闇属性
獣戦士族・効果
攻撃力１２００
守備力０

「更に『霧の谷のファルコン』を攻撃表示で召喚!」

俺の場に右手に剣を左腕に盾を装着し、民族衣装に身を包んだ人が現れる。

『霧の谷のファルコン』
レベル４　風属性
鳥獣族・効果
攻撃力２０００

守備力１２００

「永続罠『リミット・リバース』発動！墓地から『クリッター』を特殊召喚」

『クリッター』
レベル３　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力１０００
守備力６００

「レベル３『クリッター』にレベル２『ＴＧ　ストライカー』をチューニング！数多の知識を蓄えし魔術士よ、その知識を我に授けよ！シンクロ召喚！出でよ『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』」

『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』
レベル５　闇属性
魔法使い族・シンクロ／効果
攻撃力２４００
守備力１８００

「墓地へ送られた『クリッター』の効果で、デッキから、『クイック・シンクロン』を手札に、そして、手札の『冥府の使者ゴーズ』を墓地へ送り、『クイック・シンクロン』を特殊召喚！」

『クイック・シンクロン』
レベル５　風属性
機械族・効果
攻撃力７００

守備力１４００

「レベル３『ＴＧ　ワーウルフ』にレベル５『クイック・シンクロン』をチューニング！破壊を司る魔神よ、我が前に出でて、彼の者を粉砕せよ！シンクロ召喚！出でよ『ジャンク・デストロイヤー』！」

『ジャンク・デストロイヤー』
レベル８　地属性
戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２６００
守備力２５００

「『ジャンク・デストロイヤー』の効果発動！このカードがシンクロ召喚に成功した時、このカードのシンクロ素材としたチューナー以外のモンスター１体につき、フィールド上のカードを１枚破壊できる！俺は海馬さんの伏せカードを破壊する！」

「ならば、リバース・カードオープン！『収縮』！そのデカブツの攻撃力を半分にする！」

『ジャンク・デストロイヤー』
攻撃力２６００→１３００

「『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』の効果でカードを１枚ドロー」

『収縮』か……攻撃前に破壊できて良かった。

「バトル！『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』で『デュオス』に

攻撃！」

『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』が『デュオス』にカードを飛ばす。

『デュオス』がカードを剣で切り裂くが、切り裂かれたカードが背後から『デュオス』を襲う。

「ぬぅ！」

海馬
ＬＰ４０００→３２００

「『リミット・リバース』を手札に戻して、『霧の谷のファルコン』で攻撃！」

「手札の『バトルフェーダー』の効果発動！このカードを手札から特殊召喚し、バトルフェイズを強制終了させる！」

『バトルフェーダー』
レベル１　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力０
守備力０

「やっぱり、そう簡単にはいきませんか。カードを１枚伏せて、ターンエンド」

「ふん！当然だ！俺のターン！」

さて、これからどうなるか……

第２９話　冬休みその？（後書き）

冒頭に書いたＤＭＤＭＧＰが一年目と二年目の間に書こうとしているストーリーです。

無印のアニメを見た人なら、２つ目のＤＭが何の略かは分かると思いますけどね。

第３０話　冬休みその？（前書き）

冬休みラストです。

海馬も主人公も……少々、はっちゃけます。

第３０話　冬休みその？

俺
ＬＰ４０００　手札１枚

モンスター
『ジャンク・デストロイヤー』
攻撃力２６００
『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』
攻撃力２４００
『霧の谷のファルコン』
攻撃力２０００

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ３２００　手札２枚

モンスター
『バトルフェーダー』
守備力０

魔法・罠
無し

「俺のターン、ドロー、俺は手札から魔法カード『強欲な壺』を発

動し、カードを2枚ドローする。更に手札の『ラビードドラゴン』を墓地へ送り、『ハードアームドドラゴン』を特殊召喚！」

『ハードアームドドラゴン』
レベル４　地属性
ドラゴン族・効果
攻撃力１５００
守備力８００

『バトルフェーダー』と『ハードアームドドラゴン』の2体のモンスター……確実に来る！それも少々面倒な形で……

「行くぞ！『バトルフェーダー』、『ハードアームドドラゴン』の2体を生け贄に捧げ、出でよ『青眼の白龍』！！」

海馬さんの場に現われたのは、海馬さんのデッキの中で最高の龍、『青眼の白龍』。

師匠のマハードさんの物静かさや城之内さんのレッドアイズの荒々しいさとも違い、『青眼の白龍』は気高いという言葉が相応しい。

『青眼の白龍』
レベル８　光属性
ドラゴン族　通常
攻撃力３０００
守備力２５００

「『青眼の白龍』で『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』に攻撃！

滅びのバーストストリーム！！」

海馬さんの指示と共に、『青眼の白龍』の開かれた口にエネルギーが溜まっていく。

そして、、エネルギーが溜まりきった後に放たれたブレスは『ＴＧハイパー・ライブラリアン』が展開した魔方陣をものともせずに『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』を跡形もなく破壊する。

「ぐわっ」

俺
ＬＰ４０００→３４００

「カードを1枚伏せて、ターンエンドだ」

俺
ＬＰ３４００　手札1枚

モンスター
『ジャンク・デストロイヤー』
攻撃力２６００
『霧の谷のファルコン』
攻撃力２０００

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ３２００　手札０

モンスター
『青眼の白龍』
攻撃力３０００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン！ドロー！」

『ハードアームドドラゴン』を生け贄に捧げて召喚されたレベル７以上のモンスターは、カード効果で破壊されない。

伏せてある『リミット・リバース』を使い、『ＴＧ　ストライカー』を蘇生、『霧の谷のファルコン』とであのモンスターをシンクロ召喚すれば、『青眼の白龍』は倒せる上、大ダメージを与えられる。

だが、そうした場合、海馬さんは次のターンで絶対に『死者蘇生』を引き当てる。

少し警戒しすぎかもしれないが、師匠達のドロー力は常識を超越している……これぐらいが丁度良い。

ここは我慢して、１度のチャンスに全てを掛ける。

「『ジャンク・デストロイヤー』と『霧の谷のファルコン』を守備表示に変更。更にモンスターをセットしてターンエンド」

俺
ＬＰ３４００　手札１枚

モンスター
『ジャンク・デストロイヤー』
守備力２５００
『霧の谷のファルコン』
守備力１２００
伏せ　１

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ３２００　手札０

モンスター
『青眼の白龍』
攻撃力３０００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー。ふん、俺とブルーアイズの前に立ち塞がる壁は全て粉砕するまでだ。魔法カード発動『滅びの爆裂疾風弾』！

これでお前の場のモンスター全てを破壊する！」

「なっ！マジですか……」

『青眼の白龍』が翼を広げて飛び上がり、俺とモンスターを見下ろす。

見下ろしながら、先程『ＴＧ　ハイパー・ライブラリアン』を破壊した時と同様に、口にエネルギーを溜める。

そして、エネルギーが溜まりきってから、今度は俺の場のモンスター全てに降り注ぐように放たれたブレスが俺のモンスターを破壊していく。

「『滅びの爆裂疾風弾』を発動したターン、『青眼の白龍』は攻撃できん。ターンエンドだ」

俺
ＬＰ３４００　手札１枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ３２００　手札０

モンスター
『青眼の白龍』
攻撃力３０００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー！」

場のモンスター０、手札も出せるモンスター０……待った結果がこれかよ！

「カードを１枚伏せて、ターンエンド」

俺
ＬＰ３４００　手札１枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　３

海馬
ＬＰ３２００　手札０

モンスター

『青眼の白龍』
攻撃力３０００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー！『スピア・ドラゴン』召喚！」

海馬さんの場に口が異様に尖ったドラゴンが現れる。

『スピア・ドラゴン』
レベル４　風属性
ドラゴン族・効果
攻撃力１９００
守備力０

「行くぞ！『スピア・ドラゴン』でダイレクトアタック！」

「うわぁあ！」

俺
ＬＰ３４００→１５００

「『スピア・ドラゴン』は攻撃した場合、ダメージステップ終了時に守備表示になるがこれで終わりだ！『青眼の白龍』でダイレクトアタック！滅びのバーストストリーム！！」

やっぱり、ブラフで１枚伏せカードを追加しても無駄か……だが！

「リバース・カードオープン！『ガード・ブロック』！戦闘ダメージを０にし、カードを１枚ドロー！」

「ほぅ、耐えたか。俺はターンエンドだ」

俺
ＬＰ１５００　手札２枚

モンスター
無し

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ３２００　手札０

モンスター
『青眼の白龍』
攻撃力３０００
『スピア・ドラゴン』
守備力０

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン、ドロー！」

やっぱり、海馬さん相手に機を待つのが間違いだった。

攻めて機を掴みに行くべきだったな。

幸いモンスターも引いたし、攻撃も1度は防げる。

攻めるか……

「『ツイン・ブレイカー』を攻撃表示で召喚！」

俺の場に3本の剣を1つに纏め、腕に装着している戦士が現れる。

『ツイン・ブレイカー』
レベル４　闇属性
戦士族・効果
攻撃力１６００
守備力１０００

「バトル！『ツイン・ブレイカー』で『スピア・ドラゴン』に攻撃！『ツイン・ブレイカー』は貫通効果持ちのモンスター。貫通ダメージを受けて貰いますよ！」

「何！？ぐぅっ、小癪なマネを……」

海馬
ＬＰ３２００→１６００

「ターンエンド」

俺
ＬＰ１５００　手札２枚

モンスター
『ツイン・ブレイカー』
攻撃力１６００

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ１６００　手札０

モンスター
『青眼の白龍』
攻撃力３０００

魔法・罠
伏せ　１

「俺のターン！俺は『命削りの宝札』を発動！手札が５枚になるようにカードをドローする」

ここでそれを引きますか……でもこれを防げば好機だ！

「更に魔法カード発動『融合』！手札の『青眼の白龍』２体と場の『青眼の白龍』を融合！出でよ！『青眼の究極竜』！！」

『青眼の究極竜』
レベル１２　光属性
ドラゴン族・融合
攻撃力４５００
守備力３８００

海馬さんの場に現われたのは、文字通り究極の竜。

『青眼の究極竜』のステータスを上回るモンスターは居る。

だが、それらのモンスターからは全く感じられない圧倒的な威圧感を『青眼の究極竜』は持っている。

「『青眼の究極竜』で『ツイン・ブレイカー』に攻撃！アルティメット・バースト！」

「ぐっ、墓地の『ネクロ・ガードナー』の効果発動！墓地に存在するこのカードをゲームから除外し、相手モンスター１体の攻撃を無効にする！」

『青眼の白龍』が溜めたエネルギーの数倍はあろうかと思える程、エネルギーを溜めた後に、『青眼の究極竜』が放ったブレスは半透明になった『ネクロ・ガードナー』に阻まれ、『ツイン・ブレイカー』に届かなかった。

「先程のセットモンスターか」

「ええ、墓地に居て助かりましたよ」

「ふん、伏せカードを1枚場に出し、ターンエンドだ」

俺
ＬＰ１５００　手札２枚

モンスター
『ツイン・ブレイカー』
攻撃力１６００

魔法・罠
伏せ　２

海馬
ＬＰ１６００　手札１枚

モンスター
『青眼の究極竜』
攻撃力４５００

魔法・罠
伏せ　２

「俺のターン！ドロー！カードを1枚伏せて、リバース・カードオープン！『蜘蛛の糸』！相手プレイヤーが前のターン、墓地へ送ったカード1枚を手札に加える。海馬さんの墓地の『命削りの宝札』

を俺の手札へ！」

「おのれぇ……」

『命削りの宝札』を奪われた海馬さんが睨み付けて来る。

冗談抜きで怖いんだが、気にせず生かさせてもらう！

「『命削りの宝札』発動！手札が５枚になる様にカードをドロー！」

ってマジかよ……先にあったアレク、アスディ、に続いてクシルも来たか……だが、この手札なら、一気に行ける！

「永続罠『リミット・リバース』発動！墓地の『ＴＧ　ストライカー』を特殊召喚！」

『ＴＧ　ストライカー』
レベル２　地属性
戦士族・効果
攻撃力８００
守備力０

「レベル４『ツイン・ブレイカー』にレベル２『ＴＧ　ストライカー』をチューニング！天駆ける狼よ、その身朽ちし時、彼の者を呪え！シンクロ召喚！現れろ！『天狼王　ブルー・セイリオス』！」

俺の場に両腕が狼の頭になっている青い狼男が現れる。

『天狼王　ブルー・セイリオス』
レベル６　闇属性

獣戦士族・シンクロ／効果
攻撃力２４００
守備力１５００

「更にカードを1枚伏せて、装備魔法『魔導師の力』を発動！『天狼王　ブルー・セイリオス』に装備！」

『天狼王　ブルー・セイリオス』
攻撃力２４００→３９００
守備力１５００→３０００

魔法カード『死者蘇生』発動！墓地から蘇れ『冥府の使者ゴーズ』！！」

【よっしゃー！俺、参上！】

『冥府の使者ゴーズ』
レベル７　闇属性
悪魔族・効果
攻撃力２７００
守備力２５００

「墓地の『霧の谷のファルコン』と『ツイン・ブレイカー』をゲームから除外して、『ダーク・シムルグ』を特殊召喚！」

【クゥェー！】

『ダーク・シムルグ』
レベル７　闇属性
鳥獣族・効果

攻撃力２７００
守備力１０００

俺の場に並ぶ相棒達。

３体共が何時でも攻撃に移れる様に準備している。

「バトル！『天狼王　ブルー・セイリオス』で『青眼の究極竜』に攻撃！」

「馬鹿な！攻撃力の劣るモンスターで俺のアルティメットに攻撃するだと！？」

「理由は直ぐに分かりますよ！」

『青眼の究極竜』が自身に向って来る『天狼王　ブルー・セイリオス』にアルティメット・バーストを放つ。

それに対抗するかの様に『天狼王　ブルー・セイリオス』が自身を回転させて、アルティメット・バーストに向っていく。

アルティメット・バーストを断ち割りながら、『青眼の究極竜』に向っていく『天狼王　ブルー・セイリオス』だが、『青眼の究極竜』に届く寸前で力尽き、破壊される。

「ぐっ」

俺
ＬＰ１５００→９００

『天狼王　ブルー・セイリオス』を破壊し、咆哮をあげる『青眼の究極竜』だが、半透明になった『天狼王　ブルー・セイリオス』が体に取り憑かれた瞬間、『青眼の究極竜』が苦しみだす。

『青眼の究極竜』
攻撃力４５００↓２１００
「何だと！まさか」

「『天狼王　ブルー・セイリオス』は自身が破壊され、墓地へ送られた時、相手モンスター1体を選択して、選択したモンスターの攻撃力を２４００ポイントダウンさせる効果を持つ。それを発動させて貰いました」

「おのれぇ……！！」

「続いてバトル！『冥府の使者ゴーズ』で『青眼の究極竜』に攻撃！冥府の剣・斬撃剣！」

【よし！行くぜぇー！！】

ゴーズが『青眼の究極竜』を斬り捨てようと向っていく。

『青眼の究極竜』が迎撃のアルティメット・バーストを撃とうとエネルギーを溜めようとするが、半透明になった『天狼王　ブルー・セイリオス』が首を絞めて妨害する。

それでも必死にエネルギーを溜めて、ゴーズに向けて放つが先程のと比べ明らかに威力の弱い。

【甘いぜ！】

ゴーズはそれを剣で受け流し更に、『青眼の究極竜』との距離を縮める。

【冥府への片道キップだ受け取りな】

そして、『青眼の究極竜』を斬り捨てた。

「ぐわぁあああ！ぐっ」

海馬
ＬＰ１６００→１０００

「瀬戸様！？」

見守っていたキサラさんが声を上げる。

アルティメットは破壊できた！キサラさんには悪いけど、このまま行くぞ！

「『ダーク・シムルグ』でダイレクトアタック！ダーク・フレア！」

「成る程、少しはやるようになった……と言いたいが、まだまだ甘

いぞ天道！リバース・カードオープン！『機械仕掛けのマジック・ミラー』！」

「なっ、しまった！」

クシルの放った黒い炎と海馬さんとの間に鏡が現れる。

そして、その鏡は1枚のカードを写し出す。

写し出されたカードは『死者蘇生』。

「『機械仕掛けのマジック・ミラー』このカードは相手モンスターの攻撃時に発動でき、相手の墓地に存在する魔法カードを瞬時に発動できるトラップカード。お前の墓地の『死者蘇生』を使わせてもらうぞ、蘇れ！『青眼の究極竜』！」

『青眼の究極竜』
レベル１２　光属性
ドラゴン族・融合
攻撃力４５００
守備力３８００

「ぐっ、攻撃は中止。そして、ターンエンド」

俺
ＬＰ９００　手札２枚

モンスター
『ダーク・シムルグ』
攻撃力２７００

『冥府の使者ゴーズ』
攻撃力２７００

魔法・罠
『リミット・リバース』
永続罠
伏せ　１

海馬
ＬＰ１０００　手札１枚

モンスター
『青眼の究極竜』
攻撃力４５００

魔法・罠
伏せ　１

俺の伏せたカードは『フローラル・シールド』。

これでなんとか防げるか……

「俺のターン、ドロー！魔法カード『埋葬呪文の宝札』を発動。墓地の『融合』、『強欲な壺』、『命削りの宝札』をゲームから除外してカードを2枚ドローする」

ぐっ、ここで更に手札が増えるのか。

「天道、俺のデッキ最強のモンスターの姿を拝むがいい！俺は『青眼の究極竜』を生け贄に捧げ『青眼の光龍』を特殊召喚する！」

『青眼の究極竜』が光に包まれて新たに現われたのはブルーアイズの最終形態である『青眼の光龍』。

最終形態だけあって、放たれる威圧感、輝きは『青眼の白龍』や『青眼の究極竜』よりも、ずっと凄まじく、神を連想させる。

『青眼の光龍』
レベル１０　光属性
ドラゴン族・効果
攻撃力３０００
守備力２５００

「『青眼の光龍』は俺の墓地に存在するドラゴン族モンスター1体につき、攻撃力が３００ポイントアップする。俺の墓地に存在するドラゴン族モンスターは6体！よって攻撃力１８００ポイントアップ！」

『青眼の光龍』
攻撃力３０００→４８００

「更に『沼地の魔神王』を召喚し、魔法カード『龍の鏡』を発動！場の『沼地の魔神王』と墓地の『青眼の究極竜』を融合！出でよ『究極竜騎士』！」

海馬さんの場に『カオス・ソルジャー』が上に乗った『青眼の究極竜』が現れる。

『青眼の光龍』
攻撃力４８００→４５００

『究極竜騎士』
レベル１２　光属性
ドラゴン族・融合／効果
攻撃力５０００
守備力５０００

「えっ？ちょっ、海馬さん？」

「そして、リバース・カードオープン！『異次元からの帰還』！ライフを半分支払いゲームから除外されている自分のモンスターを可能な限り、特殊召喚する！」

『青眼の究極竜』
レベル１２　光属性
ドラゴン族・融合
攻撃力４５００
守備力３８００

『沼地の魔神王』
レベル３　水属性
水族・効果
攻撃力５００
守備力１１００

「『究極竜騎士』は自分の場の他のドラゴン族モンスター1体につき、攻撃力が５００ポイントアップする。俺の場にドラゴン族モンスターは2体！よって、攻撃力１０００ポイントアップ」

『究極竜騎士』
攻撃力５０００→６０００

……俺もデュエリストだ。

自重しろ！とかは言わない。

だが、一言だけ言わせてくれ。

なにこれぇ

「行くぞ！『青眼の光龍』、『青眼の究極竜』、『究極竜騎士』で攻撃！シャイニング・アルティメット・クラッシャー！！」

「何そのカオスな技名！！って、ギャー！！」

俺
ＬＰ９００→－９００→－１８００→－６３００

【じょ、上手に焼けましたー】

負けた俺に言う言葉がそれか！？

「俺だ。モクバか、どうした……何？」

デュエルの後、デュエルディスクに問題が無いか調べている所、海馬さんにモクバさんからなにやら、連絡があった様だ。

どうやら、何か問題があった様だが、海馬さんは俺の方を見ると、直ぐに代わりの者を行かせると行って、通信を切った。

なんだろう……何故か逃げないと不幸になるけど、頑張っても逃げ切れない。

そんな状態に自分が置かれている気がする。

―――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

―――――――――――――――――――

【プッ、ククク】

【ゴーズ、あまりマスターを笑うな】

【いや、だってしょうがないだろマルス。ハニーやオッサンやアスディだって笑ってんだぜ】

【しかし……】

【大体、お前だって、笑ってんだろ？】

【うっ……】

「おまえらな……」

マルス達に文句を言おうとしたら、控え室のドアがノックされた。

「貴志、準備はできたか？」

「モクバさんですか。ええ、準備万端ですよ」

「そうか、じゃぁ合図が出るまで、舞台裏で待機していてくれ」

「分かりました」

気分を切り替えないと……ちょっとやっていけないな。

ヒーローショーなんて。

「キャー！！」

舞台裏に待機して、１０分程。

舞台の方から女性の悲鳴が聞こえる。

後少しで出番だな。

「おっーと！？悪の科学者Ｄｒ．ゴザッキーにより、生み出された悪の戦士ビッグ５が、悪事を働いてるぜ！こうなったら、あの男を呼ぶしかないぜぃ！さぁ、一緒に！」

モクバさんの煽りで、観客から合図が出る。

よし、出番だ！

「そこまでだ！ビッグ５！！」

「何奴！」

「天が呼ぶ、地が呼ぶ、人が呼ぶ、悪を倒せと我の名を！『正義の味方　カイバーマン』只今、参上！」

カイバーマンに扮した俺が名乗ると同時に俺の後ろが爆発する演出がなされる。

「おのれ、カイバーマン！またしても、私達の邪魔をするのですか！」

「ふん！キサマ達が悪事を働く限り、私は何処へでも駆け付け、キサマ達の野望を挫くまでだ！」

「くぅ～生意気な！今日こそ貴方を倒して差し上げますよ！行きますよ皆さん！」

ビッグ1もとい『深海の戦士』がそう言うと、『深海の戦士』に続き、ビッグ2『ペンギン・ナイトメア』、ビッグ3『ジャッジ・マン』、ビッグ4『機械軍曹』、ビッグ5『人造人間一サイコ・ショッカー』の5人?が向ってくる。

「ふん!キサマ達が束になって掛かって来ても、この俺を倒す事などできぬわ!」

『深海の戦士』が繰り出した蹴りを左腕で受け止め、腰を低く落とす。

手加減と自重はするなと言われているので、本気で殺るぞ……

「くらうがいい!ジャスティス・パンチ!!」

「ぐわらぱぁ!」

ぶっちゃけただのパンチだが、『深海の戦士』は舞台袖まで吹っ飛ぶ。

ヘルメットが凹んでいた気がするが、気にしない。

「な、なn「遅い!ジャスティス・シュート!」ぷぎゃあ!」

動揺した『ペンギン・ナイトメア』を蹴り飛ばし、『機械軍曹』ごと吹っ飛ばす。

『ペンギン・ナイトメア』を蹴った時に、体の中心部の下辺りから、何かが潰れる音がしたが、気にしない。

「ひ、ひぃ～」

『人造人間ー サイコ・ショッカー』が背を向けて、舞台袖に向かう。

おいおい、台本にねぇぞそれ。

『ジャッジ・マン』以外は最初に殺られて舞台袖に吹っ飛ぶんだろ？

「逃がすか！ジャスティス・ジャンピング・キィーック！！」

「ぽがぱぁ！？」

どっかのバッタがモチーフのライダーの必殺技を『人造人間ー サイコ・ショッカー』の後頭部に決める。

『人造人間ー サイコ・ショッカー』は空中で2回転半して、舞台袖に消えた。

蹴りを入れた時に、ゴキッ！という音がしたが、気にしない。

「そ、そこまでだ！カイバーマン！これを見ろォ！」

舞台上段で観客から選んだ人質……って、あれ？静香さん？何故此処に？まぁ、良いか。

『ジャッジ・マン』が静香さんに武器を向けている。

「おのれ、卑怯な！彼女を解放するんだ！」

「そう言われて解放する……訳無いでしょう！ここで貴方は終わり

です！（何故だ？何故さっきから、妙な寒気がするんだ！？）」

「おのれぇ！」

「おっーと！カイバーマンがピンチだ！皆、カイバーマンに力を分けてやってくれぇー！」

モクバさんの言葉に会場の観客から、カイバーマンコールが起こる。

そして、徐々にカイバーマンの頭部に光が集まっていく。

「な、何だと！？」

「『ジャッジ・マン』よ、くらうがいい！ジャスティス・フラッシュ！！」

頭部に溜まった光を『ジャッジ・マン』に向けて、放つ。

「ぐわぁあああああ！！！」

『ジャッジ・マン』が舞台裏に消え、程なくして爆発する。

やっぱり、海馬コーポレーションのソリットビジョンシステムは凄いな。

っと、さっさと話を進めないとな。

「お嬢さん、大丈夫ですか？」

「はい、大丈夫です」

静香さんの手を取り、立たせる。

な、何だ……凄い殺気を感じる。

それも、２つも……

「はーはっはっはっ！まだ、私達はやられてませんよカイバーマン！」

「何！？」

取り敢えず、殺気の事は今は置いておこう。

舞台の中心部が開き、そこから、フラフラな『深海の戦士』、『ペンギン・ナイトメア』、『機械軍曹』、『人造人間一サイコ・ショッカー』と無傷で落下した筈なのに、ボコボコの『ジャッジ・マン』が現れる。

「さぁ、これが最後の戦いです！行きますよ！」

「「「「「最終奥義！邪竜合体！！」」」」」

『深海の戦士』、『ペンギン・ナイトメア』、『ジャッジ・マン』、『機械軍曹』、『人造人間一サイコ・ショッカー』の５体が闇に包まれて、舞台裏に密かに消える。

そして、現われたのは『Ｆ・Ｇ・Ｄ』。

「おっーと！ビッグ５は最終形態『Ｆ・Ｇ・Ｄ』へと姿を変えたぞ

！我らが『正義の味方　カイバーマン』はどうやってこいつと戦うんだぁー！！」

「ビッグ5よ！キサマ達が力を結集し、この俺を倒そうと言うならば、俺も本気で答えよう。出でよ！我が僕、『青眼の究極竜』、『カオス・ソルジャー』！」

俺の目の前に『青眼の究極竜』と『カオス・ソルジャー』が現れる。

「「「「「グワハハハハハ！その程度で私達を倒せると思っているのですか！？」」」」」

「フハハハハハ！甘い、甘過ぎるぞビッグ5！行くぞ『青眼の究極竜』、『カオス・ソルジャー』！究極融合！！現われるがいい『究極竜騎士』！！！」

「「「「「何だと！？」」」」」

『青眼の究極竜』と『カオス・ソルジャー』が1つになって現れるのは、勿論『究極竜騎士』

「これで終わりだビッグ5！くらえ！ギャクシー・クラーシュ！！」

「ぐわぁあああああ！！！」

「粉砕！玉砕！大喝采！！我が前で悪が栄えた試し無し！フハハハハハハハ！ワハハハハハハハハハ！！」

ーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーーー

―――――――――――――――
―――――――――――――――

海馬コーポレーションが新年特別イベントとして、開いたカイバーマンショーが終わり、国際電話で城之内さんに、まだ、会場の側に居た本田さんに事情を話し、マルス達（笑っていないクシルは除く）に制裁を加えた後に一息つく。

昨日、海馬さんに頼まれて（一方的且つ、命令口調だったが……）幻魔について調べている磯野さんの代理（事故に遭って、出られなくなったらしい）の代理をやったけど、こういうショーは疲れるもんだな。

まぁ、これで、交渉で勝ち取ったレッド寮の待遇改善もしてくれるから、儲けもんとも言えるけど……

さて、疲れたし、学園が始まるまで、取っておいたホテルに向かいますかね。

「おーい、何時まで寝てんだ行くぞ。全く、『つり天井』を受けたぐらいで情けない」

【【【【【……（絶対、何時か仕返しして／やる／やるぜ／やらねば／あげるよ～／やるわ】】】】】

第３０話　冬休みその？（後書き）

鷹
「さーて、久しぶりに後書きを」

貴志
「ジャスティス・パンチ！！」

鷹
「出オチ！？」

第３１話　帰還（前書き）

デュエル無しの短めです。

第３１話　帰還

「アカデミアよ、私は帰って来たー！」

【はいはい】

始業式が明日に迫った今日、船に数時間揺られて俺はデュエルアカデミアに帰って来た。

一部の荷物を除いて、先に送っておいたから、身軽なものだ。

今ある荷物はカバンの中のデッキとサイドデッキとそして、炊飯器とかだ。

さて、荷物を整理しないといけないし、さっさとレッド寮に向かいますかね。

【マスター、本当にそれで宜しいのですか？】

「ああ、これで大丈夫だろう」

【それでも、隠し場所が炊飯器の中ってのはどーなのよ】

「虚を突くのには、こういう物の方がうってつけだろう？」

部屋に着いて、ある程度荷物を整理し終え、部屋に細工がされてないか調べた後、封と書いたお札が貼ってある炊飯器を前にして、マ

ルス達と話し合う。

この炊飯器の中には何を隠そう『邪神イレイザー』と『邪神ドレッド・ルート』の2枚が入っている。

幻魔と幻魔を狙う輩との戦いで使う予定のカードだが、その戦いの日が来るまで、邪神のカードは人目を見ない方が良い。

【でも、炊飯器の中ってのはどうなんだ?どこかの大魔王じゃあるまいし】

「殆ど無いと思うが、この部屋に盗人が入った時の事を考えてだな。ダンボールやデッキケースに入れていたら、十中八九、漁られる。引き出しの中もしかりだ」

【それで、炊飯器の中なのですか】

「ああ、封と書いてあるお札を貼り、壊れていると思わせれば、わざわざ中を漁る事はしないだろ」

まぁ、漁る前に部屋に仕掛けてある罠と最低、誰か1人は部屋に残っているマルス達に撃退されるんだろうけどな。

「さて、明日も早いしもう寝るぞ」

「~であるからして」

今俺は、始業式にて、終業式と内容がさして変わらない校長先生の

長く、とても長いありがたい話を聞き流しながら、朝に十代達が言っていた事について考えている。

朝、十代と翔から、クロス・ボンバーを仕掛けられ（無論避けた）、マルスの事を聞いてきた十代を誤魔化した後、十代達から、冬休みに此処、デュエルアカデミアで十代が『人造人間－サイコ・ショッカー』の精霊と闇のデュエルした事を聞いた。

そのサイコ・ショッカーは、オカルト部が呼び出した不完全な精霊で、人を生け贄として、欲していたらしい。

だが、昔、マルスに聞いたのだが、精霊は存在、又は、実体化するにいたって、人等の生け贄として欲する事は決してない。

人から精霊になる際は自分の命を捨てなければならないとも聞いたが、これは今回のケースには当て嵌まらない。

これはマルスだけでは無く、マハードさんやマナさんにも聞いた事だ。

ただ、物事には例外があるもので、サイコ・ショッカーの様な普通のモンスターでは無く、神に匹敵しうるモンスターの復活ならば、人を生け贄に使う場合もある。

あまり考えたくは無いが、幻魔を狙う輩が幻魔を復活させる為に、サイコ・ショッカーの精霊を送り込んだと考えられる。

これは、調査した方が良いかもな。

始業式が終わり、その後、特に授業も無く、解散した後、十代と翔に詫びの品を渡したのだが、翔の喜び様に驚いた。

以前、翔が欲しいと言っていた『ブラック・マジシャン・ガール』や『雷電娘々』のフィギュアを渡しただけなんだが、俺達の身の丈を飛び越える程、喜ばれるとはな。

買う際に、マルスとリアルファイトまでして、買いに行った甲斐があるものだ。

十代には十代が持っていなかった『Ｅ・ＨＥＲＯ　フェニックス・ガイ』、『Ｅ・ＨＥＲＯ　シャイニング・フェニックス・ガイ』、『Ｅ・ＨＥＲＯ　キャプテン・ゴールド』、『平行世界融合』等を渡した。

十代の方が数が多いが、安売りしていたカードや俺が持っていたカードなので、安上がりですんでいる。

しかし、翔にいらないと言われた『白魔導師ピケル』と『黒魔導師クラン』のフィギュアはどうしようかな……まぁ、今は良いか。

さて、夜に発電所に行くまで暇だから、今の内に睡眠を取っておくか。

「マルス、どうだ？何か感じるか？」

【ほんの、ほんの僅かな闇……ただ、それだけですね。詳しく調べるには日が経ちすぎています】

今は午後8時。

こっそりと寮から抜け出して、発電所前に来たのだが、特に手掛かりらしい手掛かりは無かった。

「仕方ない。明日辺りにでも、オカルト部にサイコ・ショッカーを呼び出した時の事を聞くとするか」

「そこで何をしているのにゃ～」

「！！」

後ろから、声がしたので、咄嗟に其処から動いて、声の主の方を向く。

「一体どうしたんだにゃ～？」

「大徳寺先生ですか。何って、俺は肝試しをしていただけですよ」

「1人でかにゃ～？」

「ええ、今、日本文化を学ぶ事にはまっていまして。日本では、夜な夜な家を抜け出して、度胸試しをする習慣があるとこれで見ました。流石に十代達を誘うのは忍び無く、1人で来ました」

そう言いながら、懐から『実録！日本文化！』というインチキくさ

い本を取り出して大徳寺先生に見せる。

それを見た大徳寺先生は何か申し訳なさそうな表情をした。

「あー天道君、肝試しは夏場にやる事なのにゃ。だから、思い切り季節外れだにゃ」

「えっ！そうなんですか？十代達と怪談話と肝試しをしたのが冬だったので、てっきり冬にやる物と思っていました」

「そうでしたかにゃ。取り敢えず、夜に出歩いていた事は見逃してあげますから、他の先生に見つからない内に、早く寮に戻るのにゃ」

「分かりました」

大徳寺先生にお辞儀をしてから、寮へ帰った。

「これは一体何があったんだ？」

部屋に帰って早々、そんな声が出る。

だが、しょうがないと思う。

何故なら、発電所に向かう前にはちゃんと、机の上に置いておいた『白魔導師ピケル』と『黒魔導師クラン』のフィギュアが諭吉２０枚に変わっていたのだから。

「ゴーズ、何があったんだ？」

邪神の安全を確認した後、部屋で留守番をしていた筈のゴーズに訳を聞く。

【分からねぇ。何か黄色い物体……そう、黄色い彗星が罠を薙ぎ倒しながら、目の前を通り過ぎたかと思ったら、机の上のフィギュアが金に変わっていた】

なん…だと！？

馬鹿な仕掛けた罠には人１人の意識ぐらい、軽く刈り取れる物もあったんだぞ！

それを薙ぎ倒しただと！？

……ん？黄色い物体でピケルとクランってまさか……

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

「ふっ、ミッションコンプリート。ピケルとクランを手に入れたぜ。しかし、同士《天道》よまだまだ甘いな。俺の理論にかかればあの程度の罠等、どういう事は無い」

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

――――――――――――――――――――

まさかな……まぁ、ピケルとクランが諭吉２０枚に変わったんだから、得したと言えば得したし、まぁ、良いか。

【マスター、１つ良いですか？】

「どうした」

諭吉を財布に入れ、念の為、炊飯器を他のところに移して早々、マルスが曇った表情で話掛けて来た。

【あの大徳寺という方は一体？】

「一体と言われてもな。錬金術の先生で、この寮の寮長だよ」

【そうですか】

「大徳寺先生に何かあるのか？」

俺がそう聞くと、マルスは少し言うのを悩む様にしていたが、やがて口を開いた。

【あの大徳寺という方から、人間としての生気が感じられません】

「ちょっ、ちょっと待て！？それだと大徳寺先生は……」

【死人……そう言えます】

【じゃあ、何故死人が動いてんだ？】

ゴーズの言う事は尤もだ。

死人を蘇らせるなんて……まさか！？

【私も疑問に思っていましたが、錬金術に詳しいという事で合点が行きました】

マルスはそこで、１つ間を置いて続きを話しだした。

【ファラオや師匠、私達が生きていた時代の知識ですが、錬金術によって物を生み出すという事ができました。おそらく、大徳寺という方は不完全ながらも錬金術によって、死後も生者として、生き長らえている。そういう事だと思います】

それからマルスはただ、と更に続ける

【生き長らえていると言っても、錬金術はやはり、不完全な物。大徳寺という方はもう長くはないでしょう】

「そうか……」

思わぬところで、とんでもない事を知ってしまったな……

取り敢えず、今はこの事は俺の胸の内に秘めとこう。

第３１話　帰還（後書き）

鷹
「ふ～やっとまともな後書きがやれるよ」

貴志
「今までまともな事なんて無かったしな。と言うより、何だあの三沢みたいな奴は！」

鷹
「ああ、あれは三沢です。うちの小説の三沢はああいうのを前にしたら、戦闘力が５０００倍になります」

貴志
「それどこの超サイヤ人だよ……つーか、タニヤ戦はどうする気だよ」

鷹
「まだまだ先だけど、一応、原作通りの予定だな。その前に暑苦しい人やドローの人、レイの話に学園対抗戦編。書くことはいっぱいあるな」

貴志
「書けるのか？」

鷹
「努力するよ」

貴志

「努力ねぇ……まぁ、良いや。それではまた次回まで」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

　ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1820v/

遊戯の弟子は闇使い

2011年10月21日03時06分発行